

播磨・長越遺跡Ⅲ



兵庫県文化財調査報告 第432冊

姫路市

播磨・長越遺跡Ⅲ



2012(平成24)年3月

兵庫県教育委員会

兵庫県教育委員会

姫路市

長越遺跡Ⅲ

(飯田湯田遺跡)

— (二) 船場川水系船場川流域治水対策事業に伴う発掘調査報告書 —

2012 (平成24) 年3月

兵庫県教育委員会



空中写真（東上空から）



空中写真（南上空から）



空中写真（西上空から）



竹の前遺跡空中写真（南東上空から）



調査区全景（南から）



SH01全景（南から）



SH01焼失状況（西から）



SH01焼失状況（西から）



SH06全景（南空から）



SH06建築材検出状況



出土土器



豎穴住居跡出土土器



庄内甕



四国からの搬入土器



竹の前遺跡出土土器

例 言

1. 本書は姫路市飯田に所在する長越遺跡（飯田湯田遺跡）ならびに姫路市手柄に所在する竹の前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、兵庫県中播磨県民局姫路土木事務所が計画・施工する（二）船場川水系船場川流域治水対策事業に伴うものである。
3. 確認調査は平成15年度に、本発掘調査は平成20年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所・兵庫県立考古博物館が調査担当した。
4. 確認調査は吉識雅仁・渡辺 昇が、本発掘調査は渡辺 昇・上田健太郎が担当した。
5. 調査で使用した方位は国土座標第V系を使用し、水準は兵庫県設定の2級基準点ならびに3級基準点を使用した。
6. 調査の結果、長越遺跡と同一の遺跡であると判断されたので、調査段階では飯田遺跡で契約したが、長越遺跡として報告し、同名となることから長越遺跡Ⅲとした。
7. 基準点の測量ならびに平面図の図化は株式会社サコムに委託して実施した。遺物出土状態や土層断面図は調査員・調査補助員が実測した。
8. 遺構写真は調査担当者が撮影した。図版1の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。それ以外の空中写真は株式会社サコムに委託して撮影したものである。
9. 整理作業は、平成21～23年度の3か年に渡って兵庫県立考古博物館で行った。
10. 執筆は本文目次の通りで、編集は前山三枝子の協力を得て渡辺が行った。
11. 本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中1-1-1）ならびに兵庫県立考古博物館魚住分館（明石市魚住町清水立台池の下630-1）に保管している。ご活用ください。
12. 発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご教示を得ました。感謝致します。（敬称略・順不同）

松本正信・加藤史郎・秋枝 芳・義則敏彦・大谷輝彦・小柴治子・中川 猛・福井 優
森岡秀人・松下まり子・森下大輔・合田幸美・堀本祐二・信里芳紀・乗松真也・
荒木幸治・高上 拓・山中良平・姫路市教育委員会



図1 長越遺跡（姫路市）の位置

本文目次

例言

I はじめに	渡辺
1. 調査に至る経緯と既往の調査	1
2. 確認調査の経過と結果	2
3. 本発掘調査の経過	3
4. 整理作業の経過	5
II 位置と環境	渡辺
III 長越遺跡の遺構	渡辺
1. 竪穴住居跡	12
2. 落ち込み	15
3. 土坑	16
4. 溝	16
5. 旧河道	17
IV 長越遺跡の出土遺物	
1. 土器	渡辺
2. 石器	上田
V 竹の前遺跡の遺構と遺物	上田
1. 1区の遺構	72
2. 2区の遺構	73
3. 出土遺物	74
4. まとめ	75
VI 科学分析	
1. 長越遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)	柳加速分析研究所
2. 長越遺跡Ⅲ出土遺物の自然科学分析	パリノ・サーベイ柳
VII おわりに	渡辺

挿図目次

図1 長越遺跡(姫路市)の位置	i	図8 長越遺跡の位置と周辺の遺跡	8
図2 昭和49年度調査区(長越遺跡Ⅰ)	1	図9 長越遺跡Ⅰ土器出土状態	10
図3 平成15年度調査区(長越遺跡Ⅱ)	3	図10 壇場山古墳	10
図4 調査風景	3	図11 播磨国分寺跡	11
図5 長越遺跡調査区の位置	4	図12 豆腐町遺跡	11
図6 調査風景	5	図13 遺構配置図	102
図7 整理作業風景	6	図14 土器分類図	103

表 目 次

表 1	長越遺跡周辺の遺跡一覧	9
表 2	出土石製品一覧表	41
表 3	長越遺跡出土土器観察表	42~71
表 4	竹の前遺跡出土土器観察表	77~79

巻頭図版目次

1 上	空中写真(東上空から)	下	SH06 建築材検出状況
下	空中写真(南上空から)	6	出土土器
2 上	空中写真(西上空から)	7 上	竪穴住居跡出土土器
下	竹の前遺跡空中写真(南東上空から)	下	庄内甕
3 上	調査区全景(南から)	8 上	四国からの搬入土器
下	SH01 全景(南から)	下	竹の前遺跡出土土器
4 上	SH01 焼失状況(西から)		
下	SH01 焼失状況(西から)		
5 上	SH06 全景(南から)		

図版目次

図版 1	調査区平面図	図版 26	土器実測図 (12)
図版 2	土層断面図	図版 27	土器実測図 (13)
図版 3	SH01 実測図	図版 28	土器実測図 (14)
図版 4	SH02 実測図	図版 29	土器実測図 (15)
図版 5	SH03 実測図	図版 30	土器実測図 (16)
図版 6	SH04 実測図	図版 31	土器実測図 (17)
図版 7	SH05・SH06 実測図	図版 32	土器実測図 (18)
図版 8	SH07～SH09 実測図	図版 33	土器実測図 (19)
図版 9	SH10 実測図	図版 34	土器実測図 (20)
図版 10	SH11 実測図	図版 35	土器実測図 (21)
図版 11	SH12・SH13・SK01 実測図	図版 36	土器実測図 (22)
図版 12	SK02・SK03・SR01 実測図	図版 37	土器実測図 (23)
図版 13	SD03・SD06・SD11 実測図	図版 38	土器実測図 (24)
図版 14	SD09・SD10 実測図	図版 39	土器実測図 (25)
図版 15	土器実測図 (1)	図版 40	土器文様他拓影
図版 16	土器実測図 (2)	図版 41	石器実測図
図版 17	土器実測図 (3)	図版 42	竹の前遺跡平面図
図版 18	土器実測図 (4)	図版 43	竹の前遺跡土層図
図版 19	土器実測図 (5)	図版 44	竹の前遺跡遺構実測図 (1)
図版 20	土器実測図 (6)	図版 45	竹の前遺跡遺構実測図 (2)
図版 21	土器実測図 (7)	図版 46	竹の前遺跡遺構実測図 (3)
図版 22	土器実測図 (8)	図版 47	竹の前遺跡遺構実測図 (4)
図版 23	土器実測図 (9)	図版 48	竹の前遺跡土器実測図 (1)
図版 24	土器実測図 (10)	図版 49	竹の前遺跡土器実測図 (2)
図版 25	土器実測図 (11)		

写真図版目次

1	上	空中写真 (南西上空から)	下左下	SH06 炭化材出土状態
	下	空中写真 (南東上空から)	下右下	SH06 炭化材出土状態
2		空中写真 (国土地理院撮影)	19	上左 SH06 東壁炭化材
3	上	調査区空中写真 (東上空から)	上右	SH06 西壁炭化材
	下	調査区空中写真 (南上空から)	下左上	東壁断ち割り
4		調査区空中写真	下右上	西壁断ち割り
5	上	飯田橋からの景色 (後方は長越遺跡 I)	下左下	SH06 炭化材
	下	全景 (南から)	下右下	網状炭化材 (剥ぎ取り)
6		調査区全景 (南から)	20	上 SH06 土器出土状態 (南から)
7	上	全景 (北から)	下	SH06 出土状態
	下	竪穴住居跡群 (南東から)	21	上 SH07 (南から)
8	上	竪穴住居跡群 (南から)	中	SH08 (北から)
	下	竪穴住居群 (南西から)	下	SH08 (西から)
9	上	SH01 全景 (西から)	22	上左 SH08 土器出土状態 (西から)
	下	SH01 全景 (南から)	上右	調査風景
10	上	SH01 検出状況 (北から)	中	SH09・10・11 (南から)
	中	SH01 検出状況 (東から)	下左	SH09～11 の切り合い
	下左	SH01 検出状況 (南から)	下右	SH09 (南から)
	下右	SH01 検出状況 (西から)	23	上 SH09・SH10 遺物出土状態 (南から)
11		SH01 炭化材検出状況		SH10 (南から)
12	上	SH01 低床部全景	24	上 SH10 堆積状況 (南から)
	下左上	低床部土杭・台石	中	SH10 土器出土状態
	下右上	台石検出状況	下左	SH10・11 の切り合い
	下左下	調査風景	下右	調査風景
	下右下	調査風景	25	上 H11 (南から)
13	上	SH02 全景 (南から)	中左	SH11 刃跡
	下左上	SH02 堆積状況	中右	SH11 土器出土状態
	下右上	壁溝堆積状況	下左	SH13 (西から)
	下左下	床面土器出土状態	下右	SH13 (北から)
	下右下	中央土坑堆積状況	26	上 SK01 土器出土状態
14	上	SH03 全景 (南から)	上左下	SK02 アゼ (北西から)
	下	SH03 堆積状況 (南から)	上右下	SK03 アゼ・土器出土状態 (北西から)
15	上	SH04・SH05 全景 (南西から)	下左上	SK02 アゼ (北から)
	下	SH04 全景 (南東から)	下右上	SD01 アゼ (南から)
16	上	SH04 全景 (北東から)	下左下	SD06 アゼ (南から)
	下左上	SH04 堆積状況	下右下	SD09 (西から)
	下右上	調査風景	27	上左上 SD02 上層アゼ (東から)
	下左下	遺物出土状態	上右上	SD02 土器出土状態 (西から)
	下右下	中央土坑遺物出土状態 (西から)	上左下	SD02 土器出土状態 (西から)
17	上	SH06・SH12 全景 (東から)	上右下	SD02 土器出土状態 (西から)
	下	SH06・SH12 全景 (西から)	下左上	SR01 (北から)
18	上左上	SH06 焼土杭検出状況 (東から)	下右上	SR011 (南から)
	上右上	SH06 土器出土状態	下左下	SR01 アゼ (北から)
	上左下	SH06 焼土杭断面 (東から)	下右下	中央アゼ (南から)
	上右下	SH06 焼土杭出土状態 (東から)	28	上 旧河道土器出土状態
	下左上	SH06 刃跡断面	下	調査風景
	下右上	SH06 炭化材出土状態	29	出土遺物集合 (1)

- 30 出土遺物集合 (2)
- 31 出土遺物集合 (3)
- 32 胎土薄片 (1)
- 33 胎土薄片 (2)
- 34 胎土薄片 (3)
- 35 胎土薄片 (4)
- 36 胎土薄片 (5)
- 37 上左上 SD09 (西から)
上右上 SD10 アゼ (西から)
上左下 SR01 アゼ (南から)
上右下 SR01 アゼ (北から)
下左上 SR01 アゼ (北から)
下右上 SR01 アゼ (北から)
下左下 SX01 土器出土状態
下右下 SK02 調査風景
- 38 上左上 SX04 土器出土状態 (東から)
上右上 現地説明会
上左下 考古学者養成セミナー
上右下 実測風景
下左上 上層スキ溝 (南から)
下右上 上層水田アゼ (南から)
下左下 15年度調査区(長越Ⅱ)の現況
下右下 船場川ゴミ集積状況
- 39 出土遺物 (1)
- 40 出土遺物 (2)
- 41 出土遺物 (3)
- 42 出土遺物 (4)
- 43 出土遺物 (5)
- 44 出土遺物 (6)
- 45 出土遺物 (7)
- 46 出土遺物 (8)
- 47 出土遺物 (9)
- 48 出土遺物 (10)
- 49 出土遺物 (11)
- 50 出土遺物 (12)
- 51 出土遺物 (13)
- 52 出土遺物 (14)
- 53 出土遺物 (15)
- 54 出土遺物 (16)
- 55 出土遺物 (17)
- 56 出土遺物 (18)
- 57 出土遺物 (19)
- 58 出土遺物 (20)
- 59 出土遺物 (21)
- 60 出土遺物 (22)
- 61 出土遺物 (23)
- 62 出土遺物 (24)
- 63 出土遺物 (25)
- 64 出土遺物 (26)
- 65 出土遺物 (27)
- 66 出土遺物 (28)
- 67 出土遺物 (29)
- 68 出土遺物 (30)
- 69 出土遺物 (31)
- 70 出土遺物 (32)
- 71 出土遺物 (33)
- 72 出土遺物 (34)
- 73 出土遺物 (35)
- 74 出土遺物 (36)
- 75 出土遺物 (37)
- 76 出土遺物 (38)
- 77 出土遺物 (39)
- 78 出土遺物 (40)
- 79 出土遺物 (41)
- 80 出土遺物 (42)
- 81 上 竹の前遺跡 I区全景 (東から)
下 竹の前遺跡 II区全景 (北から)
- 82 左上 竹の前遺跡 SD02-a 全景 (南西から)
竹の前遺跡 SD02-a 中層土器出土
状況 (南西から)
左下 竹の前遺跡 SD02-a (北東から)
右下 竹の前遺跡 SD02-b (北東から)
- 83 上 竹の前遺跡 SD02 土層断面
(中央部・南西から)
下 竹の前遺跡 SD02 土層断面
(北部・南から)
- 84 上 竹の前遺跡 SB02 (北東から)
下 竹の前遺跡 SX01 (北東から)
- 85 左上上 竹の前遺跡 SB01P2-1 土層断面
(西から)
左上下 竹の前遺跡 SB02P2-1 土層断面
(東から)
左下上 竹の前遺跡 SA02P2 土層断面
(北から)
左下下 竹の前遺跡 SA04P2 土層断面
(西から)
右上上 竹の前遺跡 SB02P1-1 土層断面
(東から)
右上下 竹の前遺跡 SB03P1-2 土層断面
(西から)
右下上 竹の前遺跡 SA04P1 土層断面
(南西から)
右下下 竹の前遺跡 SA04P3 土層断面
(南西から)
- 86 竹の前遺跡 出土遺物 (1)
- 87 竹の前遺跡 出土遺物 (2)
- 88 竹の前遺跡 出土遺物 (3)
- 89 炭化材 (1)
- 90 炭化材 (2)

I はじめに

1. 調査に至る経緯と既往の調査

長越遺跡は姫路市飯田字長越・湯田に所在する遺跡である。1974年から2ヵ年にわたって建設省（当時）が計画する姫路バイパス建設に先立って調査が実施されて知られることになった遺跡である。兵庫県を代表する弥生時代末から古墳時代初期の集落跡である。その後、船場川東側では区画整理事業が計画され、東川遺跡・大鳥遺跡・飯田カスカエ遺跡・畑田遺跡として同時期の集落跡も姫路市教育委員会によって調査されている。船場川流域は上流に向かって竹の前遺跡・小山遺跡・黒表遺跡・橋詰遺跡と弥生時代後期の集落が集中している。庄内式土器が多く出土していることで特によく知られている。

長越遺跡は昭和49・50年度に全面調査が行われた庄内期の遺跡である。同報告書（播磨・長越遺跡 昭和53年 兵庫県教育委員会）掲載の今里幾次氏の「長越遺跡調査前史」によると、昭和20年代まで標高10m以下の低地に遺跡存在は考えられておらず、唯一千代田遺跡だけであった。（長越遺跡は標高4.5m）それが、30年代以降遺跡数は増加し、姫路市内の縄文・弥生時代遺跡総数の占める割合も高くなっていった。丘陵部の増加率に比べると桁が変わるほどの増加である。昭和初期には1割にも満たなかった遺跡が、30年代には3割、40年代終わりには4割近くに、現在では半数を超えているものと思われる。標高も2m近くまでの低い部分で遺跡は確認されている。

バイパス建設で知られるようになった長越遺跡であるが、実はその確認は昭和31年2月である。今里氏の栗木遺跡（飾磨区今在家）をテーマにした姫路市文化財研究講座の発表で、船場川下流域の低地に広く弥生時代の遺跡分布の可能性が示唆された。それを受けて現地踏査された増田重信氏によって長越遺跡は確認された。今里氏への葉書に「飯田の西に微高地が2ヵ所あり、弥生式土器と須恵器の破片を採集した。西が字大町、東が字湯田である」と記されている。東側の微高地が長越遺跡である。旧道（現在のバイパスの南側道路）における水道管設置掘削での採集であった。今回本発掘を行った調査区の西側集落内であり、この部分周辺が長越遺跡発見となった水道管設置工事隣接部と思われる。

昭和49・50年度に調査された長越遺跡は、竪穴住居跡15棟（落込み1も住居跡と考えれば16棟）・掘立柱建物1棟と土坑・落込み・溝・大溝が検出されている。竪穴住居跡は切り合い関係があり4小期に細分され、播磨の土器編年の基準となった。集落は東西2群に分けられ、中央空間地に掘立柱建物が存



図2 昭和49年度調査区（長越遺跡1）

在しており、両群共有の倉庫かと考えている。今回調査区と比べて古い段階（長越Ⅰ・Ⅱ期）の竪穴住居跡も存在しており、今回調査区（本報告）に分村した可能性が高い。この大溝は平成20年度調査区（長越Ⅲ）に延びているものと思われる。大溝に合流するように東側で支流が存在し、その部分に水量調整のための堰が設置されている。また、合流部西側には橋と考えられる遺構もある。その周囲で石製模造品（剣形・有孔円板・双孔円板・勾玉）を使った祭祀が行われている。石製模造品祭祀の最も古い事例である。コンテナで500箱余りに及ぶ多量の土器が出土しており、長越遺跡Ⅰ～Ⅲ式に分類されている。当時は広大な調査面積の印象があったが、3000㎡余りで、遺跡の稠密なことが理解されよう。調査区内南側には大溝が東西に通っており、現在名の水尾川と船場川の旧河道を結ぶ運河的な役割を担っているとともに、主要な水路として利用されていた。それは昭和49年度の同時期に調査された2遺跡の類似性による。船場川は長越遺跡である。水尾川は構・権現遺跡、中地・天神遺跡であり、両遺跡も古墳時代初期の遺跡で60mの空閑地があり別遺跡としているが、同一遺跡として捉えられる。竪穴住居跡6棟と大溝2条で長越遺跡と同じ状況を呈していた。1棟の竪穴住居跡は長さ14mもある多角形プランの大形住居跡である。今回の確認調査は吉識氏と担当したが、奇しくも30年前2人は東西に分かれて長越遺跡、構・権現遺跡の調査に参加していた。その際に運河的な話をした。同時代の共通項のある遺跡であることと、長越遺跡で船が出土したことによる。また、特筆されるのは古墳時代中期の馬埋葬土坑である。兵庫県での最古例であり、重要である。長越遺跡では墓が確認されていないが、中地・天神遺跡では墓城が確認されているのも注目される。

船場川・水尾川ともに姫路平野を流れる河川である。低地の比高差が少ない沖積地を流れることから、たびたび氾濫していた。それを解消するために河川改修事業が計画された。昭和40年代から計画施工され、下流から順次行われている。その一貫として分布調査・確認調査が数回実施され、遺跡の広がりが見明らかになった。調査結果から飯田遺跡は長越遺跡と同一の遺跡として考えられるので平成15年調査区を長越遺跡とし、報告も「長越遺跡Ⅱ」とした。改修事業は北側にも計画されており、字長越と同じ遺跡となることは明白である。このことから今回調査区も長越遺跡として報告するもので書名も「長越遺跡Ⅲ」とした。

2. 確認調査の経過と結果

船場川は2級河川ではあるが、比較的水量の多い河川である。姫路平野を流れ、姫路城跡の西側外堀の機能も果たしている。姫路城跡から河口まで6km近くあるが、比高差は12m前後と少ない。長越遺跡から河口までは3.5kmで比高差は3m前後である。そのため、大雨の際には姫路市街地の低い部分が浸水することが重なったことから、船場川の河川改修事業が計画された。河口から順次計画施工されている。それに合わせて主に南側から分布調査も実施している。長越遺跡周辺の分布調査は、平成5年度に実施され隣接地を含めて遺物が採集されている。また、長越遺跡の南東部分に位置することからも遺跡の存在が十分に予想された。飯田橋以南について平成14年度に兵庫県中播磨県民局土木整備部姫路土木事務所からの依頼により確認調査を実施した。調査対象地は飯田橋の南側部分で、飯田橋から南に約幅20m、長さ220mの部分である。山田清朝を担当者とし、2×4mを基本としたトレンチを14ヶ所設定して確認調査を行った。調査は平成14年6月10・11日の2日間実施した。その結果、北半部分において溝とともに全面で包含層が確認されたので、本発掘調査が必要とされ、平成15年度に2回にわたって本発掘調査を行った（長越遺跡Ⅱ）。その春に実施した1回目の本発掘調査時に、飯田橋以北の確認調査が合わ

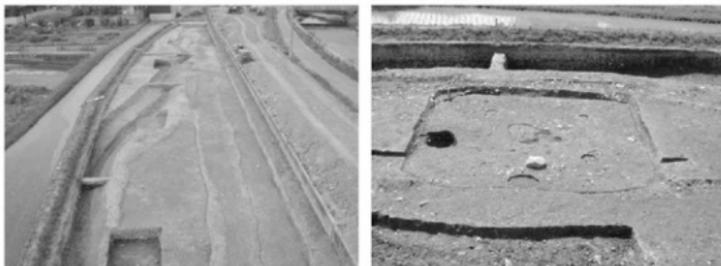


図3 平成15年度調査区（長越遺跡Ⅱ）

せて実施された。その結果、北側にも遺跡が広がっていることが明らかとなり、長越遺跡Ⅰにより接する地点となった。長越橋までの部分で今回調査の北側に位置しており、平成20年度に本発掘調査を実施した。（本報告・長越遺跡Ⅲ）。その際の大溝は昭和49・50年度調査の大溝と同一のものと思われ、同一集落であることは確実である。確認調査はまず重機によって表土から掘削し、断面観察を行いながら、遺構・遺物の存在しそうな部分は人力掘削に切り替え精査した。調査は平成15年6月6日～20日に実施した。その結果、北半部分において溝とともに全面で包含層が確認されたので、本発掘調査が必要とされた。

調査主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

事務担当 所長 平岡憲昭

主幹 輔老拓治

総務課 課長 森 俊彦

企画調整班 主任調査専門員 井守徳男

主査 甲斐昭光

課付 稲田 毅

調査第1班 調査専門員 吉田 昇

調査担当 調査第1班 主査 吉識雅仁

主査 渡辺 昇



図4 調査風景

3. 本発掘調査の経過

確認調査の成果を受けて、平成20年度に本発掘調査を実施した。年度末の2月2日に現地立会いし、調査準備に入った。10日に調査範囲を確定し、調査用の杭を打設した。14日から北端から南に向かって機械掘削を開始した。機械掘削土は南側部分に横置きした。確認調査結果を基礎にして盛土・耕土と床土を機械掘削の対象とするが、一部黒褐砂礫も上部は機械によって除去した。安全が確保出来る距離になってから、機械掘削と平行して北側から適宜壁面を整形するとともに、現状の機械掘削面でも面精査する。確認調査トレンチや攪乱坑を掘り下げ、垂直的な資料を得るように努めた。面精査の際に攪乱土の入っている部分や残っている部分は掘り下げた。北半の遺構面は新しい（近世か？）時代の耕作痕以外の遺構は確認できず、古墳時代以降の包含層（黒褐砂礫）も堆積（残存）していなかった。そのため、僅かに人力掘削を行ったものの、ほとんど面精査に近い状況であった。竪穴住居跡を中心とする集落跡



図5 長越遺跡調査区の位置

で遺構は集中していた。それに対して南半の遺構は旧河道を主とするもので濃密な包含層が厚く存在した。上面に近世の旧河道がある以外は古墳時代の堆積で早い段階に埋没したことが窺われる。古墳時代以降の堆積土は遺物が少なかった。遺構は溝が主体で上部では旧河道と思われる大溝が調査区内を流れていた。遺構は堆積状況を確認・記録するためのアゼを幾つか設定して掘り下げの参考にした。アゼをはじめ壁面の土層断面図と写真撮影を行い、アゼを除去した。遺物の出土状況も適宜記録（写真・実測）している。3月10日に遠景とともに図化するために空中写真撮影を行った。全景写真や部分写真は足場を適所に随時立てて行った。同日記者発表を行い、3月14日（土）に現地説明会を開催した。関東からも足を運んでいただくなど多数の参加を得た。現地にて17日に中間検査を受けた。一部断ち割りなどの作業・記録作成に22日まで費やした。SH01は一部拡張し、全貌を明らかにした。平行して埋め戻しを行い24日にすべての調査を終了した。

調査主体 兵庫県教育委員会

事務担当 兵庫県立考古博物館

	館長	石野博信
	副館長	藤原 悟
	埋蔵文化財調査部長	若生晃彦
	主幹	岡崎正雄
総務課	課長	前川浩子
	主査	大西晃彦
企画調整班	主査	小川弦太
調査第1班	調査専門員	吉田 昇
調査担当	調査第1班	課長補佐 渡辺 昇
	技術職員	上田健太郎
	調査参加者	赤壁千恵子・奥田智子・赤壁 静・前田陽子・佐藤朋子・ 藤田 泉・石野照代



図6 調査風景

4. 整理作業の経過

整理作業は平成21～23年度の3ヶ年で実施した。本発掘調査と同じく兵庫県中播磨県民局長と兵庫県教育長が契約を交わして実施した。平成21年度は水洗いから接合作業までを、平成22年度は実測作業からトレース作業・分析鑑定を、平成23年度はレイアウトから報告書刊行までの作業を行った。ともに兵庫県立考古博物館で行った。

調査主体 兵庫県教育委員会

事務担当 兵庫県立考古博物館

	館長	石野博信
	副館長	藤原 悟（平成21年度）・安部邦明（平成22・23年度）
	埋蔵文化財調査部長	若生晃彦（平成21・22年度）・高尾尚登（平成23年度）
	主幹	吉田 昇（平成22年度）・深井明比古（平成23年度）
総務課	課長	前川浩子

	主 査	大西晃彦
	事務職員	川原聡介（平成22・23年度）
整理保存課	調査専門員	森内秀造（平成21年度）
	課 長	村上泰樹（平成22・23年度）
	課長補佐	岡田章一（平成21・22年度）
	主 査	篠宮 正・山本 誠（平成22・23年度）
	主 査	深江英恵（平成23年度）
調査担当	調査第1課 課長補佐	渡辺 昇
	企画調整課 主 査	上田健太郎
整理保存課	嘱託員	前山三枝子・森本貴子・柏原美音・佐伯純子・加藤裕美 佐々木智子・増田麻子・古谷章子・栗原美緒・有田遥香 吉田優子・眞子ふさ恵・島村順子・又江立子・三好綾子 奥野政子・藤尾裕子・嶺岡美見・吉村あけみ・小野潤子 上田沙耶香
保存処理	整理保存課 主 査	岡本一秀
	嘱託員	岡田美徳・桂 昭子・浜脇多規子



図7 整理作業風景

II 位置と環境

長越遺跡は姫路平野南側の姫路市飯田字長越・湯田に所在する遺跡である。東側に船場川が流れており、船場川の縁辺微高地に遺跡は営まれているが、地形が複雑に入り組んでおり、旧河道も遺跡内を通っている。

姫路平野は播磨中央部の市川によって開析された平野であり、東西9.8km、南北7.5kmの兵庫県では最も広い平野となっている。その中央を市川が流れているが、現在の河道に安定したのは近世になってからである。弥生時代には幾度となく河道を変えていたことは確実である。平地の下には旧河道と微高地が存在している。氾濫時は船場川が本流の流れとなったことも十分に想像される。現在の大日線付近から姫路城跡の東外堀である三左衛門堀（川）を本流が南下していたであろうと考えられている。船場川は低地から市川と分かれているが、ある時期の氾濫などによってつながったと考えられており、本来は大野川から流れてきた河川とされている。船場川流域は弥生時代から古墳時代にかけて多くの遺跡が立地していることは、常に氾濫を受けていたわけではなく、それ以上に可耕地として肥沃な平地を与えられていたことを示している。「播磨国風土記」には市川は小川と記され、西側が大川が存在している。「大日本地名辞典」では船場川を大川に比定している。船場川は手柄山にあたり、蛇行して長越遺跡近くから直線的に南下している。その主軸方向は西側の水尾川と同じで約20°東に振っており、復原されている条里地割に即している。

旧石器時代の遺跡は但馬・丹波では良好な調査例があり、播磨でも明石市・小野市の東播磨では層位的な調査が実施されているが、西播磨では良好な例がない。たつの市礎岩遺跡でまとまっているのが良好な例である。単独の出土例が知られているだけで、まとまった調査例はない。縄文時代の遺跡も同様である。丁・柳ヶ瀬遺跡など中期から後期にかけての遺物が出土しているが生活跡は明瞭でない。早くに調査された辻井遺跡が人骨出土などで著名であるが、他にまとまった調査例はない。晩期になって低地にも遺跡が拡大されるようになって、姫路平野の遺跡は増加する。

弥生時代になると遺跡数は増大する。弥生時代から奈良時代にかけて姫路平野が播磨の中心であったことを示す遺跡の稠密さと内容を誇っている。姫路城下町にある本町遺跡でも弥生土器が出土しており、姫路城北西の八代深田遺跡は中期から後期の土器がまとめて出土しており、編年資料として使われている。八代深田遺跡東側を流れる船場川は、JRと交差する付近に南畝町遺跡・豆腐町遺跡があり、その西側に学史に残る千代田遺跡がある。船場川に近い南畝町遺跡・豆腐町遺跡は中期からの遺跡で溝(河道)・土坑が調査されている。船場川から離れた千代田遺跡と東側の北条遺跡では前期の遺構が検出されている。北条遺跡のさらに東にある市之郷遺跡は当地の拠点集落で前期から弥生時代を通して古墳時代・奈良時代と生活している。前期には木棺墓も築かれている。中期には堅穴住居跡・木棺墓や周溝墓も調査され、後期にも多数の堅穴住居跡が検出されている。古墳時代にも継続し、5世紀の堅穴住居跡群があり、韓式土器などの渡来系遺物が多数出している点は注目される。奈良時代には官衛的な遺構・遺物もあり、氏寺と思われる市之郷廃寺も建立される。西側の北条遺跡・豆腐町遺跡でも奈良時代になると獨立柱建物や井戸などの遺構が検出されており、出土遺物にも墨書土器や漆紙文書・二彩壺・円面碗などの官衛的遺物が多く見られる。鉄滓や羽口の出土や多量の製塩土器など播磨国府の工房としての機能を保有していたようである。漆の付いた土器が多いのも豆腐町遺跡の特徴である。中世になると遺

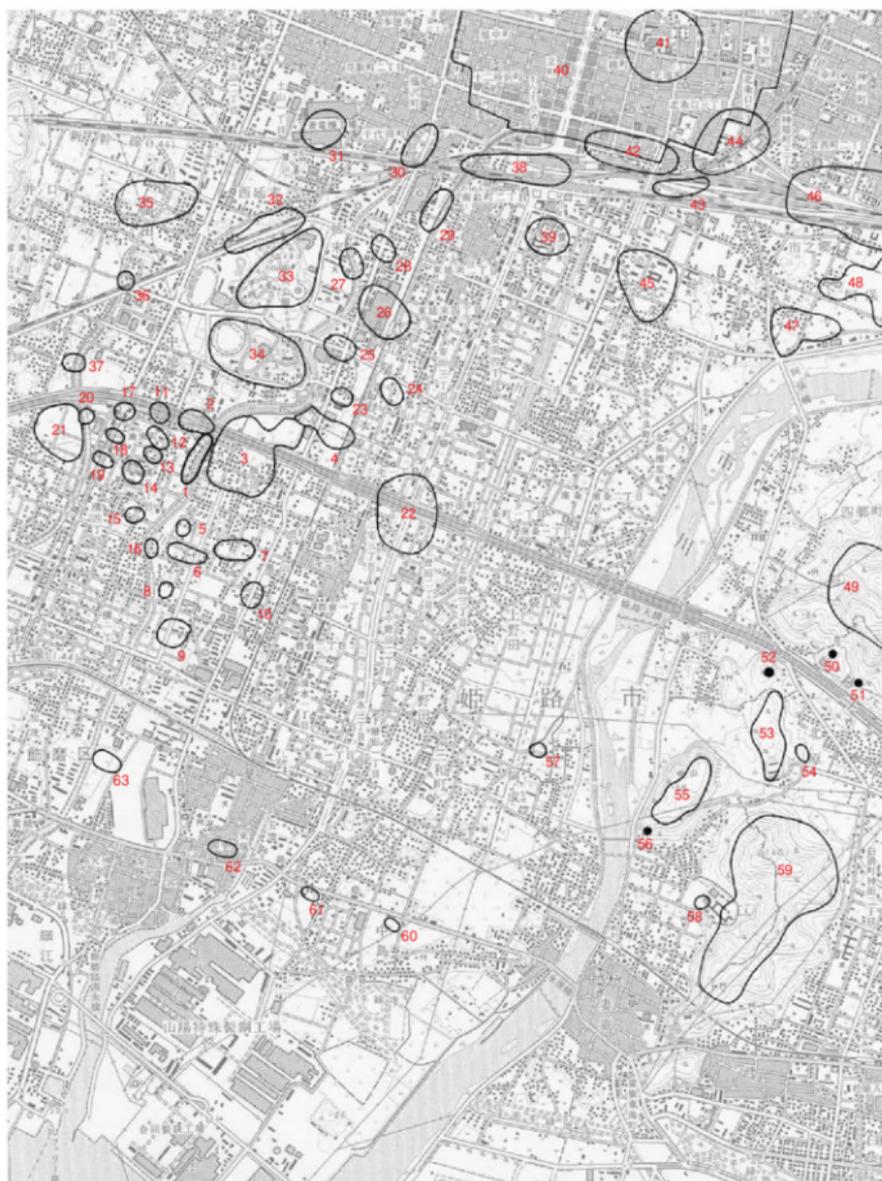


図8 長越遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1:25,000)

表1 長越遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	遺跡の時代	No.	遺跡名	所在地	遺跡の時代
1	長越(飯田湯田)遺跡	姫路市飯田	弥生～古墳	33	手柄山北丘古墳群	姫路市西延末	古墳
2	長越遺跡	姫路市飯田	弥生～中世	34	手柄山南丘古墳群	姫路市西延末	古墳
3	畑田遺跡	姫路市飯田	縄文～中世	35	八反長遺跡	姫路市岡田	弥生
4	竹の前遺跡	姫路市手柄	弥生～古墳	36	堂田遺跡	姫路市岡田	縄文～弥生
5	カスカエ遺跡	姫路市飯田	弥生～中世	37	丁田遺跡	姫路市町坪・中地	弥生～古墳
6	飯田カスカエ遺跡	姫路市飯田	縄文～古墳	38	豆腐町遺跡	姫路市豆腐町	弥生～平安
7	薄妻田遺跡	姫路市飯田	弥生～古墳	39	豊沢遺跡	姫路市豊沢町	弥生
8	飯山田遺跡	姫路市飯田	平安	40	姫路城城下町跡	姫路市本町	中世～近世
9	大島遺跡	姫路市飯田	縄文	41	木町遺跡	姫路市総社本町	奈良
10	石ヶ坪遺跡	姫路市龜山	縄文～弥生	42	鞆前町遺跡	姫路市鞆前町	弥生～近世
11	姫東遺跡	姫路市中地	弥生	43	朝日町遺跡	姫路市北条	弥生～奈良
12	東久保遺跡	姫路市中地南町	弥生	44	神屋町遺跡	姫路市神屋町3丁目	弥生～平安
13	大町遺跡	姫路市飾磨区構5丁目	弥生	45	北条遺跡	姫路市北条	弥生～古墳
14	大塚遺跡	姫路市飾磨区構5丁目	古墳	46	市之郷遺跡	姫路市市之郷	弥生～平安
15	真福寺遺跡	姫路市飾磨区構5丁目	弥生～古墳	47	阿保遺跡第1地点	姫路市阿保	平安～中世
16	構遺跡	姫路市飾磨区構3丁目	縄文～弥生	48	阿保遺跡第2地点	姫路市阿保	弥生～中世
17	西久保遺跡	姫路市中地南町	弥生	49	仁寿山古墳群	姫路市西郷町東阿保	古墳
18	中地天神遺跡	姫路市中地南町	弥生～中世	50	梅ヶ枝墓地前古墳	姫路市北原	古墳
19	権俣遺跡	姫路市中地南町	縄文～弥生	51	打籠山古墳	姫路市北原	古墳
20	中ノ町遺跡	姫路市玉手	弥生	52	兼田丸山古墳	姫路市兼田	古墳
21	大石橋遺跡	姫路市玉手	弥生～中世	53	兼田古墳群	姫路市兼田	古墳
22	三宅遺跡	姫路市飾磨区三宅	奈良	54	才田遺跡	姫路市北原	古墳・奈良
23	浜田遺跡	姫路市手柄	弥生	55	因国山城跡・甲山遺跡	姫路市飾磨区妻鹿	弥生～中世
24	古屋敷遺跡	姫路市手柄1丁目	弥生～古墳	56	甲山経塚	姫路市飾磨区妻鹿	中世
25	小山遺跡	姫路市延末	弥生～古墳	57	ヒジ倉遺跡	姫路市飾磨区阿成	古墳～中世
26	黒表遺跡	姫路市東延末	弥生～古墳	58	飾磨高等学校周辺遺跡	姫路市飾磨区妻鹿	弥生
27	橋詰遺跡	姫路市延末	縄文～古墳	59	御旗山古墳群	姫路市飾磨区中島	古墳
28	村瀬遺跡	姫路市延末1丁目	弥生	60	南通り遺跡	姫路市飾磨区中島	平安～中世
29	若田遺跡	姫路市東延末町	弥生	61	西通り遺跡	姫路市飾磨区中島	古墳～中世
30	南畝町遺跡	姫路市南畝町	弥生	62	光明寺跡	姫路市飾磨区御幸	近世
31	千代田遺跡	姫路市千代田町	縄文～弥生	63	構石田遺跡	姫路市飾磨区構	中世
32	西延末遺跡	姫路市西延末	弥生				

跡は明確でなくなるが、北条遺跡・畑田遺跡では墓や掘立柱建物が検出されている。鎌倉時代に播磨守護所が加古川に置かれるようになり、播磨の中心を維持できなくなるが、黒田氏による初期姫路城跡そして羽柴秀吉によって播磨の中心地として復活し、次いで慶長5年(1600)池田輝政による姫路城跡建築・城下町整備によって完全たるものになる。城下町として近世を謳歌し、明治維新によって鉄道が敷設される。明治21年(1888)12月に山陽鉄道会社によって兵庫から姫路まで開通している(同年6月兵庫明石間が先に開通)。その遺構が豆腐町遺跡などで確認されている。初代・2代目の機関車転車台や扇形車庫が調査されている。その後、周辺地域との合併などで増大し、平成8年には中核都市として指定され、改めて播磨の中心となった。文化財の観点からも姫路城が世界文化遺産となり、整備活用が図られ、兵庫県の文化財的リーダーの位置を保っている。

船場川を下ると手柄山周辺には多くの遺跡が並んでいる。上流から村瀬遺跡・橋詰遺跡・黒表遺跡・小山遺跡・生矢神社裏遺跡・竹の前遺跡・畑田遺跡と続く。畑田遺跡(旧船場川東区整遺跡第6地点)の対岸(西側)に長越遺跡は立地している。畑田遺跡は弥生時代中期から生活を営んでいる集落で長越



図9 長越遺跡Ⅰ土器出土状況



図10 壇場山古墳

遺跡と同時期にも大規模なムラを形成している。溝で囲まれた建物や大形の円形周溝墓も築かれている。長越遺跡より早くから生活をはじめ長期間続く集落である。銅鉄も出土している。橋詰遺跡なども早くから庄内式土器の出土が知られており、庄内期の集落が密集している地域である。小山遺跡は、この中では最も大きな集落で長い期間を通して生活しており、古墳時代まで継続している。初期須恵器も出土している。船場川西側の手柄山は独立丘陵で早くに開発されたことから、正式な調査は行われておらず、不分明な点が多い。弥生時代末の墳丘墓から古墳時代を通しての葬送地に利用されていたようである。鏡や埴輪なども出土している。手柄山南側に位置する竹の前遺跡は弥生中期から庄内期にかけての旧河道と溝が多く調査されており、多量の土器が出土している。龍を描いた絵画土器は興味深い。また、堅穴住居跡も複数検出され、洪水後も生活を続けている点が長越遺跡と異なっている。中世の掘立柱建物も検出されている。

長越遺跡は船場川の西側微高地に存在する。北側には遺跡が広がらず、東西方向もバイパス建設時の調査ではほぼ明らかになっており、南側のみ広がっていることが明らかであった。西行きのバイパス側道は十分な調査が行えなかったが、長越遺跡と同時期かやや古い集落が存在するようで、さらに南側に広がっていると予想されていた。それが今回調査した地点である。長越遺跡の西側は異なる微高地に郭東遺跡が存在する。長越遺跡と同時期の集落で銅鉄も出土している。有茎のえぐりの深いタイプである。長越遺跡でも2本出土しており、船場川東区整遺跡第6地点でも無茎の銅鉄が出土している。隣接した地域で銅鉄の出土が集中している。「播磨国風土記」では当遺跡周辺は飾磨郡伊和里とされており、実業郡伊和君が移住してきたと伝承されており、滑石製模造品から長越遺跡と伊和遺跡の関連が想起される。長越遺跡の東側は三宅の地名が残り、やはり風土記に出てくる飾磨御宅と考えられている。遺称地が三宅遺跡で奈良時代の遺物が散布している。長越遺跡でも奈良時代の墨書土器が存在し緑釉陶器が出土している。

三宅遺跡の東側市川を越えたところには、高地性集落である小富士山遺跡・仁寿山遺跡がそびえている。周辺では数少ない高地性集落で、近代には旗振り山としても活用されていた。周辺には阿保百穴や坂元古墳群・見野古墳群など後期古墳群が広がっている。前期古墳である御旅山3号墳は南東方向にあり、中期の奥山大塚は仁寿山の南側に、宮山古墳は仁寿山の北側に位置する。宮山古墳は5世紀後半の3基の堅穴式石室を埋葬主体とし、金製垂飾付き耳飾りや初期須恵器など豊富な副葬品が出土している。前記の市之郷遺跡との関連が考えられる。現状で間を市川が流れていることから、分離されがちであるが、本来の地形などを考慮すれば埋葬者と強く関係した集落であろうと考えられている。

長越遺跡の西側の水田地帯には微高地上に多くの遺跡が確認されている。これらは今里幾次・増田重信・木谷幸夫・松本正信・加藤史郎各氏らの努力の賜物である。郭東遺跡・中地天神遺跡・カスカエ遺跡・丁田遺跡・権現遺跡、そこから南西に向かって西田遺跡・五位田遺跡・タテノ遺跡・石や田遺跡・加茂構居・桜ヶ坪遺跡・栗木遺跡の各遺跡が確認されている。弥生時代後期から古墳時代の遺跡が多かったが、縄文晩期の甕も西田遺跡などで確認されている。中地天神遺跡は馬の埋葬土坑で知られており、(構)権現東遺跡では長越遺跡と類似する大溝が検出されている。この地域は都路バイパス以外にも幹線道路や下水道工事、水尾川河川改修事業によって発掘調査が行われているが、未だ全体像が浮かんでこない。また、船場川東と同様に大井川周辺も土地区画整理事業が計画され、新たな事実も判明している。水尾川河川改修事業では権現遺跡・八反長遺跡・堂田遺跡が全面調査され、岡田遺跡・西庄遺跡で確認調査が実施されている。縄文時代晩期から弥生前期にかけて、弥生後期の土器がまとまって出土しており、八反長遺跡では木製品も多量に出土している。

長越遺跡周辺の船場川流域は庄内式土器が多数出土する地域というのが大きな特徴である。長越遺跡に代表される庄内甕の存在は特殊で大和・河内から導入され、この地で播磨産の庄内甕を生産している。庄内甕の存在は古墳時代初頭の播磨の位置付けを象徴するものと思われる。



図11 播磨国分寺跡



図12 豆腐町遺跡

III 長越遺跡の遺構

検出した遺構は、堅穴住居跡14棟・落ち込み4基・土坑4基・溝11条・ピット数基と近世水路・旧河道である。調査面は1面で実施したが、遺構の時期は2時期あり、古墳時代初頭と近世から近代にかけての時期である。

近世の遺構は近世の水路と考えられるSR01と耕作痕跡である。調査区南半に限られている。SR01は幅2.5mで北西から南東に向かって調査区を東西に走っており、検出した長さは15mを測る。断面箱形で深さ0.3mである。杭列が打ち込まれ、護岸用の板材も挟み込まれている。

水田関連の遺構は畦畔と鋤溝である。畦畔は大畦畔と思われるもので高さ0.2m前後、幅0.6mを測る。鋤溝は原則的には南北方向であるが、不定方向のものも確認している。

調査区は440mと狭小な幅10mの細長い部分である。その北半が集落跡で堅穴住居跡が稠密に築かれている。南半が近世水路・水田を検出し、下層は旧河道である。

1. 堅穴住居跡

14棟検出しているが、切り合い関係が多く全体像がわかる住居跡は少ない。1棟としたが建て替えが認められるもの(SH02)もあり、面積の割りには多くの堅穴住居跡が確認されており、非常に密集した集落跡であることが判断できる。

SH01 (図版3 巻頭図版3・4 写真図版9～12)

調査区北東隅南側の東壁沿いで検出した方形プランの堅穴住居跡で、調査区東側に延びていたが、一部拡張して調査した。焼失住居跡で炭化材が多く残っていた。全体は調査していない。高床部があるが、オーソドックスなプランではなく、複雑な形状をしていた。一応、2時期あり変化したと考えている。下面(SH01a)では南東辺を調査していないが、土質が変化している部分があり、そこに板材が置かれている(SH01bの南東辺になる)。南西辺近くには板材を止める小ピットがあり杭と思われる。この部分で空間を区切っているようで、板壁があったかもしれない。南西辺だけ壁溝を有しているのも特徴的である。南西辺中央に沿って土坑があり、中から壁肩部にかけて披熱している。通常の炉跡よりも工房跡の要素を感じる。径0.4m、深さ0.4mの不定円形である。その北側にも同形の円形土坑があるが、こちらは焼けておらず、深さは0.5mと深く円礫を入れている。この2基の土坑を囲むように東西1.4m、南北1.15mを僅かに掘り窪めている。北西辺のみ全体を把握しており長さ4.2mを測る。南西辺は3.3m、北東辺は1.5m調査している。北西辺沿いに高床部がある。低床部との差は3cm前後と僅かであるが、北東辺に向かって段差部分に板材があり、板壁の可能性がある。幅1.15mで南西辺中央の2基の土坑を囲う落ち込み肩部まで高床部は続いている。前記したように南東辺は区切っており、高床部になっていたかもしれない。低床部隅に2基のピットを確認しており、支柱穴と思われる。2基の心々間距離は2.0mである。それ以外に高床部に3基、低床部に2基のピットがある。床面はいずれも強く焼けており、上下2面と考えない方が良い根拠となる。下面の炭化材は板材だけで、他は小片である。

上面(SH01b)は長さ4.4m、幅3.1mの長方形プランの堅穴住居跡で中央がやや弧状になる。炭化材が多数見られ、中央から放射状になっているものの、北西辺はその位置(板壁が)倒れた状況を示しているように思える。床面までの深さ0.20mと浅い。高床部と低床部があり、比高5cm前後である。

低床部は長さ2.55m、幅1.55mで、南西辺中央に方形の土坑を敷設する。南東辺のみ1.3mで他辺は1.0mの台形を呈し、深さはなく土質が変化しているだけで、上面に平石を据えている。

SH02 (図版4 写真図版13)

調査区中央北側に位置し、調査区内で全貌がわかる住居跡の1つで長越遺跡Ⅲの中で最も規模が大きい。ほぼ同じ位置で南から北に縮小している。調査区内の他住居跡は別名称を与えたが、本住居跡は北辺を同じくしており、建て替えてなく単なる縮小(南辺の移動)の可能性が高いと思ったので、古い方をSH02a、新しい方をSH02bと報告する。古い遺構として下面にSD06があり、SH13を切っている。

SH02aは南側に大きいもので、壁溝が途絶えている。南辺5.2m、東辺6.4m、北辺5.2m、西辺5.9mを現況で測る。南西と北東隅は角張っているが、他の2隅は隅円になっている。床面の深さは0.1mと浅くSH02bと同じ高さである。南辺中央に土坑が築かれている。東西0.85m、南北0.55m、深さ0.18mである。長方形で底は丸くなっており、北側はSH02b壁溝に切られている。柱穴は明瞭でないが、南東隅に近いP4は主柱穴で新段階に利用したかと思われる。確実に古段階と出来る遺物はない。

SH02bは北辺と西辺は共有しているが、僅かに縮小している。南辺4.7m、東辺5.3m、北辺5.0m、西辺4.8mを現況で測る。中央で測ると東西5.1m、南北5.7mになる。幅0.2～0.3m深さ0.1mの壁溝を巡らせており、西辺は隅が丸くなっており、幅が狭くなっている。東辺中央に土坑を設けている。南北1.15m、東西0.6mの南側が狭い不定円形をしており、深さ0.15mである。焼土・炭は含まれない。南東隅は壁溝が切れており、その両端にピットが見られる。P4は古段階を利用したと思われる、ピットは心々間で1.1m離れており、入口かと思われる。床面中央は極端ではないが、一段下げられ低床部になっており溝も設けている。溝は幅・深さともに0.1mと小さいものである。その内側に主柱穴があり4本柱である。主柱穴は0.4mと深い。心々間距離すなわち低床部の規模は南辺2.5m、西辺2.6m、北辺2.85m、東辺2.1mで深さは0.1m前後と浅い。東辺は南から0.5mの部分から北西隅まで0.35m張り出していて入口に対応しているように見える。土器は低床部に多く見られた。

SH03 (図版5 写真図版14)

SH02南側に位置し微高地縁辺に近い。SH06・SH12・SH14を切っている。南辺4.1m、東辺4.0m、北辺3.9m、西辺3.9mの隅円方形で、隅部の円形が多く中央で測ると南北4.95m、東西4.95mの方形になる。幅0.1～0.15m深さ0.1mの壁溝が巡る。南辺中央には壁溝から直交して幅0.2m、長さ1.3mに直線に溝が延びている。南東隅には東西1.2m、南北0.65mの不定方形の土坑が深さ0.2m掘られている。炭を含むが印跡ではない。床面中央に4本柱穴があり主柱穴と思われ、その内側が一段低くなっている。心々間距離はすべて2.4mの正方形となる。低床部中央に10土坑が存在する。西側に東西0.45m、南北0.8m、深さ0.05mの不定方形があり、被熱し焼土・炭が確認される。東側に径0.4m、深さ0.35mの円形土坑がある。土器は低床部の方が多いが顕著ではなく、高床部からも出土している。

SH04 (図版6 写真図版15・16)

調査区中央東側で検出され、SH06・SH12を切っている。やや歪な長方形プランである。深さ0.1m未満で残存状態の悪い遺構で、特に東側はかろうじて検出できた。南北4.3m、東西3.4mを測る。現況では西辺が短く、東辺は弧になっている。壁溝は検出していない。南東隅近くの南辺沿いに長径0.5m、短径0.3mの楕円形に焼土が認められた。上屋構造は4本柱と思われ、中央に土坑がある。残存度の割りに床面から多くの遺物が出土している。南東主柱穴の横には平石が置かれていた。

SH05 (図版7 写真図版15)

調査区中央東壁沿いで検出している。南西コーナーを調査しており、北側をSD09に切られている。残存長は南北1.4m、東西1.3mを測る。残存状況は悪く、深さ0.1mである。壁溝は認められず、床面は平坦で、柱穴は確認していない。遺物は小片だけである。

SH06 (図版7 巻頭図版5 写真図版17～20)

調査区中央の微高地南端で、早い段階で築かれており、多くの遺構に切られている。西側はSH14・SH03に、東側はSH04に、上面はSD09・SD10に切られている。唯一SH12を切っている。焼失住居で埋土全体に炭化材が広がっていた。平面形態は長方形で、南北4.1m、東西3.45mを測る。深さは最大で0.25mである。ピットは6基あり、平石が2ヶ所置かれていた。南東部の平石と北辺コーナー部の2基のピットが主柱になると思われ、4本柱の上屋と思われる。心々間の距離は2.6mを測る。北側と南側のコーナー部に土器が置かれていたが、南側の土器を取り上げたところ、隅から0.9m離れたところに土坑を検出した。長径0.65m、短径0.5mの不定形で深さ0.4mを測る。SH01と似た隅に位置する深めの土坑である。中央にも円形土坑あり横に焼土・炭が広がっていたので土坑の可能性が高い。炭化材は全域に散布していたが、集中していたのは北側隅からSH03に切られる付近であった。SH03に切られる手前の壁面には網状の板壁を検出している。炭化物は隅まで延びている。対面する東壁にも炭化した板材を検出している。SH03に切られた部分は高床部になっていた可能性があり、直交するように炭化した板材を確認している。高床部の板材であろうと思っており、高床部は南北2.2m、東西1.1mになる。1辺でなくコーナー部だけの高床部である。現状では板材幅の0.1m余りしか推定できない高さである。その他の炭化材も建築材ではあるが部位や本来の位置が推定できるほどは残っていない。

SH07 (図版8 写真図版21)

微高地南西にあり、壁溝の一部のみが残存している堅穴住居跡である。東西1.9m、南北1.3m残っている。壁溝は幅0.15～0.2mで最大の深さ0.15mを測る。かろうじて壁溝だけが残った住居跡で、遺物も出土しておらず床面も残存しているか不明である。南側・西側に延びていることが確実であり、住居跡の規模は不明である。

SH08 (図版8 写真図版21・22)

調査区中央東壁沿いにあり、南側をSD09に切られている。SH05にも切られている可能性が高い。SD09の南側に床面が検出されていないことから、現況に近い部分に南辺があったものと思われる。床面からは比較的多く土器が出土している。壁溝は認められず、明確な柱穴も検出していない。南北2.45m、東西1.7m、深さ0.06mを測る。

SH09 (図版8 写真図版22・23)

調査区北側にあり、SH10の上でSH11を切っている。床面はほとんど残存しておらず、壁溝のみかろうじて残っていた。西側は幅0.2mで全長3.3mあり、南北が隅隅になろうとしている。東側の壁溝はSX02以南しか確認されていないが、SX02を先に調査したことのよるものである。幅0.15mで検出長0.8mを測る。東西溝の間隔は4.0mあり、この数値が東西長と考えている。南北は3.4m床面を検出しており、多少延びるかもしれない。壁溝を有する残存状態の悪い住居跡である。

SH10 (図版9 写真図版22～24)

調査区北側中央にあり、全体像のわかる中で最も古い堅穴住居跡である。南北方向に主軸を有し、SH11に切れ、SH09・SD03が上面に築かれている。最大で0.6m掘り下げられた残存状態の良い住居跡である。南辺4.45m、東辺3.55m、北辺3.9m、西辺3.9mの歪な方形プランで、中央で測ると、

東西4.5m、南北4.15mになる。南西部のみ壁溝が残っている。幅0.1m、深さ0.05～0.1mを測る。南辺沿い中央に土坑が存在する。東西0.6m、南北0.4mの楕円形で深さ0.2mである。埋設時の遺構をSX03として調査した。一気に埋めた土で炭も混じっている。その下面で区内壺など形のある土器が出土している。床面からは口縁部だけが出土しており、古相を示しそうである。

SH11 (図版10 写真図版22・24・25)

調査区北壁沿いで検出した住居跡でSH10の上であり、SH09に南西部を切られている。底面でSD11を確認した。調査段階でSX01・SX02として調査したものであるが、最終的に下げたところ住居跡であると判明した。SH10を先に掘り下げたので南西部を欠いているが、調査時の判断ミスである。東西5.1mで北側は調査区外に延びており、調査した長さは南北2.65mである。深さは0.2～0.25mとやや深い。南辺中央に土坑が認められる。東西1.1m、南北0.6mのやや歪な方形で、深さは床面から0.2mを測る。中央に位置するピット(P2)からは焼土が出土している。西側のピットは主柱穴かと思われ、長径0.3m、短径0.25m、深さ0.3mを測る。柱痕跡を確認している。4本柱の南西部のみ検出したと考えている。遺物は床面からは少なく小片である。埋設段階でSX01から讃岐からの壺口縁部が出土している。

SH12 (図版11 写真図版17)

調査区中央南側にあり、SH06・SH04・SH03に切られている。南東コーナーのみ検出しており、残存長は東西2.1m、南北0.95m、深さ0.15mを測る。

SH13 (図版11 写真図版25)

調査区中央に位置し、SH02に切られた住居跡である。竪穴住居跡の南東隅だけが残っている。主軸方向はSH10と同じで南北を向いている。南北3.1m、東西0.7m残存している。隅円方形である。コーナーから1.1mのところ土坑が東辺に沿って設けられている。長径1.1m、短径0.7mの楕円形で不明瞭な2段になっている。深さは肩部から0.4mあり、推定床面からは0.2m掘り込まれている。小片しか出土していない。

SH14 (図版5 写真図版14)

SH03に切られており、SH06・SH12を切っている微高地縁部近くに位置している。SH03より一回り大きくやや軸を振っている。北辺は4.8mあり、東辺は2.4m、西辺は2.3m残存している。床面の残存長は2.8mである。深さ0.1mの方形プランで壁溝は認められない。

2. 落ち込み

SX01・SX02

調査区北端で検出した遺構で並んでおり別の遺構として調査したが、最終的に同一遺構と判断した。SH11と改称し、埋設段階の違いと判断した。

SX03

SX02に切られた遺構で落ち込みとしたが、竪穴住居跡の廃棄段階の面であることが判明した。下面で柱穴が検出されSH10とした。その上面の遺構である。比較的まとまって遺物が出土している。

SX04

微高地南端で検出した方形の遺構である。南側は旧河道肩部になっている。南北3.0m、東西0.5m、深さ0.2mを測る。床面に凹凸があることと柱穴・壁溝などを検出していないので落ち込みとしたが、竪穴住居跡の可能性もある。

3. 土坑 (図版11・12 写真図版26)

住居跡内の土坑を除いて4基検出しているが性格のわかる土坑はない。

SK01

旧河道肩部で検出している。最大径96cm、深さ18cmの不定形プランの土坑である。土師器小片が数点出土しているだけで図化したのは高杯1点である。

SK02

調査区中央東側で土坑と溝が集中して検出されている。その北端に位置しており、SD10に南東部分を切られている。短径80cmで長径は不明で残存長57cmの楕円形か隅円方形プランである。底面は平たく深さ12cmを測る。土師器が数点出土している。

SK03

SK02の東側に位置する隅円長方形の土坑である。主軸はN30°Wで底は平坦であるが、北側の方が僅かに低くなっている。短辺88cm、長辺146cm、深さ14cmを測る。底ではなく、埋土に際とともに土師器がやや多く入れられている。ただ小片が多く、2点しか図化していない。炭も含まれ、地山土もブロックで入っており、人為的に埋められている。

SK04

SK03の南側にあり、SD09に北側を切られている。平面プランは隅円方形と思われる、半分前後が残存しているようである。幅55cmで長辺の残存長36cmで深さは14cmを測る。底面はやはり平坦である。土師器小片が出土しており、SK02～04は同時期の同じ性格の遺構と思われる。埋土はオリープ黒シルト質極細砂で1層である。

4. 溝 (図版13・14 写真図版26・27)

18条検出しているが、小規模なのが大半である。下記の溝以外は幅0.2m、深さ0.1m前後のもので、長さは2mを越えるものはない。

SD01

調査区北西隅で検出した幅0.3mの直線に延びる溝で、長さ1.85mあり調査区北側に続いている。深さは0.1～0.2mと浅い。

SD03

SH10の西肩部上面に掘られた南北方向の溝で長さ1.6mと短い。北側は幅0.2mで細く尖って終結する。南側の方の幅が広く最大で0.38mを測る。

SD04

SD03に切られた直線的に延びる溝で主軸はSD01と同じN10°Wである。幅0.14～0.2mと細く、長さ1.9mを測る。

SD06

調査区北東隅から西壁中央部に向かう溝で、人工の溝と考えている。主軸はN40°Eで直線に延びており、調査区外両方に続いている。調査区内で21.5mの直線に走る溝である。底は全体的には丸く凹凸のある部分もあるが、平坦で台形の断面のところもある。底面のレベルはほとんど変化なく、逆に中央付近SH02北側付近がやや深くなっている。出土遺物は少なく小破片が主体である。深さ0.4m前後。

SD08

微高地南端にある溝でN40°EとSD06と同じ方位を採る。旧河道肩部手前で終わっており、流れ込んではいない。幅0.4m、長さ3.8mを測る。深さは0.15～0.25mと浅く底は平坦である。延長上にSD10があり、同一の溝かもしれない。

SD09

調査区中央東側で旧河道肩部北側に位置する溝で弧を描いている。幅0.3～0.45mを測る断面浅いU字形の溝である。調査区東側に延びており、中央をSD10に切られている。SH05・SH06・SK04を切っている。東から弧状で南に延びる溝で全長7.5mを測る。溝の中では最も多くの遺物を保有している。土師器に限られ13点図化している。今回調査した遺構の中では時期は新しい。

SD10

調査区中央にあり北東から南西に流れる溝で、主軸はN50°EでSD06などに近いがやや東に強く振っている。長さ4.6m、幅0.4m前後、深さ0.1mの直線的な溝である。北側の方が細くなっているが、残存状況の差かもしれない。

SD11

調査区北端にあり、今回調査した中で最も古い遺構である。平面的には上にSD06・SH11(SX01)があり、その底面で検出したものである。SD06から直交方向から北側に弧を描いて延びている人工の溝である。最大幅1.1mで調査した長さ4.2mを測る。深さは上面の遺構底から0.1～0.2mであるが、本来の遺構面からだとは0.3mはあったらうと思われる。遺物はほとんど出土していない。

5. 旧河道

上層に近世の水路SR01があり、下層に調査区南半全体に位置する旧河道がある。

SR01 (図版12 写真図版27)

北東から南西方向に流れるもので、肩部に杭を打ち込み護岸施設を設けている。主軸はN45°Eを採る。西側肩部に杭を打ち板材を挟み、岸を補強している。幅1.9mで深さ0.4mを測る。肩部はやや崩れているが、断面形は方形である。シルト質極細砂層が堆積しており、グライ化している。堆積土中央付近に有機質を含む層があり、溝底と思われる。現状で長さ16m直線に延びており、調査区外に延びている。南西部は一部削平されており、良好には残存していない。

遺物は土師器が多く、流路の時期を示すものは陶磁器類と自然木で出土数は少ない。18世紀頃の流路と思われ、近代以降に埋没したと思われる。現在の地割りと同じ方位である。

旧河道 (図版12 写真図版28)

調査区南半にあり、大きく2時期に分かれる。下層(暗灰砂)の流路方向は判然としないが、上層は北東から南西に流れていると思われる。微高地の東側を流れており、肩部まで遺構が築かれている。層は細かく分かれ、複雑に氾濫堆積をしていたことが理解される。上層の南肩は調査区南端から4mのところを確認している。この部分で測ると幅14.5mになる。現在の船場川旧河道と考えると良い河道である。下層の河道は上層より広いものであるが、時間的に南北の肩が同時期かは断定できない。複数時期の氾濫による河道と思われる。北側は堅穴住居跡群の下に延びている。ただ、出土土器から大きな時期差は認められず、短期間のものである。長越遺跡Ⅱや畑田遺跡のように弥生土器もほとんど含まないので周辺の集落も短期間のものである。一部は長越遺跡Ⅰの大溝と考えている。

IV 長越遺跡の遺物

(1) 土器

住居跡出土の土器は全体的に保存状態が悪く磨滅している。同様に落ち込みや浅い溝出土土器の多くも残存状態は良好とは言えない。それに対して旧河遺出土土器の多くは保存状態が良い。

1. 住居跡出土遺物

SH01 出土遺物 (1~7)

1は二重口縁壺口縁部で、薄手に仕上げられ、口縁部は外反する。擬口縁部上面に竹管文付きの円形浮文を付ける。径1.4cmと大きめの浮文である。二重口縁の変化点より下に垂れている。外面は灰褐色、内面は橙を呈する。ヨコナデで仕上げている。**2**は丸底で球形の体部をもつ小型壺である。全体に重で腹径で最大11.5cm最小10.6cm、頸部径で最大7.0cm最小6.5cmと差がある。内面はナデ仕上げで灰白、外面はヘラミガキで仕上げられ灰白～黄灰をしている。外面下半の器表に凹凸があることからタタキが施されていた可能性がある。器壁はやや薄めで、底部がやや厚くなっている。底部付近に黒斑がある。**3**は外反する壺口縁部で端部は内側につまむように仕上げている。ヨコナデが施され、内面は浅黄橙、外面は灰白である。**4**は甕底部である。底部再成形で粘土紐の継ぎ目残り中央が上げ底になっている。外面は右上がりのタタキで灰白である。内面は板ナデと思われ灰白である。底面はナデ仕上げで平滑になっている。**5**は底部再成形の甕底部でユビ成形からナデ仕上げをしている。不安定な平底でタタキ底かもしれない。内面赤灰、外面明赤褐色で粗砂含む。**6**は椀形高杯で裾部を欠いている。内湾し端部丸い杯部で口径11.3cmを測る。ヨコナデ仕上げで内面にはミガキが見られる。筒部は中実で裾部は外反している。外面はミガキである。内面は灰白で一部黒褐、外面灰白～橙をしている。**7**は一応大型の鉢口縁部としておく。甕の可能性もある。直立さみで端部は内側につまみ出している。内面には粘土紐が認められ、外面はハケ整形である。色調は外面がにぶい黄橙、内面が灰白である。

SH02 出土遺物 (8~54)

8は壺口縁部で外傾し途中で屈曲してやや開いて丸い端部になる。内面灰白で外面にぶい橙である。外面に粘土紐継ぎ目見られ、斜め方向のハケ整形からヨコナデを施す。内面はナデからヨコナデである。頸部は明瞭な稜線を有してから体部に続く。内面はハケ整形である。**9**も外傾する口縁部を持つ壺である。端部近くでやや開き端部は尖りさみに薄くなり丸く納める。内面は灰白、外面は淡黄橙で、ヨコナデ仕上げ。**10**は二重口縁壺の小片である。山陰系で内外面ともににぶい橙を呈する。頸部から短く外反し甘い稜線を有して緩やかに外反する。端部は丸く、全体にヨコナデである。**11**は二重口縁壺の口縁部である。頸部から外傾し屈曲して擬口縁部となり内傾し端部近くで反る形態をする。端部は丸くヨコナデ仕上げ。灰白で粗砂多く含んでいる。表面磨滅顕著。**12**は前代の遺物で、弥生前期壺口縁部である。外反するもので端部は角張りさみである。内面には粘土紐継ぎ目残り、内外面とも灰白でナデ仕上げである。**13**は浅い径が大きい鉢と思われるが、断定出来ない。外傾し端部角張る。外面はにぶい黄橙でハケ整形している。波状文のように施文しているよう見える。内面はユビおさえが見られ灰白である。**14**~**22**は底部である。**14**は丸底で内湾する体部に続く。内面は褐色でユビ成形からナデ整形。外面は浅黄橙～橙でハケ整形している。タタキ成形されていたかもしれない。黒斑が認められる。**15**

は左上がりのタタキ成形の甕で上げ底ぎみになっている。底面はナデで丁寧に仕上げている。内面もナデ仕上げである。内面の色調は灰白、外面はにぶい黄橙～褐灰を示す。16は器壁の薄い平底でやや上げ底になっている。突出平底で、内面は黄灰、外面はにぶい黄橙である。底面はナデ仕上げで、内面はくもの巣状のハケ整形が見られる。外面には黒斑があり、細砂含む。17は不安定な小さな平底で体部は内湾する。一応甕底部としたが、器壁が薄く端部近くの可能性が高く鉢かもしれない。底面には木葉痕が見られる。ユビ成形からナデ仕上げである。内面は褐灰で外面はにぶい黄橙である。18は突出平底で、内面は灰白、外面は褐灰である。ユビ成形ののち外面はハケ整形、内面・底面はナデ仕上げである。底面に木葉痕が見られる。19は小型の甕底部で上げ底になっている。底部再成形でタタキ底である。内面はユビ成形からナデで灰白である。外面はタタキからナデ仕上げしており、やはり灰白で粗砂含む。黒斑がある。20は不安定な平底で強く焼けている。外面はタタキからナデでにぶい黄橙、内面はハケ整形でにぶい橙をしている。底面はナデ調整を施し、粗砂含む。21は尖り気味の丸底で内面はナデで灰白～にぶい黄橙、外面はハケ整形からナデを施し灰白～浅黄橙である。底部は器壁1.4cmとやや厚手である。内面には有機質が付着している。22は上げ底の底部で底面も丁寧にナデで調整している。内外面ともにナデ整形で浅黄橙を呈している。甕底部であろう。23はミニチュアかとも思われる小型甕である。口縁部を欠いており、平底から内湾し体部中位に最大腹径8.4cmを有する。頸部の内面は甘い稜線で絞りが目が見られる。内面はユビ成形からナデ、外面は左上がりのタタキからナデを加える。内外面ともに黄灰で、器壁は厚めである。24もミニチュアで平底から内湾する体部になる。ユビ成形からナデしている。内面灰白、外面にぶい黄橙で粗砂含んでいる。黒斑が見られる。底部が大きめである。25は口縁部を欠いた二重口縁甕である。短い頸部から内湾する体部に続く。内外面とも灰白で、内面はヘラケズリ、外面はハケ整形、口縁部はヨコナデである。26～39は甕口縁部である。26は外面タタキ成形ののち口縁部を折り曲げて形成している。タタキが縦方向に残っている。ヨコナデで仕上げている。稜線は甘く外反している。内面は浅黄橙、外面はにぶい黄橙である。27は外反しており端部は尖っている。内面の稜線はシャープである。ヨコナデ仕上げで化粧土を塗布している。内面は灰白～褐灰、外面は浅黄橙～にぶい橙である。28は内傾する体部から外反する口縁部で端部は丸い。外面は右上がりのタタキでにぶい黄橙、内面はナデ調整で褐灰、口縁部はヨコナデである。29は内外面とも浅黄橙で、内傾する体部から明瞭な稜線を持たずに外反する口縁部になる。中央部は厚く端部は薄く尖り気味である。体部外面はハケ整形、内面はナデである。30～34は外傾する口縁部で端部をつまみ出している。庄内甕と思われる口縁部である。30は内外面とも灰白を呈しヨコナデで仕上げている。器壁薄く、端部肥厚ぎみである。31は外反ぎみで端部は肥厚している。内面の稜線は鋭い。色調は浅黄橙～灰白で、外面はタタキ、内面はヘラケズリである。口縁部はヨコナデで端部は内側につまみ出し面となっている。32はくの子で内面の稜線は鋭く突出している。内面ハケ整形ののち全体にヨコナデで仕上げている。端部は僅かに内側につまみ出し端面となっている。内面はにぶい黄橙、外面は黒である。33はやや大型で口径17.2cmを測る。端部は尖っており、内面の稜線は甘い。内外面ともに灰白でヨコナデ仕上げ。34は内外面ともに灰黄でヨコナデ仕上げ。薄く直線的に延び端部肥厚し部分的に面になっている。35・36は内湾ぎみの口縁部で端部が外側につまみ出されている。頸部の稜線は甘い。35は内面褐灰、外面浅黄橙でヨコナデ仕上げ。36は器壁薄くシャープな印象を受ける。角度は緩やかに延び端部は丸い。色調は内面灰白、外面浅黄橙である。37も内湾ぎみの口縁部であるがつまみ出さず、端部は丸く納める。ヨコナデ仕上げで、色調は浅黄橙～にぶい橙を呈する。38は内湾ぎみであるが途中で

変化があり、頸部の非常に短い二重口縁状になっており、端部丸い。頸部は外反し体部は外傾する。内面はヘラケズリと思われる。口縁部はヨコナデで、内面橙、外面にぶい橙をしている。39は口径が最大径となる壺口縁部で、内湾する体部から外反する口縁部で端部丸い。体部はナデ整形しているが、内面は強く施すことによって段が出来ている。内面は浅黄橙、外面灰白である。40は高杯杯部で屈曲しながら外傾している。外面に明瞭な稜線を持たないタイプと思われる、端部は丸い。内面は浅黄橙でヘラミガキがなされている。外面から端部はヨコナデで灰白である。外面下端に1ヶ所稜痕が見られる。41は高杯脚部で外傾しており、端部は尖っている。杯部との接合部で割れている。表面磨滅しているが、ナデ調整かと思われる。色調は橙～浅黄で細砂含む。3方透孔で径1cm前後である。42も高杯脚部で外傾している。3方透孔かと思われる。内外面とも褐灰でハケ整形からナデである。43も高杯脚部で裾部を欠いている。外傾し裾広がりになろうと思われる。色調は灰白で内面には絞り目が見られる。杯部との接合部で割れており、接合面を歯車状にギザギザにしている。44は脚台で甕のものであろうか。外反し端部丸い。ヨコナデ仕上げで外面の一部にヘラミガキが見られる。灰白で細砂含む、底は平坦である。45・46は製塩土器である。脚台Ⅳ式の脚台部である。45はやや器高が高めで外傾する。灰白～ぶい橙でナデ整形であろう。器壁は薄く仕上げている。46は僅かに外反す脚台で端部は尖っている。ユビ成形からナデ整形している。内面はぶい橙、外面は淡赤橙である。47は鼓形器台で突帯が残っている。内湾する上台で端部は面になり肥厚さみである。ぶい橙で細砂含む。ヨコナデで外面はヘラミガキである。下台内面はヘラケズリが施されている。48・49は器台である。48は上台部で裾部との接合部で割れている。内湾さみで端部尖る。内面浅黄橙、外面橙で、ヨコナデからナデ調整を加える。49は下台部で直線的に広がり端部尖る。色調は褐灰～ぶい黄橙で器内は黒褐である。4方透孔があり、内面は板ナデ、外面は横方向のヘラミガキがなされる。

SH03 出土土器 (50～54)

50は壺口縁部で外傾し端部丸い。頸部内面の稜線は余り鋭くない。灰白でヨコナデ仕上げ。51は壺口縁部で外傾するが直線ではなく屈曲し端部丸い。ヨコナデで、色調は内面浅黄橙、外面灰白である。52・53は鉢で、52は椀形で内湾する口縁部で端部丸い。丸底で粘土紐が看取される。内面灰白、外面浅黄橙でハケ整形からナデ調整している。53は分割成形した甕底部に似る内湾する浅いものである。端部は丸く丸底である。灰白で表面磨滅しているが、ハケ整形かと思われる。粘土紐も観察できる。54は器台で、下台部の破片で端部を欠く。直線的に広がり4方透孔である。内面は灰黄褐で、ヘラケズリののちハケ整形しナデで仕上げている。外面はぶい黄橙でヘラミガキがなされている。金雲母を多く含む河内からの搬入品である。2次焼成を受けている。

SH04 出土土器 (55～68)

55は甕ではほぼ完形である。くの字口縁でやや外反し端部肥厚さみに丸い。体部は下膨れさみで長胴である。小さな上げ底となる平底に続く。体部は右上がりのタタキで分割成形である。接合部を中心にナデが見られる。内面は板ナデで底には工具痕が見られる。底面もナデで、口縁部はヨコナデである。灰白～黒で砂粒僅かに含む。56は半分以上残存している甕で小さな平底から内湾する体部で長胴さみで頸部に続く。頸部内面の稜線は甘く、口縁部は外反し端部角張る。色調は灰白～黒で、内面の方が黒っぽい。外面は右上がりのタタキ成形ののち上半はハケ整形し、全体にナデ仕上げである。内面はユビ成形からヘラケズリののちナデで仕上げる。粘土紐痕が残っている。口縁部はヨコナデである。外面全体に煤・有機質が付着している。57は外反する口縁部で端部は丸く刻み目が施されている。内面はハケ

整形がなされ、全体にヨコナデである。頸部内面の稜線は鋭く、体部は内湾している。平行タタキで、内面はユビ成形からハケ整形をし板ナデ調整を行う。にぶい黄橙で細砂含む。刻み目の間隔広く単位がありそうである。刻み目があるが渋路ではないような気がする。58は小さな平底から球形の体部になり。口縁部は短く外反し端部丸い。にぶい黄橙～褐灰で細砂含む。内面は縦方向のヘラケズリで上半は板ナデで滑している。外面は右上がりのタタキから縦方向のハケ整形を行う。球形を示す新しい傾向の割りには上半の器壁がやや厚い。口縁部はヨコナデである。59～61は庄内甕である。頸部内面の稜線は59・60は鋭いが、61はやや甘くなっている。59は体部内面ヘラケズリで口縁部は内外ともハケ整形からヨコナデである。灰白で口縁部は直線的に延び端部は内側につまみよりにして端面となっている。60は口縁部外反さみで端部肥厚さみにつまみ出している。ヨコナデ仕上げで、体部は内面ヘラケズリで灰白、外面はハケ整形でにぶい黄橙である。61は緩やかに屈曲して外傾する。端部は内側につまみ出し沈線状となった端面になっている。62は讃岐から搬入された甕である。平底から内湾する体部で肩部は張っている。頸部内面の稜線は鋭く短く外傾する口縁部になる。端部は上方につまみ上げ端面になっている。内面は黄褐、外面は暗灰黄で細砂含む。内面はユビ成形からヘラケズリで指征痕明瞭である。外面は縦方向のハケ整形で底部近くはヘラミガキで仕上げている。口縁部はヨコナデである。63は内湾する体部の破片であるが、外面に木葉痕が見られる。粘土紐が残りナデ仕上げである。にぶい黄橙～褐灰を呈する。64～66は底部である。64は上げ底で内湾する体部に続く。ドーナツ状になっている。内面は灰黄でユビ成形から板ナデと思われ工具痕が残る。外面は灰白でタタキ成形からナデである。65は突出平底で内湾する体部になる。内面は灰白でナデ、外面はユビ成形からハケ整形で褐灰をしている。66は僅かに上げ底となる古相を示す底部である。前代のもと思われる。体部は外反しタタキをナデ整形している。にぶい橙を呈し、粗砂を含む。内面はにぶい黄橙でナデである。底面もナデ調整で黒斑がある。67は脚台である。外反し端部丸い。器高は低く、ユビ成形からナデ整形で、外面はミガキを施す。体部内面は粗いハケが見られる。灰白で粗砂含む。68は手埴り形土器である。作りは丁寧とは言えない。手捏ねに近く、ユビ成形から板ナデ・ナデ整形である。粘土紐も明瞭に看取される。平底から球形になり、上半を壺状に開け周囲に低い罍を付けている。黄灰～灰白を示し、退化した形式である。

SH06 出土土器 (69～90)

69は外反さみに広がる口縁部で端部は外側に尖る。壺と思われる。ハケ整形ののちヨコナデで仕上げ。内面は褐灰～にぶい黄橙、外面は黒～にぶい黄橙で黒斑がある。70も同タイプの壺口縁部で外反し端部丸い。褐灰～浅黄橙でヨコナデである。粘土紐明瞭に残る。71は二重口縁の口縁部破片である。稜線を持って外傾し端部尖る。口縁部下端に竹管文付きの円形浮文を配置する。磨滅しており、内面黄灰、外面灰白をしている。72は二重口縁でヨコナデである。甕かと思われ、山陰の形状をしている。明褐灰で細砂含む。73も同様の山陰系の壺口縁部である。強いヨコナデが施され、擬凹線状になっている。内面はにぶい橙、外面は橙である。74は小さな平底から丸みのある倒卵形の体部に続く大形土器である。二重口縁となる壺と思われる。内面はにぶい橙～黒褐でユビ成形からハケ整形し板ナデ・ナデ調整をする。外面はにぶい橙～褐灰で水平方向のタタキからハケ整形を行う。ハケには精粗2種がある。内面に初跡と思われる痕跡がある。75～78は甕である。75はくの字口縁で頸部内面の稜線は甘い。体部は内湾しナデ仕上げである。口縁部はヨコナデで器壁は厚めで端部は尖る。内面はにぶい赤褐で外面は明赤褐で粗砂含む。76は口縁部を折り曲げて成形しており、端部に凹凸が残っている。くの字で内面の稜線は甘く、端部は丸い。内面灰白、外面にぶい橙でヨコナデで仕上げている。77は外傾

する口縁部で端部は丸く、外面に波状文が施されている。78 はやや底が残る尖り底から内湾し、ほぼ器高の midpoint に最大腹径 21.8cm を有する。頸部内面の稜線は鋭く、口縁部はやや反し端部は丸い。外面は灰白～明赤灰で右上がりのタタキからハケ整形する。内面は灰白～黒でユビ成形からヘラケズりののちハケ整形している。口縁部はヨコナデで端部は端面になっている庄内甕である。内面には炭化物が付着し、全体に強く焼け赤変している。79～83 は底部である。79 は底部再成形で不安定な平底で体部は内湾する。内面はナデで黄灰、外面はにぶい橙で右上がりのタタキからナデを施す。底面もナデである。80 も底部再成形で底面は平坦で木葉痕が見られる。色調は黄灰～黒褐で粗砂含む。内面は板ナデで、外面は細かいタタキからナデ仕上げである。ナデは丁寧でミガキ状になっている。81 も底部再成形で体部は緩やかに内湾し低めである。内面は黒褐でナデ、外面は灰白～黒でタタキから丁寧なナデ仕上げ。82 も底部再成形で底面はナデで中央が凹んでいる。緩やかに内湾する体部で、内面はにぶい黄橙を示し板ナデと思われ工具痕が残っている。外面は右上がりのタタキで褐灰である。83 は平底から外傾しており、底面はやや上げ底になる。灰白でナデ仕上げである。底面にはケズリが見られる。84 は鉢か碗形高杯底部である。内湾し端部尖っている。表面磨減著しく、成形技法は明らかでない。内面はハケ整形かと思われ、明褐灰～にぶい橙をしている。外面はにぶい橙～褐灰で粗砂含む。2 次焼成を受けている。85 は小型丸底甕である。僅かに残る底から内湾する体部で肩が張る。頸部内面の稜線は鋭く口縁部は外傾し端部尖る。ユビ成形からナデであるが磨減顕著。内外面ともに化粧土塗布したと思われる。橙～黄橙で器内は黄灰で、胎土は精良である。器壁も薄く仕上げられた精製土器である。86 は上げ底から内湾する体部で端部丸い鉢である。強く焼けていることから表面剥離している。底部はユビ成形で作り出し側部に指圧痕が見られる。底面はナデで、口縁部はヨコナデである。色調は赤橙で粗砂含む。黒斑が認められる。87 は平底から内湾し端部外側に尖る鉢である。内面と底面はナデで黄灰、外面はタタキからナデ仕上げで灰白をしている。黒斑があり、口縁部はヨコナデである。88-89 は高杯脚部で、杯部との接合部で割れている。88 の器高は高めで外傾している。4 方透孔で径は小さめで高い位置にある。灰白～黒で、内面はナデ、外面はナデから細かいミガキである。89 は外反ぎみの脚部で残存部端に透孔があるが、個数・大きさは不明である。灰白でナデ仕上げである。90 は碗形高杯で裾部を欠く。中実の筒部で内側には串を突き刺したと思われる。灰白～黄灰で器表に凹凸あるものミガキがなされている。筒部は外傾し内湾ぎみの裾部に続く。4 方透孔となる径 0.7cm の孔がある。

SH05 出土遺物 (91～94)

91 は壺口縁部で内湾する体部から外傾する口縁部になり端部丸い。頸部には粘土紐の継ぎ目明瞭で、体部側は一段凹んでいる。内面は灰白でハケ整形からナデでからヨコナデをしている。外面も同様で灰白～にぶい黄橙をしている。端部周辺に有機質付着している。92 は甕底部で小さいことからミニチュアかもしれない。内外面灰白で比較的胎土は良好である。ナデ仕上げで内面は一部ミガキがなされているようにも見える。小さな平底である。93 は脚台Ⅳ式の製塩土器脚台である。やや厚めの底部から外反ぎみに延びる脚台でナデ仕上げしている。内面は灰白～黄灰で、外面は灰白である。粗砂含んでいる。94 は小さめの器台である。上台は内湾し端部を上方につまみ上げて丸い端部になっている。筒部は中実で、下台部は内湾ぎみに広がり端部丸い。4 方透孔がある。内面は浅黄橙～赤橙で、外面は灰白～橙である。全体的にヨコナデを施し、上台部のみナデで仕上げる。

SH08 出土遺物 (95～100)

95 は甕で球形の体部から外反する口縁部で端部は内側に尖っている。内面はハケ整形ののちナデ仕

上げで赤橙～にぶい黄橙を呈する。外面はタタキからハケ整形で赤褐である。強く被熱しており表面剥離している。96も甕口縁部でくの字で端面に沈線を有している。体部内面は赤橙～灰白でヘラケズリのみまで、粘土紐明瞭に残る。外面は赤橙～浅赤橙で右上がりのタタキである。頸部内面の後縁は余り鋭くなく、口縁部は外傾し端部は上方につまみ出す。97・98は底部で、97は僅かに上げ底となる。体部は外傾し、内外面ともハケ整形からナデを施す。色調は灰白で粗砂含む。底面は強いナデが見られる。98は僅かに残る平底で甕の可能性が高い。内湾する下彫れの体部で、内面は灰白でヘラケズリである。絞り目状になっている。外面はにぶい黄橙でハケ整形である。99は小型丸底甕で外傾し端部尖る口縁部から内湾する球形の体部になる。丸底で、口縁部はヨコナデである。内面は灰白でエビ成形からナデ仕上げ、外面は灰白～黄灰で水平方向のタタキからハケ整形を行う。器高10.8cmであるが、最大腹径12.2cmと大きめである。100は碗形高杯で、内湾する杯部で端部は丸い。内外面ともヘラミガキと思われる。灰白で少量の細砂を含む。筒部は中実で外面はヘラミガキである。脚部は内湾しているがほとんど残存していない。

SH10 出土遺物 (101・102)

101は変化の少ない二重口縁となる甕口縁部である。短く屈曲する頸部から短く外傾し端部肥厚さみである。灰白で粗砂含むヨコナデ仕上げ。形態は北近畿か丹波系を示すが胎土は地元のものである。

102も短く二重口縁となる甕である。頸部以下を欠いている。短く外傾し変化点を持って外反する口縁部で端部丸い。丹波系。

SH10 上層出土遺物 (110～124) 調査時にSX03として調査したもので、下層調査時に住居跡に変更したことから、上層遺物として取り扱う。

110は外反する甕口縁部で端部は丸く納めているが、やや上方につまんでいる。浅黄橙で細砂と小石粒少量含む。体部内面はナデ、口縁部内面はハケ整形で、外面はヨコナデである。111は二重口縁部の頸部で、直立する頸部から水平に近く外傾し変化するものである。外面には板ナデが施され、工具痕が見られる。全体にヨコナデ仕上げで、橙を呈し粗砂少量含んでいる。112～117は甕である。112～116は庄内甕で117は布留傾向甕である。112は内傾する体部から甘い頸部内面後縁で外傾し端部角張りさみである。口縁部中央は外面に影らんでいる。灰黄褐～にぶい黄橙で内面はナデ、外面・端部はヨコナデである。磨減著しい。113はくの字で内面後縁はやや鈍い。体部外面はハケ整形からナデ、内面はナデ、口縁部はヨコナデである。器表は浅黄橙で、器内は黄灰である。114は内湾する体部から外傾する口縁部で端部は角張り、内側につまみ出している。内面はエビ成形からナデ、外面は水平方向の時計回りのタタキ成形である。口縁部内面はハケ整形で外面はヨコナデである。灰白で細砂含む。115は内面の後縁が鋭く、体部口縁部とも外傾している。口縁部中央は影らんでおり、端部は丸い。内面はハケ整形からナデで他はヨコナデで、頸部外面は強いヨコナデである。内面は灰白、外面はにぶい橙でタタキを含む。116は球形の体部に外傾する口縁部が付き端部は内側上方につまみ出し端面となる。頸部内面の後縁はあまり鋭くない。浅黄橙～褐灰を呈し、外面は水平方向のタタキからハケ整形、内面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデである。肩部に黒斑があり、粗砂多く含む。117は倒卵形に近い体部に外傾する口縁部が付き端部は尖る。色調は浅黄橙～褐灰で薄く仕上げられている。器壁の薄さから内面はヘラケズリと思われるが、明確でない。外面は細筋のタタキのちハケ整形をしている。タタキは縦方向に近い施文である。口縁部もハケ整形が見られる。118は壺底部である。平底から内湾する体部になる。底面は平たくナデ仕上げで、黒灰が認められる。内面は黒～黒褐でヘラケズリかと思われる。外面はにぶい褐～黒でタタキから板ナ

デである。讃岐からの搬入品であろう。119は大形の鉢で僅かに内湾する体部から外傾する口縁部で端部は角張り端面に沈線がある。内面はナデ、外面はハケ整形からナデ、口縁部はヨコナデである。色調は浅黄橙で小石粒含む。120は口径が最も大きい鉢で、丸底であろう底部から内湾する体部になり、頭部でやや屈曲して内湾ぎみに延びる口縁部で端部尖る。内面は灰白～灰黄褐でナデ、外面はにぶい黄橙でハケ整形からナデ仕上げ、口縁部はヨコナデである。頸部に不明瞭な沈線状のものがあるが、粘土紐痕をヨコナデしたことによって生じたものと思われる。形状は精製鉢であるが小石粒も含み、余り丁寧でない。121は高杯杯部で浅めに内湾し端部外側に尖らす。磨滅著しいが、ナデ整形ののち内面はミガキ、端部周辺はヨコナデと思われる。内面はにぶい赤褐、外面は橙～灰褐である。122・123は器台上台部で122は内湾し端部近くで短く外反し端部丸い。筒部との接合部で割れている。外面はケズリ状の強い板ナデで、内面共に次にナデ整形しヨコナデで仕上げる。端部周辺は強いヨコナデによって外反している。にぶい橙～灰白で黒斑がある。123は僅かに湾曲するが直線的に延び端部は上方につまみ上げ尖らす。端面になり凹んでいる。内面はハケ整形からナデでにぶい黄橙～灰黄褐、外面は強い板ナデでにぶい橙である。端部周辺はヨコナデで仕上げる。筒部との接合部まで残存している。124は製塩土器である。ユビ成形し外面はタタキ、内面は板ナデである。橙～灰白を呈し、砂粒含んでいる。脚台部はユビ成形のままである。

SH11 出土遺物 (103～105)

103は壺でくの字の口縁部である。内面の稜線は鋭く内面に突出している。口縁部は外傾し端部は丸いがやや内側につまんでいる。強いヨコナデで器表に凹凸が出来ている。中央上に突帯を1条張るがナデで低くしている。内面は灰白～にぶい黄橙でナデ仕上げ。外面はにぶい黄橙～黒でハケ整形からナデ。104は突出平底の底部で外面はタタキからハケ整形で淡黄、内面はユビ成形からナデで灰白を呈し粗砂含む。105は高杯杯部で少し屈曲しながら開き端部尖る。にぶい黄橙～褐灰で細砂含む。内面はハケ整形からナデ調整。外面はハケ整形で、端部周辺はヨコナデである。

2. 土坑出土遺物

SK01 出土遺物 (106)

106は二重口縁壺で頸部から外反し稜線を持ってからさらに外反し端部は角張る。全体に強いヨコナデで器表に凹凸が生じている。内面は灰、外面は灰白で、細砂多く含む。

SK03 出土遺物 (107・108)

107はくの字の壺口縁部で、体部は球形になろうかと思われる。外傾し端部は外側に尖らせる。ヨコナデで仕上げているが、体部外面はヘラミガキがなされている。内面灰白、外面灰黄褐である。108は器台上台部で外反し端部は上方に大きくつまみ出している。端面となり、そこに小さめの円形浮文を付加している。赤褐～暗赤灰を呈し2次焼成を受けている。外面にタタキかと思われる痕跡があるが明瞭でない。ヨコナデで仕上げ、細砂少量含む。壺の可能性もある。

3. 落ち込み出土遺物

SX01 出土遺物 (109)

109は壺口縁部で外反し端部を上方につまみ出して端面としている。ハケ整形からヨコナデであるが、粘土紐痕が残っており丁寧な仕上げではない。灰白～にぶい黄橙で細砂含む。

SX04 出土遺物 (125～141)

125・126は弥生時代中期後半の壺口縁部である。125は外反する頸部からやや屈曲して端部は内外に肥厚している。色調は灰白で、砂粒を含んでいる。ヨコナデ仕上げで焼成は良好である。端面には4条の凹線があり2個一對の棒状浮文が付いている。細めの浮文である。頸部には貼付突起が巡り指頭圧痕が見られる。126は外反し端部はハチ形になる。磨滅しているがヨコナデであろう。灰白で砂粒含む。127は庄内壺口縁部である。127の表面は灰白、器内は灰で砂粒少し含んでいる。内傾する体部から外反する口縁部で端部は上方につまみ出し端面になっている。ヨコナデ仕上げで端面には沈線がある。128は内湾ぎみの体部から鋭い頸部内面の稜線を持って外傾する口縁部で、端部は外側につまむ。外面は右上がりのタタキで口縁部はヨコナデである。灰白で砂粒含む。129は内面ヘラケズリの内傾する体部から明瞭な稜線を有して外傾する口縁部になる。端部はやはり内側上方につまみ上げ端面にしている。体部から口縁部にかけてヨコナデ調整であるが、口縁部外面にタタキが残っている。タタキののち口縁部を形成したものである。内面にはハケ整形が見られる。全体に灰白で外面は黒部分もある。煤付着している。130は内湾する体部から鋭い頸部内面の稜線を持って外傾する口縁部になり端部は上方につまみ上げている。内外面ともに灰白で、外面は右上がりのタタキ、内面はヘラケズリで薄く仕上げている。口縁部はヨコナデで端面になる。131は鉢で内湾する体部から外反する口縁部で端部は尖る。浅黄橙で外面はハケ整形で口縁部はヨコナデ。132～136は甕である。132は内湾する体部から外反する口縁部で端部丸い。内面板ナデ、外面右上がりタタキ、口縁部ヨコナデである。口縁部外面にもタタキ見られ、タタキ成形後に再成形している。灰白で細砂少し含む。133も外反する口縁部で内面の稜線鋭い。タタキ成形後に口縁部を作っている。ヨコナデで仕上げ、色調は灰白である。134も口縁部外反し再成形で右上がりのタタキで灰白である。ヨコナデで端部丸く内面ケズリである。135は吉備からの搬入品である。肩は丸いが最大径径が上位にあり内湾する体部で、内面にぶい黄橙～褐灰でユビ成形からヘラケズリ、外面にぶい黄橙～黒でヘラミガキである。頸部は短く外反し二重口縁となって僅かに内傾し端部は外側につまみ出すように角張っている。口縁部はヨコナデで8条の擬凹線が見られる。136は二重口縁の山陰系壺口縁部である。内傾する体部から短い頸部で短く外傾し目立つ鋭い稜線を持って外反する口縁部になる。端部は丸く、色調は灰白である。137・138は甕底部である。右上がりのタタキ成形で平底で中央が凹んでいる。137は灰白で内面ナデ、外面側面にもナデが見られる。138は黄灰で底面には木葉痕がある。内面は板ナデである。139は高杯脚部で端部まで残っていない。4方透孔があり外反ぎみである。内面はぶい黄橙でユビ成形からくもの巣状のハケ整形である。外面は灰白でミガキがなされている。杯部との接合部で割れており、筒部整形のナデが見られる。杯部内面もミガキで、筒部は中実である。140は器台上台部で水平に緩やかに外反し端部下方に大きく肥厚している。端面と上面に波状文が施され、仕上げはヨコナデである。灰白を呈し、砂粒僅かに含む。141は半月状をした土製品である。複合土器などの一部分が皮袋などの土製品かと想定されるが不明である。内面は灰～暗灰、外面は浅黄橙～灰で、器内は黒灰である。板状に延び、中央部分が薄く外側が厚くなっている。下面は粘土接合部で他部品との接合部であろう。砂粒含み精製品とは思われない。ユビ成形からナデ仕上げである。

4. 溝出土遺物

SD01 出土遺物 (142)

142は壺口縁部で内傾する体部から外傾する口縁部で端部は上方につまみ出し端面となる。内面は灰白～褐灰でナデ整形である。外面は浅黄橙でやはりナデ整形。口縁部はヨコナデで、粘土紐継ぎ目残る。

SD06 出土遺物 (143～148)

143は壺口縁部で吉備からの搬入品である。外傾してから直立ぎみに外反し端部丸く、端面には擬巴線が施される。にぶい橙で強いヨコナデ仕上げである。頸部内面の稜線は鋭い。144は壺口縁部で外反し端部尖っている。ヨコナデで外面はミガキが施されている。内面にぶい赤褐、外面にぶい橙で、細砂含む。讃岐からの搬入品である。145は壺口縁部で外反し端部上方につまみ上げ丸く納める。浅黄橙でヨコナデ仕上げ。146は壺体部で球形を呈し、肩は丸い。内面はエビ成形からナデ整形で、にぶい橙である。外面はナデ仕上げで橙、頸部はヨコナデである。147・148は底部である。147は壺で底面は平たくナデている。灰白で細砂含む、外面は右上がりのタタキからナデ、内面はエビ成形からナデである。148は壺でドーナツ状の上げ底になっており木葉痕がある。内面は灰白でナデ、外面はにぶい黄橙で右上がりのタタキからナデである。

SD09 出土遺物 (149～161)

149～153は壺口縁部である。149は頸部稜線甘く外反し端部丸い。灰白で外面の一部はにぶい黄橙である。外面は粗いハケ整形で、端部は水平でなく凹凸がある。150は外傾しており、端部は丸くヨコナデ仕上げである。灰白～褐灰で粗砂含む。151は二重口縁壺で讃岐からの搬入品である。外反し突帯状に突出しさらに外反し端部角張りぎみ。ヨコナデで仕上げ、内面は横方向のヘラミガキを施す。にぶい黄橙で内面には有機質を塗布している。152は器壁薄く外反し端部外側に肥厚し角張り端面に沈線がある。頸部は甘い稜線で体部は外傾する。体部内面はケズリ、外面はナデである。灰白～浅黄橙で胎土は緻密な精製土器である。153は僅かに外反する口縁部で端部は内外に肥厚し角張る。灰白で粗いハケ整形、内面と端部はヨコナデを行う。端部周辺は強いヨコナデで端面は沈線状に窪む。154～159は壺である。154は内湾する体部から外反する口縁部で端部尖る。内面はエビ成形からナデ整形で指圧痕が明瞭に残る。灰白で細砂含む、外面はハケ整形、口縁部はヨコナデである。155は内面の稜線鋭く口縁部外傾し端部丸い。内外面ともにハケ整形からヨコナデである。内面黄灰、外面灰白で、粗砂含む。156は外反し端部薄くなって丸い。器表灰白で器内黒を呈し、胎土緻密である。内面はハケ整形を全体にヨコナデで仕上げる。体部内面はケズリ。157は内湾する体部から内湾ぎみに延びる口縁部で端部はつまみ上げる。体部外面はタタキで浅黄橙、内面はケズリで灰白、口縁部はヨコナデである。外面に黒斑があり粗砂含む。158の底部と体部は接合出来ないが同一個体であろう。外反する口縁部で端部は外側につまみ出し角張っている。端面となり沈線が施され、ヨコナデ仕上げ。頸部内面の稜線は甘く体部は内湾する。内面は灰白～黄灰でハケ整形、外面は浅黄橙で右上がりの細かいタタキである。底部は尖り底で外面はラセン状のタタキからハケ整形を加え、内面はヘラケズリである。159は突出平底の底部で木葉痕が残る未調整である。灰白～暗灰で粗砂多く含む。内面はケズリ、外面は右上がりのタタキから板ナデで黒斑がある。160は小形丸底壺で丸底から内湾する体部となり、頸部は大きく稜線も甘く、口縁部は外傾し端部丸い。灰白で粗砂含む。内面はエビ成形からナデ、外面はハケ整形からナデ仕上げ、口縁部はヨコナデである。161は鉢で小さめの平底から内湾し端部は外側につまみ出し尖る。底面には木葉痕が見られ、ナデ整形する。その後調整を加えた工具痕が残るが、ヘラ記号状になる。体部はエビ成形からナデで粘土継痕見られ、余り丁寧な作りではない。底面周辺には黒斑があり、灰白～灰を呈する。

SD11 出土遺物 (162)

162は2次焼成を受けている内湾ぎみの壺口縁部で端部は内側に肥厚する。内面橙、外面浅黄橙でヨコナデ仕上げ。粗砂多く含んでいる。

5. 旧河道出土遺物

旧河道・包含層は量が多いので、器種ごとに分類し合わせて報告する。旧河道は近世遺構として調査したSR01の下層にあるものの全体的に氾濫の堆積を示しており、明確に堆積時期を限定することは出来ない。上層である黒褐砂礫層・黒シルト質極細砂混じり砂礫層には確実に須恵器が混じっている。

壺は6種に分けられる。壺Aはく字のもの、壺Bは口縁部が外反し主に端部が肥厚するもの、壺Cは直口するもの、壺Dは二重口縁のものである。壺Eは長頸壺、壺Fは讃岐からの搬入品である。

甕は12種に分けられる。甕Aは畿内V様式の系譜を引くく字甕、甕Bは直口甕に近い形状をするもの、甕Cは庄内甕で外面にタタキを残すもの、甕Dは庄内甕で外面にタタキを残さない甕、甕Eは庄内甕で河内からの搬入品、甕Fは丹波系、甕Gは淡路系、甕Iは山陰系の二重口縁のもの、甕Hは二重口縁で山陰以外の甕、甕Jは東四国系、甕Kは吉備系、甕Lは布留傾向甕である。

高杯は中実（高杯A）と中空のもの（高杯B）、それと椀形高杯（高杯C）の3種に分けられる。分類として柱状のものも存在するが、今回出土資料にはなかったので3種に分ける。

（1）黒褐砂礫層

須恵器（163・164）

163は高杯脚部で灰白を呈する。通常の大きさと裾径8.3cmを測り外反し端部角張る。ロクロナデで仕上げ杯部はナデ仕上げを行う。極細砂含み胎土は良いとは言えない。164は杯身で尖りぎみの底部で体部は直線的である。ロクロケズリののちナデ仕上げを行う。明青灰～暗灰で極細砂を多く含む。口縁部は内傾し端部は外側につまみ出している。受部は短く水平に開く。

壺

黒褐砂礫層出土壺はCとDに限られる。その他は文様片や端部を欠いている壺である。

壺C（165～168・171～173）

明瞭な直口壺ではなく、外反ぎみの口縁部である。165は端部角張り、ハケ整形ののちヨコナデである。にぶい黄橙で細砂含む。166も端部を欠くが同タイプと思われる。ハケ整形からヨコナデである。167は僅かに外反し端部肥厚している。内外面共にハケ整形から端部周辺はヨコナデで仕上げる。ハケはやや粗めである。にぶい黄橙～灰城で細砂含む。168は壺体部でハケ整形が見事で文様のように見え、その上にヘラ描きの直線文が施される。内湾しており、天地逆かもしれない。171は内湾する体部でヘラ先の刺突文がヘラ描きの文様が施される。内面はユビ成形からナデで丁寧とは言えない。172は内湾する体部から外反し端部は外側に引き出している。内面は灰白～灰黄褐でヘラケズリである。外面は灰黄でハケ整形を施し、口縁部はヨコナデである。細砂多く含む。173は内湾する体部で内面はヘラケズリ、外面はハケ整形で長胴ぎみ。口縁部は外反し端部丸い。強く被熱している。

壺D（169・170・174～179）

169は擬口縁部の上部で波状文と竹管文を付加した円形浮文が付けられている。灰黄を呈し胎土は精良である。下部にも波状文が見られる。内面はヘラミガキ。170も波状文が施された口縁部であるが壺のタイプは不明である。ナデ仕上げで灰黄を示す。この2点は端部はないが形態から壺Dと思われる。174は二重口縁で外反し端部肥厚ぎみに角張る。端面に凹線状の窪みあるが明瞭でない。明赤褐を呈しヨコナデ仕上げで砂粒含む。2次焼成を受けている。175は直立する頸部から水平ぎみに開き外反する。端部は外側につまみ出し丸く納める。外面はにぶい黄橙でハケ整形からナデそして縦方向のヘラミガキを加える。内面は灰黄褐でナデ仕上げ、口縁部はヨコナデであるが端部近くの方はヨコナデが強く

なっている。口径21.4cmで砂粒少量含む。176は体部内湾し口縁部は外反し端部丸い。強いヨコナデによって頸部に2条の凹線文のようになっている。体部内面はヘラケズリ、外面はミガキである。177は頸部は直立し水平に直線的に伸びてから外反する。擬口縁部は段が付いている。端部近くでやや反り丸く納めるが、端面が残り凹線状の窪みが残る。内外面ともハケ整形からヨコナデである。擬口縁部周辺が強いヨコナデを施している。にぶい黄橙で砂粒含む。178は口径20.8cmで内湾する体部から外反する。体部内面はユビ成形で痕跡明瞭に残し、下半はハケ整形している。外面は右上がりのタタキからナデ整形と縦方向のヘラミガキを施す。内面は灰白、外面はにぶい橙を呈する。口縁部はヨコナデで端部は角張る。擬口縁部に鋸歯文を装飾し竹管文の付けた円形浮文を付ける。2個単位で鋸歯文の谷部に付加し、2個並べて1つ開けている。179は擬口縁部が浅く端部を欠いている。不安定な平底から球形に近い算盤玉状の体部で口縁部は外反する。底部近くに黒斑があり、内面も黒くなっている。ユビ成形からナデ・板ナデで内面下半には工具痕が残り、粘土紐の痕跡がよく残っている。灰黄褐で粗砂など砂粒多く含んでいる。外面はにぶい黄橙で、ハケ整形からヘラミガキで仕上げている。口縁部は内外ともミガキである。底部(180・181)

180・181は突出平底でタタキ成形からナデを施している。内面も板ナデ整形である。180は内面に工具痕が残っており、底面はケズリである。181の底面はナデ仕上げで、ヘラ記号(2条の平行線)が見られる。側面には初痕が残っている。外面は灰黄で粗いヘラミガキがなされている。

鉢(182・184)

182は磨減が著しく明瞭でないが鉢と考えたが、甕かもしれない。丸底に粘土を貼って不安定な平底にしている。体部は内湾し、灰白～灰黄を呈し極細砂多く含む。184は内湾する体部で端部は丸い。内外面ともにヘラケズリを行い、内面はハケ整形を施し端部周辺はヨコナデで仕上げる。にぶい黄橙～灰白で粗砂含む。

小型丸底壺(183・185)

183は算盤玉状の体部で丸底となる。内面はユビ成形で頸部には絞りが残る。口縁部は残存していないが頸部屈曲し外へ広がる部分まで残っている。外面はにぶい黄橙で下半はナデ、上半はナデ・ハケ整形のちヘラミガキである。185は内湾する体部から外傾する口縁部で端部は丸い。内面は褐灰～赤橙で板ナデか、工具痕が残る。外面はにぶい橙でハケ整形からナデ仕上げ。2次焼成を受けている。

甕(186～190)

甕A(187・188・195・197)

187は強いヨコナデによって頸部が凹んでいる。明確に言えないが他地域の影響を受けているような違和感を覚える。にぶい黄橙で体部・口縁部とも直線的に広がる。端部は僅かに肥厚している。体部内面はケズリ、口縁部内面はハケ整形からヨコナデである。188は外傾する体部で灰白を呈し砂粒多く含む。内面はケズリ、外面はハケ整形で、口縁部はヨコナデである。口縁部は外傾し端部は丸く外につまみ出している。口縁部は垂で、体部残存部端はノコギリ状になっており意図的に破砕しようとした痕跡かと思われる。195は長胴となる球形の体部から外反する口縁部で端部肥厚する。灰黄～灰黄で細砂多く含む。外面はタタキ成形からハケ整形で、肩部にヘラ記号があり、さらにその上に竹管文が施される。内面はハケ整形のち上半は板ナデが施される。197は体部の破片でタイプ不明であるがタタキ成形で竹管文が見られる。

甕C(186・192～194)

186は外傾し上部につまみ出している。端部は角張り端面中央は凹んでいる。黄灰～黄灰で外面は有機質を塗布しているか。内面はハケ整形で端部から外面はヨコナデである。口径16.5cmと通有の大きさである。体部は残存していないのでタキの有無は不明であるがそれらは堇Cとする（以下も同様扱う）。192は内湾する体部から外傾し端部角張り肥厚さみとなり、端面に沈線を有する。外面はタキで内面はハケ整形である。口縁部外面にはユビオサエが残り、中央が膨らんでおりヨコナデ仕上げ。外面はにぶい黄橙で、内面は灰白～褐灰で細砂含む。193は器壁薄くシャープである。口縁部は僅かに外反し端部は内側につまみ出して端面になっており沈線を有する。浅黄を呈し、外面はタキからヨコナデ、内面はハケ整形である。194の胎土は地元であり堇Cとしたが技法は河内（堇E）のものである。内湾する体部から外反する口縁部で端部は丸い。にぶい黄橙で外面は右上がりのタキ整形からナデている。内面は板ナデで口縁部はヨコナデである。頸部内面の稜線は突出している。

堇K (189～191)

189は内傾する体部から短い頸部で大きく外反し外傾してから直立する。器壁は薄く仕上げられ、端部は角張りさみである。体部は内面ケズリで灰黄、外面ハケ整形で灰白～黒、口縁部は強めのヨコナデである。190は頸部から外傾し突出する擬口縁部となってから内傾し、端部は丸い。口縁部は全体に強いヨコナデで端面には擬凹線が見られる。内面は褐灰、外面はにぶい黄橙である。191も頸部は短く湾曲し口縁部は外反してから直立し端部は肥厚して丸い。体部内面はケズリで口縁部はヨコナデで端面には8条の擬凹線が見られる。灰黄～黒で極細砂を含んでいる。

堇L (196)

196は内湾する口縁部で端部は肥厚し面になっている。内面はにぶい黄橙で外面は灰黄褐で、細砂含む。ヨコナデ仕上げ。

底部 (198・199・201)

198は底径3.3cmと小さい平底から外傾する。内外面ともにハケ整形で底面はナデ仕上げ。底部内面中央が串状の凹みがある。199も平底から外傾する底部で外面はハケ整形、底面と内面はナデ仕上げで黄灰で底には黒斑がある。粗砂含む、焼成良好である。201は丸底で底はユビ成形で黒斑がある。内面は黄灰で貝殻条痕かと思われる。外面はにぶい黄橙でハケ整形。

甗 (200・202～204・206)

200はラセン状のタキ甗の底部に孔を焼成前に有している。底面はタキ底をナデで平底にしている。左上がりのタキで内面は粗いハケ（貝殻？）で整形し工具痕が残る。器壁は厚く、にぶい黄橙を呈す。

大型鉢 (202～205)

202は二重口縁で径が大きいことから鉢としたが甗の可能性もある。体部は直線的に広がり、外面はタキからハケ整形、内面はヘラケズリからナデ、口縁部はハケ整形からヨコナデ。にぶい黄橙で砂粒多く含む。203はくの字口縁で内面の稜線は甘い。内面はにぶい黄橙でヘラケズリ、外面は浅黄橙でハケ整形、口縁部はハケ整形からヨコナデ。204は緩やかな二重口縁で直立し端部角張る。灰黄で内面はヘラケズリ、外面はハケ整形である。体部は内湾する。205は器壁薄く体部内湾する。灰黄で外面はタキからハケ整形、口縁部はヨコナデで端部は外側につまみ出す。端部には炭付着しており、吹き零れた状態である。

高杯 (206・207)

2点とも脚部である。206は低脚で外反し端部近くで湾曲し端部角張る。内面には串先の小孔があり、内面にはぶい黄橙で板状工具痕がある。外面は灰黄を呈しヘラミガキで4方透孔の円孔がある。207は低脚高杯で内湾ぎみの脚で端部は下につまんでいる。3方透孔で円板充填法によって杯部と接続する。灰黄褐で外面はハケ整形からミガキを行う。内面はヘラケズリからナデで、短い筒部内面には紋り目がある。

器台 (208～212)

208は上台で筒部との接合部で割れている。外傾し端部近くで反っている。端部は丸く浅い上台でヨコナデ仕上げである。灰黄で極細砂多く含む。209も上台で外傾し端部直立し尖り気味に納める。内外面ともヘラミガキで丁寧に仕上げている。端部周辺は強いヨコナデで擬凹線になっている。210は精製土器で図上で完形となる。皿状の内湾する上台で端部上につまみ出す。外面には工具痕が見られヘラミガキがなされる。下台は直線的に延び端部尖る。灰黄褐で4方透孔を有する。内面はハケ整形ののちナデ、外面はヘラミガキで、端部周辺はヨコナデで仕上げる。211は下台が高く器高がやや高めとなる。上台は外傾し端部近くで斜め上方に丸くつまみ出す。端面に凹線1条見られ、内外面ともヘラミガキで仕上げる。下台は緩やかに外反し端部丸い。3方透孔で、内面はハケ整形、外面はミガキ、端部はヨコナデである。ぶい黄橙で細砂含む。212は外面にタキが残りヨコナデで仕上げている。灰黄～灰白で脚台内面には工具痕残す。

製塩土器 (213～215)

3点とも脚台Ⅳ式の脚台である。ユビ成形ののちナデでいる。213は内面明褐色で外面灰白で外反し端部丸い。214は灰白でやはり外反し端部丸い。215は粘土紐の継ぎ目が見られやや厚めである。外反し端部角張りぎみ。ぶい黄橙を呈し粗砂含む。

(2) 黒シルト層

壺

壺 B (223)

223は内湾する体部から外反する口縁部で端部は上方につまみ上げるように尖っている。内外面ともハケ整形からナデで仕上げ、口縁部はヨコナデで端部周辺は強いヨコナデで端面に2条の沈線を有する。器壁厚く、内面には粘土紐残す。内面は灰黄褐、外面にぶい黄橙で、砂粒多く含む。

壺 C (216・217)

216は内湾する体部に直口ぎみに外傾する口縁部が付く。端部は角張り、体部肩が張っている。灰白で体部内面はケズリ、外面はナデである。口縁部はハケ整形ののちナデ・ヨコナデを施す。217は外反する口縁部で端部尖る。頸部外面に体部との接合があり、内面に突出している。灰黄～暗灰で体部内面にはエビオサエが残っており、粘土紐も見られる。口縁部はハケ整形からヨコナデ。

壺 D (218・219)

218は外反しさらに外反し端部丸い。強いヨコナデが施され外面はカキメ状になる。ぶい黄橙～浅黄橙を呈する。219は大きく屈曲する短い頸部から直立ぎみに立ち上がり端部近くで反り、端部は角張り内外に肥厚する。擬口縁部は外側に突き出る。その上に竹管文施文されている。灰白で体部外面はハケ整形から全体にヨコナデ、端面に有機質付着している。

壺 F (220～222)

220はやや長めの頸部から外反し直立するが端部は残存していない。内外面ともにハケ整形からヨコ

ナデで仕上げる。外面中央に1条の凹線があり、外面は黄灰、内面は灰白である。221は短い直立する頸部から水平に近く開き内湾ぎみに直立する。端部は角張るが薄めである。頸部には断面三角形の鋭い突帯が貼り付けられ、上下に細かい竹管文が巡らされる。口縁部はナデ整形からヨコナデ仕上げ、内面はヘラミガキを行う。ヘラ描きの斜行鋸歯文を巡らせ、その上に竹管文付きの円形浮文を付加する。円形浮文は6ヶ所に施す。内面は灰黄褐で有機質付着しており、外面はにぶい黄橙である。装飾を施した壺である。222は外傾する口縁部が直立し端部付近で僅かに外側に傾け端部角張る。ユビ成形からナデ整形し強いヨコナデを施す。擬口縁部上に1条の凹線が認められる。内面は灰黄褐で有機質塗布している。外面はにぶい黄橙で砂粒多く含む。

文様片 (224・225)

2点とも体部の破片でタイプは不明である。224はヘラ描きの絵画土器である。放射状の直線と円弧が描かれている。ナデ整形ののち、外面はミガキがなされている。内面はオリブ黒、外面は灰～灰白である。225は波状文が施されている。内面は暗灰黄でナデ、外面は灰黄でタタキからナデである。

壺

壺 A (226～228・234～236・239)

226は短めの口縁部で端部は丸くヨコナデである。灰白で細砂を含み、内面に粘土紐見られる。227は灰白～暗灰で細砂多く含む、器壁も厚い。端部角張り内湾ぎみの口縁部でヨコナデ仕上げ。228は内湾する体部から外反する口縁部で端部は角張り器壁薄い。灰白～黄灰で砂粒少量含む、内面はハケ整形からナデ、外面は右上がりのタタキからナデである。234は外反する口縁部でヨコナデ。外面は浅黄橙、内面は橙で砂粒多く含む。粗いハケは貝殻施文と思われる。235は水平ぎみに外反して開き端部上につまみ上げている。内面ににぶい黄褐、外面灰黄褐で細砂少し含む。壺丁の影響を受けているかもしれない。236はやや大きめの壺で内湾する体部から外反する口縁部で、端部丸い。灰白で細砂多く含む。239は器高13.05cmの小形である。短く外傾する口縁部で端部は丸い。体部は倒卵形で小さな平底が付く灰黄で細砂多く含む。内面はヘラケズリからナデ調整で、外面はハケ整形である。底面はナデ、口縁部はヨコナデである。

壺 C (229・230・232・233)

229は外反し端部内外に肥厚している。粗砂含み、にぶい黄橙を呈し、器壁も厚めである。内面は粗いハケ整形であるが、貝殻であろうか。230は口縁部がやや外反し端部は上方につまみ上げている。端面には沈線が見られる。水平に近い細かいタタキである。灰白で細砂多く含んでいる。232は口縁部を欠いているがタタキから壺Cとした。水平方向のタタキで、内面はユビ成形から一部ケズリでナデ調整を加え、頸部付近のハケ整形である。灰黄～黄灰で細砂少し含む。233は内湾する体部で水平のタタキ成形、内面はケズリからハケ整形である。にぶい黄橙～灰白を呈し、細砂含む。口縁部は折り曲げて作りユビ成形が残る、ハケ整形からヨコナデである。端部は丸く肥厚し、外傾するが中央部の断面は膨らんでいる。

壺 D (231)

231は内湾する体部で内外面ともにハケ整形である。内面はオリブ黒でユビ成形から横方向ハケののちナデ仕上げ、外面は黒で縦方向のハケ整形である。口縁部は外傾し端部丸く、ハケ整形ののちヨコナデ。

壺 K (237・238)

237・238は口縁部だけの破片であるが、形態はやや異なる。237は内傾し端面に7条の擬凹線があり、端部は尖りぎみである。ヨコナデ仕上げで細砂含む。色調は黒で一部褐灰である。238はほぼ直立し端部丸い。ヨコナデ仕上げで端面には擬凹線が施されている。灰黄褐で細砂含む。

底部 (242～244)

242は突出平底で底部再成形である。外面は右上がりのタタキをナデしており、黄灰～灰黄である。内面はナデで灰白。底面には葉脈痕があり、側面には指頭圧痕が見られる。243は尖り気味の丸底で外面はタタキからハケ整形でにぶい黄橙～灰白である。内面はケズリで浅黄橙である。244は大形の不安定な平底である。ハケ整形からナデしている。灰黄～暗灰で細砂と小礫少し含む。底近くに黒斑がある。

小型丸底壺 (240・241)

240は丸底でやや肩の張る体部、口縁部を欠く。ユビ成形から外面底はハラケズリを施す。内面はナデで外面はハケからナデ、体部上半から頸部はヨコナデ仕上げ。黒斑が上下の対角線上に付いている。241は端部近くでやや外反する外傾する口縁部で端部は尖る。体部は内湾し扁平である。内面は灰白でハラケズリ、外面はにぶい黄橙でハケ整形からナデ。口縁部はハケからヨコナデで細砂含む。

鉢 (245)

245は口径55.2cmを測る大形の鉢で底部を欠く。内湾する体部から短く外反し突出した擬口縁から外傾し端部角張る。外面はハケ整形から丁寧にミガキで仕上げている。口縁部も一部ミガキが施されている。にぶい黄橙で粗砂含む。内面には全体に炭化物が付着している。

高杯 (246～251)

高杯 A (249・251)

249の脚部は外傾し端部は肥厚ぎみに丸く納める。上部はナデで丸く仕上げしており、内外面ともにミガキを施す。灰白～にぶい橙で細砂多く含み、4方透孔である。251は脚部がやや低いもので4方透孔である。内湾する裾部でハケ整形。杯部は内湾し変化して外反する。端部は丸くヨコナデ仕上げ。杯部と筒部はハラミガキで仕上げる。内面は明褐灰、外面は灰黄褐で粗砂含む。

高杯 B (246～248)

246は底の平たい杯部で外傾し端部近くで僅かに反り端部は尖る。磨減顕著で化粧土が塗られていたと思われ、ミガキ仕上げである。器内は灰黄～橙で細砂多く含む。脚部には絞目がある。247は中空としたが、比較的杯底は厚い。緩やかに外反する口縁部で端部丸い。裾部も直線に広がり屈曲して外傾する。脚部内面はケズリ。灰白で細砂多く含む。248の脚部は外傾し内面は横方向にケズリを施す。外面はミガキ。杯部は水平に開いてから外傾端部近くで外反する。端部は丸くヨコナデ仕上げで内面はハケ整形で外面はミガキ。灰白～黄灰で細砂多く含む。

高杯 C (250)

250は端部残存していないが、形状から碗形の可能性が高い。内湾しナデ・ミガキを行う。褐灰を示す。

器台 (252～254)

3点とも精製土器で細砂を含んでいる。252は浅く内湾する上台で端部は上方につまみヨコナデ仕上げ。下台は外傾し端部尖る。4方透孔で内面には工具の痕跡がある。灰白～にぶい黄橙を呈する。253・254の上台は残存しない。253は外反ぎみで端部尖り、4方透孔。にぶい黄橙～灰白で内面はナデ、外面はミガキである。254は外傾し端部を内側に曲げており透孔を持たない。灰白で外面はハケ整形のちミガキである。

舞台 (255)

255は外反し端部は尖りぎみである。灰黄～灰白で内面はハケ整形、外面と端部はヨコナデ仕上げ。

製塩土器 (256～261)

256は端部を欠いており、外面にタタキが施される。外面は灰黄、内面はオリブ黒で細砂を含む。ユビ成形からナデ整形する点は他と同じである。257～261は舞台Ⅲ式の製塩土器でユビ成形からナデ整形を行っている。にぶい橙を基調に赤橙～にぶい黄橙をしており、砂粒含んでいる。多くは外反しているが、舞台部だけ残った258は内湾し、261は外傾している。259は特に強く焼け端部が爆ぜている。

(3) 確認調査・その他の層

須恵器 (262・263)

262は杯蓋で外面全体に自然釉がかかっている。天井部は丸いが蓋で体部は内湾し端部は外側を尖らす。灰～灰白を呈する。263は不安定な平底の杯Aである。底面はロクロケズリからナデであり、ヘラ記号が施されている。外面は明青灰、内面は灰白で、極細砂多く含む。全体に歪んでいる。

弥生土器 (272・273)

小破片ながら272は無頸壺と思われる。中期後半のもので3条の凹線が施される。にぶい黄橙で細砂含む。

273は小片でタイプ不明である。ハケ整形ののちに肩部にヘラ描きの文様が施される。

壺 (264～266・276)

264・265は壺Dでヨコナデで仕上げている。264は灰白でヘラミガキがなされる。265は頸部が直立し水平に開いてから短く外反する。浅黄橙で砂粒含む。266は壺Aで長胴の体部から外傾する口縁部で端部丸い。色調は灰白で粗砂含む。内面はケズリ、外面はハケ整形で肩部はカキメ状の横方向の痕跡がある。口縁部はヨコナデで器壁に凹凸がある。276は大きさから壺とした底部である。大形の底部で小さな平底を有する。灰白～にぶい黄橙で内外面ともハケ整形である。地元産で外面にはタタキも一部見られる。底面はナデ仕上げ。

甕 (267～271・273)

口縁部が残っているものはすべて庄内甕でタタキがあるもの(甕C)とないもの(甕D)、布留傾向甕(L)が出土している。267は内湾する体部から外傾する口縁部で端部は上方につまみ端面になっている。内面は淡黄～灰黄でヘラケズリからハケ整形している。外面は灰白～にぶい黄橙で水平方向のタタキからハケ整形をしている。268は端部を外側につまみ出している。浅黄橙～にぶい黄橙である。269は球形の体部で扁平ぎみで薄く仕上げられている。灰白でヨコナデ仕上げ。270も灰白で端部肥厚させ面になる新要素を持つ。外面はハケ整形で細砂多く含む。271は外傾する口縁部で内側に折るような端部で面になっている。外面は黒、内面は暗灰黄。

小型丸底壺 (274)

274は丸底を欠いているが丁寧な精製品である。にぶい黄橙で、ハケ整形から細かいミガキで仕上げている。口縁部内面は暗文になっている。

鉢 (275)

275は口径が最大腹径を上回るもので、体部は内湾し口縁部は外傾する。口縁部は折り曲げておりユビ成形からヨコナデである。内面灰黄、外面灰白で細砂多く含む。

舞台 (277・278)

277は製塩土器の可能性もある。ユビ成形から板ナデ・ナデ仕上げである。内面はふい黄橙、外面は灰白である。278は外反し端部尖り4方透孔がある。大形の脚台であることから鉢の脚台であろうか。灰白で脚台内面以外はヘラミガキで仕上げている。

製塩土器 (279・280)

ともに脚台Ⅳ式の製塩土器で砂粒多く含んでいる。色調はふい橙で外面の方が明るく橙となる。279はユビ成形からハケ整形しており、中実に近い低い脚台である。280は内湾する体部に僅かに外反する脚台で端部は丸い。ユビ成形からナデで仕上げる。

6. 包含層出土遺物

暗灰砂出土遺物

調査段階で検出した旧河道より古いことから包含層とはしたが、本来は一段階古い旧河道と考えられる層である。層位は異なるが、土器からは明瞭な時期差が認められない。観察表では旧河道と表記。

壺 (281～367)

壺 A (281～295)

細かく分けると口縁部が外反するもの (A1)、外傾するもの (A2)、屈曲しながら外傾し端部外側につまみ出すもの (A3) に分けられる。さらに端部の形状で丸いもの (a) と角張るもの (b)・肥厚するもの (c) に細分が可能である。

A1a (281～286)

281はユビ成形から外面はハケ整形し内外面ともヘラミガキとナデで仕上げている。ふい黄橙で器表に凸凹が残る。282は右上がりのタキを折り曲げて口縁部を作っている。外面はミガキで仕上げ、内面はケズリから粗いハケ整形ののち板ナデ調整している。ふい黄橙で細砂含む。口縁部内面も粗いハケからヨコナデ仕上げ。283もふい黄橙で内外面ともにハケ整形である。端部を欠いているので細分は確実でない。ヘラ描きが1条見られる。284は内湾する体部から開くが微妙に屈曲している。内面はハケ整形で褐灰である。内外面ともに有機質が付着している。285は内面灰黄褐～淡赤橙、外面にふい黄橙～灰城で細砂多く含んでいる。ユビ成形からハケ整形し口縁部はヨコナデ。286は内面ヘラケズリで口縁部と外面はヨコナデ。ふい黄橙で端部僅かに外につまむ。

A1b (287)

287は頭部が厚めになり内面の稜線はない。端部に刻み目を施す。ふい黄橙～褐灰でハケ整形からヨコナデ仕上げ。内面はナデ仕上げ。

A1c (292・293・295)

292は外側に肥厚し外面はタキ、内面はユビ成形、口縁部ヨコナデである。灰黄褐を呈し砂粒含む。293は大きく屈曲し両側に肥厚する。ふい黄橙でハケ整形からヨコナデ仕上げ。295はヨコナデ仕上げで外面にヘラ描きの山形に近い波状文が施される。内面はミガキカナデで仕上げられている。灰黄褐で砂粒少量含む。

A2a (289)

289は灰白で粗砂含んでいる。内面はハケ整形からナデで全体にヨコナデで仕上げる。外面はヨコナデ後部分的にナデ調整を加える。

A2b (288)

288 は強いヨコナデで仕上げることによって、やや屈曲して延びている。内面は灰黄橙、外面はにぶい黄橙で、細砂含む。

A2c (294)

294 の口縁部はハケ整形ののちヨコナデ仕上げ。灰白で極細砂多く含む。端部外側に肥厚する。

A3 (290・291)

2 点とも端部は丸くおさめており、灰白で粗砂含む。290 は端部に浅い刻み目が見られる。291 はユビ成形の凹凸が器表に残っており、ヨコナデ仕上げである。

壺 B (298～305・309)

298 は肩の張る内湾する体部から大きく外反する口縁部になる。ハケ整形から内外面ともにヘラミガキで仕上げる。外面は強いミガキで面となる。内面は浅黄橙、外面はにぶい黄橙で細砂含む。299 は頸部 13.4cm と体部に比べると極端に小さい。特殊なタイプで丁寧に仕上げている。体部は上半しか残存していないが腹径は 40cm を越えている。内湾しているが扁平さみである。ユビ成形からハケ整形しナデ調整である。短く直立する頸部から外傾し端部肥厚する。頸部には断面三角形の突帯が付けられ、端部には刻み目が入られる。内面は灰白～橙、外面は橙～にぶい黄橙を呈する。300 は頸部との継ぎ目で割れている。黄灰～灰でヨコナデ仕上げで端部内外に大きく肥厚する。301 は内面ににぶい黄橙～灰黄褐、外面灰黄褐で外面に 2 条の沈線がある。粘土紐見られる。302 は内側上方に肥厚しており、部分的に端面が凹線状になっている。ハケ整形ののちナデ・ヨコナデ仕上げで橙である。303 は直立する頸部から外傾し端部肥厚する。器形的には壺 B であるが讃岐からの搬入品と思われる。灰黄～黄灰で雲母などの細砂含む。304 はタタキをナデ・ミガキで仕上げている。端部周辺は強いヨコナデで両端面が凹んでいる。灰黄で細砂多く含む。305 は底部を欠いた倒卵形の体部から外傾する頸部そして外反する口縁部になる。体部内面は灰黄でユビ成形から下半はケズリを施す。外面はハケ整形で灰黄褐、口縁部はヨコナデ。309 は裾部の可能性もある。外反し端部下方に大きく断面三角形に肥厚する。細かいヘラミガキで仕上げる。

壺 C (296・297・307・308)

296 は内湾する体部で内面ケズリ、外面ハケ整形である。口縁部は外傾し端部内外に肥厚する。ハケ整形からヨコナデで、内面にはハケ原体の工具痕が刺突文状に残る。灰黄で体部と口縁端部に黒斑が認められる。297 は器壁の厚い大形の口縁部である。緩やかに屈曲し端部角張って肥厚する。外面は縦方向のハケ整形からナデ調整、端部周辺のみヨコナデ。頸部近くに 4 条の凹線がある。灰黄で砂粒多く含む。307 は直立し端部内側につまみ出す。内面は褐灰で工具痕があり、外面はにぶい黄橙である。308 は球形の体部で外面はタタキからハケ整形でにぶい黄橙、内面はケズリで褐灰を呈する。口縁部はハケ整形からヨコナデで端部尖る。

壺 D (306・311・312・317～325・327・328・330)

口縁部の形状で壺 A と同様に細分する。外反するもの (D1)、外傾するもの (D2)、外傾し端部を外側・上方につまみ出すもの (D3) に分ける。

311・312 は口縁部を欠くが形状から二重口縁になるとと思われる。311 は直立する短い頸部で直線文と肩部に波状文を施す。内面はハケ整形からミガキで仕上げているが、さほど丁寧ではない。内面は灰黄褐、外面はにぶい黄橙である。312 は内湾する体部で内面はユビ成形からハケ整形・ナデ、外面はナデ整形ののち強いヨコナデを施し、竹管文のついた円形浮文を肩部に付け、2 条の波状文も施す。頸部は

内外ともハケ整形で、灰黄～黄灰。

D1 (319・321～325・327)

319は灰白で外反しヨコナデ仕上げ。地元の胎土で磨滅している。321は肩部丸く納め、ハケ整形からミガキで灰黄褐色を呈し細砂含む。322の内面はにぶい黄橙を呈しヘラミガキで仕上げている。外面は灰白で波状文が施される。323は頸部が長く強いヨコナデで仕上げられ器表凹凸が生じている。にぶい黄橙で器内は灰である。324は低い頸部から外反し端部つまみ上げている。ヨコナデで端部に浅い凹線が認められる。外面に佛先刺突文をV字に連続して装飾している。山形文の1種であろうか。外面浅黄橙、内面にぶい橙で細砂含む。325はハケ整形からヨコナデで擬口縁部は大きく突き出す。橙～灰黄褐色で細砂含む。327は肩の張る体部から短い頸部で大きく外反し端部丸い。ハケ整形のちヘラミガキ。口縁部は縦方向に平行に施文する。橙～にぶい橙で内面も一部ミガキ。

D2 (317・318・320・328・330)

317は球形の体部から外傾する頸部で口縁部は内湾ぎみに開くが端部は残存していない。ハケ整形からミガキを施す。にぶい黄橙で1条の凹線を有する。318も球形の体部から直立する頸部で外傾する。ハケ整形からミガキで口縁部はヨコナデ。にぶい黄橙で内面はケズリが見られ、体部下半に径4mmの円孔が焼成前に作られる。底部に黒斑、端面には沈線が1条ある。320は擬口縁部の突帯部と端面に細かい竹管文を施す。端部には刻目を有す。内外面ともヘラミガキで丁寧に仕上げている。内面浅黄橙、外面灰白である。328は擬口縁部が不明瞭で、強いヨコナデで接続部を仕上げている。にぶい黄橙で細砂含む。口縁部内面下半のみミガキを施す。330は内面に有機質を塗布していることから搬入品と考えられる。頸部は外傾してから開き短く直立する。端部は角張り、ヨコナデで仕上げる。にぶい赤褐色で端面にはヘラ描き斜行の刷歯文がある。内面は横方向、外面は縦方向のヘラミガキである。

D3 (306)

306は小形で二重口縁(壺D)と外反して端部をつまみ出す(壺A3a)中間の形状である。灰黄で内湾する体部外面には籐状文のような文様を意識した断続的なハケを行っている。口縁部は内外ともに丁寧にミガキで仕上げている。

壺F (310・326・329・331～333・357～367)

310は他の大形の内傾する二重口縁壺とは異なる讃岐からの搬入品である。小形の直立する頸部を有する。頸部には突帯が付加され刻目を端部に入れている。内外ともに細かいミガキがなされる。灰黄で細砂含む。326は端部内外に肥厚する。内面は有機質付着しヘラミガキ。灰黄で極細砂多く含む。頸部外面はハケ整形で粘土紐残る。329は頸部短く稜線不明瞭。灰黄褐色で口縁部はヨコナデ、内面ケズリ、外面ハケ整形である。331の頸部は内傾し水平に開いてから口縁部は直立する。口縁部はハケ整形で2次焼成を受けている。灰赤～にぶい橙。332は外反気味に開き突出してから内傾し端部反る。擬口縁部はユビ成形し、ハケ整形後口縁部はヨコナデ。内面は褐灰～黒褐、外面は灰黄褐色で内外面ともに有機質付着。333は外反する頸部から内傾する。にぶい黄橙～灰白で体部内面はケズリ、外面はハケ整形、口縁部ヨコナデで黒斑がある。357は強いヨコナデで6条凹線を端面に有し、内面には有機質を塗布している。ハケ整形からナデ・ヨコナデで端部反りぎみで丸い。内面にぶい橙、外面灰褐色で細砂含む。358は外反する頸部から直立に延びる二重口縁で磨滅している。359は短い頸部で外反し内傾する口縁部に続く。色調は灰白で白っぽい印象を受ける。頸部外面はハケ整形で他はヨコナデ。360は大きく外反する大形品で肩部に断面三角形の突帯を回す。突帯の上下面に刻目状のヘラ先刺突文を施す。上の頸部

にも2帯のヘラ先刺突文を巡らす。突帯の下には波状文と直線文を巡らす装飾的な壺である。頸部から短く突き出してから直立し底部反る。内面はユビ成形からハケ整形し有機質付着している。にぶい黄橙で外面は灰白～灰黄で粗砂含む。肩部の残存部端は大きく割れており、意図的に破砕した可能性がある。361は短く直立する頸部から外傾し大きく断面方形の突帯を付加し外傾する口縁部になる。端部は内外に肥厚し、突帯端面と上面には360と同じヘラ先刺突文を施す。その上には竹管文帯を巡らす。二重に押圧したもので、内側は円形とC字状になる。ハケ整形からヨコナデで、内面はにぶい黄橙、外面は灰黄である。362はユビ成形からハケ整形し外面は一部ミガキを行う。緩やかに広がり、粘土の継ぎ目で段になっている。頸部はくの字で外傾し突出してから内傾する口縁部で端部やや肥厚して外側に尖る。灰白～灰黄褐でハケ整形から頸部内面はミガキを行っている。口縁部は強めのヨコナデで器表に凹凸が生じている。363は外傾してから内傾する端部を欠く口縁部である。ユビ成形からナデで外面は強いヨコナデがなされている。灰黄褐で粗砂含んでいる。364は外傾してから明瞭な稜線を持たずに内傾し端部内側につまみ出す。ユビ成形からナデで外面はヨコナデで変部上部に1条凹線がある。内面灰黄褐、外面にぶい黄橙で粗砂含む、内外面と有機質塗布している。365は大きく低く外反してから直立し端部内外肥厚する。ハケ整形からヨコナデで一部ミガキを施す。内外面とも有機質塗布し、内面灰黄褐、外面にぶい黄橙である。366は外傾してから甘い稜線を持って短く内傾し端部丸い。ハケ整形からナデ・ヨコナデで、内面はにぶい赤褐で有機質塗布、外面は黒褐で粗砂含む。367は器壁厚く内傾してから突出し内傾し、端部外側に尖らす。ユビ成形の凹凸残り、ハケ整形からナデ・ヨコナデ・ミガキである。内面黄灰で有機質塗布、外面は黒褐～にぶい黄橙で胎土良好である。

底部 (313～316・334～337)

313は平底で内湾する体部内面は灰黄でユビ成形からヘラケズリである。外面は灰黄褐でナデ仕上げ。314～316は突出平底である。314の外面はタタキからハケでにぶい黄橙、内面はユビ成形からハケで灰白である。315は下影れの球形で外面はにぶい黄橙でタタキからハケ整形、内面は灰黄褐でハケ整形、タタキ底である。底部近くに黒斑がある。316は内湾する体部下半で丸底に粘土を付加して平底にしている。灰黄で外面はタタキからミガキで滑して調整し、内面はハケ整形している。312と同一個体であるかもしれない。有機質付着。331は大形の壺で外面ハケ整形、底面木葉痕、内面ナデで、僅かに上げ底となる。底部に粘土痕見られ、内面灰白、外面灰黄、器内褐灰を呈し、粗砂含む。335も木葉痕で外面はケズリからミガキで内面は板ナデで黒斑を有する。灰黄で細砂含む。336は内湾する体部で底部は中央が凹んでいる。外面はミガキ仕上げで暗灰黄、内面はナデ・板ナデ仕上げでオリブ黒。底部に黒斑があり、細砂含む。337は頸部近くまで残存しており、肩部に波状文帯がある。2本1対にも見えるが明瞭でなく帯状になっている。倒卵形の体部で僅かに上げ底となる底部でナデ仕上げ。外面下半のみヘラミガキが残る。内面灰白～灰、外面にぶい橙である。

文様片 (338～356)

口縁部・肩部に文様が施された破片で、一応壺としているが甕も含まれているかもしれない。ヘラ描きで文様でなく記号状のものが、338と348である。338は竹管文のように円形となり、灰黄で粗砂含む。348は2本で1対となったもので川状に施す。

刺突文が339・346・354である。339は横方向にV字(矢印)が施された羽状で浅い施文である。外面ミガキで灰黄褐、内面ナデでにぶい黄橙である。346は肩部に施されており、櫛先刺突文である。ハケ整形からナデで、外面灰黄褐、内面にぶい黄橙である。354は頸部下にヘラ先刺突文を細かく巡らす。

淡橙～にぶい橙で細砂含み、外面はミガキである。

波状文が最も多く7点ある。341だけがヘラで、それ以外はクシによる施文である。340は二重口縁壺で細かい波状文を施す。灰白で内面はヘラミガキ、外面はナデ仕上げ。341は内面にぶい黄橙でヘラケズリ、外面灰白でタタキからヨコナデ・ヘラ先波状文である。堯と思われる、搬入品であろうが。342は強いヨコナデののち波状文を施した内湾する体部である。内面浅黄橙でケズリ、外面は灰白～褐灰を呈する。343は二重口縁で端面を垂下させており、そこに竹管文付きの円形浮文を間隔を開けて付加する。端面に細かい波状文を巡らせ、端部は丸く反っている。灰黄で外面の方がやや暗い。344は肩部にしっかりと丁字な10条の波状文を巡らせ、頸部近くに8条の直線文を施す。内面はユビ成形からナデで灰白、外面はにぶい黄橙でナデ調整。頸部には突帯があるように思われる。345は内面ハケ整形で灰白、外面はにぶい黄橙で外面全体に波状文が見られる。347の内面は凹凸が残り粘土紐の継ぎ目も看取される。にぶい黄～黄灰でユビ成形からケズリ・ナデである。外面は灰黄褐で直線文の上下に波状文帯を配置する。

竹管文は5点あり、そのうちの1点は波状文もある343である。349は堯で肩部に3個押されている。外面は灰白～褐灰でハケ整形である。内面は黒でナデ整形。350はタタキからハケ整形し、その上に3個の竹管文を施す。灰白で内面はナデ仕上げ。355は器台で上台部上面に竹管文を巡らす。灰黄褐で細砂含み。356は内湾する体部で灰黄を呈し、5個竹管文が押されている。

鋸歯文は2点あり、どちらも斜行のラインが認められる。351はにぶい黄橙で粗砂含み。ナデ仕上げで内面はハケ整形である。352は口縁部で端部が丸く肥厚さみである。ハケ整形からナデ・ヨコナデ仕上げ。外面灰黄褐、内面橙で細砂含む。

堯 (368～388・390～460・485) 細分は旧河道と同じで、庄内堯で体部がないものはCにしている。

堯 A (387・388・392・393・396・397・400・485)

庄内堯の次に多く出土している。図化していないものでは外反する方が多いように思われる。387は大形の堯で口縁外傾し端部上につまみあげている。ヨコナデ仕上げで、内面は赤灰、外面は赤褐である。体部内面はヘラケズリで細砂含み、頸部短く大きく屈曲し稜線は有さない。388も同種の堯で技法など387と同じである。内面灰黄褐～褐灰、外面橙で粗砂含む。393は短い頸部で外反し端部角張る。古相を示す。

堯 B (399)

399は短く外傾し端部角張る。内外面ともハケ整形で灰黄～黄灰を呈する。

堯 C (394・395・407～430)

最も多く出土している。端部つまみ出して角張るものが多く、端面になり沈線が見られるのも多い。色調は灰黄～黄灰・灰白が多く、極細砂を含んでいる。内面はハケ整形が多く、タタキは平行か右上がりが多い。河内からの搬入品もある。

堯 D (431～440・442・443)

球形の体部に内湾さみの口縁部が多い。端面になるのが多いが、外につまみ出すもの433もある。

堯 H (451～453)

ミガキを施している。口径が小さく体部の方が径が大きくなる。

堯 I (445～450)

にぶい黄橙～灰白を呈し、器壁が厚いもの447もあるが、大半は薄くシャープである。強めのヨコナ

デ仕上げである。

甕 J (390)

390は頸部内面の稜線が甘い外反する頸部で口縁部短く内側につまみあげている。ユビ成形からハケナデで椀~にぶい黄橙をしている。

甕 K (454 ~ 460)

受口部の稜線が甘いものと鋭いものがある。形態・技法は吉備だが胎土は播磨のものがある (454・455・458)。擬凹線は2点だけである。

甕 L (398・441)

端部は角張るもの398と内側に肥厚するもの441がある。内湾する口縁部は共通する。

底部

369 ~ 375・378は突出平底で甕Aの可能性が高い。外面タタキ成形のもの(369・371 ~ 375・378)が多く、370はミガキ仕上げである。内面はケズリ(369)とハケ整形(370・371・374・375)と板ナデ(372・373・378)に分かれる。ハケ整形はくもの果状になる。372は木葉痕があり、369・375・378はタタキ底である。色調は灰白~灰黄のものが多く、370には黒斑が見られる。

376・377・379 ~ 382は平底である。外面タタキ成形のもの(377・382)とハケ整形(376・379・380)とナデ仕上げ(378)に分かれる。内面はケズリ(379)、ハケ(376・380)、板ナデ(377・381・382)の3種がある。376・381には木葉痕があり、377・382はタタキ底である。376・382には黒斑がある。内面にぶい黄橙~灰黄、外面灰白~黒褐を呈する。379の胎土は播磨だが全体的に甕Jに類似している。380は外面にヘラ描きの文様(横向きにV)が施される。

383はタタキ底の丸底で黒斑がある。外面は灰白でタタキからハケ整形とナデ調整、内面は黄灰でケズリからハケである。384も丸底で内面に放射状の工具痕が見られる。外面はぶい黄橙でナデ仕上げ、内面は灰白である。385・386は短い脚台となる底部で、ユビ成形で仕上げている。385は黄灰を示し黒斑が認められる。内面には板ナデの工具痕があり内湾している。386は外面タタキからナデで灰白、内面ハケからナデでぶい黄橙で、粗砂含む。内湾する底部で、脚台部は外に開き端部丸い。

461は平底から内湾する底部で中央に穿孔され瓶となっている。タイプは甕Aであろう。

文様片

368は内湾するタタキ成形の体部で縦方向3本のヘラ描きがある。内面は灰白でハケ整形、外面は灰黄で細砂含む。403はクシ描きで、406はヘラ描きで文様を表す。404は竹管文、405は刺突文である。

鉢 (401・462 ~ 478・487 ~ 494・499 ~ 501・521 ~ 525)

丸底と平底があり、頸部の有無もある。小形の鉢は浅い皿状と半球形のものがある。大形は頸部を有し、口径が体部腹径を上回る。くの字と二重口縁がある。487 ~ 494・499 ~ 501は小形精製鉢であるが、やや粗雑なものもある。

ミニチュア土器 (479 ~ 482)

4点出土している。479は壺で形態が東瀬戸内のもので搬入品かもしれない。体部に穿孔がある。480も壺で手捏ねながら丁寧である。481・482は鉢で黒斑がある。

手焙土器 (483)

小片であるが、手焙りの罅部と思われる。内傾し端部は内外に肥厚し、端部に細かい波状文を施し竹管文のついた円形浮文を貼付する。

蓋 (484)

つまみ部の小さなもので外傾し端部角張る。ミガキ施すが余り丁寧な仕上げではない。

小形丸底壺 (496 ~ 498・502 ~ 505)

口径が勝るものと最大腹径とはほぼ同じものがある。体部の小さい496は東四国の影響であろうか。

製塩土器 (495)

495は赤化するほど強く焼けており粘土細が見られる。

高杯 (507 ~ 520・526 ~ 535)

碗形と有段のものがある。円板充填が多く見られる。508は小形の精製土器で裾広がりになる脚部が付くであろう。ミガキで丁寧に仕上げ、化粧土塗布している。514は讃岐からの搬入品で高杯は珍しい。杯部と筒部との接合面に凹凸を付けている。また、内面には串状の刺突が残るものが多い。

器台 (389・536 ~ 550)

大形と小形があり、中空と中実がある。541・542は山陰の鼓形器台である。545は径小さくミニチュアであろうか。

脚台 (551・552)

551は外反し552は内湾し端部肥厚している。ハケ整形で細砂含む。

製塩土器 (553 ~ 560)

すべて脚台式で、560だけ体部が残っている。タタキ成形で多面体になっている。内湾する体部で搬入品。

その他包含層

黄灰中砂 (561 ~ 563)

包含層上層で白磁561青磁562須恵器563が1点ずつ固化している。

灰砂礫 (564 ~ 571)

須恵器・土師器・弥生土器を固化している。須恵器には糸切り底の新しい碗まで含まれる。弥生は中期の壺である。

礫層 (572 ~ 584)

土師器・弥生土器が出土し、須恵器は含まない。吉備・山陰の土器も出土している。磨滅著しい。製塩土器が目立ち、582は本来器台であるが強く焼け製塩土器への転用と思われる。

褐灰シルト (585・586)

585は讃岐からの搬入品で、586には波状文が見られる。

その他 (排土・層位不明など、587 ~ 597)

讃岐の壺2点588・589が含まれる。593は脚台としたが余り見えないタイプである。

(2) 石器

S1はサスカイトの剥片で、周縁に若干の微細な剥離が認められ、使用痕と考えられる。この使用痕も含め、石材全体の風化が激しい。主要剥離面(図左側の面)右下の面と上下端の面は、本来、素材(原石)の面であったと思われる。

S2は二等辺三角形形状を呈する凹基式の打製石鎌で、全体的に磨耗が激しい。気泡の多い粗悪なサスカイトを用いつつも、根気よく細かな剥離を試み、横断面形をレンズ状に近づけている。

S3・S4は小型の砥石で、置き砥石ではなく手持ち砥石と考えられる。S3は灰白色の凝灰質砂岩を用い、4面の砥面を形成し、いずれも大きく内湾しよく使用されている。S4は暗灰色の凝灰質極細粒砂岩を用い、非常に緻密な石材であることから仕上げないしは研ぎ直しに用いられたことが考えられる。砥面は隣り合う3面が遺存し、ともによく使用されている。砥面のうち図正面のもののみが比較的平滑で若干内湾するが、両側面の砥面はいずれもよく内湾している。

表2 出土石製品一覧表

報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	種別	器種	石材	法量(cm)			法量(g)	
							長さ	幅	厚さ	重量	残存
S1	41	80		石製品	剥片	サヌカイト	3.10	1.80	0.40	3.1	完形
S2	41	80	確認調査トレンチ	石製品	石鏃	サヌカイト	2.30	1.60	4.50	1.2	完形
S3	41	80		石製品	砥石	凝灰質砂岩	4.50	2.55	3.25	24.6	完形
S4	41	80	旧河道	石製品	砥石	凝灰質極細流砂岩	5.45	1.45	0.65	4.5	欠損

表3 長越遺跡Ⅱ出土遺物報告表

番号	種別	部風	遺構	技法・地	形装の特徴	重量 (g)			残存	備考
						口径	器高	器径		
1	土師器	底	S01(南東部)底埋部 土層	ヨコナテ、竹筵文付倉戸形文	縁部未付たない二重口縁で器部欠い	(15.7)	(4.5)		口縁1/8	
2	土師器	底	S01(南東部)	内面ナテ、外面ミガキ	縁部の内縁で外縁	(9.9)	10.6		体部3/4、底部欠部	土層2
3	土師器	腰	S01(底床部)	ヨコナテ	外反し器部肥厚	(14.6)	(2.2)		口縁1/10	
4	土師器	腰	S01	外面タタキ、ナテ仕上げ	ドーナツ底から内湾する体部	(2.6)		(5.5)	底部完部	
5	土師器	腰	S01(東側土器)	平縁ながらナテ、タタキ盛?	不安定な突出平底から外縁する	(3.0)		(2.4)	底部1/3	
6	土師器	高杯	S01	ナテ、ミガキ、ヨコナテ	内湾し器部欠い、脚は外平ぎかに延びる	(11.3)	(7.6)		口縁わずか、脚柱部	天地窓かも
7	土師器	鉢	S01	ユビ成部からハケ・ナテ、ヨコナテ	直線的に湾き器部内縁に肥厚する	(25.7)	(8.2)		口縁1/12	
8	土師器	底	S02ア	ハケ成部からナテ、ヨコナテ	屈曲して外反し器部欠い	(15.8)	(8.0)		口縁1/6	
9	土師器	底	S02北平	ナテ、ヨコナテ	外形し器部欠る	(13.8)	(5.9)		口縁1/5	
10	土師器	底	S02北平	ヨコナテ	外反し器部欠る	(4.3)			小片	山陰
11	土師器	底	S02北平	ヨコナテ	外反し縁縁付ナテに外反し器部欠る	(14.0)	(6.2)		口縁1/8	
12	新石器	底	S02北平薄土	ナテ	外反し突出してから内湾し器部欠い	(11.6)	(4.6)		口縁1/7	
13	土師器	鉢	S02南平	ユビ成部からハケ・ナテ、ヨコナテ腹状文	外反し器部欠い	(4.3)			口縁小片	
14	土師器	底	S02南平	ユビ成部からハケ・ナテ、粘土縁部有目	内湾する	(8.8)			底部1/2	
15	土師器	腰	S02南平	タタキからナテ	平底から外縁	(4.6)		(4.8)	底部1/3	
16	土師器	底部	S02ア	ハケ成部からナテ・ヨコナテ	平底から外縁	(2.2)		(5.6)	底部2/3	黒炭
17	土師器	鉢	S02南平体部	ユビ成部からナテ、外縁無	本器部の不安定な平底、内湾する体部	(2.5)		(3.4)	底部1/3	
18	土師器	底部	S02南平	ハケ成部からハケ・ナテ、直へう縁き	平底から外縁	(2.5)		(4.6)	底部3/4	
19	土師器	底部	S02北平	内面ユビ成部からナテ、外面タタキ、タタキ盛かから器部内縁部	上げ縁から外反する	(2.4)		(3.5)	底部1/2完部	
20	土師器	底部	S02南平	外面タタキからナテ、底部ナテ	平底から外反	(2.9)		4.6	底部完部	

番号	種別	器種	器種	技法	技法	形質の特徴	法長 (cm)			残存	備考
							口径	器高	器径		
21	土師器	底部	SR02	内面ナズリ、外面ハケカケナズリ		外縁する体部で欠破				底部は片欠形	土器1
22	土師器	底部	SR02南半壊上	内面ナズリ、外面ユビ痕跡からナズリ、上げ底ナズリ		上げ底から外反する		(2.6)	4.0	底部は片欠形	
23	土師器	底	SR02南半	内面取り、ユビ痕跡からナズリ、外面へウミガキ、ナズリ		平底から胴部部で外縁する口縁部になる		(4.5)	3.0	底部欠形	
24	土師器	ミニチュア	SR02ピット15	内面ユビ痕跡からナズリ、外面ナズリ		平底から内湾する		(3.4)	(2.6)	底部欠形	
25	土師器	底	SR02南半	内面へウケナズリ・ヨコナズリ、外面ヨコハケ		内湾する体部から短く外縁し二重口縁に		(10.0)	(23.0)	胴部1/10	
26	土師器	腰	SR02アゼ	外面タキキからは縁部取り曲げヨコナズリ		外反する口縁部で端部欠い		(8.0)	3.0	口縁1/10	
27	赤生土器	腰	SR02南半	ヨコナズリ、化粧土		外反する口縁部で端部欠い		(4.2)	(4.0)	口縁1/4	2段組成
28	土師器	腰	SR02南半壊上	外面タキキからナズリ、内面ナズリ、ヨコナズリ		内湾する体部から外反する		(3.6)	(6.0)	口縁1/8	
29	土師器	腰	SR02南半壊上	外面ハケカケからナズリ、ヨコナズリ、ナズリ		外反する口縁部で端部欠る		(4.8)	(4.4)	口縁1/9	
30	土師器	腰	SR02北半	ヨコナズリ		外縁する口縁部で端部厚		(3.8)	(2.2)	口縁1/9	
31	土師器	腰	SR02南半	外面ハケカケナズリからナズリ、外面タキキからナズリ、ヨコナズリ		内湾する体部から外反し端部厚する		(6.3)	(4.8)	口縁1/9	
32	土師器	腰	SR02南半	内面ハケ、ヨコナズリ				(5.8)	(3.0)	口縁1/6	
33	土師器	腰	SR02ピット1	ヨコナズリ		外縁する口縁部で端部上へつまみ上げる		(7.2)	(4.7)	口縁1/13	
34	土師器	腰	SR02	ヨコナズリ		外縁する口縁部で端部内側に厚		(4.6)	(3.2)	口縁1/6	土器3
35	土師器	腰	SR02南半	ヨコナズリ		内湾せみに反ける口縁部で端部外につまみ出す		(5.3)	(4.1)	口縁1/8	
36	土師器	腰	SR02南半	ヨコナズリ		内湾せみに反ける口縁部で端部外につまみ出す		(5.6)	(3.3)	口縁1/4	
37	土師器	腰	SR02	ヨコナズリ		内湾せみに反ける口縁部で端部厚さみ		(5.7)	(3.2)	口縁1/4	
38	土師器	腰	SR02南半	内面ナズリ、外面ナズリ、ヨコナズリ		内湾する口縁部で端部欠い		(2.1)	(4.0)	口縁1/7	
39	土師器	腰	SR02北半	内面ユビナズリ、外面ナズリ、ヨコナズリ		内湾する体部から外反する		(5.8)	(3.2)	口縁1/7	
40	土師器	高杯	SR02	内面へウミガキ、ヨコナズリ		外縁する、端部欠い		(9.8)	(5.0)	杯部は片欠形	土器1、程度

番号	種別	部風	遺構	技法・地	部風の特徴	法量 (cm)			残存	備考		
						口径	部高	取付径				
41	土師器	高杯	SR02北半	ナズ、透孔3ヶ所	外反する胴部で底部欠る		(6.9)		(13.8)	底部1/4		
42	土師器	高杯	SR02北半	外反ハクからナズ、内反ハク、透孔3ヶ所か?	内湾する		(4.0)			脚柱部1/3		
43	土師器	高杯	SR02南半	内面紋目、ナズ、縁全面片が平にする	外反する胴部から外反する		(5.8)		(7.8)	脚柱部ほぼ完	黒灰	
44	土師器	脚台	SR02南半	ヘウミガキ、ヨコナズ、ナズ	外反し底部欠い		(3.1)		(6.0)	底部1/7		
45	土師器	製塩土器	SR02南半	ナズ?	薄く外反し底部欠い		2.2		(4.2)	底部1/6		
46	土師器	製塩土器	SR02アミ	ナズ、裾ね部へじ成形	外反し底部欠い		(2.3)		(4.2)	脚柱1/4		
47	土師器	器台	SR02南半	ヨコナズ、ヘウミガキ、底部ヘラケズリ	内湾する上台部、突筋になり底部欠い		(9.0)	(4.0)		上台口縁1/4	山腹	
48	土師器	器台	SR02北半埋土	ヨコナズからナズ?	内湾し底部欠る		(9.6)	(4.0)		口縁1/3		
49	土師器	器台	SR02	内面平ナズ、外反縁方面のミガキ、上台縁角のナズ、脚成部目4ヶ所	外反する胴部で底部欠る。上台は外反		(8.3)		10.6	脚柱ほぼ完		
50	土師器	壺	SR03中央上段	ヨコナズ	外反し底部欠い		(15.2)	(3.9)		口縁1/9		
51	土師器	壺	SR03南東隅土坑	ヨコナズ	即曲しながら外反し底部欠い		(12.6)	(5.2)		口縁1/10		
52	土師器	鉢	SR03北半	ハケからナズ、粘土縁部目	薄く平縁部に内湾し底部欠り内湾する		(9.9)	(4.5)		口縁～底部1/4		
53	土師器	鉢	SR03北半	外反ハクからナズ、粘土縁部目	内湾し底部欠い		(10.4)	(3.8)		ほぼ完部		
54	土師器	器台	SR03北半	内面ヘラケズリ、ヘウからナズ、外反ヘウミガキからナズ、透孔4ヶ所	外反する		(5.3)		(10.8)	脚柱1/2	内内	
55	土師器	壺	SR04下	内面平ナズ一部工具痕あり、外反タタキ、途中タタキのナズ、底部ナズ	ドーナツ底から下部外縁の縁部体部から外反する口縁部		15.5	23.0	19.4	3.2	ほぼ完部	
56	土師器	壺	SR04下	内面ユビ底面からケズリのみナズ、外反タタキのちハク、ヨコナズ	小さな平底から内湾し口縁部外反し底部外反する		(4.3)	21.0	18.1	3.0	口縁1/3・体部3/4・底部1/2	
57	土師器	壺	SR04下	内面ユビ底面からハクのみナズ、器目	内湾する体部から外反する口縁部で底部欠い		(8.0)	(8.0)		口縁1/5・体1/3		
58	土師器	壺	SR04下	外面斜タタキからタタキハクのみナズ、内面縁部工具のナズ、ヘウケズリ	器形の体部で平直、口縁部外反し底部欠い		(15.0)	(17.5)		口縁1/4・体2/3		
59	土師器	壺	SR04東半	内面ハク、ケズリ、外反ヘウからナズ、ヨコナズ	くの字で口縁部外反し底部上につきまぶ上げる		(15.8)	(3.1)		口縁1/8		
60	土師器	壺	SR04下	内面ヘラケズリ、外反タタキハク、ヨコナズ	外反し底部欠る		(16.2)	(3.0)		口縁1/7		

番号	種別	図面	遺構	技法・地	形態の特徴	法量 (cm)			残存	備考	
						口径	断面	底径			
61	土師器	壺	SB04東平	ハコ、ヨコナデ、周面絞縁	外縁し器内張り肥厚	口径	3.4	底径	口径1.9		
62	土師器	壺	SB04下	内面ニヒ底形ニハコケズリ、ナデ、外張りタテハ、外底からナデ、ヘラミダケ、ケ目からナデ、ヘラミダケ	肥厚から削削形の体部になり広く外縁し端部肥厚	(13.8)	(25.5)	(5.0)	口径1.8・底部1.7	譲渡	
63	土師器	壺	SB04下	ナデ、外底木炭痕、内面粘土組織	内湾する	(4.7)			体部小片		
64	土師器	壺	SB04アゼ	内面ニヒ底形から板ナデ、外張りタテキからナデ	上げ底で外縁する	(2.9)		(6.0)	底部1.3		
65	土師器	壺	SB04下	内面ナデ、外底ニヒ底形からハケ状工具でナデ、藍染ナデ	平底から内湾する	(3.1)		(3.8)	底部1.25		
66	弥生土器	壺	SB04下	内面ナデ、外張りタテキからヨコナデ、底部ナデ	上げ底から外反する体部	(3.9)		(5.8)	底部3.4	2次焼成	
67	土師器	脚台	SB04西平	ユビ底形からナデのもろミダケ、ヨコナデ	外反し端部欠い	(3.3)		(6.7)	脚底部1.2		
68	土師器	手付土器	SB04	内面ニヒ底形から板状工具のナデ、外底ナデ、底部ナデ	平底で内湾する体部体部 端部僅かに反る	(6.4)		(6.8)	底部1.4・体部3.4		
69	土師器	壺	SB06土器3	内面ハコ目のもろミダケあり、外底ヨコナデ、一部にタテ方向の工具のタテミダケ	外反し端部欠る	(15.4)	(4.2)		口径1.15	土器4	
70	土師器	壺	SB06	外底ヨコナデ、内面ナデ、ヌス付着	外反し端部欠い	(13.2)	(3.8)		口径3.4		
71	土師器	壺	SB06	ヨコナデ、張り付け取付取付文から竹笠文	外縁し端部欠る二重口縁部で厚み付く	(3.3)			口径小片	土器は、良あり	
72	土師器	壺	SB06	ヨコナデ	外反する二重口縁	(2.6)			口径小片	2次焼成 山陰	
73	土師器	壺	SB06東面上面	ヨコナデ、濃いヨコナデによる縦凹縁状	外反する二重口縁	(3.1)			小片	山陰	
74	土師器	壺	SB06	外底ヨコナデ方向の濃いタテキ、ハケ目、内面ヨコナデ向の板ナデ、ハコ、ナデ、凹底	小さな平底からやや喇叭形に近い球部の体部	(44.1)	41.3	6.0	体部7.8・底部1.1	土器8 程度	
75	土師器	壺	SB06	ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外縁する口縁部	(10.8)	(4.8)		口径1.3	狭く通ける (赤家)	
76	土師器	壺	SB06	ヨコナデ、外底ハケ、口縁部凹凸	内縁する体部に外縁する口縁部	(16.4)	(3.6)		口径1.7	土器4	
77	土師器	壺	SB06	外底板状文、内面ナデナデ	外縁し端部欠い	(2.9)			口径小片		
78	土師器	壺	SB06	外張りタテキのハケ、内面ニヒ底形からケズリのハケ、	喇叭形の体部に反底、外反する口縁部で端部欠い	(16.6)	22.4	21.7	2.0	口径1.3・体部7.8・底部1.1	土器1
79	土師器	壺	SB06東面上面	外張りタテキからナデ、内面ナデ、道部ナデ	突出平底から内湾する	(3.1)			底部3.4		
80	土師器	壺	SB06	内面板状工具のナデ?、外張りタテキのちナデ、底部ナデ	突出平底から内湾する	(3.2)		(5.0)	底部1.2	土器6	

番号	種別	部風	部構	技術 他	部風の特徴	流量 (cm)			残存	備考
						日替	部風	部風		
81	土師器	甕	S806	外面タキからナズ、内面ナズ	突出平底から内湾する	(2.1)	(5.0)	底部小片		
82	土師器	甕	S806	内面工具のアタリ痕、朝面から底部ナズ	突出平底から内湾する	(2.6)	(4.3)	底部1/2	土器3	
83	土師器	底部	S806地上灰	ナズ、底部ナズ	平底から外縁する	(1.9)	(5.1)	底部1/4	2次焼成	
84	土師器	鉢	S806	内面ハク?	内湾し底部突る	(32.6)	(5.6)	口縁2/3	土器1 2次焼成	
85	土師器	小型&底巻	S806	ユビ成形、内外赤褐色付着	内湾する体部から外縁する口縁部で底部突る、内底巻をみ	11.7	7.9	11.2	2.6	土器1 2次焼成
86	土師器	鉢	S806	ヨコナズ、外側下部コビオナニ成形、底部ナズ	上げ底から内湾し底部突る	(10.2)	5.0	4.4	底体部突・口縁1/2	土器1 2次焼成
87	土師器	鉢	S806	外面タキからナズのろ敷状工具のナズ痕?、内底ナズ、ヨコナズ、底部ナズ	平底から内湾し底部突る	(10.4)	(5.5)	(3.1)	底部突、口縁1/2	分形底部の下半分、断面
88	土師器	高杯	S806	内面ナズ、外面細いミガキ?、透孔も?否?	外縁する	(7.3)	(10.0)	脚部1/3	土器6	
89	土師器	高杯	S806	ナズ、透孔は?所か?	外反する	(2.2)	2.0		脚柱部1/2突	
90	土師器	高杯	S806地上灰	外面ミガキのろ敷文?、外面ミガキナズ、杯部ミガキ?、底成面透孔4ヶ所	外縁すろ敷文に?りになり杯部は水平から内湾し底部突る	(34.9)	(8.7)		口縁1/6・外側1/3・脚部1/6	
91	土師器	甕	S805	外面ハクのみナズ?、赤面ヨコハクのみナズ、ヨコナズ、底部部底有輪痕付着	外反し底部突る	(31.2)	(5.0)		口縁1/10	
92	土師器	ミユツア	S805	ナズ、内面ミガキ?	小さな平底から内湾	(1.6)			底部突部	
93	土師器	製塩土器	S805	底部ハクからナズ?、ナズ	外反し底部突る	(2.5)			脚柱部突部	
94	土師器	器台	S805	外面ミガキのみナズ?、ナズ、ヨコナズ、裏1ヶ所	底部中央で浅い上台部、内湾する下台で底部突る	(7.2)	(7.3)		(4.0)	脚柱部1/2突
95	土師器	甕	S808	内面ハクのみナズ、外面肩タキからハクのみナズ	底部中央で浅い上台部、内湾する下台で底部突る	(35.8)	(13.2)	(17.2)		脚柱部1/2突
96	土師器	甕	S808	内面ハクナズリ、ヨコナズ、外面タキ、底巻	外縁し底部面を上につまむ	(2.4)	(3.7)			口縁1/2
97	土師器	甕	S808	内面ハクからナズ?、外面ハクからナズ、底巻強いナズ	傾かぬ上げ底から外縁する	(4.8)			(5.0)	底部1/3
98	土師器	甕	S808	内面タテハクナズリ?、外面タテハク目、底部内底成り目状	小さな平底から内湾する	(5.1)			(2.0)	底部突部
99	土師器	甕	S808	内面ミガキのみナズ?、外面タキのみハク?、ヨコナズ	底部の外縁から外縁する口縁部で底部突る	(10.1)	16.8	12.2		口縁1/3・外側1/3・底1/2
100	土師器	高杯	S808	へろミガキ?、底部ナズ	内湾する杯部で底部突る、中央の脚部	(31.0)	(6.0)			口縁1/9

番号	種別	図形	遺構	技法・地	形質の特徴	法長 (cm)			残存	備考
						口径	法高	底径		
101	土師器	甕	SH02北端	ヨコナテ	内縁する体部に近く外縁しの上み上げて二重口縁に	01.7	02.7		口縁J/12	近江の野響
102	土師器	甕	SH02北端	ヨコナテ、外面ス付兼	外縁から外反し縁部ない	02.4	01.8		口縁J/7	
103	土師器	甕	SH11 (SH01・02) 東端	内面ナテ、内ヨコナテ、外面ハテのちナテ、ヨコナテ	内縁する体部から外縁する口縁部で縁部ない	17.9	07.3		口縁Z/5	
104	土師器	甕	SH11	内面ユビ底形からナテ、外面タタキからハテ、底ナテ	平底から内湾する	03.3	03.3	06.0	底部J/3	
105	土師器	高杯	SH11	内面ハテからナテ、ヨコナテ、外面ハテミヨキカ、ハテ	内湾から縁やかに外縁する杯部で増部突る	07.8	06.0		口縁J/10	
106	土師器	甕	SH04	狭いヨコナテ、段になる	外反し突出してから外反し縁部ない	03.8	05.7		口縁若干	
107	土師器	甕	SH05	外面ヨコナテ?、ミヨキ?	内縁する体部から外縁する口縁部で縁部外に上つむ	03.0	06.6		口縁J/10	
108	土師器	鉢台	SH03	外面タタキからヨコナテ、四角片支ナテ	外縁し縁部上につまみ上げる	03.5	02.4		口縁J/10	
109	土師器	甕	SH04	一部ハテ兼あり、ヨコナテ	外反し縁部上につまみ上げる	02.8	07.3		口縁J/4・、縁部S/4	
110	土師器	甕	SH03	内面ハテ、ナテ?、外面ヨコナテ	外反し縁部ない	14.9	07.7		口縁J/2	
111	土師器	甕	SH03東端	外面タタキ方向の縁ナテのちヨコナテ、工具痕、内面ヨコナテ	底さきみの頸部から外縁し二重口縁になる	03.4	6.7		底部は底完存	
112	土師器	甕	SH03	外面ヨコナテ、内面ナテ?	内縁する体部に外縁する口縁部、増部外縁する	03.8	04.9		口縁J/9	
113	土師器	甕	SH03東端	内面ナテ、粘土貼、外面ハテ目りのちナテ、ヨコナテ	内縁する体部から外縁する口縁部で増部厚上げる	05.8	04.0		口縁J/12	
114	土師器	甕	SH03	内面ユビ底形からナテ、ハテ、外面タタキ、ヨコナテ	内湾する体部から外縁する口縁部で増部外縁する	05.2	07.1		口縁J/4	土器2
115	土師器	甕	SH03後半	内面ハテ目りのちナテ、外面ヨコナテ	内縁する体部から外縁する口縁部、増部ない	03.9	03.8		口縁J/6	
116	土師器	甕	SH03	内面ヨコ方向のハテズリ、ハテケズリ、外面平打タタキからタタキハテ、ヨコナテ	縁部の体部に内湾さきみの口縁部で上につまみ上げる	04.3	07.5		口縁・底ほぼ底完形体部J/3	黒炭
117	土師器	甕	SH03	内面ケズリ、外面タタキからハテ、口縁部ハテ、ヨコナテ、窪み兼	穴り底から長筒球部の体部から外縁する口縁部	07.1	26.2	26.6	口縁J/3・、体部J/3	土器5
118	土師器	甕	SH03	内面ケズリからのちナテ、外面平打タタキのちケズリ、底ナテ	平底から内湾する		05.3	7.0	底部完存	黒炭、黒灰、土器3
119	土師器	鉢	SH03	内面ナテ?、外面ハテのちナテ、ヨコナテ、縁部厚	内湾する体部から外縁する口縁部で増部外縁する	09.5	08.5		口縁J/12	土器2
120	土師器	鉢	SH03	内面ナテ、外面ハテのちナテ、ヨコナテ、粘土貼、窪み兼	内湾する体部に外縁する口縁部で増部突る	02.3	4.6	02.0	口縁J/9・、体部J/4弱	土器4

番号	種別	形態	機構	技法 他	形態の特徴	音量 (db)			残存	備考
						日音	器音	器音		
121	土師器	高杯	S303E床面	内面ケズリのみをタキ・ナズ、外面ヨコナズ・ナズ、貼付線画目	内湾し端部外面に欠る	01.9)	(3.6)		口縁わずか、体部1/4	2次修復
122	土師器	部台	S303	内面ケズリのちの子、外面ケズリケズリ、外周ケズリケズリ	内湾し端部上につまみ上げ欠る	00.15)	(3.0)		杯部はほぼ完整	土器4 断面
123	土師器	部台	S303北半	内面ケズリのちの子、外面ケズリのみ子、ヨコナズ、横行書	内湾し端部上につまみ上げ欠る	(00.4)	(2.8)		口縁～杯部3/8	(10)
124	土師器	製瓦土器	S303	内面ケズリ、外面タキ・ユビオサエ、底面ユビオサエ	体部外面タキのみで器部中央にのみなり上げ欠る	(20.8)	(6.7)	4.4	底欠	写真あり
125	赤生土器	壺	S304	ヨコナズ、筒状直基文書、4本の凹線の内縁及び文書	外反し端部内に凹線する	(11.0)	(3.4)		口縁3/8	写真あり
126	赤生土器	壺	S304	ヨコナズ	外反し端部ひょうし内湾する	(17.0)	(3.0)		口縁3/10	写真あり
127	土師器	壺	S304	内面ケズリ、ヨコナズ、端部沈線	内湾する体部から外反し端部内側につまむ	(14.9)	(4.1)		口縁3/8	
128	土師器	壺	S304	外面ケズリ、ヨコナズ	内湾する体部から外側する口縁部で端部止につまむ	(15.0)	(3.7)		口縁3/6	
129	土師器	壺	S304	外面ケズリのみヨコナズ、横行書、内面ハテ	内湾する体部に外側する口縁部で端部上につまむ	(16.6)	(4.7)		口縁3/14	
130	土師器	壺	S304	内面ケズリ、外面タキ、ヨコナズ	内湾する体部から外反し端部欠る	(28.0)	(13.6)	(30.0)	口縁3/4	
131	土師器	鉢	S304	外面ハテ、ヨコナズ	内湾する体部から外反し端部欠る	(19.8)	(5.3)		口縁3/6・体部若干	写真あり
132	土師器	壺	S304	内面ケズリ、外面タキ、ヨコナズ	内湾する体部から外反し端部欠る	(17.5)	(2.3)		口縁3/6	写真あり
133	土師器	壺	S304	外面ケズリのみヨコナズ、内面ケズリ、ヨコナズ	外反する口縁部で端部欠る	(15.0)	(3.0)		口縁3/4	
134	土師器	壺	S304	外面ケズリのみヨコナズ、内面ケズリ、口縁部ヨコナズ	内湾する体部から外反し端部欠る	(14.8)	(13.3)	(22.3)	口縁・体部若干	写真あり 古備
135	土師器	壺	S304	内面ヨコナズ、ケズリ、ヨコナズ、外反ミダテ、ヨコナズ、縁部の縦凹線	肩のゆるい肩部で広く大きく外反する端部から内湾する	16.3	(8.2)	(4.0)	口縁3/4	山陰
136	土師器	壺	S304	内面ケズリ、外面ヨコナズ	内湾する体部から外反し端部欠る	(2.0)			底部1/2	写真あり 黒版
137	土師器	壺	S304	外面タキ・ユビオサエ、ナズ、底面ユビオサエによる凹みあり	トーナツ型から内湾する	(1.8)			底部3/4	写真あり
138	土師器	壺	S304	内面ケズリ、外面タキ、底面縦線、中央部凹み	中央部凹み平底から外側	(4.1)			脚部1/2	写真あり
139	土師器	高杯	S304	ミダテ、ユビオサエ、ハテ、透孔4ヶ所	外反する	(37.0)	(1.75)		口縁3/12	2次修復
140	土師器	部台	S304	ヨコナズ、端部と上面に波状文	水平帯みに外反し端部下に垂下し欠る					

番号	種別	図例	遺構	技法・地	形態の特徴	法線 (mm)				残存	備考
						口径	断面高	底径	壁厚		
141	土師器	不明	S304	ユビ成形、ナデ	水平に並び直立する小	口径	断面高	底径	壁厚		
142	土師器	覆	S001	ナデ、ヨコナデ、粘土細粒表皮	内湾する体部から外縁し肩部外縁する	(15.8)	(3.6)			口径1/5	複合土器小
143	土師器	覆	S006	ヨコナデ、外縁強いヨコナデによる縦切溝?	外縁し直曲して内側に外反し肩部外縁し	(3.2)				小片	片断
144	土師器	蓋	S006	外反ヘラミガキナデ、ヨコナデ	外反し肩部外縁する	(5.0)				小片	片断
145	土師器	覆	S006	ヨコナデ	外反し肩部外縁し	(3.1)				小片	石あり
146	土師器	蓋	S006	ヨコナデからナデ	内湾する	(5.5)	(15.0)			体部1/3	表面磨滅
147	土師器	覆	S006	内面ユビ成形からナデ、外反タキキナデ若干、底部ナデ	平直から外反する	(3.7)		(5.2)		底部1/2	石あり
148	土師器	蓋	S006	内面ナデ、外反タキキナデ、底部木葉風からナデ	ドーナツ形から内湾する	(3.7)		(5.6)		底部1/3	
149	土師器	蓋	S009	外反強いヨコハケ、ナデ	長く外反し肩部外縁し	(13.3)	(5.9)			口縁～肩部は片完部	
150	土師器	蓋	S009	ヨコナデ	外縁し肩部内縁する	(13.8)	(6.3)			口径1/4	表面磨滅
151	土師器	蓋	S009	内面褐色ヨコヘラミガキナデ、ヨコナデ	外反し変化したさらに外反	(23.8)	(5.3)			口径1/9	肩部、有横貫数直
152	土師器	蓋	S009	内面ヨコ方向のヘラミガキナデ、ヨコナデ、ナデ、肩部深溝	外反し肩部外縁し肥厚さみ	(15.6)	(5.3)			口径1/4	
153	土師器	蓋	S009	内面ハナからヨコナデ、外反タキキナデのハナ目的ヨコナデ	外反し肩部外縁し肥厚さみ	(17.65)	(6.95)			口径1/6	
154	土師器	覆	S009	内面ユビ成形からナデ、外反ヘケ、ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部で肩部外縁し	(14.2)	(4.1)			口径1/5	
155	土師器	覆	S009	内面ヘケナデ、ヨコハケ、外反ヘケナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外縁する口縁部で肩部外縁し	(14.3)	(2.8)			口径1/6	
156	土師器	覆	S009	内面縦方向のヘケナデ、一部ヘケ、ヨコナデ	外反し肩部外縁し	(17.8)	(3.6)			口径1/6	
157	土師器	覆	S009	内面ナデ、外反ヨコ平行タキキ、ヨコナデ	内湾さみの口縁部で肩部内側に肥厚、体部も内湾	(17.6)	(4.3)			口径1/4	
158	土師器	覆	S009	内面縦方向のヘケ・縦方向のナデ、外反右が肥厚リタキキ・縦方向のヘケ	肥厚部の体部に外反、外反する口縁部で肩部外縁し	(17.2)	25.0	(23.0)	0.8	口径1/2、体部1/6、底部1/1	2次造成
159	土師器	覆	S009	内面縦方向のナデリのみナデ、外反磨滅状のナデキから成りナデ、木葉風	平直から内湾する					4.85	片断
160	土師器	小型瓦直造	S009	内面ユビ成形からナデ、外反ヘケ?からナデ、ヨコナデ	横かた平直から半環部の体部、口縁部外縁し	(10.0)	(6.7)			体部1/4	

番号	種別	部材	部材	技法・処	部材の特徴	寸法 (cm)			残存	備考
						口径	高さ	質量		
161	土師器	鉢	S009	外口縁部からナゲ・胎土痕あり。器部水置痕からナゲ上縁部?	平底から内湾し器部丸凸	11.3	5.85		口縁1/3、底部1/1	器部へ勾配付加工痕 2次焼成
162	土師器	壺	S011	ヨコナゲ	内湾部から器部内縁部	(15.8)	(3.0)		口縁1/9	2次焼成
163	須恵器	高杯	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	ロクロナゲ・ナゲ	外反する器部で器部内縁		(4.25)		脚部3/4	5トレンチ
164	須恵器	杯身	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	ロクロナゲのち1方方向ナゲ	直線的に置き内径受取型、わずかに水反し器部丸凸	(11.2)	4.1		脚部1/4	
165	土師器	甕C	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	ハケ型部からヨコナゲ	外縁する器部	(14.8)	(6.1)		口縁1/3	
166	土師器	甕C	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	ハケ型部からヨコナゲ	外縁する器部		(6.1)	(6.4)	脚部1/7	5トレンチ
167	土師器	甕C	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	ハケ型部からヨコナゲ	外反する口縁部で肥厚	(17.6)	(8.6)		口縁1/10	
168	土師器	甕C	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	ハケ型部、ナゲ	内湾する	(8.0)			体部小片	5トレンチ
169	土師器	甕D	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	ヨコナゲ、竹管着き四角形文・波状文、エガキ	心や突出	長 (3.05)	厚1.25		体部小片	
170	土師器	小片	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	波状文、ナゲ	外縁する	長(4.7)	幅(2.9)	厚1.0	体部小片	
171	土師器	甕C	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	ヨビ取部からナゲ、ハケ置き	内湾する	(6.1)			体部小片	2トレンチ
172	土師器	甕C	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	外反ハケ、内面ケズリ、ヨコナゲ	内湾する体部から外反する口縁部で器部外に出さず	(16.75)	(14.65)		器部若干、器部6、肩部3/4	2トレンチ
173	土師器	甕C	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	外反ハケのちヨコナゲ、内面ケズリ、ナゲ	内湾する体部から外反する口縁部で器部外に出さず	(13.75)	(17.15)	(23.0)	口縁1/2、器部1/3、口縁1/7	2次焼成
174	土師器	甕D	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	ヨコナゲ	外反する器部から突出して口縁部外反する	(18.5)	(5.9)		口縁1/4	2次焼成 山陰
175	土師器	甕D	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	外反ハケからナゲのちエガキ、ヨコナゲ	成立する器部から水反し器部外反する	(21.4)	(7.9)		口縁1/4	山陰 2トレンチ
176	土師器	甕D	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	内面ケズリ上からナゲ、外反エガキ、強いヨコナゲ	内湾する体部から直交し突出して外反する	15.3	(11.65)		口縁1/2、器部1/5	山陰 2トレンチ
177	土師器	甕D	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	外反ハケのちヨコナゲ、外反ハケのちヨコナゲ、器部	成立する器部から水反し器部外反する	23.6	(6.13)		口縁1/4	
178	土師器	甕D	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	外反エガキからエガキのちナゲ、竹管文付き器部淨文貼付、内面ハケ、ユビナゲ、口縁部ヨコナゲ	内湾する体部から外反し突出して外反し器部外反する	(20.8)	(26.0)	(29.4)	口縁1/6、器部1/2	2トレンチ
179	土師器	甕D	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	外反エガキからエガキ	小さな器部から扁平な器部の外部、外反する口縁部	器(10.1)	(23.3)		器部1/2、底部1/2	器部 2トレンチ
180	土師器	甕	甲河遺 (厚胎砂・シルト)	外反エガキから工具ナゲ、ケズリ	平底から内湾する		(3.2)		底部1/3	(4.0)

番号	種別	器種	技法 他	形態の特徴	法量 (mm)			飛存	備考	
					口径	断面	壁厚			
181	土師器	壺	外底平ズのリミダギキ、底部ナズ、ヘラ記号あり	平底から内湾する	口径	(3.75)	4.5	底面1/1	平底	
182	土師器	底器	断面のため不明	底器形成形で内湾する	口径	(3.9)	3.3	底面1/1	断面	
183	土師器	ミニチュア	外底平ズからナズ、ミダギキ、内面紋目、ユビダ	扁平な底形で外湾する断面	口径	(5.4)	(8.2)	体部1/2	2トレンチ	
184	土師器	鉢	ヨコナズ、ヨコナズ	内湾し断面&あり	口径	(16.0)	(5.3)	口縁、体部は比定形	5トレンチ	
185	土師器	小型丸底器	外底平ズから外底ヘケのちナズ、板ナズ、ヨコナ	内湾する体部から外湾する短い口縁部で断面	口径	(8.8)	(4.8)	口縁1/7	2次断面 2トレンチ	
186	土師器	壺	内面ハケ、ヨコナズ、口縁部に波線状の窪み	外湾し断面上につきまみ上げる	口径	(16.55)	(2.4)	口縁1/4	2トレンチ	
187	土師器	壺	内面ナズリのみナズ、ヘケのみヨコナズ、外底ヨコナズ	内湾する体部から外湾し断面外につきまみ出す	口径	(12.7)	(4.35)	口縁1/7弱		
188	土師器	壺	内面ナズリ、外底ヘケ、ヨコナズ	内湾する体部から外湾し断面外につきまみ出す	口径	(15.7)	(6.0)	口縁1/3	右側 2トレンチ	
189	土師器	壺	ヨコナズ、内面ナズリ、外底ハナ	内湾する体部に短く外反する断面、外底し直	口径	(11.9)	(3.4)	口縁1/8	右側	
190	土師器	壺	ヨコナズ、裏面凹?	外反する断面から突出して外湾する口縁部で	口径	(13.2)	(3.4)	口縁1/9、断面1/4	右側	
191	土師器	壺	ヨコナズ、内面ナズリ、裏面凹&、裏面凹	短く外反する断面から外湾し突出してから直	口径	(15.7)	(3.55)	口縁1/9	右側	
192	土師器	壺	内面平ズ、外底ナズキ、ユビナズからヨコナズ、断面凹線	外湾する体部から外湾する口縁部で断面厚	口径	(13.8)	(5.5)	口縁1/6		
193	土師器	壺	内面ハズリのみナズ、外底工具のアタリ痕、タ	内湾する体部から外反する口縁部で断面上に	口径	(17.0)	(3.55)	口縁1/4強		
194	土師器	壺	外底ナズキからミダギキ、板ナズ、ヨコナズ	肩が張り内湾する体部外反し断面&あり	口径	(15.0)	(7.4)	(18.8)	口縁1/10、体部1/4	肩内の影響 2トレンチ
195	土師器	壺	内面ナズリ、ヘケ、外底ヘケからナズ、外底ヨコナズ	内湾する長形の体部で口縁部外反し断面&あり	口径	(14.1)	(18.8)	(21.2)	口縁1/8、体部1/3	断面 2トレンチ
196	土師器	壺	ヨコナズ	内湾する体部から内湾する口縁部で断面厚	口径	(14.0)	(3.7)	口縁1/4		
197	土師器	壺	外底ナズキからナズ、管文	内湾する	口径	(4.8)		体部小片	5トレンチ	
198	土師器	壺	内面ヘケからナズ、外底ヘケ、断面ナズ	小さな断面から外湾	口径	(4.4)	3.3	底面1/1		
199	土師器	壺	外底ヘケからナズ、内面工具ナズ	平底から内湾する体部	口径	(2.1)	2.4	底面完全	断面	
200	土師器	壺	外底ナズキからナズ、外底ヨコナズ、外底ナズキからナズ	平底から内湾する、断面管乳	口径	(3.3)	2.6	底面完全	2トレンチ	

番号	種別	部風	部構	技芸 他	部風の特徴	音量 (dB)			残存	備考
						日替	部風	部音		
201	土師器	高部	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	内面直線状縁からナズ、外周ケズリからナズ、ハケ	入り部から内湾する	(6.1)	(9.6)	底部ほぼ定形	黒色 5トレンチ	
202	土師器	林	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	内周ケズリからナズ、ヨコナズ、外周タキのちハケ	内湾する体部から外反し突出してから外反する	(27.5)	(8.05)	口縁直平	黒褐色の砂	
203	土師器	林	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	ハケからナズ、ケズリ、ヨコナズ	内湾する体部から外側へ湾部入い	(35.2)	(7.5)	口縁直平	黒褐色の砂	
204	土師器	林	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	内周ケズリ、外周ハケ目、ヨコナズ	内湾する体部で近く外反する部部、直立する	(29.4)	(12.15)	口縁へ体部小片	黒褐色の砂	
205	土師器	林	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	内面ユビ足形からナズ、外周タキのちハケ、ヨコナズ	内湾する体部から外側する	(31.8)	(15.4)	口縁、頸部5/8、体部1/8	黒褐色の砂 黒色	
206	土師器	高杯	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	内面曲状工具、ミガキ、透孔4カ所	外反する部部で湾部外湾する	(6.9)	(13.4)	頸部ほぼ定形		
207	土師器	高杯	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	外周ハケのちミガキ、ヨコナズ、内縁取り目からナズ、ケズリからナズ、透孔3カ所	中央の直立する部部から内湾互みに広がりを部下につまむ	(4.47)	(15.2)	底部直平	阿波色漬	
208	土師器	器台	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	ヨコナズ、腰台部で折れる	内湾してから部部近くで外反し部部入い	(9.9)	(2.85)	杯部1/4	黒褐色の砂	
209	土師器	器台	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	内面ヘラミガキ、外周ハケからミガキ、ヨコナズ	近く内湾し部部近く直立し部部入い	(8.9)	(2.4)	口縁1/4	黒褐色の砂(種・水・石あり)	
210	土師器	器台	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	外周ケズリのちミガキ、ヨコナズ、杯部内縁ハケ目のちナズ、腰り目ナズ	近く外湾する上段で部部内縁に突る、下台は外湾しする、出目透孔4方	(10.0)	8.85	口縁1/7、底部5/8		
211	土師器	器台	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	外周ミガキ、内周ハケのちミガキ、ヨコナズ、杯部内縁取り目からナズ、ケズリのちヨコナズ、透孔3カ所	外側へ湾部つまみ出す上段、長く外反し部部入い	(10.55)	10.95	口縁2/8、底部1/3		
212	土師器	器台	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	内面ナズ、外周ヨコナズ、タキ	外湾する体部は外反する脚台部	(3.5)		脚柱部1/1	5トレンチ	
213	土師器	製塩土器	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	ユビ成形	外反し部部入い	(1.9)	4.7	底部ほぼ定形	5トレンチ	
214	土師器	製塩土器	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	ナズ	外反し部部入い、体部内湾	(2.1)	(4.4)	底部1/3	黒褐色の砂	
215	土師器	製塩土器	甲賀道 (黒縄砂・シルト)	ユビ成形、内周ナズ	外反し部部入い、体部内湾	(2.8)	4.4	底部定形	5トレンチ	
216	土師器	器C	甲賀道 (黒シルト)	内面ヘラケズリ、ハケ、内周ナズヨコナズ	内湾する体部から外側へ湾部外湾する	(3.0)	(8.5)	口縁1/2		
217	土師器	器C	甲賀道 (黒シルト)	内面外縁とユビオキス、ハケ、外周ハケのちハケ、ヨコナズ	内湾する体部から外反し部部突る口縁部	(6.1)	(8.0)	口縁若干、部部1/4	石あり 黒色	
218	土師器	器D	甲賀道 (黒シルト)	強いヨコナズ(タキヤ紋になる)	外反してから湾部を持ち外反する二重口縁で部部入い	(6.4)	(4.9)	口縁1/8	山越 5トレンチ	
219	土師器	器D	甲賀道 (黒シルト)	外周ハケのちヨコナズ、竹管文	外反する部部で縁を持ち直立互みに外反する	(10.6)	(8.8)	口縁1/4	石あり 濃灰	
220	土師器	器F	甲賀道 (黒シルト)	外周ハケ、凹縁、内面ハケのちナズ、ヨコナズ	外反し直立する	(7.3)		頸部1/8	濃灰	

番号	種別	器種	技法	技法 地	形態の特徴	法庫 (cm)			残存	備考
						口径	器高	底径		
221	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	内面ナズリからハケ、ナズ、外面ヨコナズ、竹管 文付自由筋文取付	短く高さする器部から外傾し内湾きみで器部 角部出る	21.0	(8.8)		口縁3口径定形	遺佚
222	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	ヨコナズ、内面ヒオボナエ	外傾から内傾し器部角部出る	(20.6)	(10.3)		口縁3口径	遺佚 2トレンチ
223	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	ハケからナズ、ヨコナズ	内湾する器部に外反する口縁部で器部内傾に 出る	(13.4)	(9.2)		口縁3口径、器部1口 径	2トレンチ
224	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	内面ナズ、外面ナズの上からミダキ、ハケ置き文 取	内湾する	長(17.75)	厚(0.65)		器部小片	
225	土師器	小片	田向深 西壁 (黒シムト)	ナズ、外面タタキのちナズ、遺状文	内湾する		(5.0)		器部若干	
226	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	内面ケズリ、工具痕、粘土層の継ぎ目あり、ヨコ ナズ	内湾する器部に短く外反する口縁部で器部外 出	12.85	(4.9)		口縁3口径	
227	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	内面ヘラケズリ、ヨコナズ	内湾きみの口縁部で器部も外傾し器部内傾 する	(14.1)	(4.9)		口縁3口径	2トレンチ
228	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	内面ナズ、外面タタキのちハケ、ヨコナズ	内湾する器部から外反する口縁部、器部外 出	(11.5)	(3.8)		口縁3口径	
229	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	内面ケズリ、ヨコナズ	外反する口縁部で器部内傾	(17.8)	(4.5)		口縁3口径	3トレンチ
230	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	内面ケズリ、ハケ、外面ヨコナズ、タタキ、断面 皮層状に凹凸	内湾する器部から外反きみの口縁部、器部内 につまむ	(16.0)	(4.7)		口縁3口径	右あり
231	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	内面ヨコナズからハケのちナズ、ハケのちヨコナ ズ	内湾する器部部に外傾する口縁部で器部外傾 する	(14.9)	(3.9)		口縁3口径	
232	土師器	甕 (黒シムト)	田向深 西壁 (黒シムト)	内面タタキ、ヨコナズ、内面ハケ、ケズリ	内湾する器部の器部		(16.5)	(20.0)	器部1口径	
233	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	内面ケズリからハケ、ハケからヨコナズ、外面タ タキからハケ	内湾する器部から外傾し器部内傾	(16.2)	(15.5)	(21.0)	口縁3口径、器部1口 径	5トレンチ
234	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	ナズ、ハケ、ヨコナズ	外反する口縁部で器部外に出る、器部内傾	(18.6)	(6.35)		口縁3口径	
235	土師器	甕	田向深 肩部 (黒シムト)	ヨコナズ、外面ハケ	外反し器部上につまみ上げる	(25.0)	(2.1)		口縁若干	
236	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	内面ケズリ	内湾する器部から外反する口縁部、器部外傾 する	(18.4)	(11.25)		口縁3口径、器部1口 径	
237	土師器	甕	田向深 西壁 (黒シムト)	ヨコナズ、肩田部?	外傾して内傾し器部内傾	(12.2)	(2.3)		口縁3口径	右傾
238	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	ヨコナズ、肩田部	外反する器部外傾し器部外傾し短く外反する口 縁部	(15.8)	(3.4)		口縁3口径	右傾 3トレンチ
239	土師器	甕	田向深 (黒シムト)	内面ケズリからナズ、ハケ、ヨコナズ、器部ナズ 部部内傾	小さな外底から内湾し短く外傾する口縁部で 器部内傾	(13.25)	13.05	14.25	口縁3口径、器部1口 径、器部7口 径	5トレンチ
240	土師器	小形丸底甕	田向深 (黒シムト)	外面ヨコナズ、ハケ、ケズリ	丸底で内湾する、口縁部外傾		(7.5)	9.0	器部～器部1口 径	遺佚

番号	種別	部風	部風	技芸 他	部風の特徴	音量 (dB)				残存	備考
						口徑	部風	風量	風速		
241	土師器	小型瓦葺成器	印河漕 (黒シルト)	外周面に直線彫からナズ、ハケ、クズリ、外部ハケからナズ、ヨコナズ	周面に内湾する体部で外湾する口縁部、端部	0.4	(7.2)	(10.4)		口縁1/8、体部1/4	
242	土師器	壺	印河漕 (黒シルト)	内面ナズリ、外周タキのちナズリ、底部葉脚風	突出平底から外縁する		(3.7)	(5.0)		底部1/2	
243	土師器	壺	印河漕 (黒シルト)	外周タキからハケ、内面ナズリ	尖底で内湾する		(8.5)			底部完形	
244	土師器	高杯	印河漕 (黒シルト)	内面ナズリ、ハケ	平底から内湾する		(8.7)	6.0		体部若干、底部は完形	黒炭
245	土師器	鉢	印河漕 (黒シルト)	ヨコナズ、口縁部・外周ミガキ	肩のゆる内湾する体部から外反し突出して外縁する	(35.2)	(12.4)			口縁1/7	5トレンチ
246	土師器	高杯	印河漕 (黒シルト)	内面ハケミガキ、縁リ目	水平に広がる外反する体部で端部尖る、肩部成立	(14.4)	(6.45)			杯部1/2	化粧土施色
247	土師器	高杯	印河漕 (黒シルト)	杯部内面ナズリ	胴部中央で、水平に開き外反する杯部で端部尖る、外縁ハケ、杯部内面ナズリ	(17.3)	11.6	(11.1)		杯部1/2部、脚柱部1/1	
248	土師器	高杯	印河漕 (黒シルト)	外周ユビ成器からナズ、ヨコナズ、杯部内面ナズリ	水平から外縁し端部近くで外反する杯部、肩部外縁	(18.6)	(11.3)			杯部1/2、脚柱部1/1	
249	土師器	高杯A	印河漕 (黒シルト)	外周ミガキ、ナズ、ヨコナズ、杯部内面ミガキ、方溝孔	胴部中央で、外縁する杯部で端部厚み		(9.2)			脚柱部1/1、脚柱部1/9	5トレンチ
250	土師器	高杯C	印河漕 (黒シルト)	ヨコナズ、外周ナズ、縁ナズ	内湾する		(2.4)			底部小片	5トレンチ
251	土師器	高杯A	印河漕 (黒シルト)	外周ミガキ、内面ナズ、ヨコナズ、透孔4ヶ所	内湾し帯化して外反する杯部、短く中央の箇所から外縁する	(13.0)	(18.0)			口縁1/2、脚柱部完形	2トレンチ
252	土師器	器台	印河漕 (黒シルト)	ヨコナズ、杯部内面工場のアタリ痕	浅く内湾し端部厚する上付、外縁し端部外面につまみ出す	(10.3)	8.6	(10.9)		口縁3/4、底部1/3	
253	土師器	器台	印河漕 (黒シルト)	外周ミガキ、ヨコナズナズ、透孔4ヶ所	外反する下付で端部外面につまみ出す、内縁		(6.0)	(9.2)		底部1/3	
254	土師器	器台	印河漕 (黒シルト)	ヨコナズ、外部ハケ一部ミガキあり	外縁し端部内面に折る	(6.4)		(10.85)		脚部1/3	
255	土師器	器台	印河漕 (黒シルト)	ヨコナズ、ハケ、円縁葉脚	脚部外反し端部尖い、体部外縁	(2.9)		(7.9)		脚柱部1/1、脚柱部1/9	5トレンチ
256	土師器	製塩土器	印河漕 (黒シルト)	外周タキ、ナズ	内湾する体部、脚部外縁小		(2.9)			鉢部1/1	
257	土師器	製塩土器	印河漕 (黒シルト)	ユビ成器、ナズ	外反し端部尖い	(2.6)		(5.0)		底部は完形	石あり
258	土師器	製塩土器	印河漕 (黒シルト)	ユビ成器、ナズ	内湾し端部尖い	(1.5)		(4.6)		底部1/2	
259	土師器	製塩土器	印河漕 (黒シルト)	ユビ成器、ナズ	外反し端部尖い、体部内湾	(2.8)		4.6		底部は完形	石あり
260	土師器	製塩土器	印河漕 (黒シルト)	ユビ成器、ナズ	外反し端部尖い、体部内湾	(2.1)		4.8		底部完形	

番号	種別	器機	技法	技法	形態の特徴	法量 (mm)			飛存	備考
						口径	断面高	飛程		
261	土師器	製風工器	田河道 (不明)	ユビ成形、ナブ	外反し彫部入い、体部内湾	13.8	4.6	底部完形	右あり	
262	須恵器	杯蓋	田河道 (不明)	外面彫部へケズリ、外面方向の仕上げナブ、口クロコナブ	平たい尻部から内湾し彫部外側にのみみ出	4.75	4.6	ほぼ完形	自然焼 5トレンチ	
263	須恵器	杯身	田河道 (不明)	口クロコナブ、彫部へケズリのみナブ、蓋部外面へケ記号あり	不安定平底から外側する体部で彫部入い	3.6	(9.0)	約1/3	蓋 5トレンチ	
264	土師器	蓋	田河道 (不明)	外面ミダキ、ヨコナブ	外反する彫部で突出してから外反し彫部入い	(15.8)	(4.6)	口縁1/4	2トレンチ	
265	土師器	蓋	田河道 (不明)	ヨコナブ	成立する彫部から水平に圓形突出して外反す	22.25	(7.7)	口縁1/1	2トレンチ	
266	土師器	蓋	田河道 (不明)	内面ナブ、ケズリ、外面ハケ、タラハハからヨコナブ	体部主要部の縁部で、外側する口縁部で彫部	15.2	(24.5)	口縁3/5完形、体部1/3	5トレンチ	
267	土師器	饗	田河道 (不明)	内面彫ハケ、ケズリ、外面タタキからハケ、ヨコナブ	内湾する体部に外側する口縁部で彫部記号	(18.0)	(16.5)	口縁～体部1/3	5トレンチ	
268	土師器	饗	田河道 (不明)	内面ヨビオヤサユからヨコナブ、外側ハケ	内湾する体部から外側し彫部外につまむ	(14.7)	(9.3)	口縁～唇部1/3	5トレンチ	
269	土師器	饗	田河道 (不明)	内面ナブ、ケズリ、外面ハケからナブ、ヨコナブ	内湾する体部に外側する口縁部で彫部入い	(14.2)	(7.5)	口縁1/4	5トレンチ	
270	土師器	饗	田河道 (不明)	ヨコナブ、外側ハケ	外側し彫部外につまみ出す	(13.6)	(3.8)	口縁1/4	5トレンチ	
271	土師器	饗	田河道 (不明)	内面ケズリ、ハケ、外面ヨコナブ、粘土紐風	外側する口縁部で彫部内側に彫部	(14.6)	(3.2)	口縁1/2弱	5トレンチ	
272	赤土器	無彫造	田河道 (不明)	ヨコナブ、ナブ、丸、凹線	内湾する	(4.7)		体部小片		
273	赤土器	蓋	田河道 再製 (不明)	ヨコナブ、ハケ目、外面にへケノ風	厚0.7	幅(6.35)		体部小片	2トレンチ	
274	土師器	小型丸底造	田河道 (不明)	内面ヨコナブ、右斜方向の周文、外面ミダキ、ケズリ	外側する体部から内湾みに及び口縁部で彫部	(10.9)	(4.3)	口縁1/4	5トレンチ	
275	土師器	鉢	田河道 (不明)	内面ケズリ、ハケ、ヨコナブ	内湾する体部から口縁部外縁	(45.7)	(12.65)	口縁1/5、体部若干	2トレンチ	
276	土師器	蓋	田河道 (不明)	外面タタキの上からハケ、ナブ	小さな円盤から内湾する		8.8	底部1/1	5トレンチ	
277	土師器	製風工器	田河道 粘土 (不明)	内面彫ハケ、ヨビオヤサユ、外面工具によるナブ	内湾する体部に外側する唇台	(3.3)	3.2	体部1/2	2.5トレンチ	
278	土師器	台付鉢	田河道 (不明)	ミダキ、ヨコナブ、彫部内面ヨビ成部から工具	内湾する体部で外反する唇台が付く、彫部	(9.0)		杯部1/1、脚部1/4	2トレンチ	
279	土師器	製風工器	田河道 (不明)	内面ハケ状工具のアタリ痕、直部ハケ	内湾する体部に短く外側する唇台で成る	(2.6)	3.8	底部完形	2.5トレンチ 粘土	
280	土師器	製風工器	田河道 (不明)	ユビ成形からナブ	内湾する体部に外側する唇台で彫部入い	(2.5)	(3.5)	底部2/3	2.5トレンチ 粘土	

番号	種別	師範	原稿	書体	技法 他	習熟の特徴	度量 (cm)				残存	備考
							口徑	器高	器径	器体		
281	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	外底平直タテリ、ハケからミダキ、内面ハケミダキ、ヨコナツ	外反し端部外反	口徑13	14.4	6.7		口徑13		
282	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	外底平直タテリ、ハケからミダキ、ヨコナツ	内湾する体部で中央区りぎりに外反し端部外反	口徑19、体部12	13.7	8.4		口徑19、体部12	写真あり、北平	
283	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	ハケ、ヨコナツ	内湾する体部から口縁部外反	口縁径13	11.2	7.9		口縁径13		
284	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	ヨコナツ、内面ハケ	内湾する体部から口縁部外反	口縁径19	13.0	6.5		口縁径19		
285	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	ハケのみナツ、ハケ	内湾する体部から口縁部外反	口縁径14	14.8	8.4		口縁径14		
286	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	ヨコナツ、内面タテリ	内湾する体部に外反し外に引く	口縁径19	15.2	8.0		口縁径19		
287	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	ハケのみヨコナツ、外底ハケ、刺ひ目	外反する口縁部で端部内湾する	口縁径18	14.6	8.3		口縁径18	右、木、説、概、遺あり	
288	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	強いヨコナツ	外反する口縁部で端部内湾する	口縁径14	14.0	15.7		口縁径14		
289	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	ヨコナツ、内面ハケからナツ、ケズリ	内湾する体部から外反し端部外反	口縁径14	15.8	7.3		口縁径14		
290	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	内面ハケからナツ、ヨコナツ、刺ひ目	外反する口縁部で端部近くで反り丸い	口縁径14	16.0	15.8		口縁径14		
291	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	ヨコナツ、ユビ底形の凹凸状	外反する口縁部で端部近くで反り丸い	口縁径14	18.4	6.4		口縁径14		
292	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	外底タテキのみヨコナツ、タテキ、ヨコナツ	内湾する体部で口縁部外反し端部外側に肥厚する	口縁径15、頸部14、肩部13	13.9	9.35		口縁径15、頸部14、肩部13		
293	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	ヨコナツ、外底ハケからヨコナツ、ヨコナツに上る細頸	外反する口縁部で端部内外に肥厚する	口縁径13	17.8	15.4		口縁径13		
294	赤生土器	意A	印付遺 (朝沢砂)	内面ハケ目、ケズリ、ヨコナツ	内湾する体部から外反し端部肥厚	口縁径19	21.3	8.9		口縁径19		
295	土師器	意A	印付遺 (朝沢砂)	ヨコナツ、ハケ縁き輪状文、内面ミダキナツ	外反し端部肥厚する	口縁径18	14.4	15.1		口縁径18		
296	土師器	意C	印付遺 (朝沢砂)	内面ハケ、工のミダキ、ケズリ、外底細ハケから細ハケ、ヨコナツ	内湾する体部から外反する口縁部で端部肥厚する	口縁径19、体部19	15.0	15.2	18.0	口縁径19、体部19	木、種あり	
297	赤生土器	意C	印付遺 (朝沢砂)	外底細ハケからナツ、細頸(条)	外反する口縁部で端部肥厚	口縁径18	27.4	13.7		口縁径18		
298	赤生土器	意B	印付遺 (朝沢砂)	外底ハケからミダキ、内面ミダキ	内湾する体部から大きく外反する口縁部で端部外側に肥厚し、外反し端部外側に肥厚する	口縁径19	19.6	11.0		口縁径19、体部肥厚	表面近く	
299	土師器	意B	印付遺 (朝沢砂)	外底ハケからナツ、外底ハケ、ナツ、粘土、ヨコナツ、頸部に刺ひ目の改善	内湾する体部から反り立ちする頸部、外反し端部肥厚する	口縁径19、頸部19	18.95	15.2		口縁径19、頸部19		
300	赤生土器	意B	印付遺 (朝沢砂)	ヨコナツ、ナツ、粘土縁き目	直立する頸部から外反し端部肥厚する	口縁径14	18.0	15.8		口縁径14		

番号	種別	器種	技法	技法	形態の特徴	法線 (mm)			残存	備考
						口径	断面	底径		
301	土師器	甕B	甲州産 (朝沢産)	ヨコナテ、ナテ、外部へうねり化粧2線、粘土斑付	外反し脚部肥厚	20.0	7.1	口径1/3		
302	土師器	甕B	甲州産 (朝沢産)	外部へうねりナテ、外部へうねりから粘土斑のちへうねり、断面ヨコナテ部分的に脚部肥厚になる	直立する脚部から外反し脚部肥厚する、踵面、脚部肥厚	21.1	7.5	口縁完形		
303	土師器	甕B	甲州産 (朝沢産)	ヨコナテ、外部へうねり	直立する脚部から外反し脚部肥厚する、踵面、底面少し	23.2	7.7	口縁1/3	脚底	
304	土師器	甕B	甲州産 (朝沢産)	外部へうねりナテ、ハテ、ヨコナテ	外反してから外反し脚部肥厚	23.8	7.43	口縁1/6		
305	土師器	甕B	甲州産 (朝沢産)	内部ケズリの子ナテ・ユビエトあり、外部へうねり、ヨコナテ	球形の体部から外反し脚部肥厚	21.8	24.7	口縁1/3、脚部完形、体部1/6		
306	土師器	甕D	甲州産 (朝沢産)	内部ナテ・ユビエトナテ、外部脚状文、ナテ、ミガキ、ヨコナテ	内湾する体部から外反し脚部内側上分につまみ上げる	12.0	6.7	口縁1/3		
307	土師器	甕C	甲州産 (朝沢産)	内部工貝痕あり	外反し脚部内側につまむ	10.6	3.7	口縁1/2		
308	土師器	甕C	甲州産 (朝沢産)	外部へうねりヨコナテ、タタキから脚へうねり、内部へうねりナテ	内湾する体部から外反し脚部肥厚する	11.0	14.7	口縁2/3、体部1/4		
309	土師器	甕B	甲州産 (朝沢産)	へうねりナテ、ヨコナテ	外反し脚部下面に肥厚する	11.5	6.0	底面1/6		
310	土師器	甕D	甲州産 (朝沢産)	外部ヨコナテからへうねりナテ、内部へうねりナテ、ユビエト部、彫み目	内湾する体部から直立する脚部に突部が付く	3.3	0.0	脚部完形		
311	土師器	甕D	甲州産 (朝沢産)	外部ヨビエト部から脚部文・波状文・波状文、内側ミガキ、粘土斑の脚文あり	傾く外反する直立する脚部から水平に傾く体部	4.0	11.8	脚部1/4	西側近く 脚底	
312	土師器	甕D	甲州産 (朝沢産)	外部へうねりナテ・ユビエトナテ、外部へうねりヨコナテ、波状文、内側彫み目に竹管痕付	内湾する体部から外反する脚部	11.3		脚部2/4、脚部1/8	310と同一個体?	
313	土師器	甕	甲州産 (朝沢産)	内部ユビエト部、ナテ	平直から内湾する	6.7	6.6	底面1/2	2次風成	
314	土師器	甕	甲州産 (朝沢産)	外部タタキからへうねりナテ、内部へうねりナテ、へうねりナテからハテ、タタキ、内側ハテ、底面ヨコナテ	突出平直から内湾する	5.3		7.1	底面完形	写真あり 北半
315	土師器	甕	甲州産 (朝沢産)	内部ユビエト部からハテナテ、へうねりナテ、底面ユビエト	突出平直から内湾する下腹の体部	17.5	26.0	4.4	底面ほぼ完形、体部1/2	
316	土師器	甕	甲州産 (朝沢産)	外部タタキからへうねりナテ、内部へうねりナテ、へうねりナテからハテナテ、底面ユビエト	突出平直から内湾する下腹の体部	12.0		6.5	底面1/5	312と同一個体?
317	土師器	甕D	甲州産 (朝沢産)	外部ヨコナテの子ナテ、ケズリの子ナテ、内部へうねりナテ、ハテからヨコナテの子ナテ	球形の体部から外湾する脚部になり内湾する下腹の体部	11.9	12.2		脚部～底面完形	
318	土師器	甕D	甲州産 (朝沢産)	外部ケズリの子ナテ、ハテ目の子ナテ、ヨコナテの子ナテ、内部ナテ、ハテのちへうねり、波状文	下腹の体部から直立する脚部、口縁部外反し脚部から肥厚	14.6	12.4	12.05	口縁2/4、体部～底面ほぼ完形	体部に小穴、脚底
319	土師器	甕D	甲州産 (朝沢産)	ヨコナテ	外反し突出して外反する口縁部で脚部反つて入い	14.0	6.9		口縁1/4	山積
320	土師器	甕D	甲州産 (朝沢産)	ヨコナテからへうねりナテの子ナテ、竹管文	直立する脚部から水平に傾き突出して外湾する、脚部欠る	10.9	6.4		口縁1/4	

番号	種別	時期	遺構	技法・地	形態の特徴	位置 (cm)			残存	備考
						口径	高さ	壁厚		
321	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	ハケのちへラミガキ、ヨコナダ	外反ししてから内側を持ち外縁する二重口縁で縁部太い	(18.1)	(5.4)		口縁1/9	
322	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	内面ヘラミガキ、ヨコナダ、縦状文	外反し突出してから外反する。肩部内側に突く	(19.0)	(4.8)		口縁わずか	
323	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	ヨコナダ、ケズリ	大きく外反し突出してから外反する口縁部。上部太い	(19.8)	(16.0)		口縁1/9、肩部1/2	山形
324	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	ヨコナダ、口縁部ヨコナダによる浅い引線、外面ヘラミガキ、少許光面直文	外反し突出してから外反する口縁部で縁部太い	(22.0)	(5.3)		口縁1/9	
325	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	ヨコナダ、外面ハケからヨコナダ・ナダ	外反し突出してから外反する口縁部で縁部太い	(22.6)	(8.3)		口縁1/4	
326	赤生土器	ⅡF	甲冑通 (研灰砂)	内面ヘラミガキのみナダ、外面ヨコナダ、ハケ目、縦上織	外反し突出してから外縁する口縁部で縁部太い	23.0	(8.7)		口縁1/2、肩部1/1	
327	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	外面ハケのみミガキ、ヨコナダのみミガキ、内面ヨコナダ	肩の部分縁部で広く直立する肩部から水平に伸び外反する	(19.2)	(17.0)	(24.7)	口縁1/2、体部1/6	
328	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	内面ユビ成形からハケのみミガキ、外面ユビ成形からナダのみヨコナダ	内縁する体部、肩部狭く外反し変化した外溝	(16.8)	(6.2)		口縁～肩部完形	
329	土師器	ⅡF	甲冑通 (研灰砂)	内面ナダ、ケズリ、外面ハケのちヨコナダ、ハケ	内縁する体部、肩部狭く外反し変化した外溝	(18.3)	(7.8)		口縁1/4	
330	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	内面ヘラミガキのみナダ、外面タタキからヘラミガキ、ヨコナダ、縁部文のへラミガキ	外縁する肩部から幅広く水平に置き直立する口縁部	(16.6)	(6.6)		口縁1/3	
331	土師器	ⅡF	甲冑通 (研灰砂)	口縁部ハケ、ナダ	外縁する肩部から水平となり直立する口縁部	18.5	(9.0)		口縁1/2、肩部ほぼ完形	2枚彫成
332	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	ハケ、ヨコナダ、外面ユビ成形	直立する肩部から水平に置き内縁する。肩部太く広がる	(20.6)	(7.8)		口縁1/4	東四国
333	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	ヨコナダ、内面ヘラミガキ、外面ハケ目	内溝し大きく外反する肩部で突出してから内縁する	17.45	(16.4)		口縁1/1	東四国
334	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	外面面ハケのみナダ、直部木敷	傾かな上げ底から外縁する	(3.2)		(7.4)	底部完形	
335	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	内面板ナダ、外面ケズリからヘラミガキ、直部ナダ・木葉風	平底から外縁する	(2.1)		4.0	底部完形	木、種あり
336	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	内面板ナダのみナダ、外面ヘラミガキ、ユビ成形の印に成る	トーナツ底から外縁する	(8.2)		5.7	底部1/1	
337	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	外面ヘラミガキ、縦状文、直部ナダ	上げ底から肩の強まる直部の体部	(径¹15.0)	(18.0)	(16.0)	体部1/3	
338	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	ナダ、ヘラミガキ	外反する	(1.8)			体部小片	
339	土師器	ⅡB	甲冑通 S801 (研灰砂)	内面ナダ、外面ミガキ、矢印の刺状文	内溝する	(4.2)			体部若干	右、木、炭、種、葉あり
340	土師器	ⅡB	甲冑通 (研灰砂)	外面ヨコナダからヘラミガキ、内面ヘラミガキ	外縁してから外反する	(3.3)			口縁近く小片	

番号	種別	図例	遺構	技法・地	形態の特徴	法庫 (mm)			備考		
						口径	断面	底径			
341	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	外正面線文から波状文のちタテキ、内面ハケケズリ	内湾する	(4.3)		底径	残存	体部小片	
342	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	外正面線文から波状文、内面ケズリ	内湾する	(3.7)					体部小片
343	土師器	壺	印付遺構 調査区中央 (複製物)	ヨコナテ、波状文、竹管文付き円形浮文貼付	内湾するかで肩部近くで区り間取ない	(4.2)					口縁小片
344	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	内面ユビ足形からナテ、直線文、波状文	内湾する	(5.0)					体部線片
345	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	ハケ、波状文	内湾する	(5.7)					体部小片
346	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	内面ハケからナテ、外周タシ形刺点文からナテ	内湾する	(5.2)					体部小片
347	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	ユビ足形からナテとヘラケケズリ、外正面線文から直線文のち波状文、刺点形の刺き目あり	内湾する	(3.6)					体部小片
348	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	内面ハケからナテ、外周ナテからヘラ線キ文	内湾する	(2.7)					口縁近く小片
349	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	外周ハケから竹管文、内面ナテ、ヨコナテ	内湾する	(4.2)					口縁小片
350	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	外周タシ形刺点文からハケのち竹管文、内面ユビ足形のちナテからハケ	内湾する	(3.6)					体部小片
351	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	内面ナテからヘラ線キ、ハケ	外反する	(3.1)					体部小片
352	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	外周ハケからヘラ線キ、内面ナテ、ヨコナテ	外反し肩部肥厚	(3.3)					口縁部小片
353	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	ハケ、ヨコナテ、凹線2条	内湾する体部、外湾する口縁部で肩部内外に肥厚する	(3.5)					口縁小片
354	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	内面ナテ、外周ハケ、ヨコナテミガキ、刺点文	内湾する体部で外湾する肩部	(4.7)					肩部小片
355	土師器	髷台	印付遺構 (複製物)	ヨコナテ、竹管文	水平に置き外反するか	(1.4)					口縁1/5
356	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	内面ナテ、ユビ足文、外周ハケ目、竹管文	内湾する						体部線片
357	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	内面ハケからナテ、ケズリ、外周ハケからヨコナテ、凹線2条	外反し突出してから外反する口縁部、肩部欠	(17.9)	(8.2)				口縁付小片、肩部1/3
358	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	頸縁のみ不明	内湾する体部、外反する二重口縁で線縁有する	(6.2)					肩部完部
359	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	外周ハケからヨコナテ、内面ヨコナテ	外反してから内湾する	受け口 (19.8)	(4.6)				受け口1/2
360	土師器	壺	印付遺構 (複製物)	内面ヨコナテ、ユビ足文、外周ヨコナテ、工具あたる痕、ヘラ先形点文、波状文、直線文	外反する肩部で肩部外側付く、突出してから外湾する口縁部で肩部外側付く	(21.6)	(12.4)				口縁～肩部は反変部

番号	種別	部局	部員	技術 他	作業の特徴	所要 (人)			残存	備考
						日数	要員数	高価		
361	土師器	部庁	田村道 (朝沢)	内面全周のヨコナギ、ナゲ、外面ヘタ目のみ ヨコナギ、竹文、筋目	底文字部から外縁し突帯をつけて内反す 。端部彫る	32.1	(12.6)	口縁1/3	口縁1/6、肩部1/2	口縁、有縁買電在
362	土師器	部庁	田村道 (朝沢)	内面ヨコナギからヘタ、ヨコナギ、外面筋目のヨ コナギ、ナゲ目、ヘタミ目	外縁する体部から外縁し突出してから内縁し 。端部外に向える	25.0	(25.3)	口縁1/6	口縁1/6、肩部1/2	口縁、有縁買電在
363	土師器	部庁	田村道 (朝沢)	内面ヨコナギからナゲ、外面ヨコナギ	外縁してから突出し内縁する	27.0	(8.8)	口縁1/6	口縁1/6	口縁、有縁買電在
364	土師器	部庁	田村道 (朝沢)	内面ヨコナギからヨコナギ、外面ヘタからナゲ、 ヨコナギ	外縁し内い境から内縁すみに及び端部内側に つまむ	23.6	(11.7)	口縁1/8	口縁1/8	口縁、有縁買電在
365	土師器	部庁	田村道 (朝沢)	ヨコナギからミガキ、ヨコナギ	外反し縁を持って外縁すみに及び端部外縁す る	21.5	(6.8)	口縁1/7	口縁1/8	口縁、有縁買電在
366	土師器	部庁	田村道 (朝沢)	ヘタからナゲ、ヨコナギ	外縁してから縁帯を持って内縁する	19.3	(4.6)	口縁1/3	口縁1/8	口縁、有縁買電在
367	土師器	部庁	田村道 (朝沢)	外面ヨコナギ、ナゲ目、内面ヘタミガキ	外縁し突出してから内縁する口縁部、端部外 につまみ出す	23.9	(9.0)	口縁1/3	口縁1/3	口縁、有縁買電在
368	土師器	兼	田村道 (朝沢)	内面タキからナゲのみヘタミガキ、外面ヘタ ケ、ナゲ	内湾する	16.1	(8.4)	(26.0)	肩部1/2、底部1/1	
369	土師器	兼	田村道 (朝沢)	内面筋子ナゲ、外面タキからヘタのみナゲ、筋 部タキナゲ	平底から内湾する		(9.0)	4.2	底部完部、肩部1/4	字買あり 肩平
370	土師器	兼	田村道 (朝沢)	内面筋いハケ、筋部ヘタミガキ、ヨコナギ、筋部 ヨコナギ	不安定な平底から外縁する体部		(5.6)	(6.0)	底部完部	底部内成形
371	土師器	底部	田村道 (朝沢)	内面ヘタ目、外面タキ、底部筋部	上げ底から外縁する		(4.3)	6.3	底部1/1	
372	土師器	兼	田村道 5801 (朝沢)	内面ナゲ、外面タキ、底部筋部	平底から外反する		(2.4)	5.9	底部完部	右、木、炭、靫、葉つ ばあり
373	土師器	兼	田村道 (朝沢)	内面靴状工具痕、外面タキ、ヨコナギ、筋部タ キ筋部からナゲ	平底から内湾する		(2.9)	4.7	底部1/1	
374	土師器	底部	田村道 (朝沢)	内面筋いハケから筋部ヘタ上縁の筋部、外面 タキからナゲ、筋部タキからナゲ	上げ底から外縁する		(3.4)	(4.0)	底部完部	筋部
375	土師器	底部	田村道 (朝沢)	内面ヘタ、外面タキからナゲ、筋部タキ	平底から内湾する		(3.6)	5.2	底部完部	底部内成形
376	土師器	底部	田村道 5801 (朝沢)	ヘタ、底部筋部	平底から外縁する		(2.4)	6.2	底部完部	筋部?
377	土師器	兼	田村道 5801 (朝沢)	内面靴子・ヨコナギ、外面タキ、筋部タ キ	小さな平底から内湾する		(2.8)	(3.0)	底部1/3	右、木、炭、靫、葉つ ばあり
378	土師器	兼	田村道 (朝沢)	内面筋部ナゲ、ヨコナギ、外面タキ、筋部タ キ	突出平底から内湾する		(4.6)	(4.9)	底部1/2完部	
379	土師器	兼	田村道 (朝沢)	内面ヘタナゲ、外面ヘタ、筋部ヘタナゲ	平底から内湾する		(3.0)	2.95	底部1/1	筋部の影響
380	土師器	底部	田村道 (朝沢)	外面ヘタからナゲ、内面ヘタ、筋部ナゲ	上げ底から内湾する		(2.9)	(3.2)	底部1/2	ヘウ記あり?

番号	種別	図様	図様	技法	技法	形態の特徴	寸法 (mm)			残存	備考	
							口径	断面	壁厚			
381	土師器	底部	印付遺 (複製品)	内面ハケ工具のアタリ痕、ナズ、底部ナズから木蓋痕	平底から内湾する		口径	断面	壁厚	底部は定形形		
382	土師器	腰	印付遺 (3801) (複製品)	内面板ナズ、外底タタキ、タタキ底	不安定な平底から内湾する		(2.8)	(3.0)	(2.8)	底部は定形形		
383	土師器	底部	印付遺 (複製品)	内面コトケズリ、ハケ、外底タタキからハケ・ナズ、底面タタキ	丸底から内湾する		(2.5)	(2.5)	(4.0)	底部は定形形	黒底	
384	土師器	蓋	印付遺 (複製品)	内面工具アタリ痕、外底ナズ	丸底で内湾する		(8.1)	(8.1)	(6.7)	底部は定形形	黒底	
385	土師器	底部	印付遺 (複製品)	内面板工具アタリ痕、底部平すくね成形ナズ	内湾する体部で外縁すくね付く、底部内湾する		(5.9)	(2.3)	(4.0)	底部定形		
386	土師器	底部	印付遺 (複製品)	内面ハケからナズ、外底タタキからナズ、ユビ底	内湾する体部で外縁すくね付く、底部内湾する		(2.3)	(2.3)	(5.0)	底部1/2		
387	土師器	腰A	印付遺 (複製品)	内面ヘラケズリ、ヨコナズ	内湾する体部から外縁上端部上につまみ出す		(25.6)	(4.1)		口縁1/13		
388	土師器	腰A	印付遺 (複製品)	内面ヘラケズリ、ヨコナズ	内湾する体部から外縁上端部上に入きみつまみ出す		(26.0)	(5.0)		口縁1/12		
389	土師器	唇付	印付遺 (複製品)	外底ヘラケズリ、内面腰ハケ、ヨコナズ	外縁上端部全体に腰ら小厚くなる、丸い		(20.1)	(3.7)		口縁1/7		
390	土師器	腰J	印付遺 (複製品)	内面コトケズリからハケのみナズ、外底ハケ、ヨコナズ、底部浅い円筒状	内湾する体部に長く外反する口縁部で端部上につまむ		(16.6)	(8.4)		口縁1/4	腰付蓋、濃緑	
391	赤土器	腰	印付遺 (複製品)	ヨコナズ、ナズ	内湾する体部に長く外反する口縁部で端部上につまむ		(22.9)	(5.1)		口縁1/4		
392	土師器	腰A	印付遺 (複製品)	内面板ナズ、ヨコナズ	外反する口縁部で端部内湾		(13.5)	(5.0)		口縁1/5		
393	土師器	腰A	印付遺 (複製品)	外底板エダキ、ヨコナズ、粘土埴	外反する口縁部で端部内湾		(11.8)	(4.1)		口縁1/9		
394	土師器	腰C	印付遺 (複製品)	内面ナズ、外底タタキ、ヨコナズ	内湾する体部から外縁すくね付く		(14.8)	(4.5)		口縁1/4	腰付蓋	
395	土師器	腰C	印付遺 (複製品)	内面ハケ目、ヘラケズリ、外底腰ハケからナズ、ヨコナズ	内湾する体部から外縁すくね付く		(16.6)	(3.55)		口縁1/3		
396	土師器	腰A	印付遺 (複製品)	内面ナズ、ケズリ、外底腰ハケからナズ、ヨコナズ	球形の体部から外縁すくね付く		(10.6)	(8.7)	(13.4)		口縁わずか、底部1/2	
397	土師器	腰A	印付遺 (複製品)	内面ヘラケズリ、ハケからナズ、ヨコナズ	内湾する体部から外縁すくね付く		(12.8)	(5.5)		口縁1/4		
398	土師器	腰J	印付遺 調査区中央 (複製品)	内面コトケズリからナズ、ヨコナズ	内湾する体部に内湾する口縁部で端部内側に肥厚		(10.8)	(7.8)		口縁1/4		
399	土師器	腰B	印付遺 (複製品)	外底コトケズリからタタキ、丸いハケからハケ、ヨコナズ、粘土埴	内湾する体部から外縁すくね付く		(11.4)	(12.5)		口縁1/3、底部1/3		
400	土師器	腰A	印付遺 (複製品)	内面コトケズリからハケのみナズ、外底ハケ工具のアタリ痕、腰ハケからナズ	球形体部から外縁すくね付く		(13.4)	(8.3)	(17.7)		口縁～底部は肥厚	胎土陶具

番号	種別	部類	部類	技法	技法	技法	技法	長さ (cm)			残存	備考
								口徑	器高	器径		
401	土師器	鉢	甲冑道 (明灰砂)	外底タキからナズ、内面ナズ、ヨコナズ	内湾する体部から外縁し肩部狭い	20.0	(12.9)		口縁1/12	木、種あり、磨料磨出		
402	土師器	壺	甲冑道 (明灰砂)	内面横ハケ、ヨコナズ、身長と器高同じヨコナズ	外縁し器部内面につまみ出す		(3.1)		口縁小片	特殊な口縁部		
403	土師器	体部	甲冑道 (明灰砂)	内面ナズ工具のアタリ痕、外面タキからナズ	内縁する		(3.7)		体部小片			
404	土師器	体部	甲冑道 (明灰砂)	内面ナズ、外面ナズ、ヘラミガキ、竹管文	内湾する	長 0.1	厚0.6		体部小片	灰		
405	土師器	壺	甲冑道 (明灰砂)	外底ハケ、刺突文のちナズ、内面ハケ	内湾する		(4.3)		体部小片			
406	土師器	壺	甲冑道 (明灰砂)	外底ハケからナズ、内面ヨコナズ	内湾する		(4.2)		体部小片			
407	土師器	甕	甲冑道 (明灰砂)	外底タキからナズ、外面ヘラケズリ、ヨコナズ、穴縁	内湾する体部から底に外縁し肩部肥厚	0.5	(4.3)		口縁1/6			
408	土師器	甕	甲冑道 (明灰砂)	内面ハケからナズ、外底タキからハケ、ヨコナズ	内湾する体部から外縁する口縁部で肩部狭い	0.4	(4.8)		口縁1/5	肉内の磨擦		
409	土師器	甕	甲冑道 (明灰砂)	外底ハケからヘラミガキ、内面ヘラケズリ、ヨコナズ	内湾する体部から外縁する口縁部で肩部狭い	0.4	(7.0)		口縁～肩部1/2			
410	土師器	甕	甲冑道 (明灰砂)	内面ナズ、外面タキ、ヨコナズ、細面は横縁に内湾する	内湾する体部で肩が狭く、内湾ぎみの口縁部	0.4	(7.0)		口縁1/6	木、種あり		
411	土師器	甕	甲冑道 (明灰砂)	内面ハケ、外面タキ上からハケ、ヨコナズ	内湾する体部で器部縁縁縁口縁部外縁する	0.7	(12.35)	(22.0)	口縁1/2、体部1/8	肉内の磨擦		
412	土師器	甕	甲冑道 (明灰砂)	外底タキ上からハケ一部ヘラミガキ、外面ハケ上からナズ用し、ヨコナズ、横上縁縁	内縁する体部は外縁する口縁部で肩部つまむ	0.4	(5.73)		口縁1/6、肩部1/4	肉内の磨擦 煤付着		
413	土師器	甕	甲冑道 (明灰砂)	内面ヘラケズリ、横ハケ、外面タキ、ヨコナズ	内湾する体部に外反する口縁部、肩部肥厚	0.6	(4.0)		口縁1/5			
414	土師器	甕	甲冑道 (明灰砂)	内面横ハケからヨコナズ、外面タキからタテハ、ヨコナズ、器部に化粧土集	内湾する体部から外反する口縁部で肩部にな	0.7	(5.9)		口縁1/2、体部1/2			
415	土師器	甕	甲冑道 (明灰砂)	内面ヘラケズリ、外面タキ、ヨコナズ	内縁する体部に外縁する口縁部で肩部つまむ	0.7	(4.8)		口縁1/2			
416	土師器	甕	甲冑道 (明灰砂)	内面ハケ一部上からヘラケズリ、外面タキ上からハケ、ヨコナズ	内湾する体部から外縁する口縁部、器部上につまむ	0.6	(8.5)		口縁1/4、肩部1/2			
417	土師器	甕	甲冑道 (明灰砂)	外面タキから横ハケ、内面ヘラケズリ、ハケ、ヨコナズ	内湾する体部から外縁する口縁部、器部肥厚	0.5	(18.3)		口縁器部、体部1/3			
418	土師器	甕	甲冑道 (明灰砂)	内面ヘラケズリ、ヨコナズ、外面タキ、ハケ	内湾する体部から外反する口縁部、器部内面につまむ	0.3	(7.46)	(13.0)	口縁1/2、肩部1/8			
419	土師器	甕	甲冑道 (明灰砂)	内面ヘラケズリ、外面タキ、ヨコナズ、器部に化粧土	内縁する体部に外縁する口縁部で肩部につまむ	0.7	(3.8)		口縁1/6			
420	土師器	甕	甲冑道 S001 (明灰砂)	内面ハケ、外面ヨコナズ、器部肥厚	外縁する体部に外縁する口縁部で肩部につまむ	0.5	(3.5)		口縁1/6	石、木、炭、煤、葉が		

番号	種別	距離	道標	技法	技法	技法	距離 (m)			備考
							口徑	断面	直径	
421	土師器	ⅡC	甲好遺 (朝沢砂)	内面へラケズリ、外縁へラケカタタキ、ヨコナズ、ヨコナジによる仮取	内縁する体部に外反する口縁部で断面に上につまむ	(17.8)	(3.2)		口縁J7	甲内
422	土師器	ⅡC	甲好遺 (朝沢砂)	外面へラケカタタキ、内面へラケズリ、ヨコナズ、断面仮取	内縁する体部から外反する口縁部で断面に上につまむ	(15.4)	(3.8)		口縁J3	甲内
423	土師器	ⅡC	甲好遺 (朝沢砂)	内面へラケ、へラケズリ、ヨコナジ、断面に凹線状あり	内縁する体部から外反する口縁部、断面内面につまむ	(15.5)	(3.8)		口縁J9	甲内
424	土師器	ⅡC	甲好遺 (朝沢砂)	内面へラケ上からへう上芝キ、ハケ目、外面タタキ、ヨコナジ、断面凹線	内縁する体部に外反する口縁部で断面に上につまむ	(15.5)	(5.9)		口縁J4	底
425	土師器	ⅡC	甲好遺 (朝沢砂)	内面へラケズリ、外面タタキからナズ、ヨコナジ	内縁する体部に外反する口縁部で断面に上につまむ	(16.0)	(4.8)		口縁J2	甲内
426	土師器	ⅡC	甲好遺 (朝沢砂)	内面へラケズリ、ヨコナジ、外面タタキ、ユビオサエ	断面体部から外反する口縁部で断面に上につまむ	(24.0)	(8.3)		口縁J5	
427	土師器	ⅡC	甲好遺 (朝沢砂)	外面タタキからナズ、へラケズリ、外面タタキ、ヨコナジ、断面凹線	内縁する体部から外反する口縁部で断面に上につまむ	(15.6)	(18.9)		口縁J5、体部J3	高麗区
428	土師器	ⅡC	甲好遺 (朝沢砂)	内面へラケズリ、ヨコナジ、断面凹線	内縁する体部から外反する口縁部、上につまむ	(14.2)	(11.6)		口縁J1、体部J2	
429	土師器	ⅡC	甲好遺 (朝沢砂)	内面へラケズリ、ヨコナジ、断面凹線	内縁する体部から外反する口縁部で断面に上につまむ	(15.7)	(8.5)		口縁J5	
430	土師器	ⅡC	甲好遺 (朝沢砂)	内面へラケズリ、ヨコナジ、断面凹線	内縁する体部から外反する口縁部で断面に上につまむ	(17.4)	(8.8)		口縁J5	
431	土師器	ⅡD	甲好遺 (朝沢砂)	外面へラケカタタキ、内面へラケズリ、ヨコナジ	断面体部から外反する口縁部、断面に上につまむ	(15.1)	(11.0)		口縁J3、体部J2	
432	土師器	ⅡD	甲好遺 (朝沢砂)	外面へラケ、内面へラケからヨコナジ、へラケズリ、ヨコナジ	内縁する体部から外反する口縁部で断面に上につまむ	(12.8)	(5.5)		口縁J4	
433	土師器	ⅡD	甲好遺 (朝沢砂)	内面へラケズリ、ハケ目のちヨコナジ、外面へラケカタタキ、ヨコナジ	内縁する体部に外反する口縁部で断面に上につまむ	(13.2)	(6.0)		口縁J4	
434	土師器	ⅡD	甲好遺 (朝沢砂)	内面へラケズリ、ハケ目のちヨコナジ、外面へラケカタタキ、ヨコナジ	内縁する体部に外反する口縁部、断面外につまむ	(13.2)	(6.1)		口縁J3、断面J4	
435	土師器	ⅡD	甲好遺 (朝沢砂)	外面タタキ、ヨコナジ	内縁する体部から外反する口縁部	(12.2)	(5.6)		口縁～体部J4	
436	土師器	ⅡD	甲好遺 (朝沢砂)	外面タタキ、ヨコナジ	内縁する体部に内縁きみの口縁部、断面外につまむ	(13.6)	(7.7)		口縁J2	
437	土師器	ⅡD	甲好遺 (朝沢砂)	外面タタキ、ヨコナジ	内縁する体部に内縁きみの口縁部、断面外につまむ	(12.0)	(8.3)		口縁J3	
438	土師器	ⅡD	甲好遺 (朝沢砂)	内面へラケズリ、外面へラケ、ヨコナジ	内縁する体部から外反する口縁部で断面に上につまむ	(14.0)	(8.5)		口縁J2、体部J3	
439	土師器	ⅡD	甲好遺 (朝沢砂)	内面へラケズリ、ヨコナジ、外面ハケ目、断面凹線	内縁する体部から外反する口縁部、断面外につまむ	(14.2)	(6.25)		口縁J3	
440	土師器	ⅡD	甲好遺 (朝沢砂)	内面へラケズリ、ヨコナジ	内縁する体部に内縁きみの口縁部、断面外につまむ	(13.2)	(6.1)		口縁～断面・断面J4	

番号	種別	部風	部構	技芸 他	部風の特徴	音量 (dB)			残存	備考
						日昼	夜間	深夜		
441	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	ヨコナテ	外履する口縁部で強部突出	(13.8)	(2.9)		口縁1/7	
442	土師部	壺2	甲冑道 (朝夜6)	外履ハクからナテ、内履ナテ、ヨコナテ	内履する体部から外反する口縁部で強部突出	(13.6)	(3.7)		口縁1/7	
443	土師部	壺3	甲冑道 (朝夜6)	ヨコナテ	内履する体部に内履者みの口縁部、強部外につまむ	(13.15)	(3.43)		口縁、頸部1/4	
444	土師部	壺	甲冑道 (朝夜6)	ヨコナテ、内履ユビオサエ	内履する体部に内履者みの口縁部、強部外に短く外反する頸部から突出し外反する口縁部で成る	(16.9)	(5.0)		口縁2/3	
445	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	内履ハクナズリ、ヨコナテ	内履する体部から短く外反しさらに外反する二重口縁	(13.7)	(4.4)		口縁1/7	山盛
446	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	内履ハクナズリ、外履ハク、ヨコナテ	外反する頸部から突出し外反し強部成る	(15.0)	(5.2)		口縁1/7	山盛
447	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	内履ハクナズリ、外履ハク、ヨコナテ	外反する頸部から突出し外反し強部成る	(15.3)	(6.6)		口縁1/5、頸部1部	山盛
448	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	内履ハクナズリ、外履ハク、ヨコナテ、口縁部ユビ成部からヨコナテ	内履する体部から短い頸部になり入るく突き出て外反	(17.0)	(6.2)		口縁1/5	山盛
449	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	内履ユビ成部、ハケテ、ハクナズリ、外履ハク、成部	外反する頸部から突出し外反し強部外張り外につまむ	(15.8)	(8.1)		口縁1/4	山盛
450	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	外履ハクミガキからナテ、内履ナテ、ヨコナテ	内履する体部から外反し水平から外反し強部外反し	(16.0)	(10.1)		口縁1/5、頸部2/3	山盛
451	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	内履ハクナズリからナテ、外履ハクミガキ、ヨコナテ	内履する体部から短い頸部突出して直立し強部外反し	(10.0)	(5.0)		口縁1/9	
452	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	外履ハクミガキからナテ、内履板状器具ナズリからナテ、長いヨコナテ	扁平な形状で短い頸部から直立し強部外反し	(8.6)	(8.8)		口縁わずか、体部1/4	
453	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	ヨコナテ	外履し突出してから内履する口縁部	(4.8)	(3.2)		口縁1/4	
454	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	ヨコナテ	外履してから直立し強部外反し	(10.8)	(2.7)		口縁1/8	
455	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	ヨコナテ、内履ハクナズリ	内履する体部から短い頸部、内履し強部外反し	(14.1)	(3.6)		口縁1/8	
456	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	ヨコナテ、頸部線	頸部短く外履してから直立し強部外反し	(15.8)	(3.4)		口縁1/8	古備
457	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	ヨコナテ、内履ハクナズリ、頸部線	内履する体部から外履し内履する、強部外反し	(16.0)	(3.9)		口縁1/10	
458	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	ヨコナテ、内履ハクナズリ、頸部線	外履してから突出し外履する強部外反し	(16.4)	(3.6)		口縁1/12	山盛
459	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	ヨコナテ、内履ハクナズリ、頸部線7条	内履する体部から外履し内履する、強部外反し	(15.8)	(4.4)		口縁1/10	古備
460	土師部	壺1	甲冑道 (朝夜6)	ヨコナテ、内履ハクナズリ、外履ハク目のちヨコナテ	肩が部から内履する体部から外履し内履する、強部外反し	(12.7)	(10.45)	(18.7)	口縁5/8、頸部1/5	古備

番号	種別	器型	遺構	技法・地	形態の特徴	法量 (cm)			残存	備考
						口径	高さ	腹径		
461	土師器	甕 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	内面ハケからナズ、外蓋タガキからナズ、底部ナズ、乳あり	平庭から内湾する、底部穿孔	口径	高さ	腹径	底面完形	
462	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	ナズ、ヨコナズ、外蓋底部ハケナズ	外蓋ホリで埋部欠る	(12.0)	(5.0)		口縁～底部1/4	
463	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	外蓋ホリ底部からナズ、ヨコナズ	内湾し埋部欠い	15.6	5.7		近完形	
464	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	内面ナズミガキ、外蓋ナズ、ヨコナズ	内湾し埋部欠い	(16.7)	5.3		口縁1/5	木、種あり
465	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	外蓋ナズミガキ、内面ハケからナズ、ヨコナズ、ヨコナズによる白線	内湾する体部から水平ガキに覆き埋部角部欠る	(21.8)	(6.4)		口縁1/7	
466	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	内面ホリ埋部からハケナズ、ヨコナズ	内湾し埋部欠る	(12.6)	(5.5)		口縁1/5、底部完形	
467	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	内面板ナズ、外蓋ハケからナズ、埋部周部ヨコナズ	内湾し埋部欠い	(14.0)	(5.0)		口縁1/3	
468	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	ナズ、底部ナズ	平庭から内湾し埋部欠る	(8.8)	(4.2)	2.8	底面完形、口縁わず小	2枚埋成
469	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	内面板工具のアタリ痕のみナズ、外蓋ナズ、底部ナズ、ハケ部足あり	小凸平庭から内湾し埋部角部ナズミ	9.75	5.45	2.9	口縁一部欠損、ほぼ完形	
470	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	内面板ナズ、ヨコナズ、外蓋ホリ埋部、底部ハケナズ、ヨコナズ	上げ基から内湾し埋部欠い	(10.7)	(6.1)	3.9	口縁1/2、底部完形	
471	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	ハケ、ヨコナズ	内湾する体部から短く外湾する口縁部で埋部角部欠る	(33.7)	(8.35)	(96.0)	口縁小片	
472	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	内面ホリの上からナズガキ、外蓋ナズミガキ、ヨコナズ	内湾する体部から外湾する口縁部で埋部欠る	(37.5)	(8.5)		口縁1/9	
473	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	内面ナズミガキからヨコナズミガキ、外蓋ヨコナズミガキ、ヨコナズ、跡のみ	内湾する体部から外反し埋部上につきま上げ	(37.4)	(13.6)		口縁1/10	
474	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	ヨコナズ、内面ナズ、外蓋ハケか板ナズ、埋部内面ホリ	内湾する体部、短く外反する埋部に底立し埋部欠い	(37.0)	(18.1)	(37.3)	口縁1/4、底部1/8	
475	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	ヨコナズ、内面埋部状の印のみ	外反し突出してから外蓋	(39.7)	(7.4)		口縁1/4	灰
476	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	ヨコナズ、内面ヨコナズナズ	内湾する体部、短く外反する埋部に底立し埋部欠い	(32.2)	(11.8)		口縁1/5	
477	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	ユビ痕形、ヨコナズ、底部ナズ工具痕	短く内湾し埋部欠い	(10.9)	(3.0)		口縁～底部1/2	
478	土師器	鉢 (明瓦形)	明瓦道 (明瓦形)	内面ナズミガキ、外蓋ハケからナズ、ヨコナズ、底部穿孔	内湾し埋部薄く欠い	(15.8)	4.5		口縁わず小、底部1/2	煤付着
479	土師器	ミコトユフ 重	明瓦道 (明瓦形)	内面ハケからナズ、横り目、外蓋ハケから工具ナズ、乳孔	平庭から斜壁土状になる	(3.4)		(2.8)	底部1/2、体部1/2	個人品？
480	土師器	ミコトユフ	明瓦道 (明瓦形)	内面ホリ埋部、外蓋ナズ、工具ナズ	平庭から内湾	(3.8)		(2.8)	底部～体部1/3	

番号	種別	部風	部風	技法	技法	部風の特徴	音量 (db)			残存	備考
							口唇	鼻風	鼻音		
481	土師器	ミコナツ	甲州道 (朝沢部)	手すくは、内面ナツ、外面ハツ目	手すくは、夕夕なか工風から板ナツ、蓋部ナツ	平底から内側し端部突出	4.25	2.85	2.6	底辺部	
482	土師器	ミコナツ	甲州道 (朝沢部)	手すくは、夕夕なか工風から板ナツ、蓋部ナツ、外面ハツ目	手すくは、夕夕なか工風から板ナツ、蓋部ナツ、外面ハツ目	突出平底から外側し端部突出	5.3	4.5	3.4	底辺部2、体部口4	
483	土師器	手付土器	甲州道 (朝沢部)	外面ハツ目、内面ナツ、内面ハツ目	外面ハツ目、内面ナツ、内面ハツ目	内側し端部内外に肥厚		12.8		小片	黒灰
484	土師器	蓋	甲州道 (朝沢部)	外面ハツ目、内面ナツ、内面ハツ目	外面ハツ目、内面ナツ、内面ハツ目	浅く外側し端部外縁、つまみ小きめが柱状	17.4	5.4		口縁口5	
485	土師器	壺	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ、内面ハツ目、内面ナツ	ヨコナツ、内面ハツ目、内面ナツ	縁部体部から内側し端部突出	12.2	12.4	13.4	口縁口7、底辺部	黒灰地質片
486	土師器	壺	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ、内面ハツ目、内面ナツ	ヨコナツ、内面ハツ目、内面ナツ	縁部体部から内側し端部突出	12.1	10.9		口縁口4、体部口3	
487	土師器	鉢	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ	ヨコナツ	内側する体部から外側し端部突出	10.2	3.6		口縁口4	
488	土師器	鉢	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ	ヨコナツ	内側する体部から外側	12.2	4.3		口縁口6	2次産成
489	土師器	鉢	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ	ヨコナツ	内側する体部に表い二重口縁で外反し	15.0	3.0		口縁口4	
490	土師器	鉢	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ、内面ヨコナツのら感文、外反ナツ	ヨコナツ、内面ヨコナツのら感文、外反ナツ	表裏で内側する体部、外側してむら上方に延び	15.3	5.5		口縁口2、体部口2	
491	土師器	鉢	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ	ヨコナツ	内側する体部から内側する口縁部で端部突出	11.8	5.0		口縁口7	
492	土師器	小型丸底壺	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ、ナツ	ヨコナツ、ナツ	内側する体部から外側する口縁部で端部突出	11.2	6.0		口縁口3	
493	土師器	鉢	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ、ハツからナツ	ヨコナツ、ハツからナツ	体部内側し外側する口縁部	14.2	7.8		口縁口9、体部口2	
494	土師器	鉢	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ、外面ハツ目、ハツナツ	ヨコナツ、外面ハツ目、ハツナツ	体部内側し内側する口縁部で端部突出	11.8	7.5		口縁口4	
495	土師器	製塩土器	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ、内面ナツ	ヨコナツ、内面ナツ	体部内側し口縁部外反する	13.1	7.9		口縁口9	
496	土師器	小型丸底壺	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ、内面ナツ、外面ナツ	ヨコナツ、内面ナツ、外面ナツ	内側する体部から外側する口縁部で端部突出	8.0	8.4		口縁口9、体部へ端部突出	
497	土師器	小型丸底壺	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ、内面ナツ、外面ナツ	ヨコナツ、内面ナツ、外面ナツ	縁部の体部から外反する口縁部で端部外側につまみ出す	9.0	10.4		口縁口7、体部	
498	土師器	小型丸底壺	甲州道 (朝沢部)	内面ハツ目、内面ナツ、外反ナツ	内面ハツ目、内面ナツ、外反ナツ	浅く内側する体部で端部内側縁縁口縁部からナツ	10.8	6.2		底辺部	
499	土師器	鉢	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ、内面ハツ目、内面ナツ	ヨコナツ、内面ハツ目、内面ナツ	浅く内側する体部から内側し端部突出	11.4	13.2		口縁口9、体部口3	
500	土師器	鉢	甲州道 (朝沢部)	ヨコナツ、外面ハツ目、ナツ	ヨコナツ、外面ハツ目、ナツ	平縁部の体部から外側し端部突出	12.0	6.6		口縁口9、底辺部	

番号	種別	器種	楽	楽種	技法	技法	技法	演奏時間				備考
								日経	楽高	楽位	楽経	
501	土鈴器	笛	笛	笛	ヨコナガ、内面ヨビ成部からナガ、外面ハウからナガ	内溝する体部から外溝する口縁部で端部反つて反る	01.9	8.2			口縁1/4、体部1/3	
502	土鈴器	小型丸底壺	壺	壺	ヨコナガ、内面ナガ、外面短ハケからナガ、ケズ	内溝する体部から後腹側面な端部、口縁部外縁し端部反る	0.8	(7.6)	(10.0)		口縁おウチ、胴径1/5	
503	土鈴器	小型丸底壺	壺	壺	ヨコナガ、内面ケズリ、外面ハウからナガ、ハシカ成ナガ	内溝する体部から後腹側面な端部、口縁部外縁し端部反る	0.8	(5.7)			口縁～底部1/2	
504	土鈴器	壺	壺	壺	ヨコナガ、内面ハウから短ミガキ、外面ヨコミナガ	外縁する口縁部で端部反る	0.8	(5.4)			口縁～胴部ほぼ完形	
505	土鈴器	小型丸底壺	壺	壺	ヨコナガ、内面ヨビ成部、粘土根直	内溝する体部から外面して外縁する口縁部で端部反る	0.8	(7.7)			口縁1/7、体部1/3	
506	土鈴器	壺	壺	壺	ヨコナガ、ナガ、外面タキのちナガ	口縁部外縁し端部近くで反る	0.6.0	(6.1)			口縁1/6	
507	土鈴器	高杯	高杯	高杯	ヨコナガ、ハウケズリ	内溝し端部反る	0.3.0	(3.9)			口縁1/3	
508	土鈴器	高杯	高杯	高杯	ヨコナガからハウミガキ、内面短部ハウミガキ	杯部外周で平底から内溝し口縁部外縁し反る	0.4	(4.6)			口縁1/2	化粧土施色
509	土鈴器	高杯	高杯	高杯	杯部内面ミガキ、杯部内面短部目、ヨビオオキ、外面ナガ、ユオオキ	内溝する杯部を外反する杯部、中空凹面	0.5				杯部1/3、脚若干	有欄覆行者
510	土鈴器	高杯	高杯	高杯	ヨコナガ、内面ハウミガキ	内溝する杯部下平から外反し端部反る	0.7.0	(3.6)			口縁1/8	
511	土鈴器	高杯	高杯	高杯	ヨコナガ、内面ヨコミカからハウミガキ、外周ハウケズリからナガ、口縁成直	平たい下平から外反する口縁部で端部反る	0.8.2	(3.3)			口縁1/4	
512	土鈴器	高杯	高杯	高杯	ヨコナガ、内面ハウからミガキ、外周直線、内面成直	内溝する下平から外反し端部反る、杯部外縁	0.9.4	(6.8)			口縁1/5	
513	土鈴器	高杯	高杯	高杯	内面ヨコナガ上からハケ、ナガ、外面ヨコナガ	水平平みから外反する口縁部で端部反る	0.4.0	(3.6)			杯部1/4	尻
514	土鈴器	壺	壺	壺	ヨコナガ	水平平みから突出し外反する口縁部で端部反る	0.2.5	(5.7)			口縁1/4	頸岐
515	土鈴器	高杯	高杯	高杯	ヨコナガ、内面ミガキ、外周短部ナガ、杯部ハウケズリ、杯部内面短部目、ハケ、杯部成直、ハシカ成ナガ	内溝する下平から外反し端部反る、杯部外縁、中空	0.2.6	(0.4)			口縁1/4、脚柱部1/2	重底
516	土鈴器	高杯	高杯	高杯	ヨコナガ、ハウミガキ、杯部内面ハウケズリ、外面ハウミガキからハケ、口縁成直で中央半成直	内溝し突出してから外反する杯部で端部反る、内面外反し中空	0.7.6	(16.0)			口縁1/4、脚柱部1/2	
517	土鈴器	高杯	高杯	高杯	ヨコナガ、内面ハウからナガ、外面ヨビオオキ、ハケ、ケズリ	内溝する下平から内反し端部反る	0.0.2	(7.0)			口縁1/3	
518	土鈴器	高杯	高杯	高杯	内面ミガキ、杯部内面ケズリ、ヨコナガ外直ミガキ	外反する杯部で端部反る、杯部内溝	0.2	(6.2)	10.2		底部1/4	
519	土鈴器	高杯	高杯	高杯	ミガキ、杯部短部ナガ	外縁し美化して不連続部	0.4	(4.4)			脚部若干	縁部面に串收甚
520	土鈴器	高杯	高杯	高杯	ミガキ、ヨコナガ、ナガ	外縁する	0.3.0				脚部若干	

番号	種別	形類	遺構	技法 他	形類の特徴	法量 (cm)			残存	備考	
						口径	器高	器径			
521	土師器	鉢	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ、内面ナギ、外面ヘラケナギ	内湾し腹部太い	(18.9)	(4.7)		口縁1/4		
522	土師器	鉢	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ、内面ヘラ、ケズリからナギ、外面ヘラケナギからナギ	内湾し腹部太る	(14.8)	(4.0)		口縁～底部2/3		
523	土師器	鉢	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ、ヘラミガキ	内湾し腹部太い	(14.0)	(5.3)		口縁1/4		
524	土師器	鉢	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ、外面ヘラからナギ、ヘラケナギ、南部 比羅岐になる	内湾し腹部太い	(13.2)	(5.6)		口縁1/5		
525	土師器	鉢	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ、内面ヘラミガキからナギ、外面ヘラケナギからナギ	内湾し腹部太い	(11.8)	(4.5)		口縁1/4		
526	土師器	高杯	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ、内面ヘラミガキ、外面ヘラケナギからヘラミガキ、底に中央凹突	水平に開き外反さみの口縁部で腹部太い	(11.0)	(4.6)		口縁わずか		
527	土師器	鉢	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ	内湾し腹部太い	(9.8)	(4.6)		口縁1/6		
528	土師器	高杯	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ、ヘラミガキ	内湾し腹部太い	(13.0)	(4.6)		口縁1/2、体部1/2		
529	土師器	高杯	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ、ミガキ、ナギ、4方向穿孔	内湾し腹部太る体部から中央の短い頸部から低く外湾し頸部太る	11.3	8.8	(15.8)	口縁3/4、底部1/4	字真あり、南平	
530	土師器	高杯	甲冑道 (明灰砂)	頸部外縁太ナギ、数日目のちナギ、ヘラ、外面ヘラケナギからナギ、4方向穿孔、4方向穿孔	中央の外縁する頸部から外湾し頸部太い		(6.2)	(17.5)	底部若干		
531	土師器	高杯	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ、内面ミガキエ調整、外面ヘラからナギ、4方向穿孔	内湾すみに低く延びる頸部		(3.2)	(17.6)	脚部ほぼ完成		
532	土師器	高杯	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ、外面タテナギからヘラミガキ、3方向同 孔	中央頸部から外反し腹部太る		(7.0)	(10.2)	底部1/9		
533	土師器	高杯	甲冑道 (明灰砂)	外面ケズリからヘラのちミガキ、内面板ナギ、3方向同孔	外縁してから外反する		(7.0)	(13.2)	底部1/4	鎌合面に車状筋	
534	土師器	高杯	甲冑道 (明灰砂)	内面ナギ、外面腹ヘラからナギ、脚部内面ヘラからヘラミガキ、孔3方向	内湾し腹部下につまむ、短い中実		(5.7)	(11.9)	脚部ほぼ完成	重底	
535	土師器	高杯	甲冑道 (明灰砂)	内面ケズリ、ヘラからナギ、外面工具当たり重、ケズリ、ミガキ、孔3方向	外反し腹部太い		(6.3)	(11.6)	底部3/4		
536	土師器	鉢台	甲冑道 (明灰砂)	外面ヨコナギ、内面ミガキ	外縁し腹部角太る		(2.5)	(9.6)	脚部1/2		
537	土師器	鉢台	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ、1集脚部から四角文と竹管文	外反し腹部太くつまみ上げ用になる	(23.5)	(3.7)		口縁1/6		
538	土師器	鉢台	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ、内面ヨコナギからヘラミガキの分竹管文、外面ヘラからヘラミガキ、同縁	外反し他心ぶ肥厚する	(29.0)	(4.5)		口縁1/3		
539	土師器	鉢台	甲冑道 (明灰砂)	ヨコナギ、内面ナギ、ヘラからナギ、外面ミガキ	頸部外反し頸部外縁し腹部角太る、上台は突出してから外反し太い	20.0	14.6	脚 4.0	14.2	字真あり 南平	
540	土師器	鉢台	甲冑道 (明灰砂)	内面タテナギからナギ、ヘラミガキ、外面ケズリ、ヘラのちナギ、ミガキ、4方向同孔、底土壁	外反し腹部太い、脚出してから外反する上台部で頸部太る	(23.8)	18.15	14.5	14.5	口縁1/2、底部5/7	字真あり 北平

番号	種別	図様	遺構	技法・地	形態の特徴	法量 (cm)			残存	備考
						口径	断面	底径		
541	土師器	器台	印内遺 (埋込砂)	ヨコナガ、内面ヘケナリ	内面はくの字に溝き端部外側につまみ出す、 外底面凸	(11.8)	(3.3)	(11.0)	脚部は片足形	山腹
542	土師器	瓶型器台	印内遺 (埋込砂)	内面ナガ、ケズリ、外底ヨコナリ	下台は内溝、上台は外縁し縁線を持つ		(5.0)		体部若干	
543	土師器	器台	印内遺 (埋込砂)	ヨコナガ、内面ヘケミガキ、外底ヘケラズミガキから ヘケミガキ	内溝し端部上につまみ上げない	(10.0)	(2.9)		口縁1/3	
544	土師器	器台	印内遺 (埋込砂)	ヨコナガ、内面ヘケミガキ、外底ケズリ	内溝し端部上につまむ	(7.9)	(3.2)		口縁1/4	頸部ソケット状になる
545	土師器	器台	印内遺 (埋込砂)	ヨコナガ、ミガキ	外縁し端部上につまむ		(1.6)	(6.7)	底面1/4	
546	土師器	器台	印内遺 (埋込砂)	ヨコナガ、内面ヘケからナリ、工具痕、凹縁状	内溝し端部実る	(8.4)	(3.4)		口縁1/3	
547	土師器	器台	印内遺 (埋込砂)	杯部内面ヘケミガキ、外底ミガキ、ヨコナガ、脚 部内面ヘケ、外底ヘケミガキ、孔	内溝する上台部、内溝する下台部で端部つま む	(8.0)	(6.1)	(10.6)	脚部3/4	
548	土師器	器台	印内遺 (埋込砂)	内面ヘケ取工具のナリ、外底ヨコナガ、ヘケミガ キ、脚部内面取目目、4方孔	外縁する側部で端部実る、上台は外縁		(7.3)	(11.4)	脚部は片足形	
549	土師器	器台	印内遺 (埋込砂)	ヨコナガ、内面取目工具、外底ヘケミガキ、4方孔 孔	外縁する側部で端部実る、 内縁する側部で端部実る		(7.9)	(12.9)	脚部2/3	
550	土師器	器台	印内遺 (埋込砂)	ヨコナガ、内面取目ヘケからヘケミガキ、外底ヘケ ミガキ、凹縁、脚部内面取目目、ケズリ、5方取目 凸がる	溝き外縁し端部つまみあげると、側部溝で 広がる	(10.6)	(6.4)		口縁2/3、脚部足形	
551	土師器	脚部	印内遺 (埋込砂)	内面ヘケのちナリ、外底ミガキ、工具痕	外反する		(3.0)	(8.3)	底面1/4	
552	土師器	脚部	印内遺 (埋込砂)	内面ナリ、ハケ、ヨコナリ	内溝し端部凹浮し、中央、外縁する体部		(6.9)	9.5	脚部は片足形	
553	土師器	製瓦土器	印内遺 (埋込砂)	ユビ成形、ナリ	外反し端部実ない		(2.4)	5.1	底面は片足形	
554	土師器	製瓦土器	印内遺 (埋込砂)	ユビ成形、ナリ	外縁し端部実ない、体部内溝		(2.6)	4.9	底面足形	
555	土師器	製瓦土器	印内遺 (埋込砂)	ユビ成形、ナリ、内面ヘケ工具痕、外底ユビナ リ	外縁し端部中央実る、体部内溝		(2.5)	(4.5)	底面は片足形	
556	土師器	製瓦土器	印内遺 (埋込砂)	内面工具のアタリ痕、外底タタキ、ユビ成形	外縁し端部実る、体部外縁する		(3.3)	(4.2)	底面足形	
557	土師器	製瓦土器	印内遺 (埋込砂)	ユビ成形、ナリ、粘土地	体部内溝、外縁し端部実ない		(2.4)	5.4	底面は片足形	
558	土師器	製瓦土器	印内遺 (埋込砂)	ユビ成形、ナリ	体部内溝、外縁し端部実ない		(2.9)	5.4	底面足形	
559	土師器	製瓦土器	印内遺 (埋込砂)	ユビ成形、内面ナリ、外底タタキからナリ、ユビ ナリ	側部中央で体部内溝、短く距ひ実る		(4.2)	(4.6)	底面は片足形	
560	土師器	製瓦土器	印内遺 (埋込砂)	内面ヘケ、外底タタキからナリ、ユビ成形	内溝する体部、外縁する脚部で端部実ない		(6.9)	(4.4)	底面1/2	

番号	種別	部風	部構	技法 他	部風の特徴	音量 (db)			残存	備考
						口徑	部風	部体		
561	白磁	碗	包含層 (灰吹中砂)	ロクロナデから彫削、テズリ出し高台	低い高台から内湾する	(3.4)	(5.0)	底部1/2		
562	青磁	碗	包含層 (灰吹中砂)	断面台形の高音で内湾する	断面台形の高音で内湾する	(3.4)	(4.9)	底部わが、体部1/4		
563	須恵器	杯身	包含層 (灰吹中砂)	ロクロナデ	内湾する	(3.1)	(3.3)	口縁1/7		
564	須恵器	杯身	包含層 (焼層)	ロクロナデ、内車ロクロナデの上からナデ、外面 回転へう送りからナデ	内湾し反り外反し、受盤短くする	(1.8)	(3.1)	口縁1/12		
565	須恵器	杯身	包含層 (焼層)	ロクロナデ、高台底は焼状に固む	平底から内湾し底部外側に反る	(1.7)	3.15	口縁1/4		
566	須恵器	杯	包含層 (焼層)	ロクロナデ、底加ね曲がり	平底から外壁し底部外側、方形の高台	(2.2)	2.8	(8.8)	口縁1/11	
567	須恵器	碗	包含層 (焼層)	ロクロナデ	中央が上がる平底から内湾	(1.3)	(5.2)	底部1/2完部		
568	須恵器	皿	包含層 (焼層)	ロクロナデ	平底から外壁し底部外	(6.8)	1.9	(15.0)	口縁1/10	
569	土師器	直	包含層 (U(砂焼)	内面ユビ彫削からへたくらナデ、外面へうから ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部、底部外	(2.6)	(7.65)	口縁～肩部1/4	写真あり	
570	赤生土器	直	包含層 (U(砂焼)	外面ヘラミガキ	内湾する体部から直立する底部	(5.95)		頸部1/1	写真あり	
571	赤生土器	直	包含層 (焼層)	外反ナデ、指頭印交差文、クシ種直線文、波状 文	外反する体部で体部外壁きみ	(5.35)		頸部小片		
572	土師器	壺	包含層 (焼層)	ヨコナデ、内側へうテズリ、縦印線	短く外反する底部から斜めに外壁し底部外	(1.9)	(3.3)	口縁1/4	古備	
573	土師器	直	包含層 (焼層)	ヨコナデ、外面ヨコナデによる凹線	外反する底部から内湾し底部近くで外反し 底部外	(2.4)	(5.0)	口縁1/8		
574	土師器	小型丸底直	包含層 (焼層)	口縁部ヨコナデ、内面テズリ、外面ナデ	やや平の底の内湾する体部から低い、底部縁部 外側から外湾する口縁部、底部外	(10.0)	(7.4)	口縁1/2完部、体部1/2	写真あり	
575	土師器	壺	包含層 (焼層)	ヨコナデ、外面直線文	外反し底部外	(9.4)	(3.25)	口縁小片		
576	土師器	壺	包含層 (焼層)	内面ヨコナデ、へうテズリ、外面ヨコナデ	内湾する体部から内湾する口縁部で外に外	(7.4)	(7.45)	口縁2/3		
577	土師器	鉢	包含層 (焼層)	ヨコナデ、外面ナデからへたく、内面ナデ、へ テウ、底部内底彫削からナデ	上げ高から内湾し、口縁部短く外壁し底部外	(3.4)	(6.8)	口縁1/3	写真あり	
578	土師器	製瓶土器	包含層 (焼層)	内面ナデ、ユビ彫削からナデ	内湾する体部で断面外壁し底部外にのみみ出 す	(3.1)		(4.0)	底部1/2完部	個人品小
579	土師器	製瓶土器	包含層 (焼層)	内面ナデ、ユビ彫削	外壁する体部、断面も外壁し底部外	(2.3)		(4.8)	底部1/2	
580	土師器	製瓶土器	包含層 (焼層)	ユビ彫削からナデ	内湾する体部で断面外壁は短く外反、底部外	(2.3)		(4.3)	底部1/2	

番号	種別	図様	遺構	技法・地	形質の特徴	法量 (cm)			残存	備考
						口径	断面	底径		
581	土師器	製瓦工器	包含層 (被層)	ユビ成形、ナデ	外反する胴部で底部太い、体部内湾	(2.1)		4.4	底部完形	
582	土師器	餅台	包含層 (被層)	ヨコナデ、円板状	内湾し底部太い	(9.2)	(3.1)		口縁1/5	製瓦土器に転用
583	土師器	高杯	包含層 (被層)	ヨコナデ、ナデ、底に凹状切欠	内湾し底部反り太い	(14.8)	(5.2)		口縁3/4	写真あり
584	土師器	餅台	包含層 (被層)	ヨコナデ、外周ナデ、底部ナデ、土台内面中心に貫通しない乳	内湾し底部上につまみ上げる上弁、外反する上弁	(8.2)	(3.1)		口縁1/2	
585	土師器	蓋	包含層 (被層)	ヨコナデ、内周ナデ	外反し突出して内湾する	(22.6)	(3.8)		口縁1/7	遺焼
586	土師器	体部	包含層 (被層)	外面へろミガキ、内面ヨコナデ、ハケのちナデ折し、底状文?	内湾する	長 (4.2)	厚 0.75 (4.0)		口縁小片	
587	土師器	襷	包含層	ヨコナデ、内面ヨコハケ、外周タタハケナギ	内湾する体部に外縁する口縁部で底部内側につまむ	(18.0)	(6.3)		口縁1/7	
588	土師器	蓋	包含層	ヨコナデ、内面ヨコハケ、外周タタハケ?	外縁して直に上弁	(7.0)	(19.0)		底部1/7	木あり 遺焼
589	土師器	襷	包含層	内面凹状縁、外周タタキからミガキ	不安定な平底から内湾する	(3.1)		6.1	底部完形	遺焼
590	土師器	底部	包含層	内周ナデ、工具タタリ痕、外周ハケからナデ、底部木製痕	トーナツ底から内湾する	(4.2)		(4.0)	底部完形	
591	土師器	底部	灰被層	ナデ、内面底部に工具痕、底部へろ縁?	小さな平底から内湾する	(4.1)		1.4	底部完形	鉢心
592	土師器	高杯	東西トレンチ	ヨコナデ	外反し底部太る	(25.8)	(3.2)		口縁1/10	
593	土師器	餅台	2.5トレンチ	内周ナデ、外周腰ハケからナデ、ユビ成形	平底から外反する	(6.8)	(4.2)		底部1/2	
594	土師器	製瓦土器	包含層	ユビ成形	外縁し底部太い	(1.8)		(4.2)	底部1/5	
595	土師器	製瓦土器	灰被層	ユビ成形、ナデ	外縁し底部太る、体部内湾	(2.8)		(4.8)	底部1/2	鉄あり
596	土師器	餅台	東西トレンチ	ナデ、胴部内面タタキ、ユビ成形	外反し底部太る	(4.2)		(6.4)	底部1/2	
597	土師器	餅台	餅土	外面ミガキからナデ、内周ナデ、ハケ、底状折穿孔	外反し底部内外に凹湾する	(3.7)		(8.0)	底部1/5	木あり

V 竹の前遺跡の遺構と遺物

竹の前遺跡において検出した遺構は、1・2区あわせて掘立柱建物跡3棟・柱穴列4列・土坑1基・溝3条・ピット4基である。1区の遺構の時期は弥生時代と中世前半期である。2区出土の遺物量は希少であるものの、およそ奈良時代から平安時代にかけての時期と考えられる。

1. 1区の遺構

遺構は、現耕土ないし旧耕土の直下で検出した。遺構検出は1面で実施したが、遺構の時期は少なくとも2時期あり、弥生時代(SB03・SA01・SD02)と中世前半期(SB01・02・SD01)である。

SB01 (図版44・写真図版85)

調査区北東隅で検出し、調査区外に未検出部分が及ぶが東西方向で1間以上、南北方向で3間以上の側柱建物である。P 1-1・1-2間は1.96m、P 1-1・2-1間は2.09m、P 2-1・3-1間は2.94m、P 3-1・4-1間は2.19mを測る。P 1-1～3-1を基準とした主軸方向はN14.6°Wを指向する。

柱穴の直径は19～30cmを測り、検出面からの深さは11～33cmを測る。いずれの柱穴においても柱痕が確認でき、直径は6～8cm程度である。

SB02 (図版45・写真図版85)

調査区南東隅で検出し、調査区外に建物南側の未検出部分が及ぶ可能性が残るが東西方向で3間、南北方向で2間以上の総柱建物である。建物の規模は、東西ではP 1-1・1-4間で7.08m、P 2-1・2-4間で7.24mを測り、南北ではP 1-2～3-2間で4.76m、P 1-3～3-3間で4.84mを測る。P 1-2～3-2及びP 1-3～3-3を基準とした主軸方向はN9.1°Wを指向する。

柱穴の直径は22～34cmを測り、検出面からの深さは19～37cmを測る。いずれの柱穴においても柱痕が確認でき、直径は7～11cm程度である。

SB03 (図版44・写真図版84・85)

調査区南部で検出し、調査区南壁に近いものの1間×1間のみの建物である可能性が高い。桁行方向はP 1-1・1-2間で2.23m、P 2-1・2-2間で2.35m、梁行方向はP 1-1・2-1間で1.99m、P 1-2・2-2間で1.89mを測る。P 1-1・1-2及びP 2-1・2-2を基準とした主軸方向はN37.8°Wを指向する。

柱穴の直径は24～54cmを測り、検出面からの深さは28～33cmとほぼ底が近いレベルに掘っている。柱穴はいずれも切り合い、各々の内側に再度掘削して建物建て替えている状況が看取される。以上から、床面の削平された竪穴住居跡の主柱穴のみが残存している状況が可能性の一つとしてあげられる。

SA01 (図版45)

柱穴3基が並び、主軸方向はN55.4°Eを指向する。柱穴の直径は23～33cmを測り、検出面からの深さは10～19cmを測る。いずれの柱穴においても柱痕が確認でき、直径は9～14cm程度である。

SK01 (図版44)

調査区西壁際の中央付近で検出した。約半分が調査区外西側に及ぶが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。長軸方向81cm、短軸方向の検出最大幅47cm、検出面からの深さ24cmを測る。埋土から土器は出土していないため、時期は不明である。

SX01 (図版44・写真図版84)

調査区南側で検出した。掘り方の平面形は隅田方形を呈し、その規模は主軸方向で1.47m、その直交方向で79cmを測る。横断面形は箱形を呈し、最深部となる東小口付近でも検出面からの深さはわずか8cmである。棺材そのものは遺存していなかったが、土質の違いから棺痕跡を掘り方の中央部付近で確認することができた。底部での規模は主軸方向で1.20m、その直交方向で52cmを測る。また主軸方向はN54.4°Wを測る。なお、北側の備板部分と東側の木口部分のほぼ中央付近の裏込め土内に直径9～16cmの垂角礫が配置されており、それぞれ備板、木口板を立てる際の支えとされた可能性が考えられる。

SD01 (図版47・写真図版81)

調査区北半を横断し、延長15.2mを検出した。検出幅は一定せず幅0.85～3.5mとなり、検出面からの最大深25cmを測る。特に西半部では、最も深い部分が南北に2箇所認められ、埋土は概ね淡い灰黄色を呈するシルトからシルト質の極細砂で構成される。埋土の堆積状況から溝内における埋没の単位に関して2～3度の変遷が看取され、それぞれの横断面形は概ね皿状を呈するが、部分的に逆台形状を呈する箇所も認められる。埋土から出土した土器より、少なくとも11世紀後半には掘削されていたと考えられる。

SD02 (図版47・写真図版82～83)

調査区の西側を直線的に縦断する溝である。延長17.2mにわたって検出した。堆積状況により2時期に分かれ、古い時期のもの(SD01-a)が埋没した後新しい時期のもの(SD01-b)が掘り直されている。SD01-aは最大幅2.63m、検出面からの深さ83cmを測り、横断面形は幅広のV字形を呈する。SD01-bは最大幅2.02m、検出面からの深さ55cmを測り、横断面形は逆台形を呈する。SD01-bでは、少なくとも5層及び8層、9層の堆積する直前に掘り直されていることが観察され、管理が及んでいた状況が看取される。また、黒褐色から暗褐色の極細砂で構成される3層から4層上半にかけては弥生時代後期前葉の土器が多く出土している。一方SD02-aからは弥生時代前期の土器が出土しているが、掘削の時期が弥生時代前期まで遡りうるものか、混入したかは出土量が少ないために判断を保留しておきたい。

2. 2 区の遺構

中央付近から南側にかけて長方形に近い形状の攪乱が大きく及んでいたが、東半分で柱穴や溝を確認することができ、また南壁では攪乱の影響をさほど受けず、堆積状況を確認することができた。遺構は盛土ないしは旧床土の直下で検出した。それ以下の層序では、淡い灰黄色を基調とする低湿な堆積(1～9層)からなる調査区西半部を中心とする狭い谷地形が観察されているが、これらの層から土器は出土していない。

SA02 (図版46・写真図版85)

柱穴3基が並び、主軸方向はN76.4°Wを指向する。柱間はP1・P2間で2.26m、P2・P3間で2.09mを測る。柱穴の直径は29～31cmを測り、検出面からの深さは12～22cmを測る。いずれの柱穴においても柱痕が確認でき、直径は9～13cmである。

SA03 (図版46)

柱穴が少なくとも2基以上並び、主軸方向はN85.6°Wを指向する。柱間はP1・P2間で2.43mを測り、P2では柱穴の直径が32cm、検出面からの深さが16cm、柱痕の直径は10cm程度を測る。

SA01 (図版 46・写真図版 85)

柱穴3基が並び、主軸方向はN17.6°Wを指向する。柱間はP1・P2間で2.05m、P2・P3間で1.95mを測る。柱穴の直径は25～36cm、検出面からの深さは19～26cmを測る。柱痕が確認できたP2・P3では直径15cm程度である。P1では柱の抜き取り後に、根石と思われる角礫も一緒に埋められている。P2底部では土師質の平瓦が礎盤として利用されており、8世紀後半から9世紀代の所産と考えられる。

SD03 (図版 47・写真図版 81)

調査区北東側から中央付近にゆるやかな弧を描きつつ延びる。攪乱に切られており、延長6.6mを検出した。幅7～9cm、検出面からの最大深12cmを測り、横断面形はU字形を呈する。溝底は北から南に向かってわずかに傾斜する。柱穴に切られるが、埋土から出土した土器は出土していないため、詳細な時期は不明である。

3. 出土遺物

SD01 (図版 48・写真図版 86)

1は白磁の碗で、口縁は断面三角形に近い。横田・森田分類の白磁碗IV類に分類される。2は須恵器の碗で、回転糸切りの底部は平高台がやや突出する。いずれも11世紀後半の所産と考えられる。

SD02 (図版 48・49・写真図版 86～88)

出土した土器はすべて弥生土器である。

5・22・23・32・35・36は弥生時代前期後葉から末ないしは中期初頭の土器で、特に22・32・35・36は胎土に粗い砂粒が顕著に含まれる。5・36は甕、他は壺である。5は3条沈線の施された胴部上半から口縁が緩やかに外反する甕である。32は広口長頸壺の頸部から体部肩付近に移行する箇所破片で、貼り付け突帯上に刻み目を施す。35は分厚い底部の外面には入念に横方向のミガキが施される。36は大型の甕の底部で、底径は10.2cmを測る。

弥生時代前期後葉から中期初頭の土器を除いたほかは弥生時代後期前葉の土器である。

3・4・6～14・30・31は甕である。3は平底から卵形に近い体部が立ち上がり、短い口縁が緩やかに外反しつつ、端部は丸く収められる。4は小型品で、やや上げ底気味の底部から内傾気味に開く体部は肩が張り、口縁は屈曲して端部は面を持ち退化した凹線が施される。6・31は受け口状の口縁となるが、口縁端部が立ち上がるがつまみ出されない。7は口縁端を肥厚させ端面をもつ。内面はヘラケズリを施す。8は体部からくの字形に屈曲する口縁が端部を上下に拡張させ、退化した凹線を2条設ける。9も緩やかに屈曲する口縁が端部を上下に拡張させ、退化した凹線を2条設ける。体部内面はヘラケズリを施す。10は上下に拡張された口縁端にかすかに凹線2条が施された痕跡が看取される。11は胴張りし、くの字形に屈曲する口縁が端部を上下に拡張させ、退化した凹線を1条設ける。12～14は甕底部で、いずれも平底で13は外方にふんばり気味。12はこの一群の中では底径が3.1cmと小さく、14が5.1cmあるのとは対照的である。

15～21は壺である。15は吉備系の脚付直口壺。胴部最大径は30.2cmを測り、備前や播磨の他の出土例も含め直径18～20cmのものが多いことから、通常の1.5倍程の規模となる。断面M字形の突帯を2条施し、その間に8条を1単位とする棒状浮文を付し間隙には縦方向のミガキを施して加飾する¹⁾。

16・17は口縁部の外反の著しい直口壺で球形の胴部を持ち、いわゆる香東川下流域産土器(大久保2003)と共通する器形、調整を持つ²⁾。特に頸部上半に右上がりのらせん状の沈線文を施し、その下端

と頸部境界に1条沈線を設ける間に16では板状原体の先端の刺突による右上がりの斜線を1段、17では同様の斜線を羽状に2段対置させるのが特徴的である³⁾。なお、上方につまみあげて肥厚させた口縁端部に形成された端面には、16では沈線2条、17ではナデの条線を沈線状に2条程度施し、口縁の内外面ともにナデの単位により凹凸を造り出すが、内面のほうがより顕著で凹線状に2条以上施す。

18・19は広口壺で、いずれも球形の胴部に直口気味の短い口縁部が付くものである。

20・21は壺の底部。20は外面に粗いナデのような縦方向の幅の広いミガキを施す。

24～28は高杯である。24・25は有稜高杯の杯部で、浅い杯部の屈曲部から口縁が立ち上がり気味に外反しつつ開く。25は口径33.4cmと大型化している。26・27はラッパ状に開く脚部で、27は脚部端部を肥厚させ端面を設ける。26は円孔を中程に4ヶ所、27では中程に2箇所のほかさらにやや下方にも4ヶ所穿つと考えられる。28は円筒形の脚部から屈曲して外反しつつスカート状に開く裾部をもつ。裾端部に端面を設け、退化した凹線を1条施す。

29は器台で、裾に凹線5条を施し、裾端部は上方につまみ上げ端面を設ける。裾の直径は28.8cm。

4. まとめ

弥生時代、律令期、中世前半の遺構を検出した。弥生時代は溝及び堅穴住居の可能性のある建物、律令期は柱穴列、中世前半は掘立柱建物と柱穴列で、その他に検出した土坑や木棺墓の時期は不明である。

1区の中世前半と考えられるSB01・02は主軸方向が南北方向に近く、弥生時代のSB03の主軸方向はSD02のそれに近く、2区柱穴列SA02・SA04の主軸方向は現在の地割に近い。2区SA03は律令期から9世紀と考えられるが、主軸方向は本町遺跡で検討された飾磨郡条里N23°Eとは異なる。

2区SD02は、横断面形幅広のV字形の古い時期のもの(SD02-a)の埋没後に、横断面形逆台形の新しい時期のもの(SD02-b)が掘り直されている。SD02-bは弥生時代後期前葉頃とみられるが、SD02-aは埋土内からの弥生時代前期後葉から中期初頭の土器の出土がごく少量であるため時期の決定には慎重を期したい。

出土遺物ではSD02から出土した弥生土器が大半を占め、前期のものを除くと外面にタタキを施し、口縁を丸く収める甕(3)以外は、概ね外面タテハケ調整で、口縁端部を拡張して端面を設け、後期前葉の一群に比定される。とりわけ外來の要素を持つ吉備系の脚付直口壺や讃岐系の直口壺が特筆される。

SD02は、姫路市教育委員会による竹の前遺跡の平成20年度調査(飯田・手柄地区第3次発掘調査)の際に検出された溝と本来同一の遺構と考えられ、当該調査においても良好な出土資料が知られている。

1) ただし棒状浮文は、最大で9条残存している箇所が認められる。なお、類例は脚の付くかどうか不明な破片もしくは脚の付かない直口壺を含めて比較対象としているが、2条突帯間の棒状浮文については、赤穂市有年原・田中遺跡や岡山市百間川原尾島遺跡では3条1単位のものが、岡山市赤穂市立道遺跡では4条1単位のものが出土しており、神戸市西区池上北遺跡では棒状浮文を付さず縦方向のミガキのみを一定間隔で設けたものが知られている。

2) 胎土も角四石を含む褐色を呈するが、両者の直接の比較・検討作業を経ていないため早急な結論は差し控えたい。

3) 口縁の外反の著しく頸部に凹線からせん状の沈線及び斜線を施す例は高松市上天神遺跡を中心に、隣接する太田下・須川遺跡にかけてみられる。なお、上天神遺跡では口縁の外反の著しい直口壺が「直口壺C」と分類される。上天神遺跡では直口壺全体では斜線文が羽状に2段配置される例は一定量認められるものの直口壺Cでは1段が一般的であり、その一方で大阪府高槻市芥川遺跡では口縁の外反の著しい器形斜線文を2段配置する類例が認められる。17では2段の斜線文のうち上段が下段を切るが、この2段の斜線文の切り合い関係は太田下・須川遺跡の壺に認められる切り合い関係と共通するものである。

参考文献

- 伏枝 芳 1984『本町遺跡』姫路市教育委員会
- 大久保徹也・森格也（編）1995『上天神遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方整備局
- 大久保徹也 2003『高松平野香東川下流域産土器の生産と流通』『初期古墳と大和の考古学』学生社
- 尾上元規（編）2006『栄光寺跡・栄光寺遺跡・立道遺跡・平岩古墳』岡山県埋蔵文化財調査報告199 岡山県教育委員会
- 北山健一郎・森下友子（編）1995『太田下・須川遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方整備局
- 菅本宏明 1986『池上北遺跡』『昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 高上 拓 2010『太田下・須川遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第124集 高松市教育委員会
- 橋本久和 1995『芥川遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第18冊 高槻市教育委員会
- 姫路市埋蔵文化財センター 2008『飯田・手柄地区発掘調査（第3次）調査成果報告会資料』
- 平井 勝（編）1995『百間川原尾島遺跡4』岡山県埋蔵文化財調査報告97 岡山県教育委員会
- 横田賢次郎・森田 勉 1978『大宰府出土の輸入陶磁器について』『九州歴史資料館研究紀要』4 九州歴史資料館

表4 竹の前遺跡 出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構	技法・他	形態の特徴	法量 (cm)			底径	残存	備考
						口徑	器高	腹径			
1	白磁	甕	1区 S001	内外面回転ナズ	断面三角形の玉縁の口縁	(16.6)	(3.5)	(3.5)	口縁周辺		
2	須恵器	甕	1区 S001	内外面回転ナズ、底部回転糸切り	平高台がやや突出	(1.9)	(4.0)	(4.0)	底部1/4		
3	赤生土器	甕	1区 S002-a	外面タタキ、内面	平底から内湾する体部、口縁は外反し端部高い	(8.6)	14.4	4.2	口縁1/3、底部完形		
4	赤生土器	甕	1区 S002-a	外面前方のみガキ、内面ヘラケズリ、口縁端部に退化凹縁	平底から内湾しつつ肩張り	(7.8)	7.3	(8.0)	口縁1/3、底部完形		口縁と底部の対称位置に黒底あり
5	赤生土器	甕	1区 S002-b	ヘラ掘り窪3条	直立する体部	(4.1)	(4.1)	(4.1)	体部小片		
6	赤生土器	甕	1区 S002-a	外部テアハケ	外傾しつつ立ち上がる口縁	(15.2)	(3.8)	(3.8)	口縁1/4		
7	赤生土器	甕	1区 S002-a	内面ヘラケズリ	口縁端部厚、両面取ける	(14.0)	(3.3)	(3.3)	口縁1/8		
8	赤生土器	甕	1区 S002-a	口縁端部退化凹縁2条	くの字形屈曲口縁の端部厚	(14.9)	(3.7)	(3.7)	口縁1/9		
9	赤生土器	甕	1区 S002-a	口縁端部退化凹縁2条、内面ヘラケズリ	縁や小に屈曲する口縁部厚	(14.8)	(6.6)	(6.6)	底部1/2		頸部屈曲内面に接合痕
10	赤生土器	甕	1区 S002-a	外面テアハケ、内面指オサエ後ナズ	口縁端部厚、両面凹縁か	(15.5)	(10.5)	(16.7)	口縁1/4、体部1/10		
11	赤生土器	甕	1区 S002-a	外面テアハケ、内面ヘラケズリ後ナズ	肩張り、口縁部厚さ端部に退化凹縁1条	(14.5)	(17.9)	(17.9)	口縁1/4強		
12	赤生土器	甕	1区 S002-a	外面テアハケ、内面ヨコハケ	平底から体部開く	(6.5)	(6.5)	(6.5)	3.1	底部完形	
13	赤生土器	甕	1区 S002-a	外面ヘラケズリ、内面板ナズで掘き取る	体部下部部分が内れふんばり気味の底部	(3.6)	(3.6)	(3.6)	4.5	底部完形	胎土の色調は濃岐に傾るが形態が異なる
14	赤生土器	甕	1区 S002-a	外面テアハケ、内面板ナズ粘土掘取り	平底から直立気味に開く	(4.9)	(4.9)	(4.9)	5.6	底部3/4	
15	赤生土器	甕	1区 S002-a	外面前方のみガキ、断面平突帯2条間に種状浮文8条(56単位、内面ヨコハケ後ナメハケ)	扁平なタマヤセ状の胴部に、細い頸部と細い胴部がとりつく	(13.1)	30.2	(13.1)	胴部4/5		外面の一部に黒底あり、内面に接合痕あり
16	赤生土器	甕	1区 S002-a	外面口縁端部凹縁2条以上、口縁ナズ、頸部上部に右上がりらせん状の沈積文、頸部下半タテハケ→板状原体の先端の輪突による右上がり斜縁文を土政→上平のらせん状沈積(たじし斜縁文)土条のみ沈積を切る。胴部ヨコハケ後板ナズ(本線2条以上)、内面口縁ナズ(本線2条以上)、内面指オサエ及び指オサエ一部ヘラケズリ及び斜縁、肩部指オサエ、胴部下斜縁方向のヘラケズリ	外反の著しい口縁、長い頸部、底部の胴部を持つ	(18.6)	(31.0)	(23.1)	口縁1/2、頸部1/2、体部1/6		頸部内面に接合痕、胴部内面残存下部に黒底あり

番号	種別	器種	遺構	技法 植	形態の特徴	法量 (cm)			備考
						口径	器高	腹径	
17	弥生土器	甗	1区 S002-n	外面口縁端ミガキの条線2条以上、口縁部は縁ミガキ、内面口縁部は縁ミガキ、下半は板状原体の条線2条、下半は板状原体の条線2条を別々に2段配置(上段が下段を切る)、口縁部境界に条線1条、内面口縁ミガキ(条線2条以上)、内面指オサエ及び指オサエ一部あり	外反の著しい口縁、長い頸部から底形の脚へと移行する	(18.2)	(20.2)		口縁7/8、腹部1/4 腹部内面に条線直
18	弥生土器	甗	1区 S002-n	脚部外面上半横方向のミガキ、下半はタテハケ、腹部付近はタテハケ、内面は上半が指オサエ、下半がヨコハケ	やや内側の著る縁部の体部、円筒状の底部	(20.1)	(24.0)	5, 8	体部1/2、底部完形
19	弥生土器	甗	1区 S002-n	外面口縁部タテハケ、外面体部ミガキ(上半斜め及び横方向、下半縦方向)、内面ヨコハケ、底部内面指オサエ	縁部の体部から直立気味の頸部を経て口縁が肥厚しつつ外反する	12.5	25.0	(6.4)	口縁1/2、体部ほぼ完形、底部1/2
20	弥生土器	甗	1区 S002-n	外面粗いミガキのようになり、内面ナデ	わずかに上げ気味の底部から体部が開く	(4.5)		8, 6	底部完形
21	弥生土器	甗	1区 S002-n	外面タテハケ後縁打用のミガキ、内面タテハケ後指オサエ	平底の底部から球形の体部	(8.2)		(6.0)	底部ほぼ完形
22	弥生土器	甗	1区 S002-n	外面縦方向のミガキ	平底の底部から体部が開く	(6.7)		(7.9)	底部2/3 黒底あり
23	弥生土器	甗	1区 S002-n	外面タテハケ、底部付近一部ケズリ、内面ナメハケ、内面指オサエ後ナデ	平底の底部から体部が開く	(9.1)		(8.1)	底部1/4
24	弥生土器	高杯	1区 S002-n	外面杯部、脚部ハケ調整後縦方向のミガキ、内面口縁部調整方向のミガキ、内面調整方向のミガキ、口縁元直線部あり	浅い杯部の唇部から口縁が立ち上がり気味に外反しつつ開く	23.1	(6.8)		口縁1/4、杯部1/2強
25	弥生土器	高杯	1区 S002-n	外面ハケ調整後斜め方向のミガキ、内面調整のためナデ	浅い杯部の唇部から口縁が立ち上がり気味に外反しつつ開く	(33.4)	(7.7)		杯部1/2弱
26	弥生土器	高杯	1区 S002-n	外面ハケ調整後縦方向のミガキ、内面斜り目、透かし口孔4ヶ所	ラッパ状に開く脚部	(5.1)			脚部ほぼすべて、脚部なし
27	弥生土器	高杯	1区 S002-n	外面縦方向のミガキ、内面ヨコハケ後ナデ消す、透かし口孔2ヶ所、下4ヶ所	脚部ラッパ状に開き、脚部を肥厚させ筒面	(10.7)		(11.3)	脚部ほぼすべて、脚部1/2

番号	種別	器種	遺構	技法・他	形態の特徴	寸法 (cm)			現存	備考
						口径	器高	胴径		
28	赤土器	高杯	1区 S002-a	外面タテハク後縦方向のミガキ、内面絞り目	中央の円柱状の胴部から、スカート状に膨らみ、胴部を加厚させ頸部に凹線1条	(19.3)	(18.8)	胴柱部のみ、底部わずか		
29	赤土器	器台	1区 S002-a	外面粗凹線5条	胴部即厚させ全面段ける	(4.0)	(28.8)	胴部部1/5		
30	赤土器	壺	1区 S002-a	外面細かいナメハク、内面へツケズリ	口縁薄配厚、退化凹線2条	(7.6)		口縁1/2、体部2/3	凹頂縁	
31	赤土器	壺	1区 S002-a	外面タテハク、内面細め方向ツケズリ	受け口状の口縁	(11.0)		口縁1/2	口縁～体部上半に黒底	
32	赤土器	壺	1区 S002-b	外面貼り付け突帯、突帯上に刻み目	胴から体部肩に内湾し移行	(3.3)		体部小片		
33	赤土器	壺	1区 S002	底部外面指子成形、内面板子	指子成形によりふんばる底部から肩部の体部が固く	(3.1)	5.0	底部完形	強く焼酎し劣化する	
34	赤土器	壺	1区 S002-a	内外面ともにナデ	若干上げ底気味の底部	(2.5)	4.8	底部ほぼ完形	強く焼酎し劣化する	
35	赤土器	壺	1区 S002-b	外面横方向のミガキ、内面ナデ	器壁のぶ厚い底部から固く	(3.5)	(10.6)	底部1/4		
36	赤土器	壺	1区 S002-b	外面タテハク	平底で傳手の底部	(4.8)	(10.2)	底部1/4		

VI 科学分析

1. 長越遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

長越遺跡は、兵庫県姫路市飯田に所在する。測定対象試料は、弥生時代末（庄内期）と考えられる堅穴住居跡床面出土炭化材 3 点 (No. 1 : IAAA-101165 ~ No. 3 : IAAA-101167) である (表 1)。

2 測定の意義

材の絶対年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸・アルカリ・酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、 0.001 M から 1 M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1 M に達した時には「AAA」、 1 M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

3 MV タンデム加速器 (NEC Pelletron 9SDH-2) をベースとした ^{13}C -AMS 専用装置を使用し、 ^{13}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0 yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素

と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{13}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{13}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{13}C 年代に対応する較正曲線上の暦年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{13}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない ^{13}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{13}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

壑穴住居跡床面出土炭化材の ^{13}C 年代は、SH01 出土の No. 1 が $1870 \pm 30\text{yrBP}$ 、SH06 出土の No. 2 が $1920 \pm 30\text{yrBP}$ 、SH09 出土の No. 3 が $2180 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は No. 1 が 79 ~ 209cal AD、No. 2 が 57 ~ 124cal AD、No. 3 が 353 ~ 193cal BC の間で、各々複数の範囲に分かれて示される。No. 1、No. 2 は弥生時代後期、No. 3 は弥生時代中期に相当する値となった。

一般に炭化材を試料とする場合、最外年輪部が伐採年、枯死年を示し、内側では年代値が遡ることを考慮する必要がある。また、No. 1、No. 2 が含まれる 1 ~ 3 世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal09 に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾壽 2009、坂本 2010 など)。その日本版較正曲線を用いて No. 1、No. 2 の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて 50% を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 1

測定番号	試料名	採取層位	試料形態	δ ¹³ C (‰)	δ ¹³ C 補正後		
					1σ (‰)	2σ (‰)	
IAAA-101165	No.1	遺構-SH01 層位:木皮	炭化材	AsA	-27.15 ± 0.58	1,870 ± 30	79.19 ± 0.26
IAAA-101166	No.2	遺構-SH06 層位:床面	炭化材	AAA	-22.42 ± 0.34	1,920 ± 30	78.72 ± 0.25
IAAA-101167	No.3	遺構-SH09 層位:床面	炭化材	AAA	-25.69 ± 0.28	2,180 ± 30	76.26 ± 0.24

[51753]

表 2 (1)

測定番号	δ ¹³ C 補正後		暦年較正年代 (BP)	1σ 暦年較正範囲		2σ 暦年較正範囲	
	Age (yrBP)	δ ¹³ C (‰)		1σ (calAD - 10calAD) (53.6%)	2σ (calAD - 22calAD) (95.4%)		
IAAA-101165	1,910 ± 30	78.84 ± 0.24	1,874 ± 26	79calAD - 10calAD (53.6%) 15calAD - 18calAD (6.7%) 19calAD - 209calAD (7.8%)	73calAD - 22calAD (95.4%)		

表 2 (2)

測定番号	δ ¹³ C 補正後		暦年較正年代 (BP)	1σ 暦年較正範囲		2σ 暦年較正範囲	
	Age (yrBP)	δ ¹³ C (‰)		1σ (calAD - 90calAD) (43.1%) 10calAD - 124calAD (26.7%)	2σ (calAD - 130calAD) (95.4%)		
IAAA-101166	1,880 ± 30	79.14 ± 0.24	1,921 ± 25	35calDC - 295calDC (48.2%) 229calBC - 20calDC (1.5%) 73calBC - 17calBC (4.0%)	36calDC - 274calDC (55.3%) 202calDC - 16calBC (40.1%)		

[50700]

文献

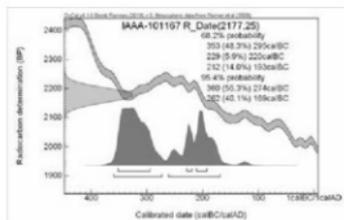
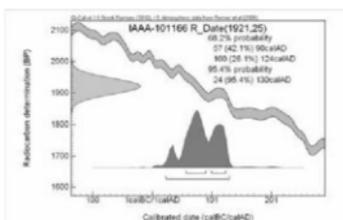
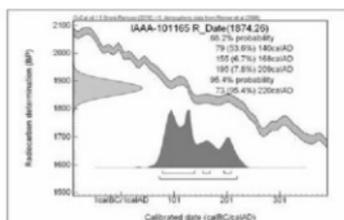
Stuiver M, and Polach H.A. 1977 Discussion : Reporting of 14C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360

Reimer, P.J, et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves. 0 -50,000 years cal BP, Radiocarbon 51 (4), 1111-1150

尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代, 弥生時代の考古学 1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235

坂本 稔 2010 校正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5 同年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株) 加速器分析研究所, 85-90



[参考] 暦年較正年代グラフ

2. 長越遺跡Ⅲ出土遺物の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、長越遺跡Ⅲにおいて検出された、古墳時代初期の住居跡より出土した住居構築材と考えられている炭化材についてその種類を同定し、当時の植物利用について検討する。また、古墳時代初期の遺物包含層より出土した土師器について、その材質（胎土）の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関する資料を作成する。特に、今回の土師器試料には、発掘調査所見により、讃岐産、河内産、吉備産、因幡産など、近畿や瀬戸内さらには山陰などの地域から搬入された可能性があると指摘された壺や甕の試料もあり、これらの所見と胎土との対応関係あるいは推定される地域性などを検討し、搬入品の可能性について考察する。

1. 炭化材の樹種同定

1. 試料

試料は全て炭化材で、SH01 から出土した壁材など4点、SH06 の4点、SH09 の1点、旧河道の1点の合計10点である。このうち、SH06 の試料4点は、1点が垂木?と表記されている他は、全て同一の表記であったため、1-3の仮番号を付して区別している。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を制作し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材

は、針葉樹2分類群（スギ・ヒノキ）

と広葉樹4分類群（コナラ属コナラ亜

属クスギ節・コナラ属コナラ亜属コナ

ラ節・コナラ属アカガシ亜属・スダジ

イ）に同定された。なお、SH06 の垂木?

は、道管が認められることから広葉樹

であるが、保存が悪く道管配列等が観察できないため、種類不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材

表1. 樹種同定結果

遺構	位置	番号	樹種
SH01	壁		コナラ属コナラ亜属クスギ節
	雨束柱		コナラ属コナラ亜属コナラ節
	雨西柱		コナラ属アカガシ亜属
	北側垂木		ヒノキ
SH06	垂木?		ヒノキ
		仮1	ヒノキ
		仮2	ヒノキ
		仮3	スダジイ
SH09			スギ
旧河道			コナラ属アカガシ亜属

部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型~トウヒ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus subgen. Quercus sect. Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus subgen. Quercus sect. Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・スタジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイ属

環孔材放射孔材で、道管は接線方向に1~2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高。

4. 考察

SH01では、壁材と考えられる炭化材がクヌギ節、柱と考えられる炭化材がコナラ節とアカガシ亜属、垂木と考えられる炭化材がヒノキに同定された。クヌギ節、コナラ節、アカガシ亜属は、いずれも重硬で強度が高い材質を有し、加工はやや困難な部類に入る。一方、ヒノキは、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、早材部・晩材部の材質差も少なく、加工は容易である。SH01では壁材や柱材には強度の高い広葉樹、垂木には耐水性・加工性の高い針葉樹が利用されていたことが推定される。

SH06では、垂木?に広葉樹、出土位置不明の3点にヒノキとスタジイが認められた。スタジイは、比較的強度が高いが、加工はやや困難で、保存性も低いとされる。SH01と利用される種類は似ているが、垂木?に広葉樹が利用されており、利用方法・部位に違いが認められる。

SH09は、針葉樹のスギが確認された。スギは、ヒノキと同じく木理が通直で割裂性が高く、加工は容易であるが、ヒノキに比べて早材部・晩材部の材質差が大きく、その分加工性も低い。出土状況は不明であるが、SH01やSH06とは異なる種類が利用されていたことが推定される。

同時期の住居跡出土炭化材については、大中遺跡で樹種同定が行われており、クヌギ節やコナラ節の利用が確認されているが、スギやヒノキ等の針葉樹類は確認されていない(高橋 2007)。クヌギ節やコナラ節の利用は、本遺跡の結果とも類似する。一方、大中遺跡では、常緑広葉樹がツバキ属1点のみであり、周囲が二次林化していた可能性が指摘されている。今回の結果では、暖温帯常緑広葉樹林を構成

するアカガシ亜属やスダジイと、二次林を構成するクスギ節やコナラ節が確認され、周囲に常緑広葉樹と落葉広葉樹が分布していたことが推定される。

針葉樹については、玉津田中遺跡の弥生時代後期～古墳時代の加工材や盤脚部にヒノキが確認された事例があるが、同時期の建築部材に確認された事例はみられない(島地, 1996)。今回の結果は、ヒノキが建築部材にまで利用されたことを示す結果として重要である。また、スギについては、丹波地域を中心に木製品に利用された例が多く報告されているが、播磨地域では内陸部に位置する下三草・諏訪ノ下遺跡で堅穴住居跡内から出土した用途不明の炭化材に1点確認された例が知られているのみである(島地・林, 1990; 嶋倉, 1991; 伊東, 2006)。今回の結果は、同時期のスギ材利用を考える上でも重要な資料である。

II. 土器の胎土分析

1. 試料

試料は、古墳時代初頭とされる遺物包含層から出土した土器器片20点である。器種の内訳は、播磨産の所見がある庄内甕が3点、(No. 1～3)、同所見の甕および壺が2点ずつ (No. 4、5とNo. 6、7)、同所見の高坏および小形丸底壺が3点ずつ (No. 8～10とNo.11～13) あり、讃岐型播磨産とされた壺が1点 (No.14)、讃岐産とされた壺が3点 (No.15～17)、河内産、吉備産、因幡産とされた壺が、それぞれ1点ずつ (No.18, 19, 20) あり。これらを一覧表にして表2に示す。

2. 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲

表2. 胎土分析試料一覧および胎土分類

No.	種別	器種	備考	胎土分類																
				鉱物・岩石組成						粒径組成						砂屑物				
				A2	Fs	Cs	Cb	Cte	Cf	e	m	f	sf	cs	I	II				
1	土師器	庄内甕	播磨産																	
2	土師器	庄内甕	播磨産																	
3	土師器	庄内甕	播磨産																	
4	土師器	壺	播磨産																	
5	土師器	壺	播磨産																	
6	土師器	壺	播磨産																	
7	土師器	壺	播磨産																	
8	土師器	高坏	播磨産																	
9	土師器	高坏	播磨産																	
10	土師器	高坏	播磨産																	
11	土師器	小型丸底壺	播磨産																	
12	土師器	小型丸底壺	播磨産																	
13	土師器	小型丸底壺	播磨産																	
14	土師器	壺	讃岐型, 播磨産																	
15	土師器	壺	讃岐産																	
16	土師器	壺	讃岐産																	
17	土師器	壺	讃岐産																	
18	土師器	壺	河内産																	
19	土師器	壺	吉備産																	
20	土師器	壺	因幡産																	

鉱物・岩石組成の各分類内容は本文を参照されたい。

砂全体の粒径組成においてピークを構成する粒径: c:粗粒砂 m:中粒砂 f:細粒砂 sf:極細粒砂 cs:超細シルト ●:第二のピーク

砂屑物の割合 I:10%未満 II:10%以上

内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3. 結果

観察結果を表2、図1～3に示す。鉱物片では、ほぼ全ての試料で石英と斜長石を主体とするが、試料によってはそれらに加えて角閃石を多く含む組成やカリ長石を少量伴う組成などが認められる。また、岩石片では、凝灰岩を主体とする組成と花崗岩類を主体とする組成が認められる。これまでの兵庫県下の遺跡出土土器胎土分析において設定した鉱物片および岩石片の種類構成による胎土分類では、A類からK類までの種類が設定され、さらに、各種類について副次的な鉱物や岩石の種類によって細分もしている。今回の結果も、その基準に従って分類してみると以下ようになる。

No.2～No.10、12、14は、鉱物片では石英または斜長石を主体とし、微量のカリ長石を伴うことが特徴である。岩石片では、凝灰岩を比較的多く含むことが特徴であり、それ以外に頁岩、流紋岩・デイサイト、花崗岩類、変質岩、珪化岩および火山ガラスという多種類の岩石片および碎屑物を少量または多量含むことが特徴である。凝灰岩を多く含む組成は、これまでの分類のF類に相当する。F類は、これまでのところ、F1類からF6類まで細分されているが、凝灰岩以外に多種類の岩石片および火山ガラスを伴う組成は、F6類に分類される。なお、F類の凝灰岩および流紋岩・デイサイトは結晶質であることも重要な特徴である。

No.11とNo.13については、凝灰岩を含まないことからF類に分類することはできない。これらのうち、No.13は、頁岩と流紋岩・デイサイトおよび花崗岩類の岩石片を少量ずつ含み、さらに火山ガラスを比較的多く含んでいる。このような岩石片組成は、これまでの分類のA2類に相当する。No.11は、岩石片は多結晶石英のみであることから、これまでの分類基準を見出すことはできないが、微量ながらも火山ガラスを含むことから、No.13と同様のA2類か上述した多数の試料と同様のF6類かのいずれかである。後述する砂分全体の粒径組成も考慮すれば、No.11はF6類よりもA2類に近い分類であると判断される。

No.1とNo.15～20は、いずれも岩石片の種類構成では花崗岩類を多く含む組成となる。このような組成は、これまでの分類のC類に相当する。C類については、供伴する鉱物片のうち、角閃石の多いものをC1類とし、黒雲母の多いものをC2類としているが、No.20以外の試料については、いずれも角閃石の多い特徴が認められることから、C1類に分類される。さらに、今回の試料では、C1類の中でも、供伴する鉱物片と花崗岩類以外の岩石片の種類構成に、比較的確かな違いが認められることから、C1類をC1a、C1b、C1cの各類に細分した。C1a類は、鉱物片の組成において、石英と斜長石は同量あ

表3 薄片観察結果(1)

%	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計							
		鉱物片							砂石片							その他										
		石英	斜長石	基岩礫石	角閃石	酸化角閃石	綠泥石	高雲母	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類	斑岩類		珪長岩	石英片	変質岩	珪化岩	火山ガラス	砂質シルト塊	凝物片
1	細礫																									0
	極粗砂	1																								1
	粗砂	3	1		2																					8
	中粒砂	8	2	2	2		1									2										17
	細粒砂	6	2	4	2		3																			19
	極細粒砂	7	2	4	6																					19
	粗粒シルト	6		4	1																					11
中粒シルト																									0	
高質																										206
孔隙																										4
2	細礫																									0
	極粗砂									2	3											1				6
	粗砂	8		1					4	10	2	3		2	3	4					2	2	2			43
	中粒砂	9		3					1	8	1			2	1	1							4	1		31
	細粒砂	3		1						1												1				6
	極細粒砂	4		2																						6
	粗粒シルト	2																						1	3	6
中粒シルト																									0	
高質																										287
孔隙																										8
3	細礫																									0
	極粗砂										4															4
	粗砂	3								2	8												1	2		16
	中粒砂	3		1							3					1							1	1		10
	細粒砂	2	1	1							2	1														7
	極細粒砂	2		1																				1		4
	粗粒シルト	2		1																						3
中粒シルト			1																						1	
高質																										362
孔隙																										3
4	細礫																									0
	極粗砂	2									1															3
	粗砂										1	5			1									2		9
	中粒砂			1									1													2
	細粒砂	2									1												1	1		5
	極細粒砂	2		3			1																	3		9
	粗粒シルト	2		1																						3
中粒シルト																									0	
高質																										233
孔隙																										7
5	細礫																									0
	極粗砂	2									1						2							1		6
	粗砂	6									6	1			1	1	1					1	6			23
	中粒砂	3		2								1			1									3		10
	細粒砂	2	1		1							1														10
	極細粒砂	12	1	1												2								3		17
	粗粒シルト	8		6												3										15
中粒シルト	5														1										6	
高質																										280
孔隙																										4

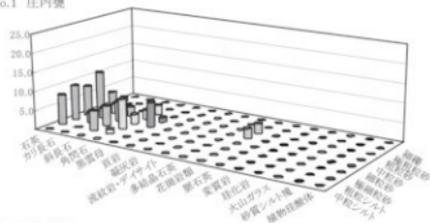
表3 薄片観察結果(3)

%	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計								
		鉱物片							岩石片							その他											
		石英	カリ石	黒長石	角閃石	輝石	緑泥石	酸化角閃石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デブサイト	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類		凝灰岩	閃緑岩	ホルンフェルス	頁岩類	炭化岩	火山ガラス	砂質シルト塊	植物性残体
11	砂																										
	細砂																										0
	極細砂																										0
	粗砂																							1			1
	中砂																										0
	細砂																										0
	極細砂	4		1													2							1			8
粗砂シルト	8	1	3																						1	13	
中砂シルト	1																									1	
高質																										217	
孔隙																										6	
12	砂																										
	細砂																										0
	極細砂															1											2
	粗砂	2	1									6					1	1			1	1			1		14
	中砂			1																		1		2			4
	細砂			1							1												6				8
	極細砂					1																					2
粗砂シルト	3		2																					1		6	
中砂シルト																										0	
高質																										211	
孔隙																										2	
13	砂																										
	細砂																										0
	極細砂																										0
	粗砂	1															1										2
	中砂	2																						1			3
	細砂	5	1	2						1	5		3														11
	極細砂	6	3								2																12
粗砂シルト	8		3																					1		11	
中砂シルト	2		1																							3	
高質																										311	
孔隙																										3	
14	砂																										
	細砂																										0
	極細砂	2																									6
	粗砂	11	2								3	21	3	1	7	3											39
	中砂	17	5								3	23	1	6	6	1	1	1	2	10	2						73
	細砂	11	6								5	4			8									1			31
	極細砂	11	1	2									1														15
粗砂シルト	8		1																					1		12	
中砂シルト	4																									4	
高質																										651	
孔隙																										30	
15	砂																										
	細砂																										0
	極細砂	1	2	1										3													6
	粗砂	6	5	6			1						1			1	7							1	1		29
	中砂	20	1	17	13		2				2		1	1		2	8										67
	細砂	10	2	28	18		1	1								1	1										62
	極細砂	6		12	8		1																				27
粗砂シルト	1		6	2																						9	
中砂シルト																										0	
高質																										657	
孔隙																										18	

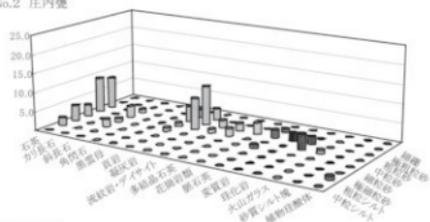
表3 薄片観察結果(4)

No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計											
		鉱物片										岩石片							その他										
		石英	多角石英	細石英	原形石英	角閃石	輝石	緑泥石	輝石	高雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩・ポプサイ	安山岩	玄武岩		多結晶石英	花崗岩類	凝結岩	閃緑岩	ホルンフェルス	珪石類	変質岩	柱状岩	火山岩	砂質シルト塊	珪質シルト塊
16	総数																												0
	極細粒砂		1										1																2
	細粒砂	14	4	4	2			1				1	3	2			2	6						1		2		62	
	中粒砂	15	5	9	10			1	1		2		4	2				9								1		39	
	粗粒砂	6	3	18	9			5	4		2		1	1				2										51	
	極粗粒砂	6	8		1			2																				17	
	粗粒シルト	3	2		1																							6	
	中粒シルト																											0	
	高質																												486
孔隙																												12	
17	総数																1											1	
	極細粒砂				1	1											3											7	
	細粒砂	1	7	1	2												8											19	
	中粒砂	2	68	1	8													9	1									68	
	粗粒砂	4	46	2	9			2																				63	
	極粗粒砂	1	22		3																							26	
	粗粒シルト	1	11		1																							13	
	中粒シルト	1	2																									3	
	高質																												391
孔隙																												3	
18	総数																											0	
	極細粒砂																							1				1	
	細粒砂	1	4		4			2									1							1				2	
	中粒砂	2	11		7		3										4											15	
	粗粒砂	2	11		7		3																					23	
	極粗粒砂		5		7		2																					14	
	粗粒シルト		2				1																					3	
	中粒シルト																											0	
	高質																												236
孔隙																												3	
19	総数																											0	
	極細粒砂	1																3										4	
	細粒砂	11	2	1														8										22	
	中粒砂	13	9	15	1													9						1				47	
	粗粒砂	8	9	7	4																							30	
	極粗粒砂	3	2	12	1		1	1																				20	
	粗粒シルト	5	7																							1	13		
	中粒シルト	1	1																									2	
	高質																												476
孔隙																												14	
20	総数																											0	
	極細粒砂		1	1														1										3	
	細粒砂	3	2															8										13	
	中粒砂	20	5	9				1										5										40	
	粗粒砂	35	2	7			1						1			2	1											49	
	極粗粒砂	11	2	11			1	1																				26	
	粗粒シルト	4	9																									13	
	中粒シルト		1																									1	
	高質																												476
孔隙																												12	

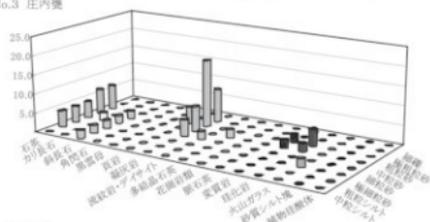
No.1 庄内糞



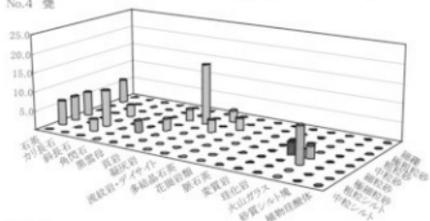
No.2 庄内糞



No.3 庄内糞



No.4 糞



No.5 糞

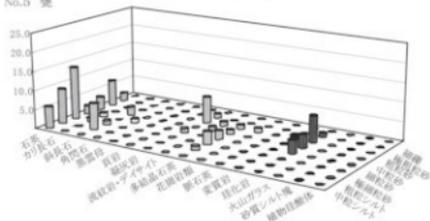
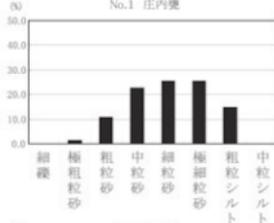
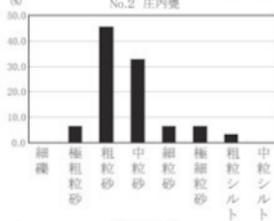


図1.各粒度層における鉱物・岩石出現頻度(1)

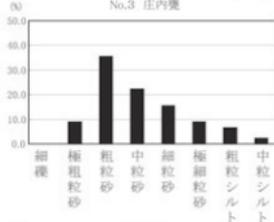
No.1 庄内糞



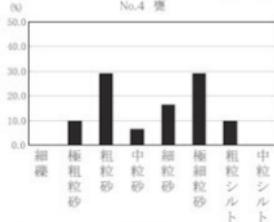
No.2 庄内糞



No.3 庄内糞



No.4 糞



No.5 糞

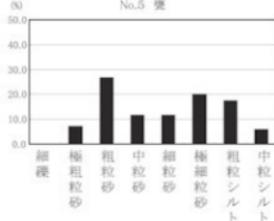


図2.胎土中の砂の粒径組成(1)

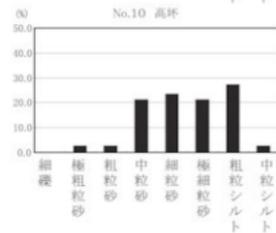
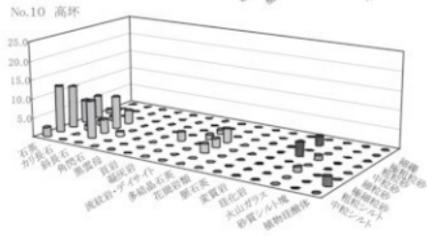
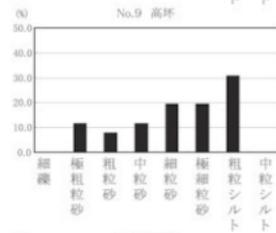
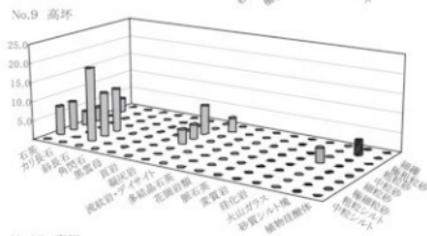
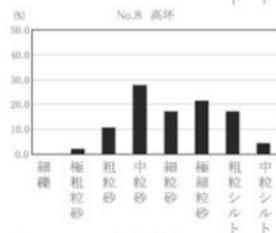
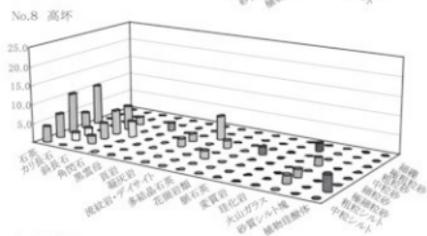
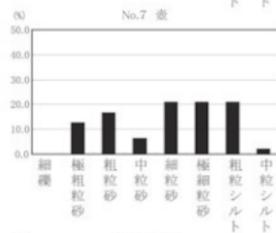
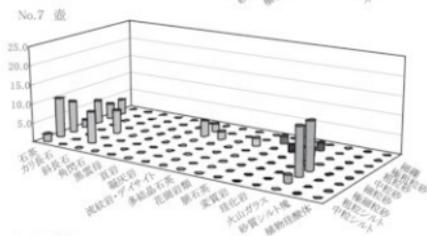
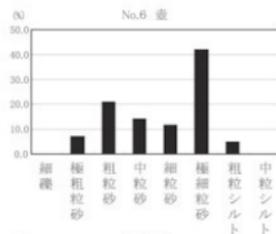
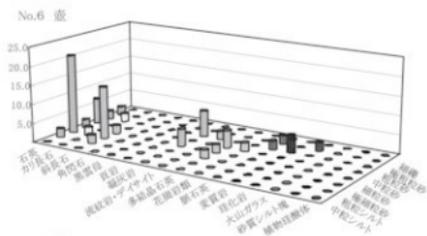
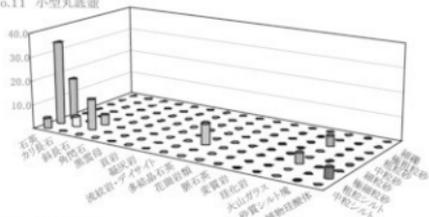


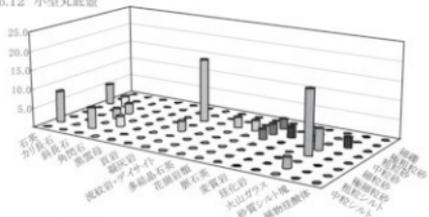
図1.各粒度層における鉱物・岩石出現頻度(2)

図2.胎土中の砂の粒徑組成(2)

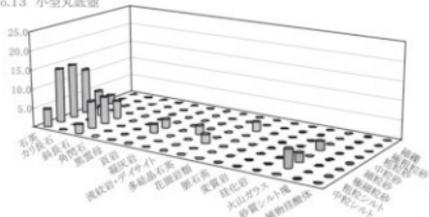
No.11 小型丸底甕



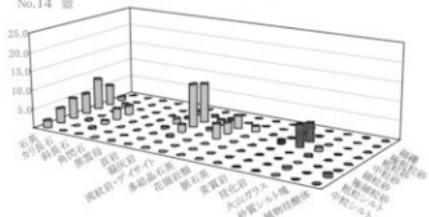
No.12 小型丸底甕



No.13 小型丸底甕



No.14 甕



No.15 甕

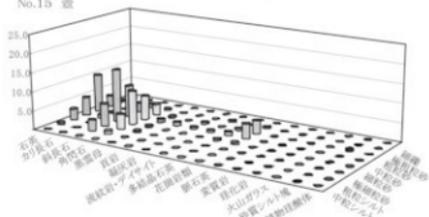
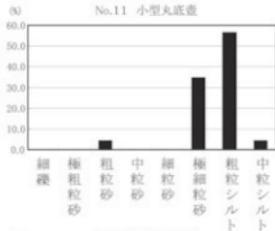
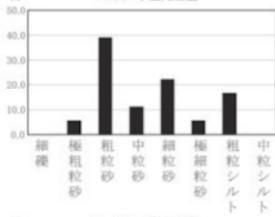


図1.各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(3)

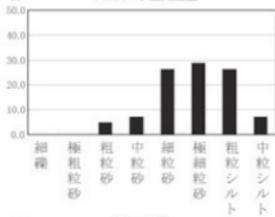
No.11 小型丸底甕



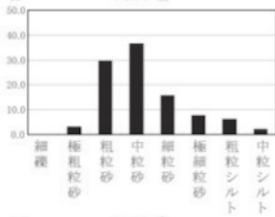
No.12 小型丸底甕



No.13 小型丸底甕



No.14 甕



No.15 甕

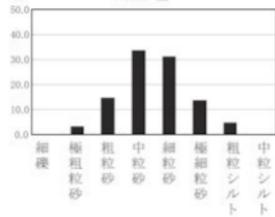


図2.胎土中の砂の粒径組成(3)

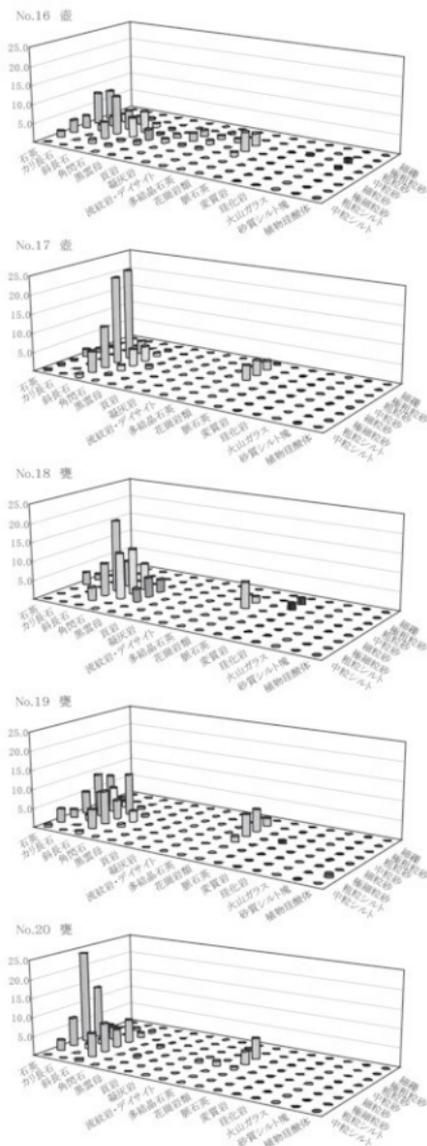


図1.各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(4)

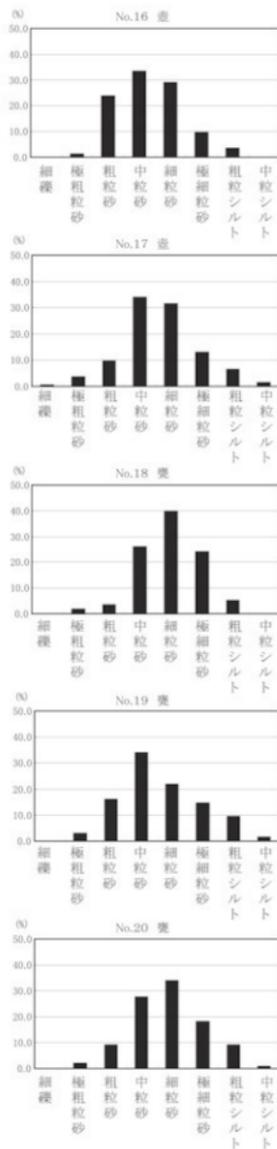


図2.胎土中の砂の粒徑組成(4)

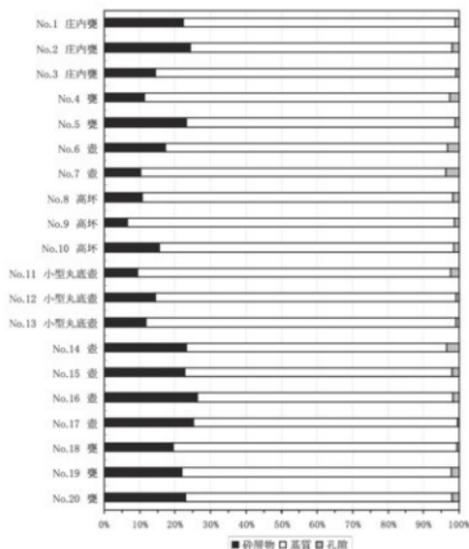


図3 粉屑物・基質・孔隙の割合

るいは斜長石の方がやや少なく、少量のカリ長石を伴うことが特徴であり、岩石片は花崗岩類以外はほとんど含まれないことが特徴となる。これに分類される試料は、No. 1 と No.19 である。C1b 類は、花崗岩類以外にも頁岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイトなどの岩石片を微量伴うことを特徴とし、No.15 と No.16 がこれに分類される。C1c 類は、鉱物片の組成において石英が少量しか含まれず、カリ長石が含まれないのに対して斜長石が多量に含まれることが特徴であり、また試料によっては微量の単斜輝石も含まれる。岩石片は花崗岩類以外はほとんど含まれないことが特徴となる。これに分類される試料は、No.17 と No.18 である。

No.20 は、酸化角閃石と黒雲母がともに極めて微量であるため、C1 類にも C2 類にも分類されない。特徴としては、鉱物片では石英の方が斜長石よりもかなり多く、少量のカリ長石を伴い、岩石片では花崗岩類以外に極めて微量ながらも流紋岩・デイサイトを伴っている。これまでの C 類の分類では、C6 類まで設定されているが、このような特徴は、いずれにも該当しないため、ここで C7 類を設け、No.20 の分類を C7 類とする。

次に各試料の砂分全体の粒径組成をみると、モードを示す粒径は試料によりこととなり、2つのピークを持つ双峰性のヒストグラムを示す試料も認められる。ここでは、モードを示す粒径とモードに次いで多い粒径の2つまたは3つの粒径の組み合わせを示すことで各試料の特徴とすると、以下のような状況が認められる。

粗粒シルトと極細粒砂：No. 9、11

粗粒シルト～細粒砂：No. 7、10、13

極細粒砂と細粒砂：No. 1

極細粒砂と中粒砂：No. 8

極細粒砂と粗粒砂：No. 4、5、6

細粒砂と中粒砂：No.15～20

細粒砂と粗粒砂：No.12

中粒砂と粗粒砂：No. 2、3、14

砕屑物・基質・孔隙の割合では、砕屑物の割合が20%未満と20%以上で2分することができる。前者をⅠ類とし、後者をⅡ類とすると、今回の試料では以下の通りに分けられる。

Ⅰ類：No. 3、4、6～13

Ⅱ類：No. 1、2、5、14～20

なお、上述した各試料の鉱物・岩石組成、粒径組成および砕屑物の量比における各分類結果は、一覧にして表2に併記する。

4. 考察

(1) 胎土の由来と発掘調査所見による産地の可能性

今回の試料では、全試料について、発掘調査所見によりその産地が推定されている。本分析法により産地を検討する場合、鉱物・岩石組成に着目し、その組成から推定される地質学的背景を有する地域が、産地として推定されている地域内に認められるか否かということから考察することができる。今回の分析では、細分類も含めれば、6種類もの組成を認めることができた。以下に、これら各種類について鉱物や岩石の由来する地質とその分布域について述べる。

最も多くの試料が分類されたF6類は、当社が以前に分析した飯田遺跡出土の庄内式とされた甕、甕、製塩土器の胎土と同様の分類である。これらの試料は、発掘調査所見によりいずれも地元産と考えられていたが、F6類の鉱物・岩石組成も飯田遺跡周辺の地質学的背景と整合すると考えられた。すなわち、結晶質の凝灰岩や流紋岩・デイサイトは、姫路市内に分布する丘陵を構成している中生代白亜紀の相生層群の中上部亜層群に相当する伊勢層に由来し、花崗岩類は、飯田遺跡至近の北西方の丘陵の北側に分布する丘陵（桜山貯水池を囲んでいる）を構成している白亜紀・古第三紀の斑状角閃石黒雲母花崗閃緑岩（桜山岩体）に由来し、さらに火山ガラスは、姫路市中心市街地を取り囲む丘陵の縁辺に形成された山麓緩斜面堆積物中に挟まれるテフラ層に由来すると考えられた（以上、猪木（1981）、日本の地質「近畿地方」編集委員会（1987）、山元ほか（2000）の地質記載参照）。今回の分析でも、F6類に分類された試料は、飯田遺跡の位置を含む姫路市およびその周辺域で作られた可能性が高いと考えられる。F6類に分類された試料は、庄内甕のNo. 2、3、No. 4～10までの甕、壺および高坏、小形丸底壺のNo.12、叢岐型の壺のNo.14であり、これらの発掘調査所見による産地は全て播磨産となっている。したがって、F6類に分類された試料については、発掘調査所見と胎土分析所見とが一致する結果になったと言える。

発掘調査所見により播磨産とされた試料の中には、A2類が2点、C1a類も1点認められた。A2類については、F6類との違いは凝灰岩の有無のみであり、それ以外の岩石片の組成は、頁岩や流紋岩・デイサイト、花崗岩類、火山ガラスを含むことまではほぼ同様である。したがって、A2類についても、その地質学的背景は、F6類と同様であると考えられる。両者の違いは、砂あるいは粘土を採取した場所の背後の丘陵を構成している伊勢層が凝灰岩の少ない層位であったことなどに起因すると考えられる。

A2類に分類されている試料は、No.11と13の2点の小型丸底壺であるが、2点ともに播磨産とされている。すなわち、A2類の試料も、発掘調査所見が胎土分析により支持された。なお、F6類に分類された試料とは、材料となった土や粘土の採取地がおそらく異なっていた可能性が高いと考えられ、その場合、製作地も異なっていたと考えられる。

C1a類は、播磨産とされたNo.1の庄内壺のほかに、吉備産とされたNo.19の壺の胎土も分類されている。現時点では、発掘調査所見による吉備とは旧吉備国のどこまでの範囲を示しているかは不明であるが、例えば地理的には岡山県瀬戸内沿岸地域を想定した場合、この地域には広い範囲で花崗岩類の分布が認められている（松浦ほか（2002）、日本の地質「中国地方」編集委員会編（1987）など）。しかし、この花崗岩類は、主に黒雲母花崗岩（有色鉱物は黒雲母が多く、斜長石よりもカリ長石の方が多い）から構成されていることにより、C1a類の由来する地質とはならない。したがって、No.19の吉備産という所見については、分析結果からは支持されない。一方、No.1の庄内壺はF6類すなわち地元産とされたNo.2や3と同様に播磨産という所見が示されている。C1a類から推定される花崗岩類としては、カリ長石よりも斜長石が多く、有色鉱物は角閃石を主体として黒雲母を伴う、角閃石黒雲母花崗閃緑岩などがあげられる。この岩質は、前述した板山岩体の岩質とほぼ同様であることから、No.1の播磨産とされた所見の方は、分析結果と整合すると言うことができる。おそらく、板山岩体からなる丘陵内の谷内の堆積物を想定すれば、C1a類のような胎土となる可能性がある。このことは、No.19の壺についても同様であるから、分析結果からは、No.19の壺は吉備産よりも播磨産である可能性の方が高いと考えられる。

C1b類は、No.15とNo.16のともに讃岐産とされた壺が分類された胎土である。C1b類の特徴のうち、花崗岩類以外に相伴する鉱物の種類は、F6類やA2類とほぼ同様である。また、C1b類の花崗岩類もその鉱物組成から角閃石黒雲母花崗閃緑岩であることが推定される。これらのことから、C1b類についても、その地質学的背景は、F6類やA2類とほぼ同様であると言える。すなわち、C1b類の試料も、姫路市および周辺域で作られた可能性が高いと考えられる。なお、讃岐産といった場合の讃岐の地域を讃岐平野とした場合、その主な地質学的背景は、中生代白亜紀後期の領家帯の花崗岩類と新生代第三紀中新世の流紋岩・デイサイト火砕岩および安山岩火砕岩・溶岩からなる讃岐層群である（日本の地質「四国地方」編集委員会編、1991；牧本ほか、1995；松浦ほか、2002）。領家帯の花崗岩は、角閃石黒雲母花崗閃緑岩を主要な岩相の一つとするが、同程度に黒雲母花崗岩も主要な岩相となっており、さらに片麻状（圧力により変形した構造）を呈することも特徴とされている。C1b類の岩石片の種類構成は、上述した讃岐平野の地質学的背景とは一致せず、さらにC1b類の花崗岩類の岩石片には顕微鏡下でも変形構造は認められなかった。これらのことから、C1b類に分類されたNo.15と16が讃岐（平野）産である可能性は低いと考えられる。

C1c類は、讃岐産とされたNo.17の壺と河内産とされたNo.18の壺が分類された胎土である。C1c類の鉱物組成から推定される花崗岩類としては、斜長石が突出して多く、石英は微量、カリ長石は含まれず、有色鉱物では角閃石が多く、微量の黒雲母を伴うことから、角閃石黒雲母トータル岩または同石英閃緑岩があげられる。なお、No.17の単斜輝石も花崗岩類に由来する可能性が高い。このような岩相の花崗岩類は、上述した板山岩体、岡山県瀬戸内沿いの花崗岩類、讃岐平野の領家帯の花崗岩類のいずれにも含まれていない。播磨平野周辺域でこのような岩石の分布をみると、小豆島南東部の坂手湾を囲む北側および東側の両半島のほぼ全域にわたって分布する中生代白亜紀の塩基性岩類のなかに、同様の岩

石の分布が認められている。C1c 類は、供伴する岩石も認められないことから、例えば、この半島内で採取された砂あるいは粘土の鉱物・岩石組成は C1c 類のようになる可能性はある。しかし、現時点では、No.17 と No.18 の壺を小豆島産と特定するまでには至らない。自然堆積物の確認といった分析による検証も必要であるが、小豆島における土器の産出状況まで含めて検討する必要があると考えられる。なお、河内地域の主要な地質学的背景は、領家帯の花崗岩類であることから、No.18 が河内産である可能性は低いと考えられる。

C7 類は、因幡産とされた No.20 の壺が分類された胎土である。C7 類の鉱物組成から推定される花崗岩類としては、角閃石黒雲母または黒雲母角閃石花崗閃緑岩があげられる。また、流紋岩・デイサイトが供伴することも C7 類の特徴である。発掘調査所見で示された因幡産の因幡という地域を鳥取平野とした場合、鳥取平野の主要な地質学的背景は、中国山地東北部に分布する山陰帯と呼ばれる花崗岩類である。この花崗岩類は、主に黒雲母花崗岩と角閃石黒雲母花崗閃緑岩から構成されている（日本の地質「中国地方」編集委員会編、1987）ことから、花崗岩類の種類からは、C7 類は鳥取平野に由来する可能性があるように見えるが、しかし、流紋岩・デイサイトの分布が鳥取平野周辺にはほとんど認められない。したがって、現時点では C7 類に分類された No.20 が因幡産であることは、分析からは支持されない。また、C7 類の想定される地域も、現時点では具体的に示すことはできない。

(2) 胎土と器種との対応関係

胎土と器種との関係では、粒径組成および砕屑物の割合と器種との間に有意と考えられる対応関係が認められる。以下に器種ごとに述べる。

1) 庄内壺

鉱物・岩石組成で C1a 類 1 点と F6 類 2 点に分かれたが、粒径組成でも、モードの粒径と 2 番目に多い粒径の組み合わせ（以下粒径組み合わせとする）をみると、C1a 類の試料は極細粒砂・細粒砂、F6 類の試料は粗粒砂・中粒砂に別れ、F6 類の方が砂が全体的に粗粒傾向であることが窺える。なお、F6 類の庄内壺は、下記の播磨産とされた壺、壺、高坏、小型丸底壺に比べても粗粒傾向であると言える。

2) 播磨産とされた壺、壺、高坏、小型丸底壺

壺は 2 点ともに極細粒砂・粗粒砂であり、同様の組み合わせは No. 6 の壺にも認められる。また、F6 類の小型丸底壺も細粒砂・粗粒砂を示し、これらは他の壺や高坏および他の小型丸底壺に比べて粗粒傾向を示す。No. 7 の壺と 3 点の高坏および A2 類に分類された No.11 と 13 の小型丸底壺は、粒径組み合わせが中粒砂以下であり、細粒傾向の胎土であると言える。

3) 讃岐型で播磨産とされた壺、讃岐産とされた壺、河内産・吉備産・因幡産とされた壺

讃岐型で播磨産とされた壺は中粒砂・粗粒砂であり、同様の組み合わせは、上述した播磨産とされた庄内壺にも認められる。讃岐型で播磨産とされた壺以外の試料はいずれも細粒砂・中粒砂である。この組み合わせは、上述した播磨産とされたいずれの試料にも認められない。前述したように、これらの試料の中には、播磨産の可能性のあるものも含まれているが、砂の粒径組成は異なっている。この砂の粒径組成の違いが土器の質感の違いとなって、発掘調査所見では産地の違いとして示された可能性があると考えられる。

引用文献

林 昭三、1991、日本産木材 顕微鏡写真集、京都大学木質科学研究所。

- 猪木幸男, 1981, 20 万分の 1 地質図幅「姫路」, 地質調査所。
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京大木質科学研究所, 81-181。
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京大木質科学研究所, 66-176。
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京大木質科学研究所, 83-201。
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京大木質科学研究所, 30-166。
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京大木質科学研究所, 47-216。
- 伊東隆夫, 2006, 横田遺跡出土木材の樹種同定, 「横田遺跡・横田北古墳群発掘調査報告書」, 兵庫県文化財調査報告第 303 冊, 兵庫県教育委員会, 96-102。
- 牧本 博・利光誠一・高橋 浩・水野清秀・駒澤正夫・志和龍一, 1995, 20 万分の 1 地質図幅「徳島」, 地質調査所。
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察-岩石学的・堆積学的による-, 日本文化財科学会第 16 回大会発表要旨集, 120-121。
- 松浦浩久・栗本史雄・吉田史郎・齋藤文紀・牧本 博・利光誠一・巖谷敏光・駒澤正夫・広島俊男, 2002, 20 万分の 1 地質図幅「岡山及九尾」, 産業技術総合研究所地質調査総合センター。
- 日本の地質「中国地方」編集委員会, 1987, 日本の地質 7 中国地方, 共立出版, 290p。
- 日本の地質「近畿地方」編集委員会, 1987, 日本の地質 6 近畿地方, 共立出版, 297p。
- 日本の地質「四国地方」編集委員会, 1991, 日本の地質 8 四国地方, 共立出版, 266p。
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification]。
- 嶋倉巳三郎, 1991, 下三草・諏訪ノ下遺跡出土の木材樹種, 「下三草・諏訪ノ下遺跡」, 加東郡教育委員会, 66-69。
- 島地 謙, 1996, 玉津田中遺跡出土木製品の樹種, 「神戸市西区 玉津田中遺跡 -第 6 分冊- (総括編) 田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」, 兵庫県文化財調査報告第 135-6 冊, 兵庫県教育委員会, 15-49。
- 島地 謙・林 昭三, 1990, 上板井遺跡出土木器の樹種, 「上板井遺跡発掘調査報告書」, 兵庫県文化財調査報告第 76 冊, 兵庫県教育委員会, 79-86。
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p。
- 高橋 敦, 2007, 大中遺跡出土炭化材の樹種, 「大中遺跡Ⅲ 兵庫県立考古博物館建設に伴う大中遺跡 (第 22 次) 発掘調査報告書」, 兵庫県文化財調査報告第 319 冊, 兵庫県教育委員会, 61-64。
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]。
- 山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和, 2000, 龍野地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅), 地質調査所, 66p。

Ⅶ おわりに

長越遺跡Ⅲの調査は2009年2～3月に手柄に位置する竹の前遺跡と合わせて実施した。調査面積440㎡と狭小であったが多大な成果を挙げることが出来た。調査地の北半が集落域、南半が旧河道であった。住居跡は多くの切り合いがあり、人口集中部分であったことが把握された。堅穴住居跡14棟、落ち込み3基、土坑4基、溝18条とピット数基が検出された。

長越遺跡は1956(昭和31)年に増田重信氏によって飯田集落の下水管理設工の際に土器が採集され知られることとなった遺跡である。著名になったのは姫路バイパス建設に伴って全面調査が実施され、多量の庄内甕を保有する古墳時代初期の集落跡であることが明らかになってからである。その調査は、昭和48年度に確認調査が鎌木義昌氏を担当者として瀬戸内考古学研究所によって実施され、その結果を受けて、姫路バイパス本線部分の全面調査が昭和49・50年度に兵庫県教育委員会を調査主体として行われた。その報告は兵庫県文化財調査報告第12冊「播磨長越遺跡」として松下勝氏編集によって刊行されている。私も幸いなことに、その時に学生として調査に参加し多くを学ばせて戴いた。

次に船場川河川改修に伴って、平成5年度に分布調査からはじまり、下流から順に工事が進められた。2003(平成15)年に飯田橋以南西岸の本発掘調査を行い、長越Ⅲ～Ⅳに該当する堅穴住居跡を5棟検出し、兵庫県文化財調査報告第375冊「播磨・長越遺跡Ⅱ」として2010年に刊行した。報告書整理作業時に今回の調査を実施した。長越遺跡Ⅰとの違いは長越遺跡Ⅱは弥生中期の土器が多く出土し、堅穴住居跡が5棟と少ないことである。長越遺跡Ⅰと今回調査した長越遺跡Ⅲの方に類似点が多い。

長越遺跡の東側には密接な関係がある畑田遺跡が存在する。昭和50年代以降、姫路市教育委員会によって長期に亘って調査が行われ、多くの問題を提起している。長越遺跡が庄内期に限られた集落であるのに対して弥生時代中期から長越遺跡と同時代、そして古墳時代後期から奈良・中世へと続いている。そして特記されるのは、庄内期において柵で囲まれた中心施設を検出している点である。この時期の周溝墓も特筆される。首長居館の存在と前代から続いて後世に続く集落であることが大きな違いである。長越遺跡の短期間の集落とは大きく異なっている。今回平行して調査した竹の前遺跡も弥生前期からの遺跡と同様な性格を有するかもしれない。船場川流域には小山遺跡・橋詰遺跡など庄内甕を保有する遺跡が並び、細かい調査が行われれば評価も変わってこよう。同様に西側水尾川流域の遺跡群も検討が必要である。長越遺跡Ⅰと同時期に調査された構権現遺跡や中地天神遺跡と遅れて調査された東川遺跡である。これら遺跡群も船場川流域と一帯となって隆盛したように思われる。

遺構

今回14棟の堅穴住居跡を調査したが、堅穴住居跡をはじめ溝・落ち込みなどの多くの切り合い関係がある。遺構の切り合い関係を示すと

SD11 → SD06 → SH13 → SH02
SH12 → SH06 → SH04
SH06 → SH14 → SH03
SH06 → SD09 → SD10 ← SK02

SH05・SH08・SK04 → SD09

SH10 → SX03 → SH11 → SH09 となり、SH01・SH07には切り合い関係がない。

表4 長越遺跡竪穴住居跡一覧表

遺構名	平面形	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	壁溝	高床部	炭化材	支柱穴	10土坑	時期	備考
SH01a	方形	4.20	3.30	0.20	あり	あり	あり	4本		4期	
SH01b	長方形	4.40	3.10	0.15		あり	あり			5期	
SH02a	方形	6.25	5.60	0.25						5期	SH13を切る
SH02b	方形	5.70	5.10	0.25	あり	あり		4本		5期	SH13を切る
SH03	方形	4.95	4.95	0.15	あり	あり	あり	4本	あり	5期	SH14を切る
SH04	長方形	4.30	3.40	0.10				4本		4期	SH06を切る
SH05	方形	(1.40)	(1.30)	0.10						4期	SD09に切られる
SH06	長方形	4.10	3.45	0.15		あり			あり	3期	SH12を切る
SH07	方形	(1.90)	(1.30)	0.00	あり					5期	
SH08	方形	(2.45)	(1.70)	0.05						4期	SD09に切られる
SH09	方形	(3.40)	4.00	0.10	あり		あり			5期	SH11を切る
SH10	方形	4.50	4.15	0.50	あり			4本		2期	上にSH09
SH11	方形	5.10	(2.65)	0.25				4本?		4期	SD11を切る
SH12	方形	(0.95)	(2.10)	0.05						2期	SH06他に切られる
SH13	方形	(3.10)	(0.70)	0.20						4期	SH02に切られる
SH14	方形	(2.80)	4.80	0.15						4期	SH03に切られる

() は残存長

最も古い遺構はSD11で次がSD06で、最も新しい遺構はSD10でその前がSD09である。新古段階の両端が溝であるのは偶然であろうか。相互の切り合い関係に各遺構の埋土・検出したレベルや竪穴住居跡の属性を加味して検討すると、7期に分けられる。

1期 SD11

2期 SD06・SH12・SH10

3期 SH06・SX03 (SH10 上層)

4期 SH13・SH04・SH14・SH11・SH05・SH08・SK02～SK04

5期 SH01～SH03・SH07・SH09

6期 SD09

7期 SD10

竪穴住居跡で切られているものは内容が不明である。特に古い段階の住居跡は不明な点が多い。すべて方形プランである。SH01・SH07は壁溝があり浅いことから、5期にした。各期の特徴を示すと、2期のSH10は深く掘り下げられている。3期のSH06も壁が高く深い住居跡であり、壁溝がある。4期の住居跡は浅く残存度が悪い。5期のSH02・SH03は方形プランで高床部を有し、壁溝も持っている。支柱穴は4本であり、隅に土坑を設けている。共通点の多い竪穴住居跡で、壁溝を特徴と考え、SH01・SH07も5期とした。

1・6・7期には竪穴住居跡はない。高床部があるのは、SH01・SH02・SH03の3棟、壁溝があるのは、SH01・SH02・SH03・SH07・SH09の5棟である。今回の調査では、古い時期は深く掘り下げられ、3期から壁溝が見られる。ベッド状遺構（高床部）は5期に認められる。

遺物

遺構は切り合い関係が多く、時期を細分した。それに合わせて遺物も単純に分類出来ればと思ったが、簡単には行かなかった。細かい差は当然あるはずであるが、大きな時期差は認められない。2期はやや古そうな口縁部などであるが、3期には庄内壺が入り、確立された播磨型と河内型がある。小型精製土器も入り長越Ⅱ式以降であることが理解される。この時期から山陰・東四国の土器は搬入されている。

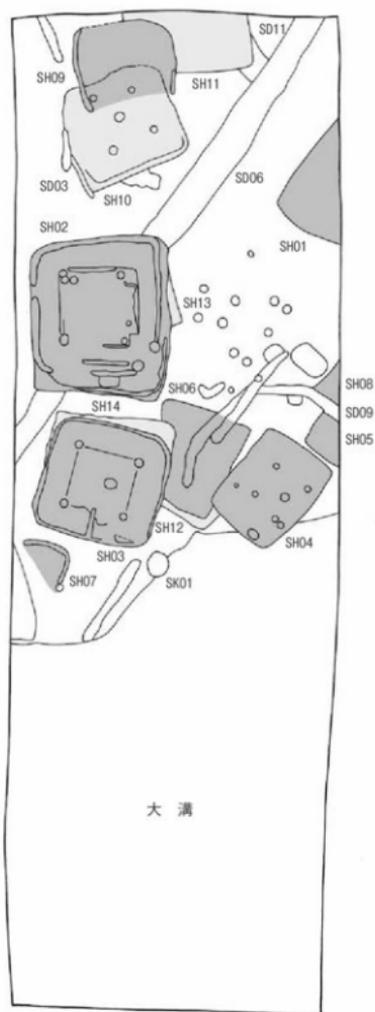
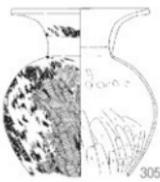
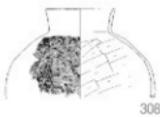
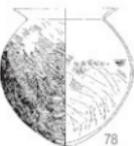
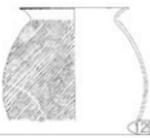
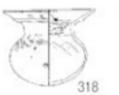
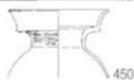


図13 遺構配置図

	壺	甕	高杯	器台		
A	 294	 55	 516	 539		
B	 305	 399	 247	 252  211		
C	 308	 78	 529	 541		
D	 178	 431	G  129	手焙  68		
	 318	 306			H  451	蓋  484
					I  450	精製鉢  500
E	 377	 425	J  62	 500		
F	 362	 102			K  460	
					L  444	

○は長縁 I から

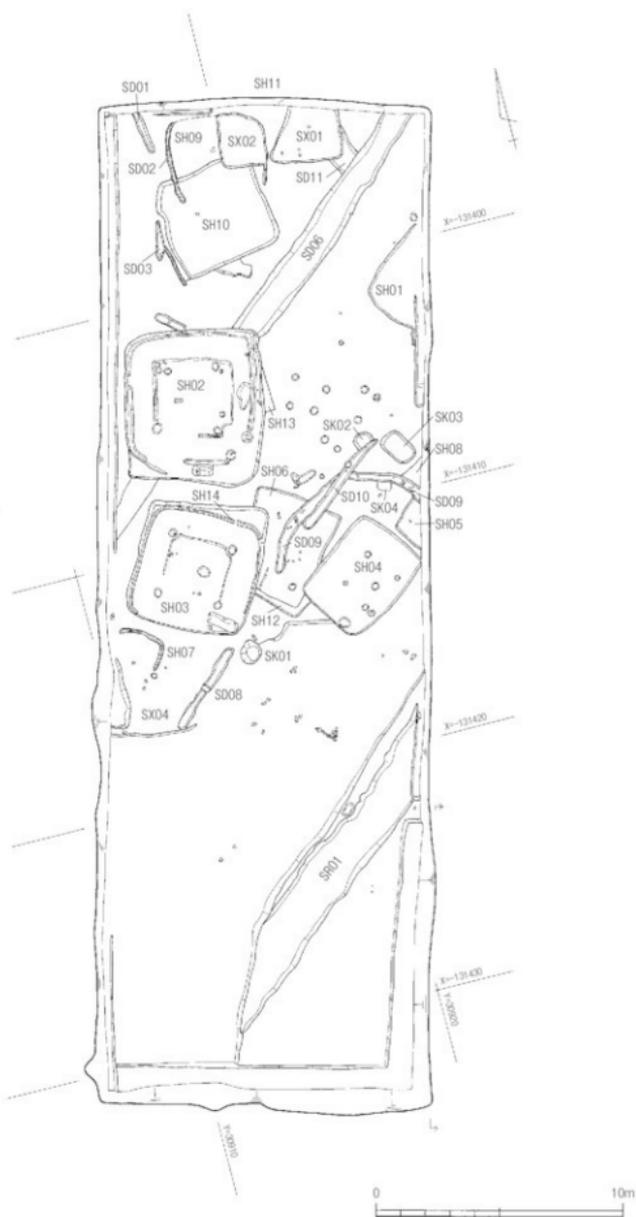
図14 土器分類表

搬入品は4期さらに5期になって増加する傾向にある。SH04の土器は古相を示すものが含まれ編年観に苦慮する。整合しないセット関係である。5期には布留傾向変が見られる。

播磨での庄内夷は船場川流域と太子町に集中する傾向がある。長越遺跡はその中で最初に多量の庄内夷を出土した遺跡で、庄内夷播磨発生説の根拠となった遺跡である。年とともに遺跡数や出土量・内容など当然変化しているが、大局的な長越遺跡の位置付けは変わることはない。短期間の集落で今回の調査でさらに稠密度が増したことになる。長越遺跡Ⅲは長越遺跡Ⅰよりも切り合い関係が多く密度の高い地域である。性格はⅠと似通っている。Ⅱが分村的な要素を考えたが、Ⅲは拡大した同一の集落と考えられる。畑田遺跡での首長館と推定される住居域との比較は行っていないが、重要である。長越遺跡の方が住居跡の密度は決定的に多く搬入土器も多く庄内夷も多い。そして庄内期のより新しい段階は長越遺跡が王例すると思われるが何故であろうか。首長館を東に築き、ムラの移動を行い、少しの時を経て集落を廃したのであろうか。そして移動したと考えるのが妥当かもしれない。

最後に長越遺跡Ⅱの「おわりに」で、本報告で長越遺跡Ⅱのまよりの足りない部分を補完し、長越遺跡の十分な位置付けを示すつもりでいたが、またまた力が及ばずその責を果たすことが出来なかった。これからも無理かもしれないが、どこかでほんの一部でも還元できたらと思っている。長越遺跡は思い出深く出発点の遺跡であり、終着点となるはずであったが、また先の課題となってしまった。「長越遺跡Ⅱ」で記したように2人の方の影響に支えられ、また怯え？ながら、今後に期したいと思う。

圖 版



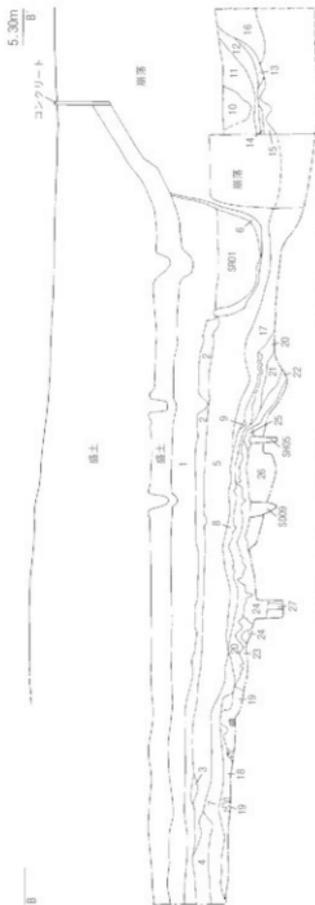
調査区平面図

4.00m
A

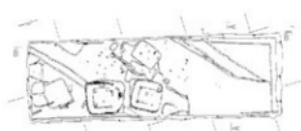


- | | | | |
|---------------|-----------|--------------|-----------|
| 1. 1508 4.2 | 砂礫層(多量)含む | 10. 57 5.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 2. 2.09 2.2 | 砂礫層(多量)含む | 11. 2.57 4.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 3. 7.04 2.1 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 4. 1008 4.5 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 5. 1008 2.1 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 6. 1008 1.2/1 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 7. 1008 0.1 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 8. 2.57 3.1 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 9. 2.57 3.1 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 10. 1008 2.2 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 11. 2.57 4.2 | 砂礫層(多量)含む | | |

5.30m
B



- | | | | |
|---------------|-----------|--------------|-----------|
| 1. 田丸土 | 砂礫層(多量)含む | 14. 2.57 5.1 | 砂礫層(多量)含む |
| 2. 1008 4.3 | 砂礫層(多量)含む | 15. 2.57 4.1 | 砂礫層(多量)含む |
| 3. 1008 4.5 | 砂礫層(多量)含む | 16. 2.57 4.1 | 砂礫層(多量)含む |
| 4. 1008 4.5 | 砂礫層(多量)含む | 17. 5.8 4.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 5. 1008 4.8 | 砂礫層(多量)含む | 18. 1008 3.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 6. 1008 4.8 | 砂礫層(多量)含む | 19. 1008 4.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 7. 1008 3.3/3 | 砂礫層(多量)含む | 20. 1008 4.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 8. 1008 5.1 | 砂礫層(多量)含む | 21. 2.57 3.1 | 砂礫層(多量)含む |
| 9. 1008 5.1 | 砂礫層(多量)含む | 22. 1008 4.1 | 砂礫層(多量)含む |
| 10. 57 5.2 | 砂礫層(多量)含む | 23. 1008 4.1 | 砂礫層(多量)含む |
| 11. 57 5.2 | 砂礫層(多量)含む | 24. 1008 2.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 12. 57 5.1 | 砂礫層(多量)含む | 25. 1008 3.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 13. 7.57 4.1 | 砂礫層(多量)含む | 26. 1008 2.1 | 砂礫層(多量)含む |
| | | 27. 7.57 2.1 | 砂礫層(多量)含む |



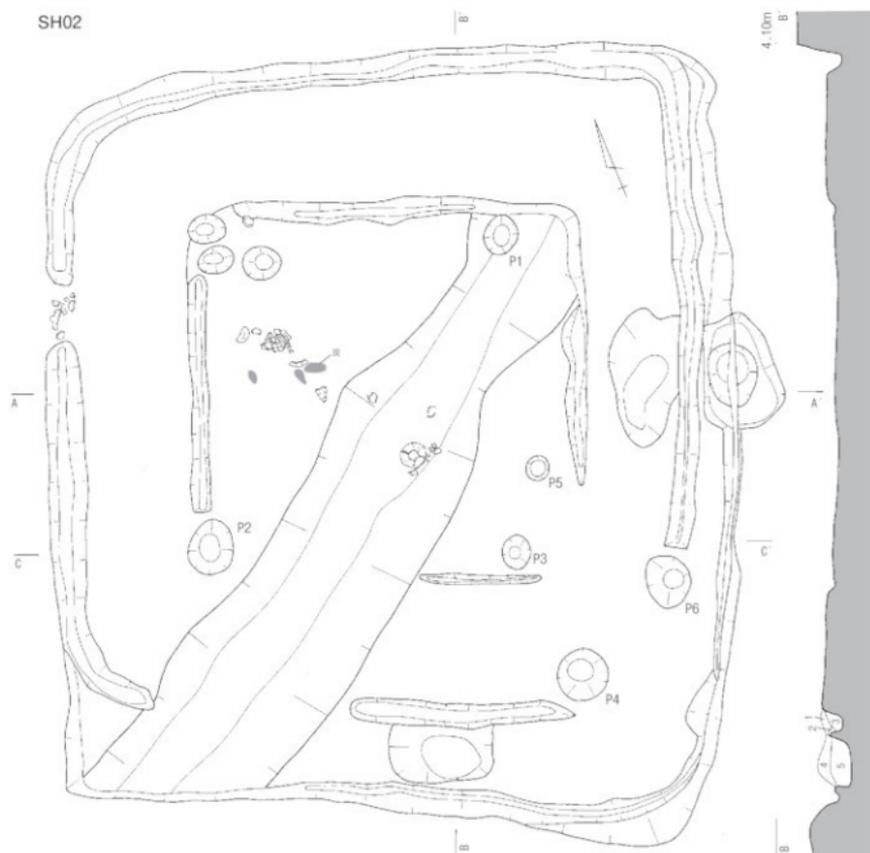
土層断面図

SH01



SH01実測図

SH02



4.10m
B

4.10m
A

4.10m
C



- 1 7.5R 2/2 遺構 シルト質粘砂層 (土器・マンガン含有)
- 2 10R 2/1 遺 構 シルト質粘砂層 (燧山ブロック・土器含有)
- 3 10R 4/2 灰質層 中砂 (土器含有)

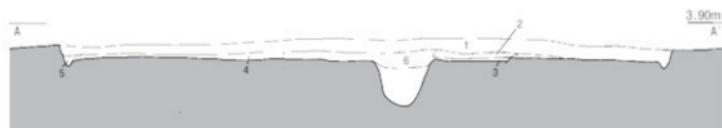
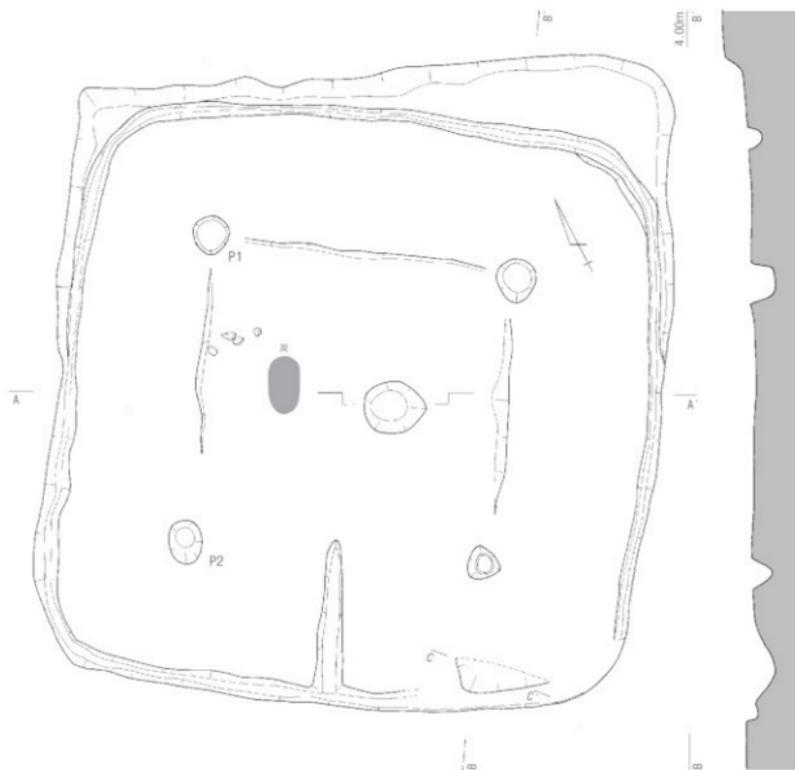
- 4 10R 2/2 遺 構 シルト質粘砂層
- 5 10R 2/1 遺 構 シルト質粘砂層
- 6 10R 4/2 遺 構 灰質層



SH02実測図



SH03



- | | | | |
|---|---------|----|-----------------|
| 1 | 10R 2/3 | 築城 | シルト質粘細砂 (堆山土含む) |
| 2 | 10R 3/1 | 築城 | シルト質粘細砂 (堆山土含む) |
| 3 | 10R 2/1 | 溝 | シルト質粘細砂 (炭灰) |
| 4 | 10R 4/2 | 堀戻 | シルト質粘細砂 (堆山土含む) |
| 5 | 10R 2/2 | 築城 | シルト質粘細砂 (炭灰) |
| 6 | 10R 3/1 | 築城 | シルト質粘細砂 (炭灰) |

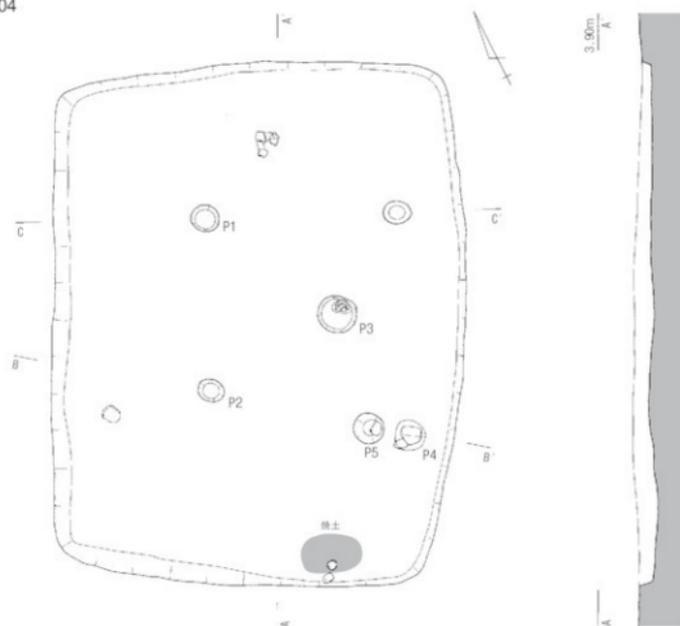


1 2.5R 1/2 溝 シルト質粘細砂 (炭・堆山土ブロック多く入る)

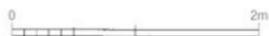


SH03実測図

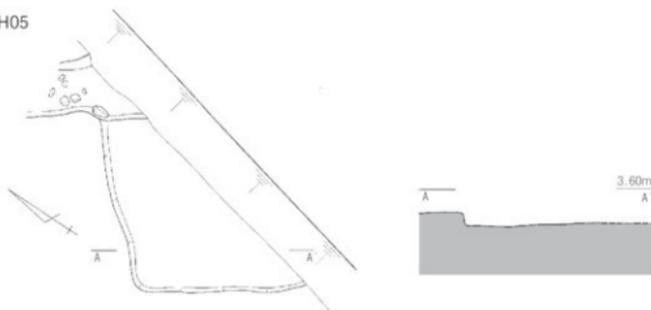
SH04



SH04実測図



SH05

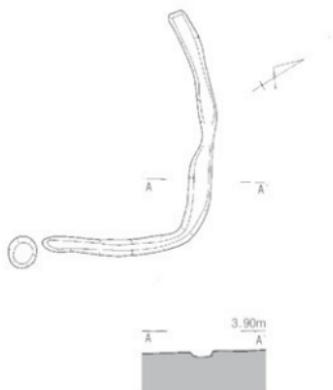


SH06



SH05·SH06实测图

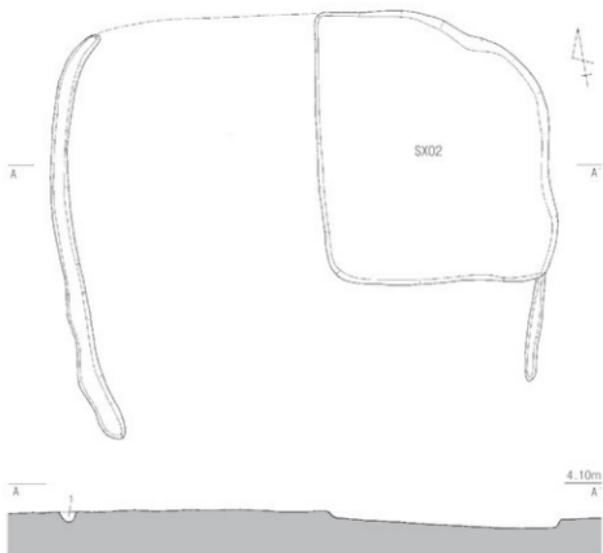
SH07



SH08



SH09

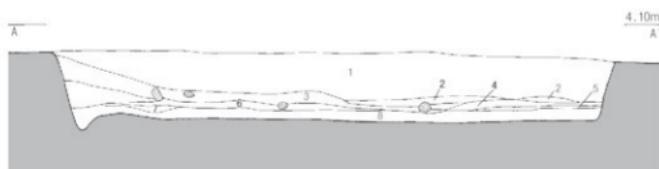


1 7.5F 2/2 オリーブ葉 シルト質輪紋砂

SH07~SH09実測図



SH10

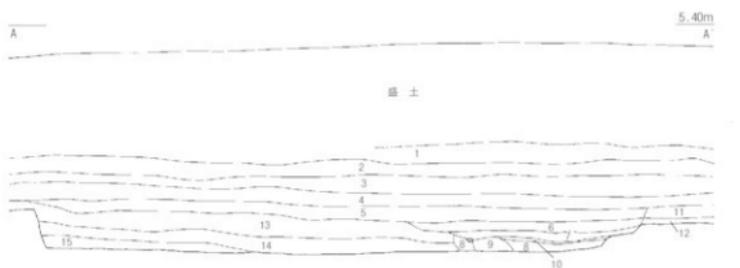
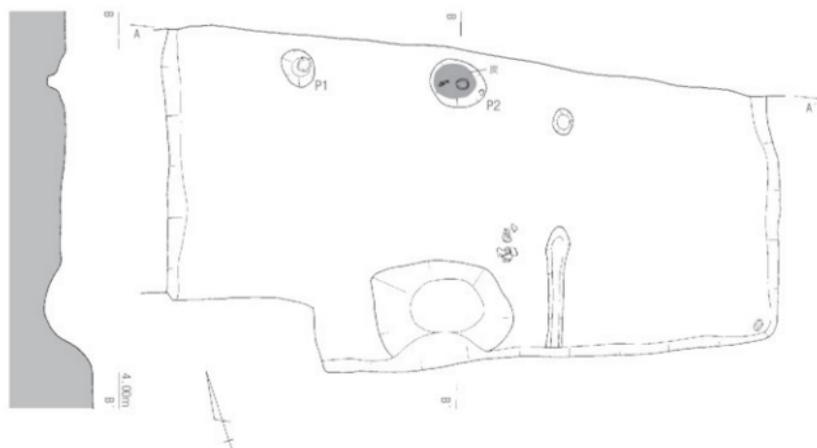


- | | | |
|---|-----------------|---|
| 1 | 10R 3/3 堀溝 | シルト質粘細砂 (堆山土・灰・10R 4/1 焼灰 シルトのブロック多く含む) |
| 2 | 10R 5/8 栗焼 | シルト質粘細砂 |
| 3 | 10R 4/3 にがい栗焼 | シルト質粘細砂 (堆山ブロック多く・灰少量含む) |
| 4 | 2.5R 4/3 オリーブ焼 | 細砂 |
| 5 | 2.5R 4/1 栗灰 | シルト質粘細砂 (堆山土含む) |
| 6 | 2.5R 4/1 栗灰 | シルト質粘細砂 (堆山土含む) |
| 7 | 2.5R 3/3 暗オリーブ焼 | シルト |
| 8 | 10R 2/2 栗焼 | シルト質粘細砂 (堆山土含む) |

SH10実測図



SH11

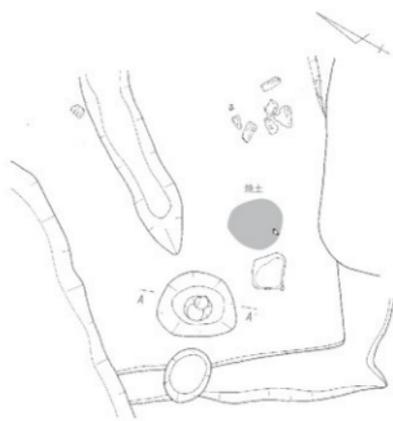


- | | | | |
|----|--------------|---------------|---------------------|
| 1 | 粘土 | | |
| 2 | 5R 5/3 | オリーブ黄 | シルト質粘砂 |
| 3 | 10R 4/3 | にがい黄褐色 | シルト質粘砂 |
| 4 | 10R 3/3 | 黄褐色 | シルト質粘砂 (黄褐色) |
| 5 | 10R 2/2 | 黄褐色 | シルト質粘砂 |
| 6 | 10R 3/2 | 黄褐色 | シルト質粘砂 (黄褐色) |
| 7 | 10R 4/1 | 黄褐色 | シルト質粘砂 (粘性強い) |
| 8 | 10R 3/1 | 黄褐色 | シルト質粘砂 (粘土土・黄褐色) |
| 9 | 10R 4/2 | 灰黄褐色 | シルト質粘砂 (7層・粘土土多く含む) |
| 10 | 10R 4/1 | 黄褐色 | 細～中砂 (ラミナ状になる) |
| 11 | 10R 4/2 | 黄褐色 | シルト質粘砂 |
| 12 | 粘土土 | (上から影響を受けた部分) | |
| 13 | 5層と粘土土が混じった層 | (5層が多い7～8割) | |
| 14 | 5層と粘土土が混じった層 | (粘土土が多い7割位) | |
| 15 | 2.5R 4/1 | 黄褐色 | シルト質粘砂 (黄褐色) |



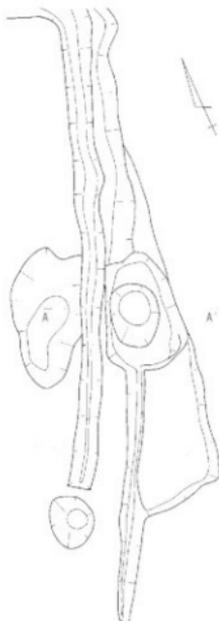
SH11実測図

SH12

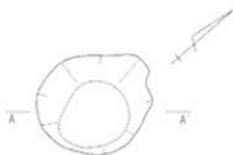


- 1 7.5m 2.2 黒褐色 シルト質粘細砂 (焼山・灰・焼土・レキ含む)
- 2 10m 1.7/1 黒 シルト質粘細砂 (焼山・灰・焼土含む)
- 3 0.2 2/1 黒 シルト質粘細砂 (焼土・灰含む)
- 4 2.50m 2/1 黒 シルト質粘細砂 (灰・土器含む)

SH13



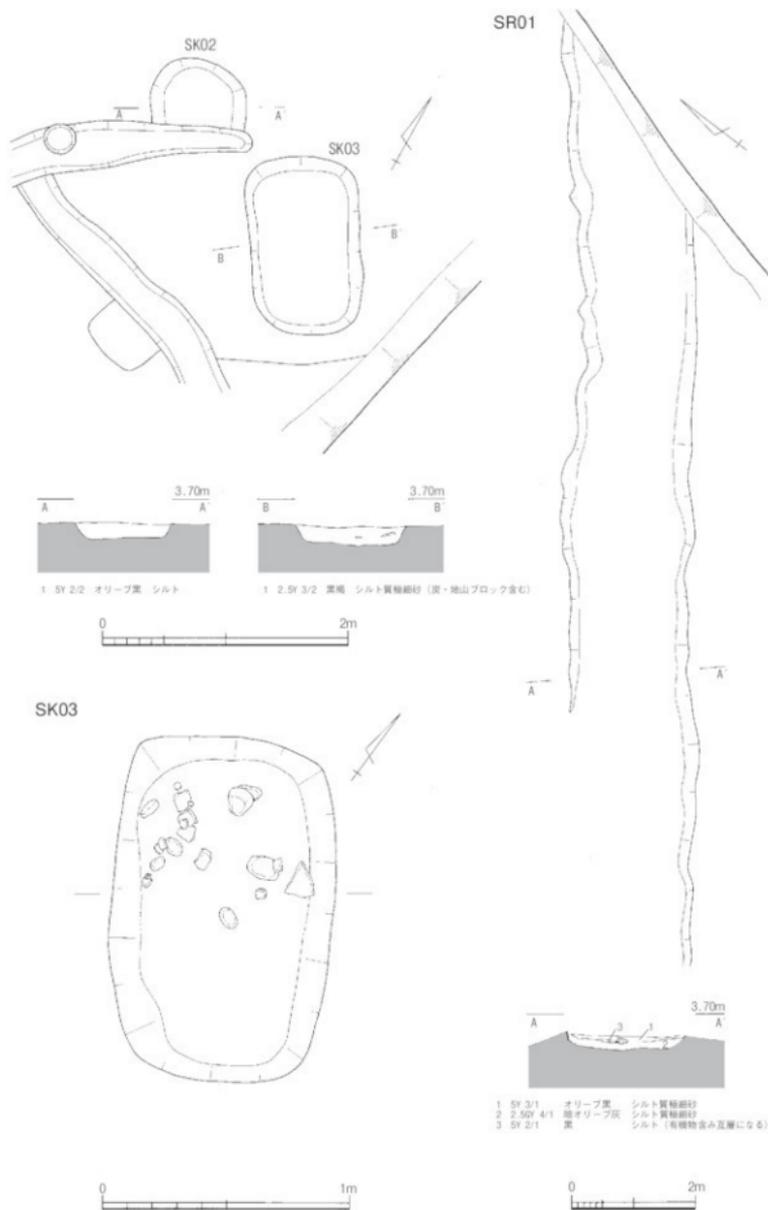
SK01



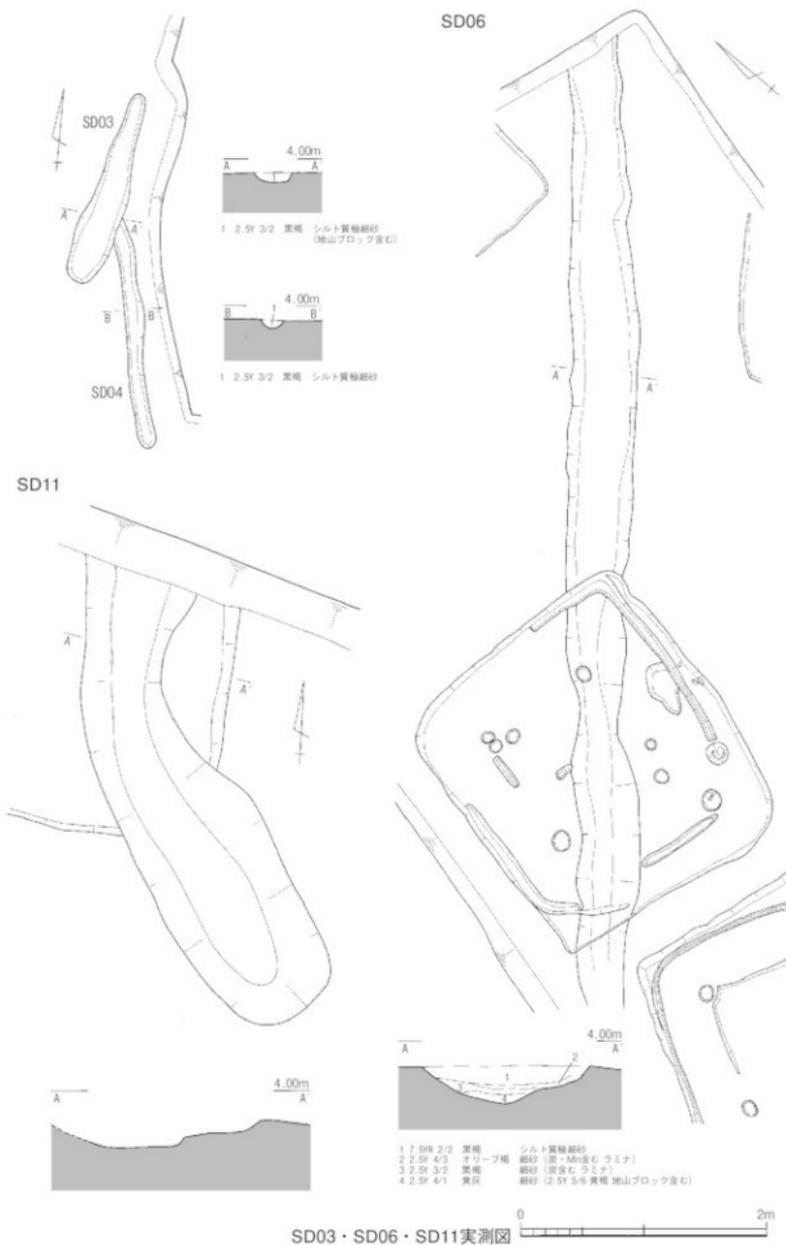
- 1 5F 2/2 オリーブ黒 シルト質赤石

SH12・SH13・SK01実測図

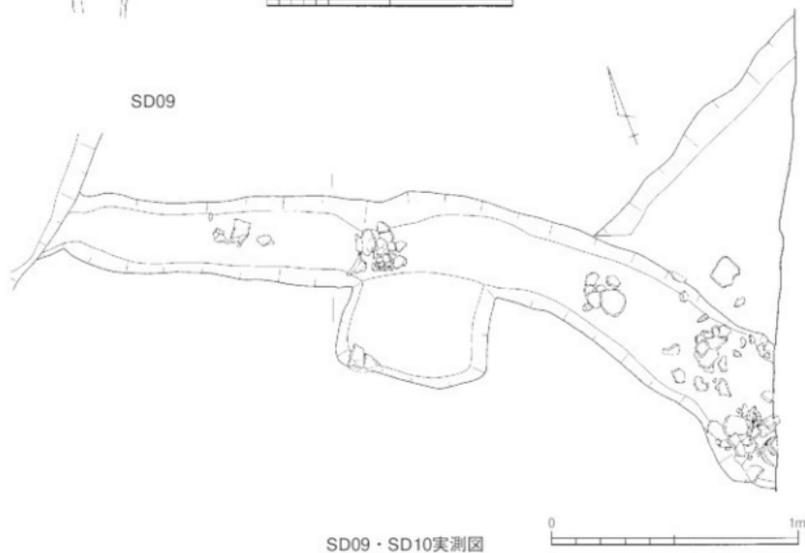
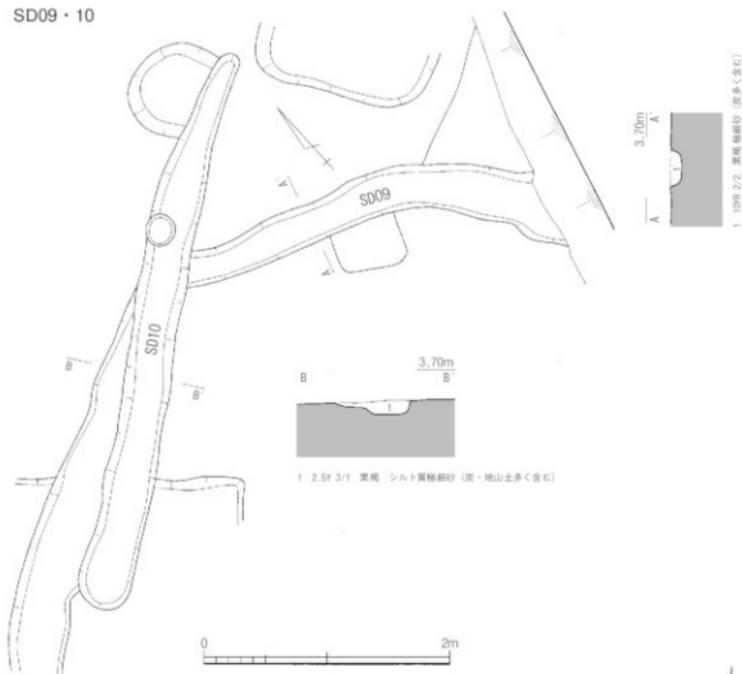




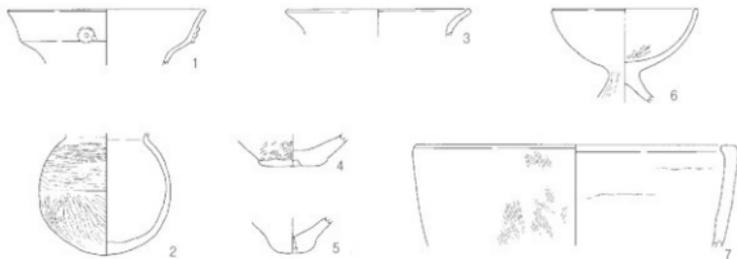
SK02・SK03・SR01実測図



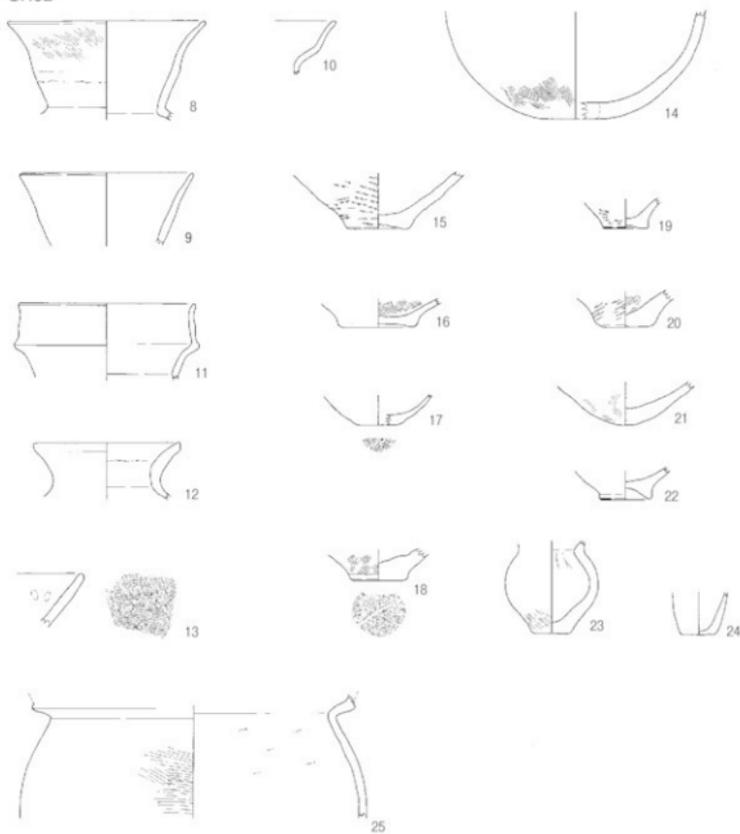
SD09・10



SH01



SH02



土器実測図(1)



SH02



26



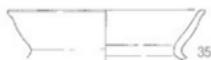
34



42



27



35



43



28



36



44



29



37



45



30



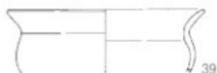
38



46



31



39



47



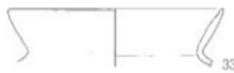
32



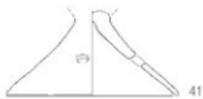
40



48



33

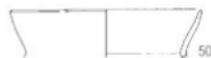


41

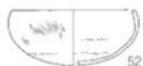


49

SH03



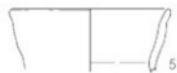
50



52



54

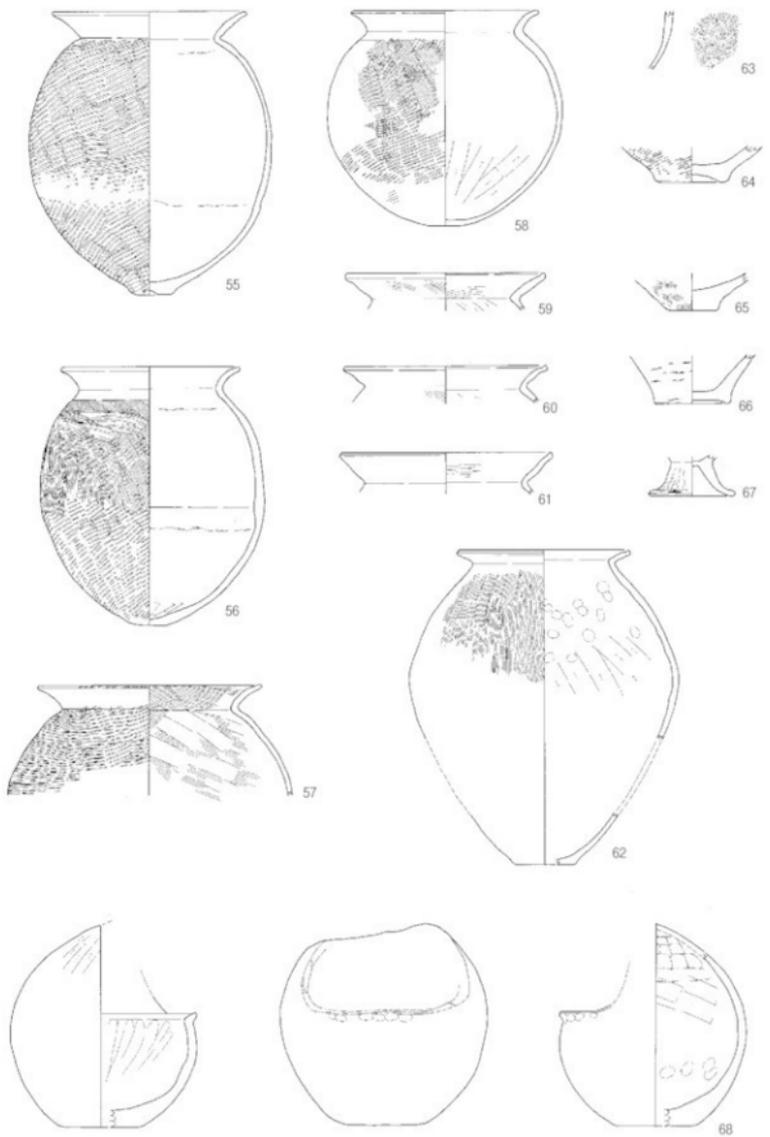


51



53

SH04



土器実測図(3)



SH06



69



70



71



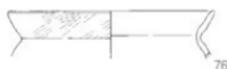
72



73



75



76



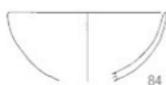
77



74



78



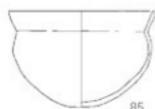
84



81



82



85



88



83



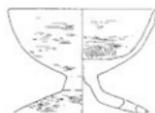
89



79



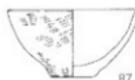
86



90



80

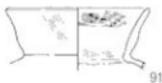


87

土器実測図(4)



SH05



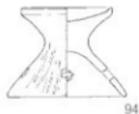
91



92

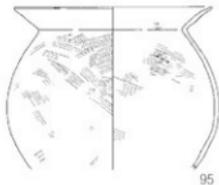


93



94

SH08



95



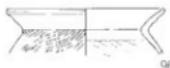
97



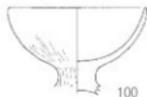
98



99

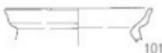


96



100

SH10

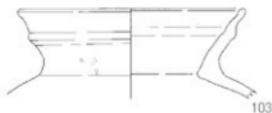


101



102

SH11



103

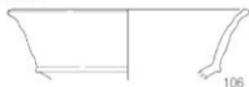


104



105

SK01



106

SK03

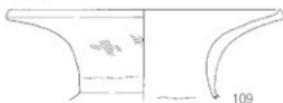


107



108

SX01

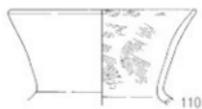


109

土器実測図(5)



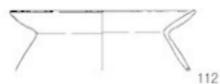
SX03



110



111



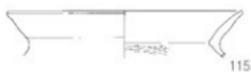
112



113



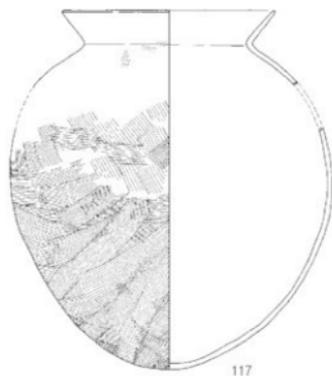
114



115



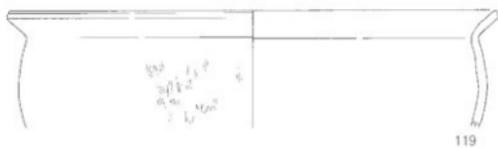
116



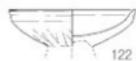
117



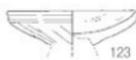
118



119



122



123



120



121

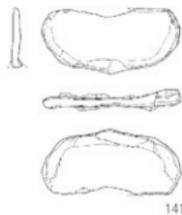
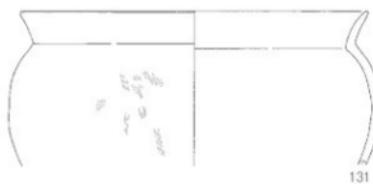
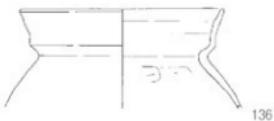
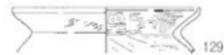
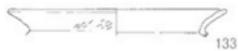
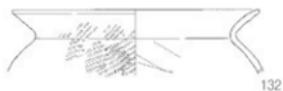
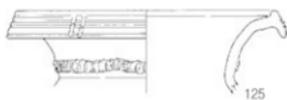


124

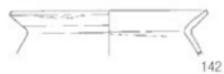
土器实测图(6)



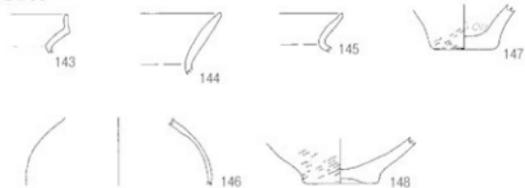
SX04



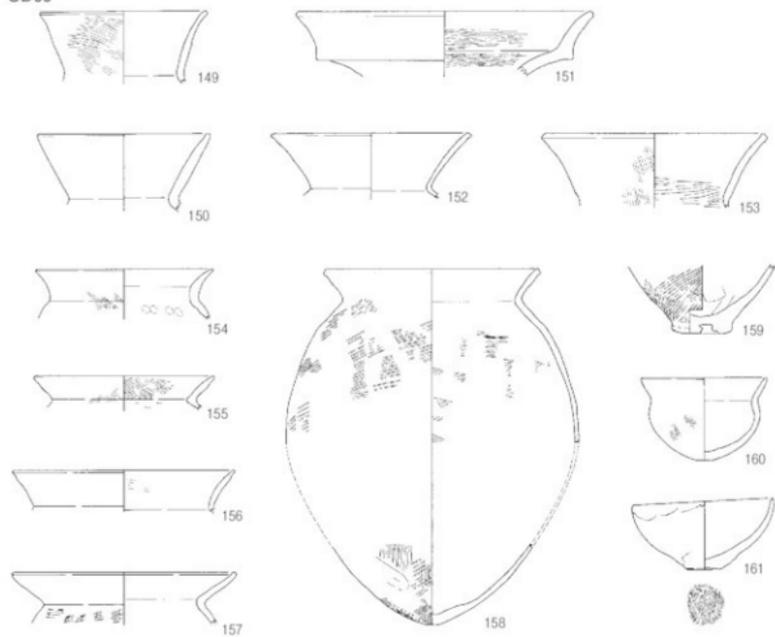
SD01



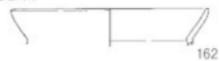
SD06



SD09

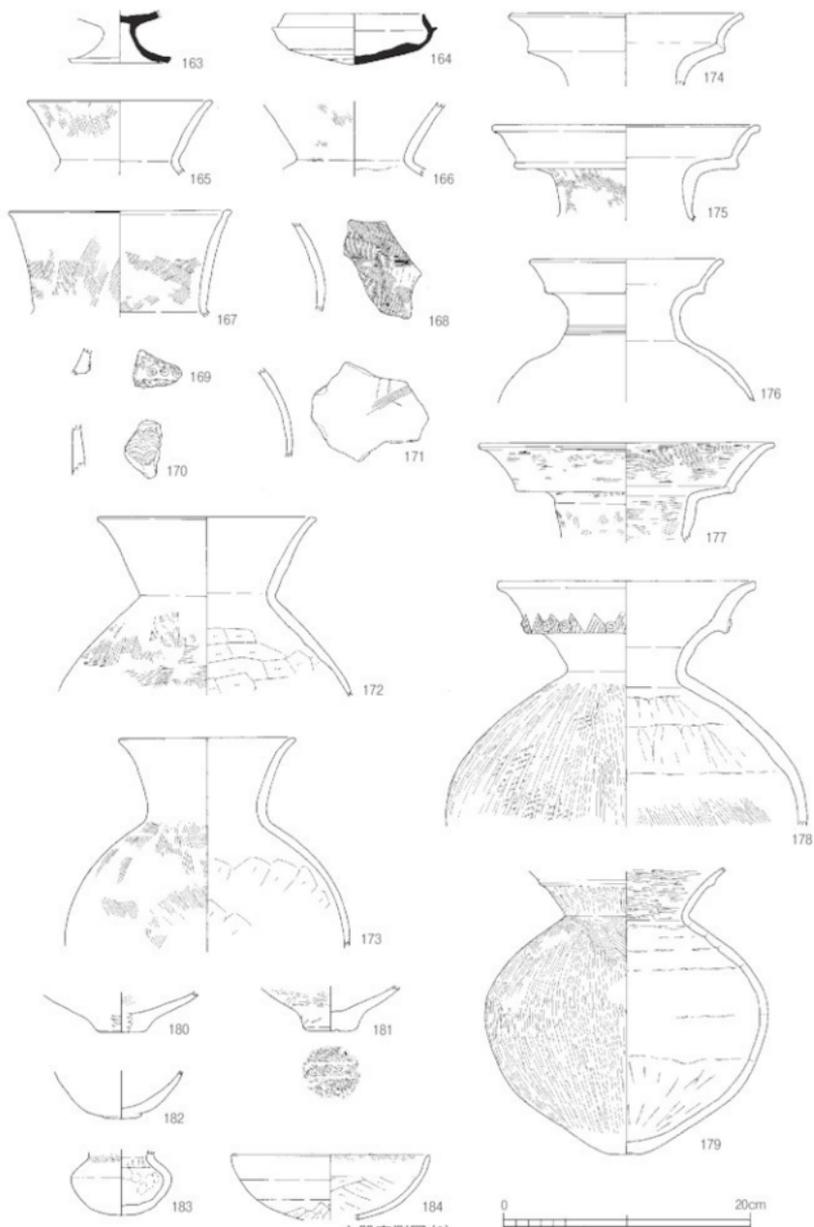


SD11

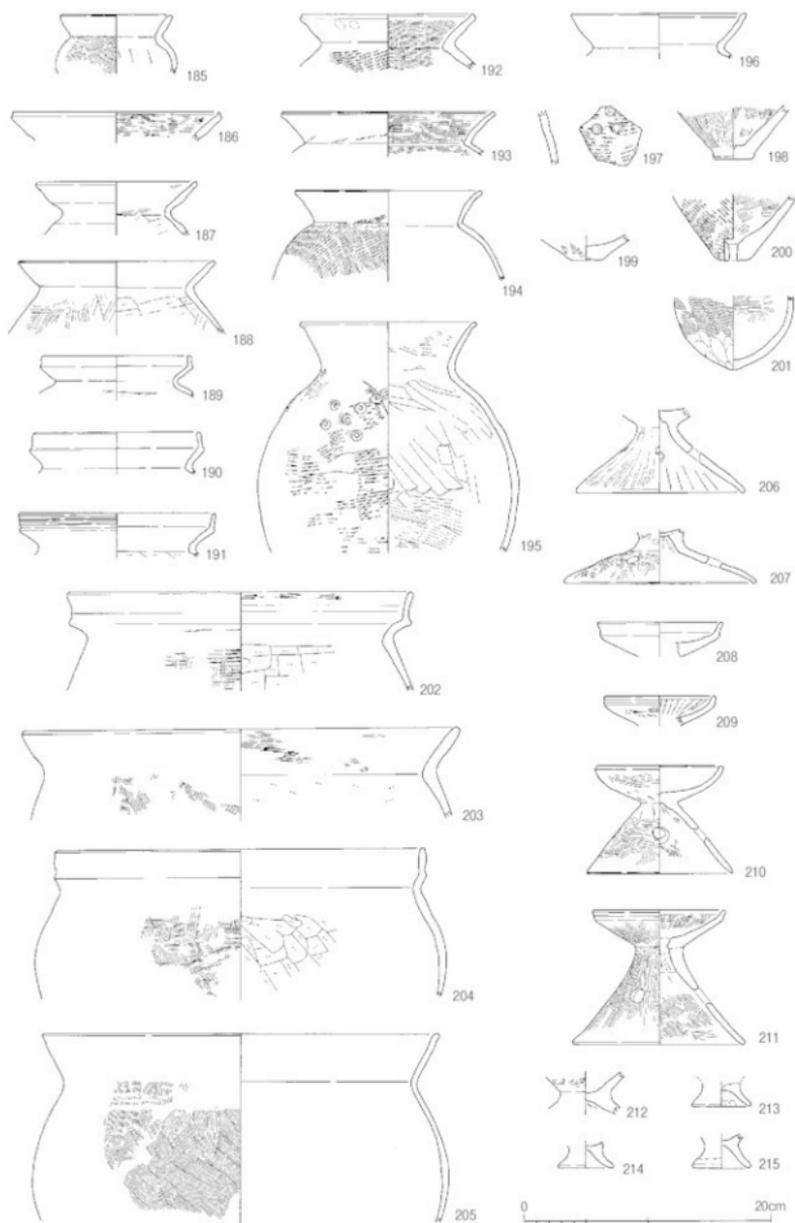


土器実測図(8)

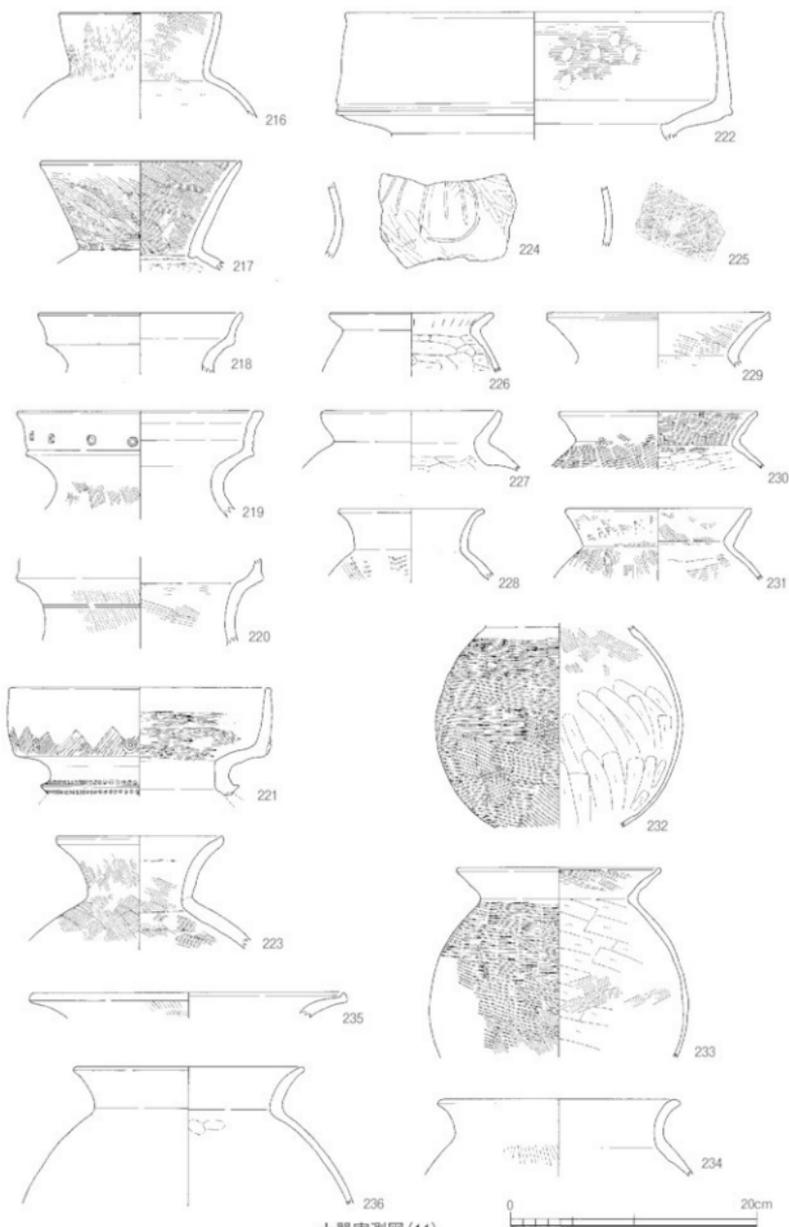




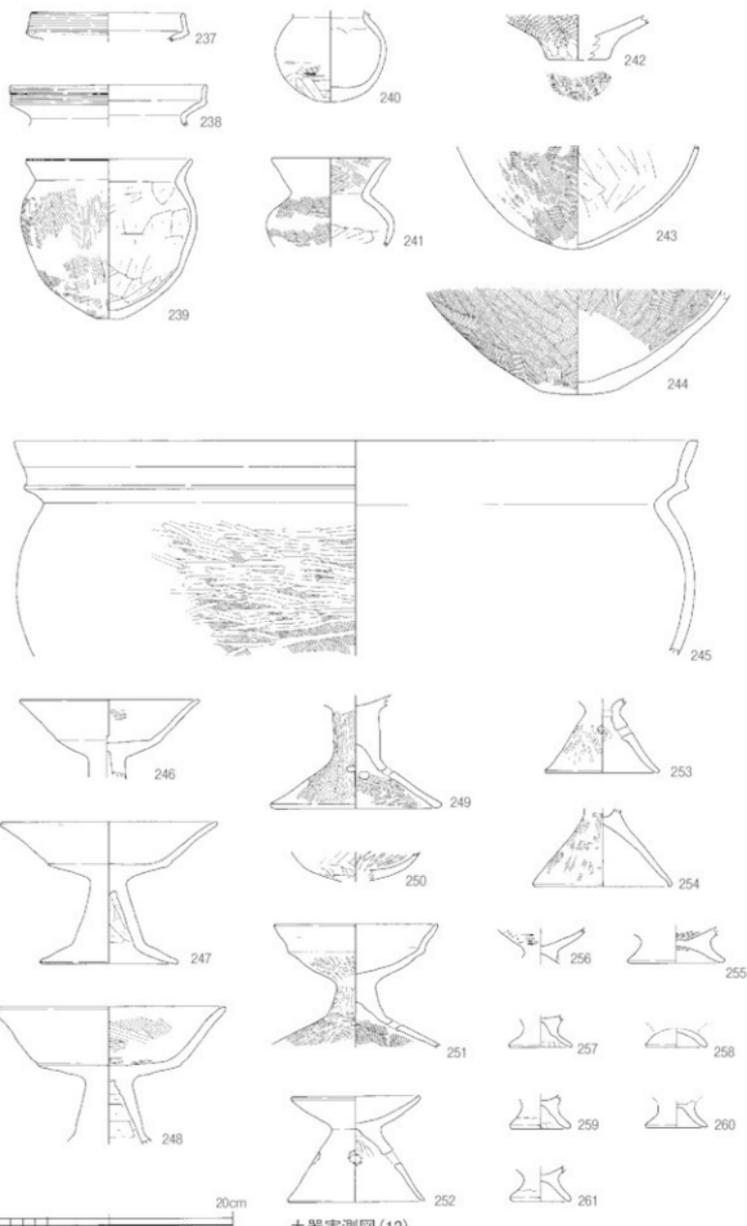
土器実測図(9)



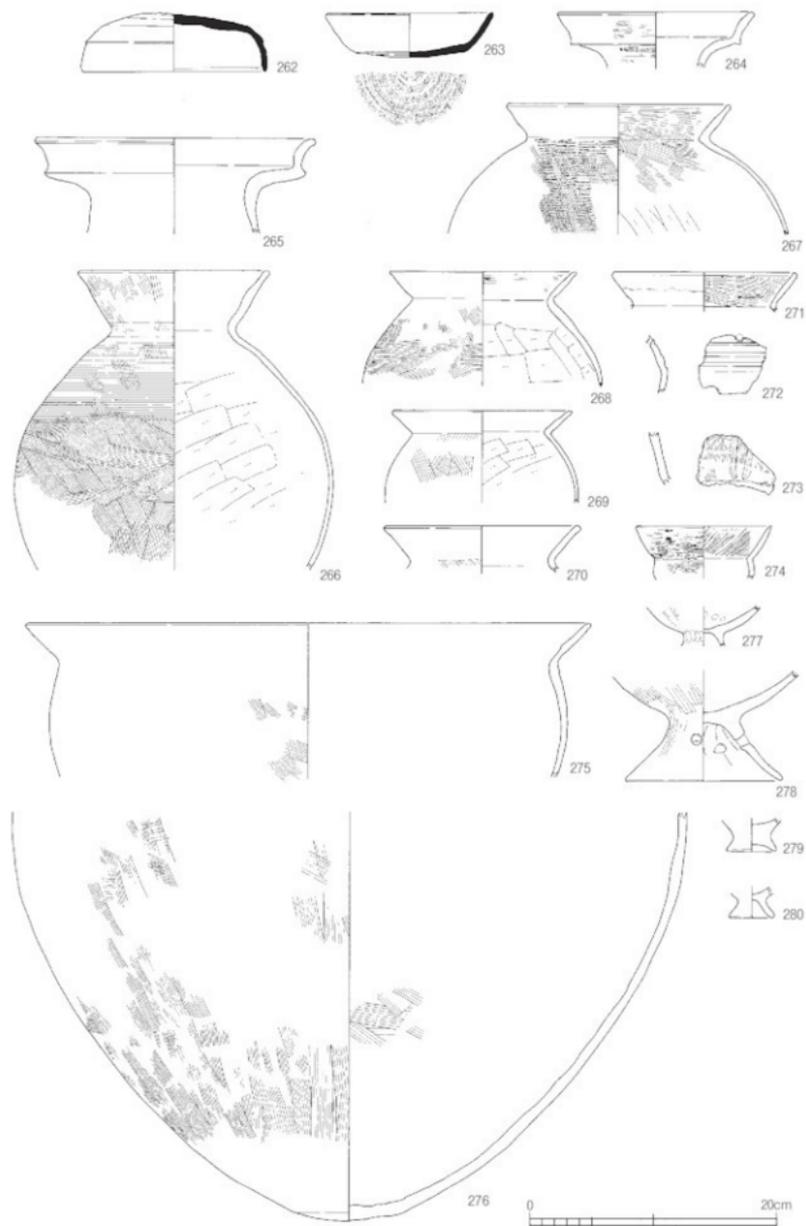
土器実測図(10)



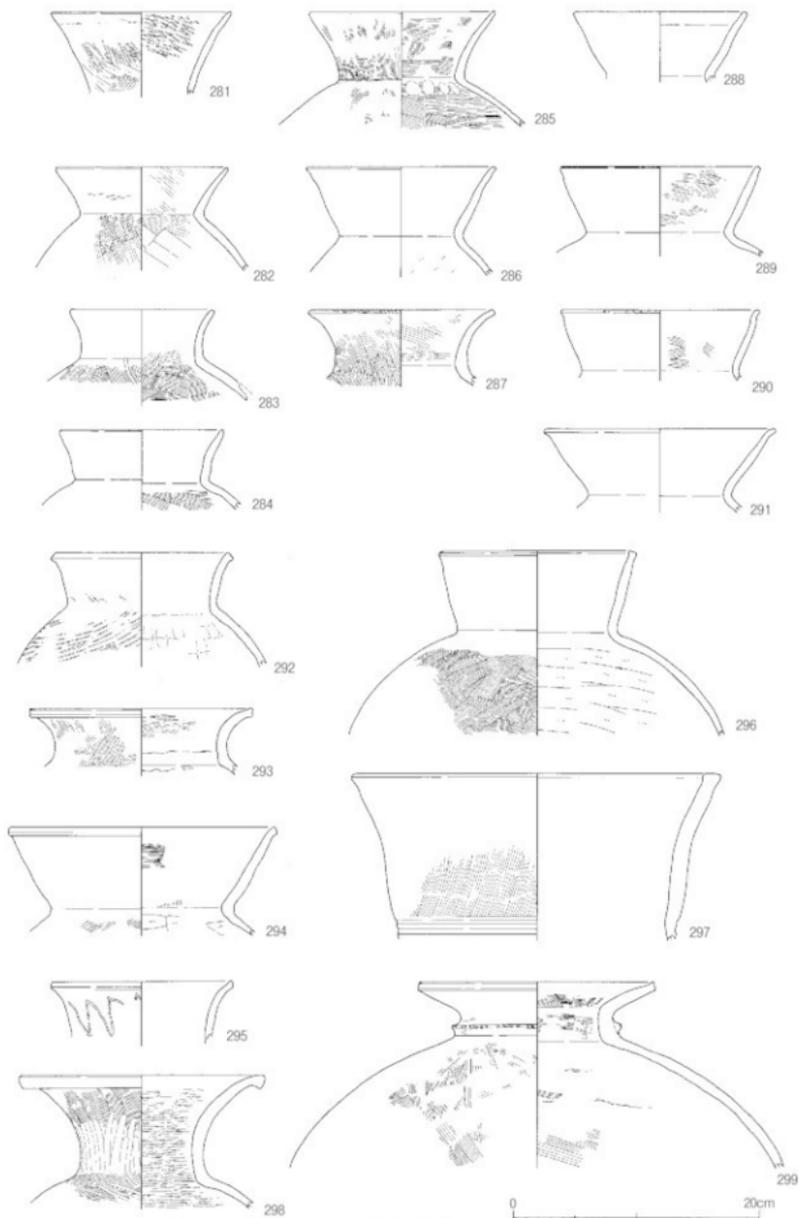
土器実測図(11)



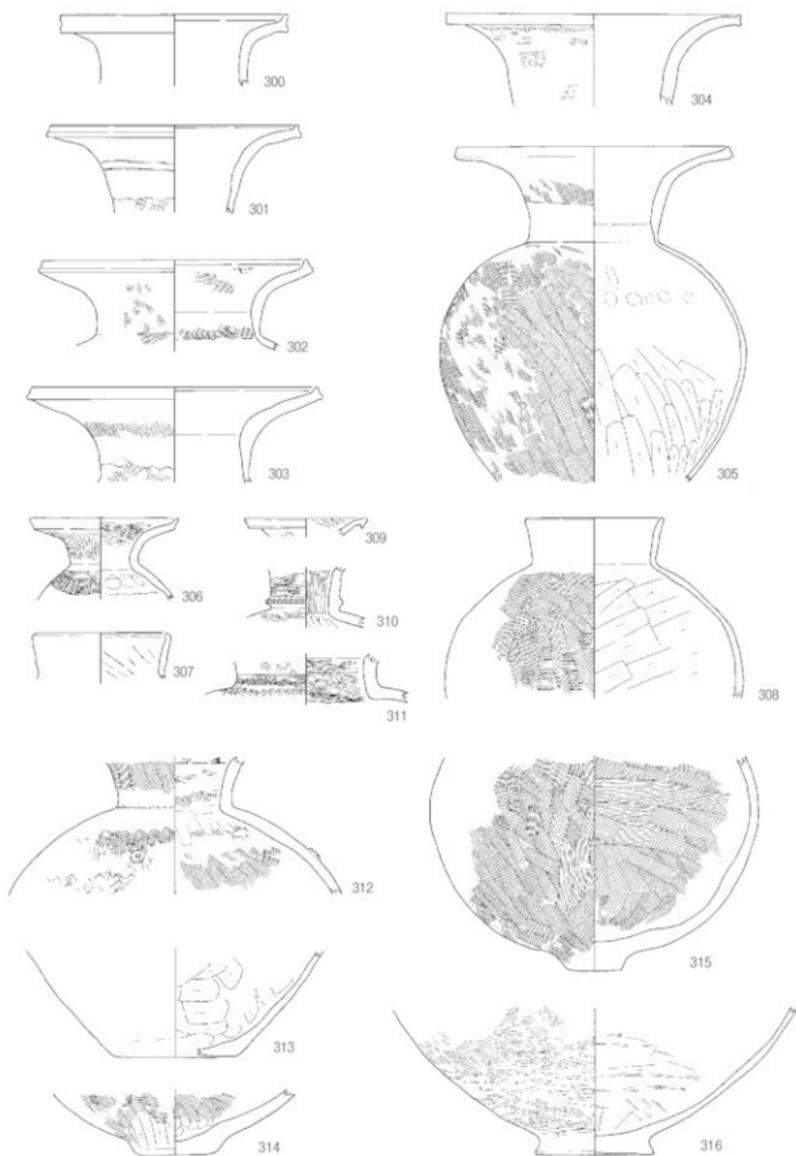
土器実測図(12)



土器実測図(13)

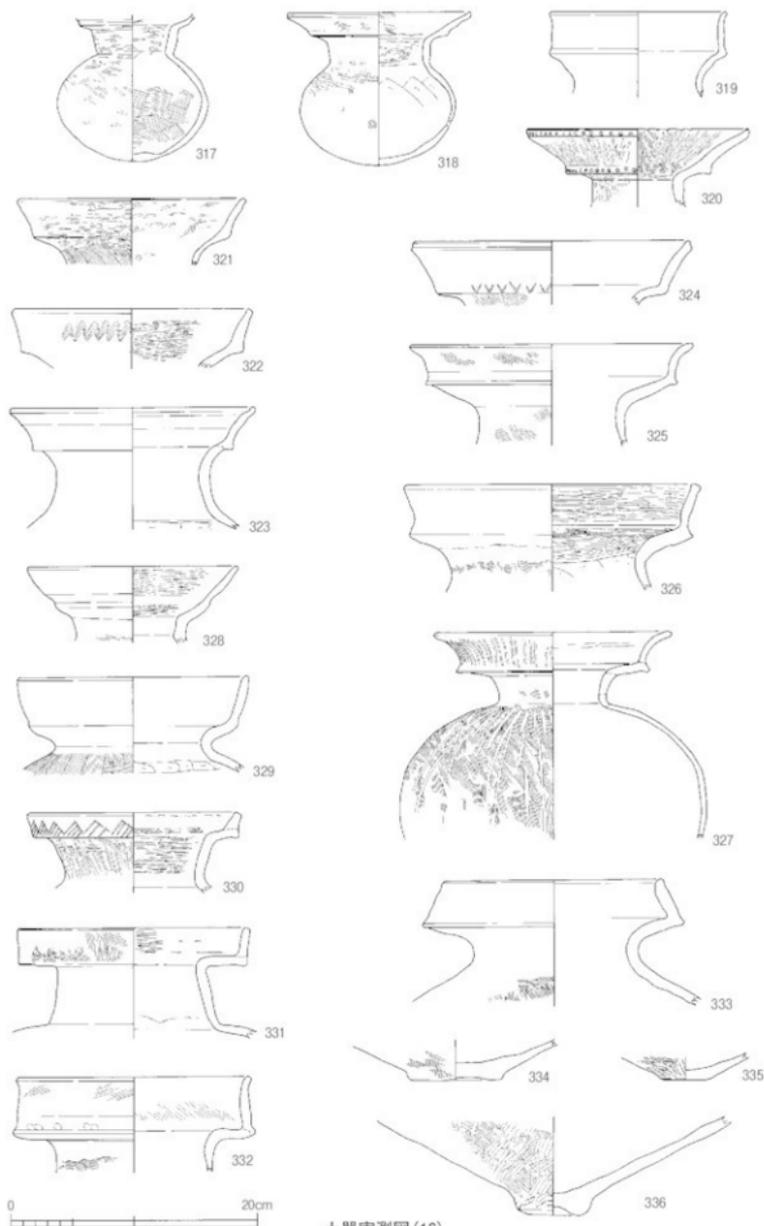


土器实测图(14)

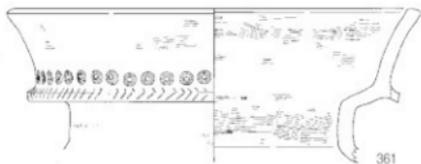
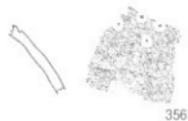
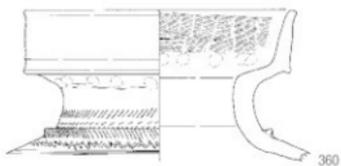
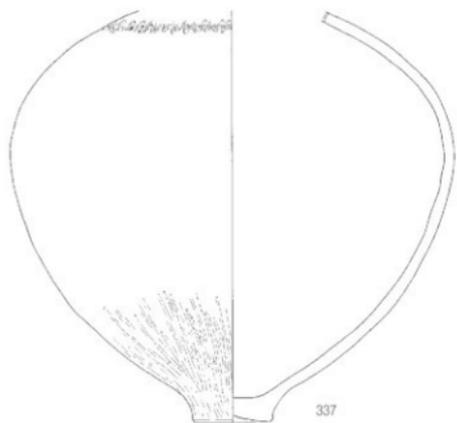


土器実測図(15)

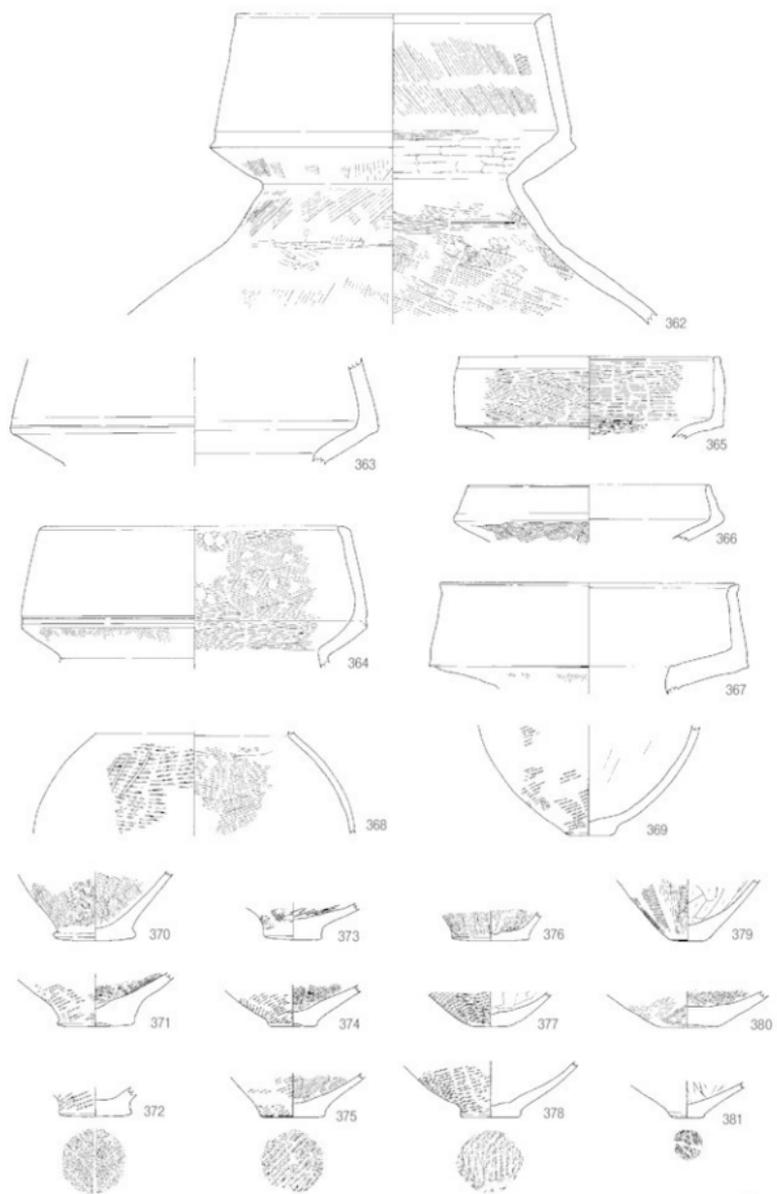




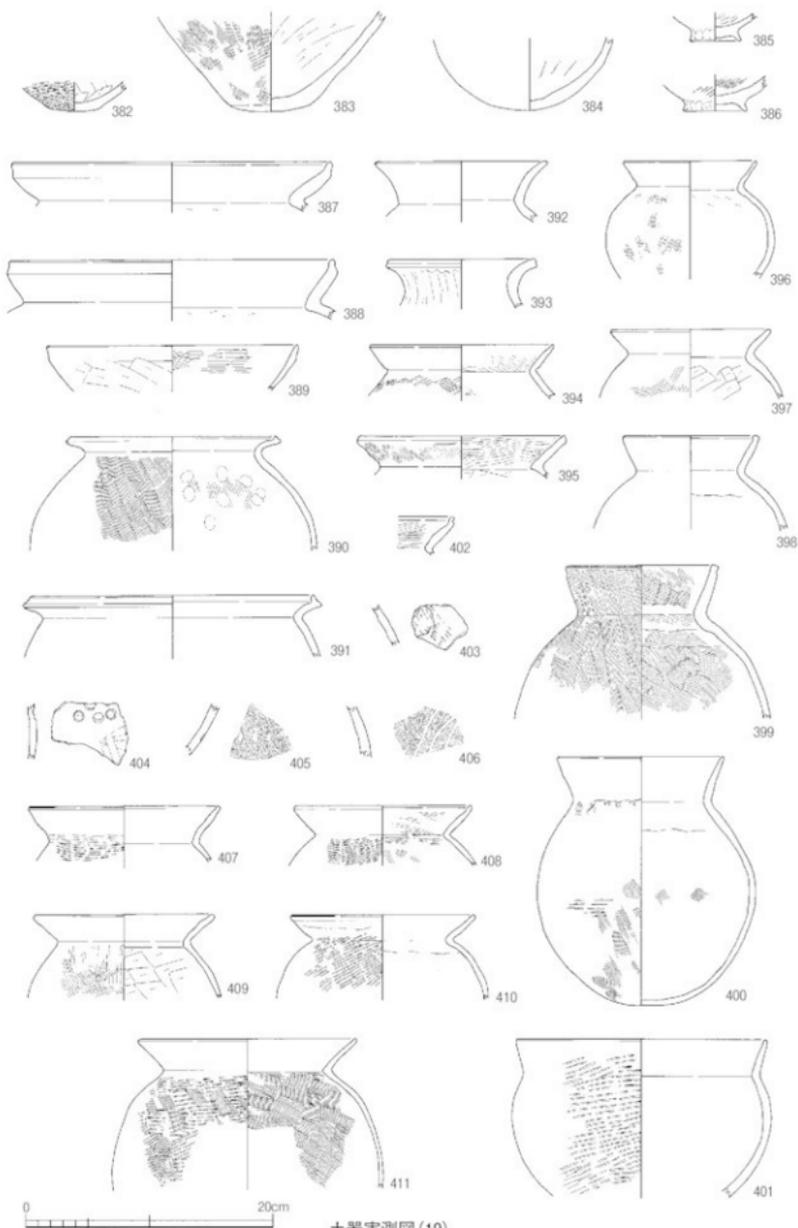
土器実測図(16)



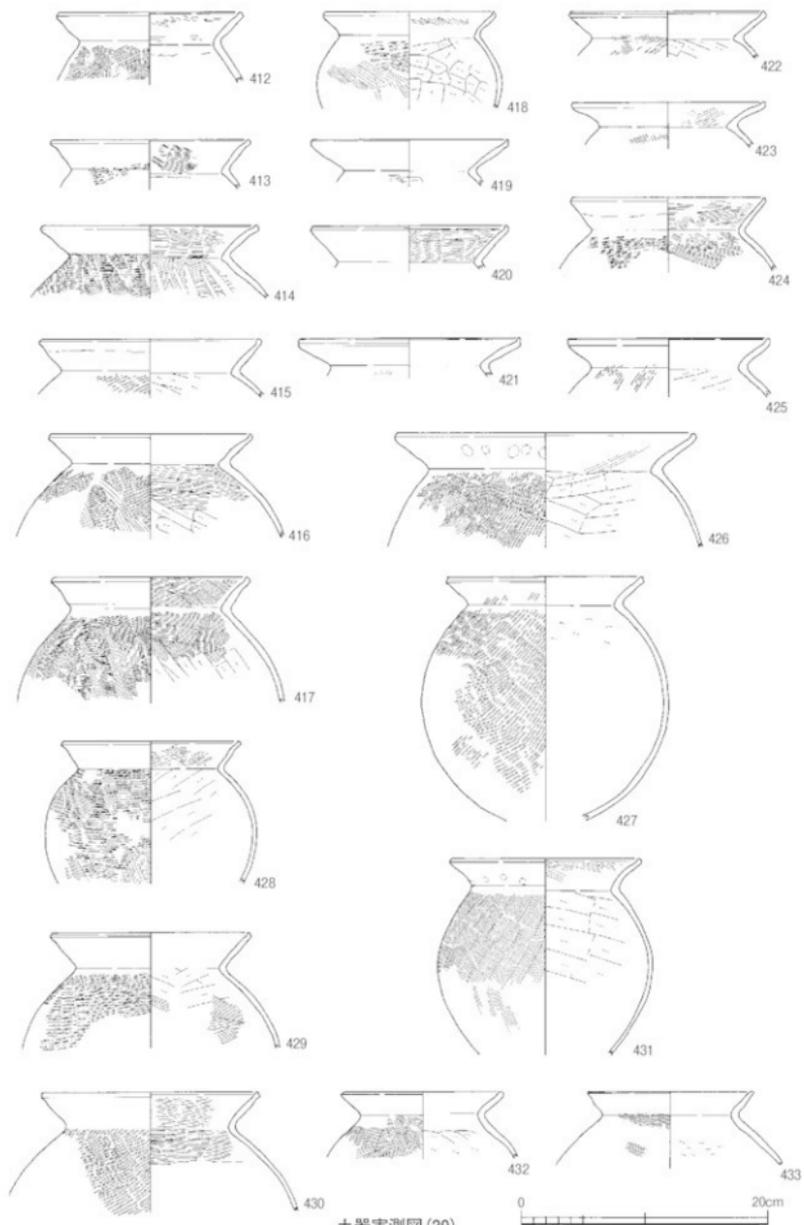
土器実測図(17)



土器实测图(18)

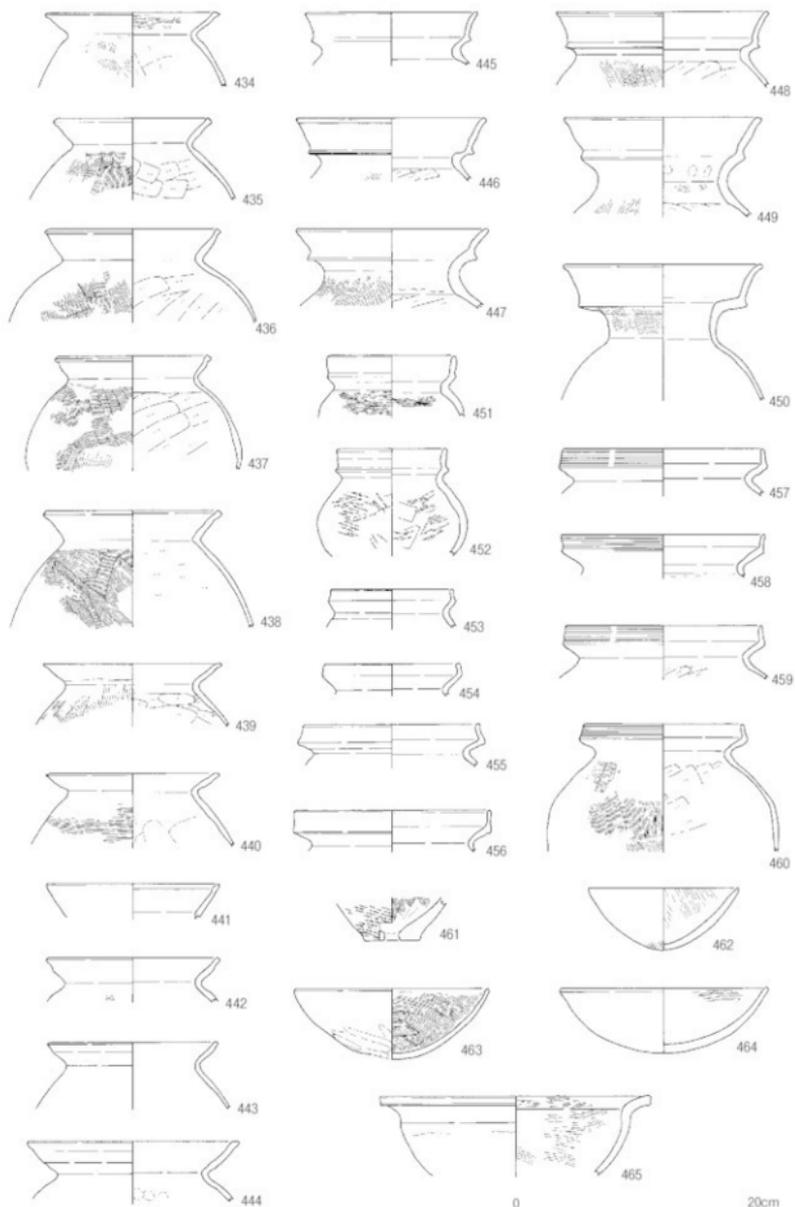


土器实测图(19)

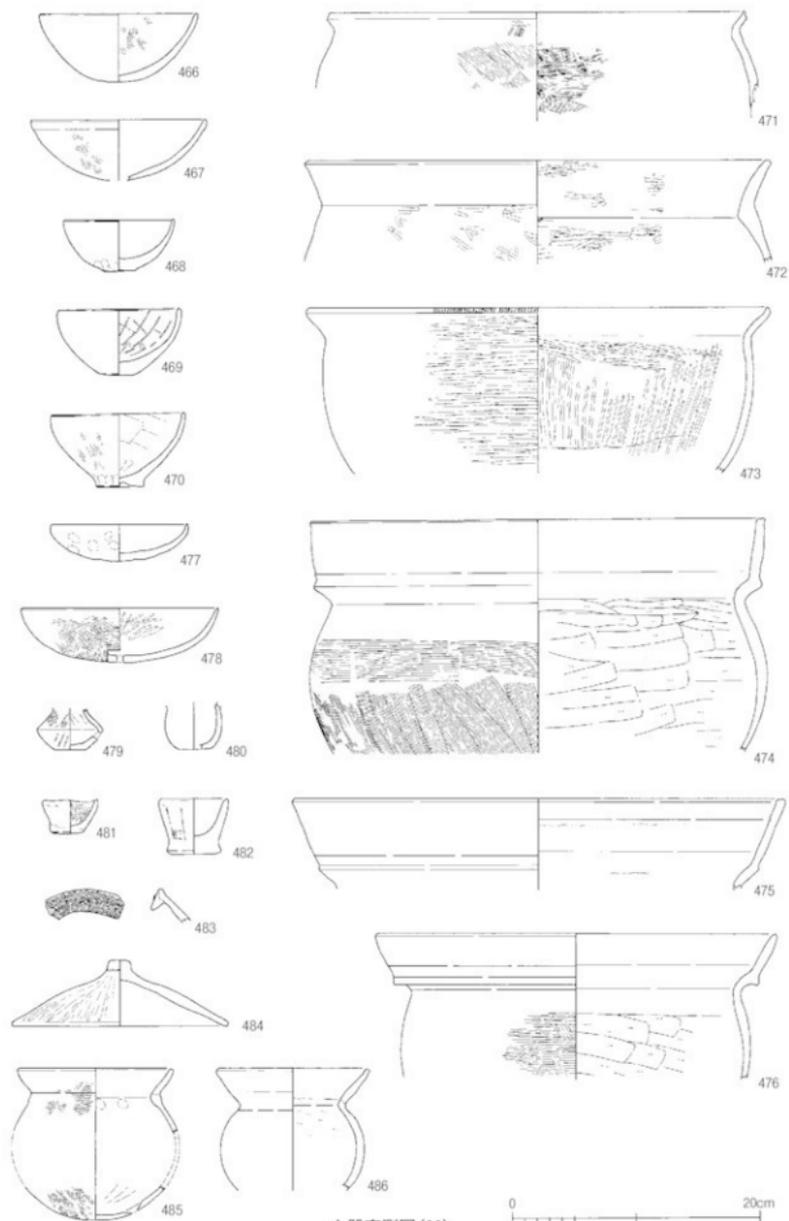


土器実測図(20)

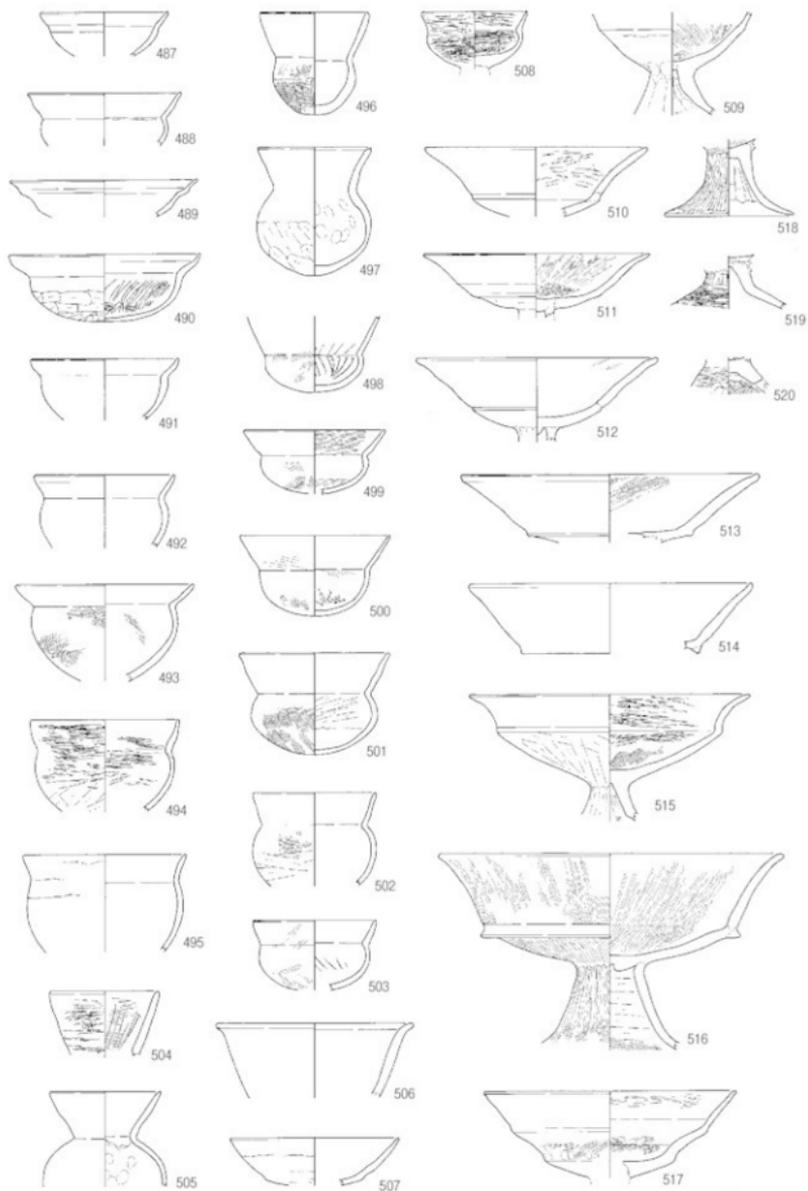
0 20cm



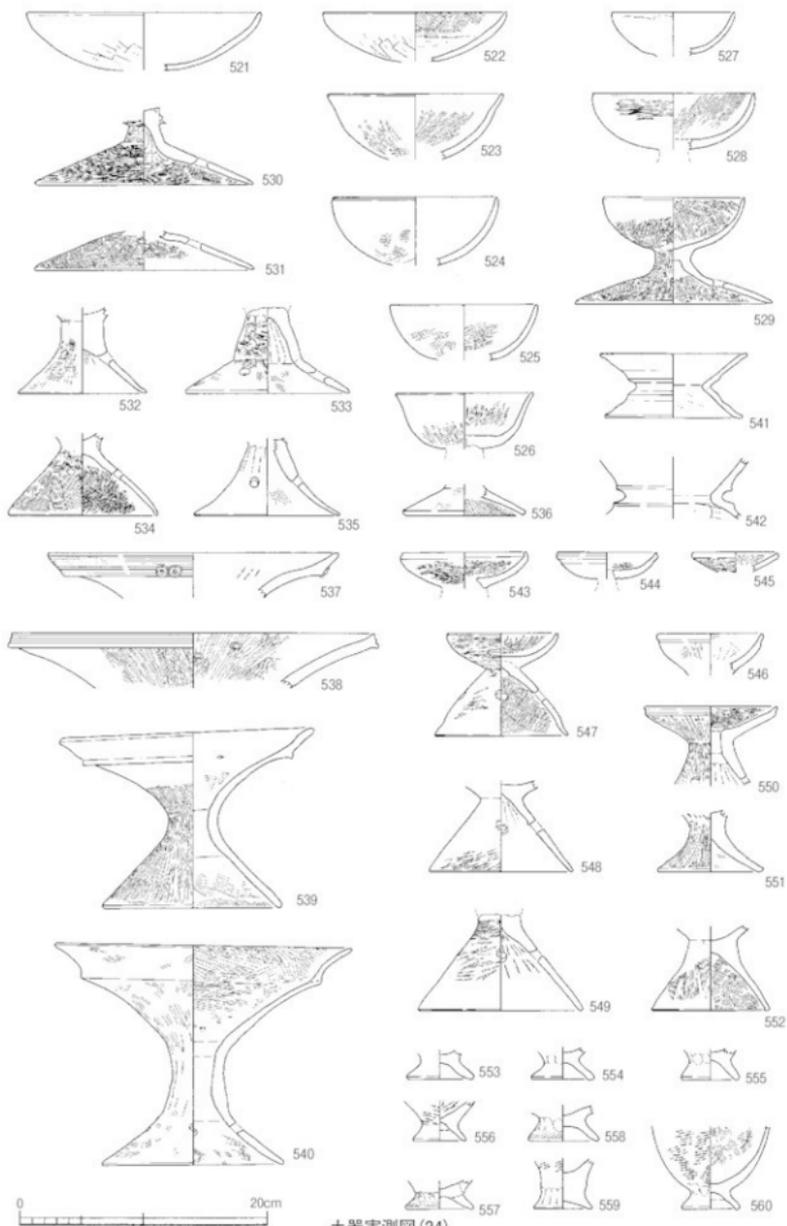
土器实测图(21)



土器実測図(22)

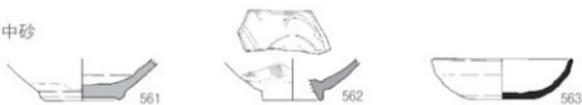


土器实测图(23)

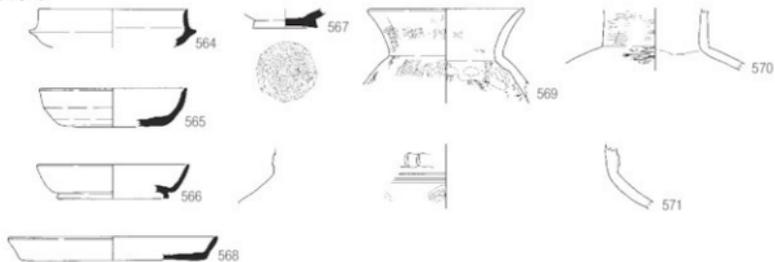


土器实测图(24)

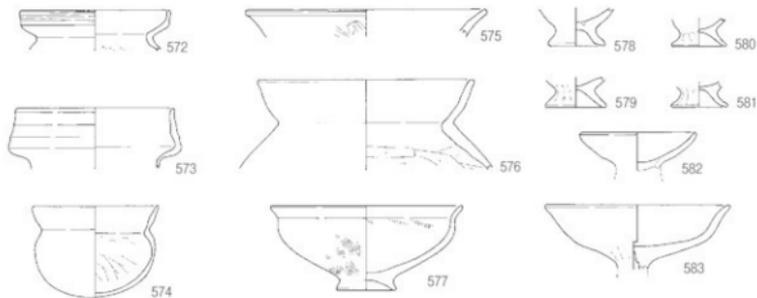
黄灰中砂



灰砂礫



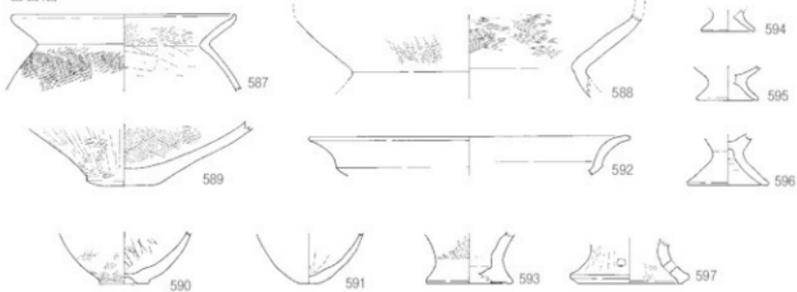
礫層



褐灰シルト



包含層



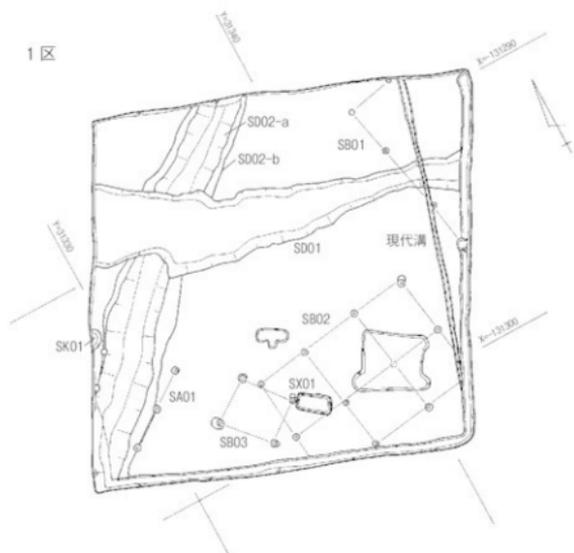
土器実測図(25)



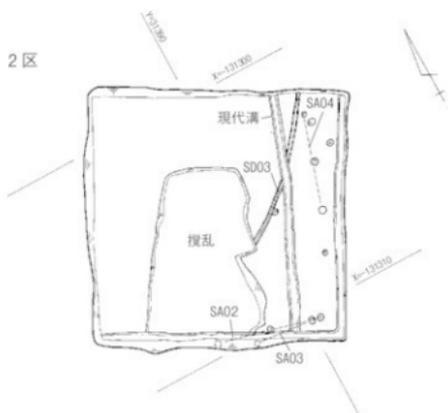




1区



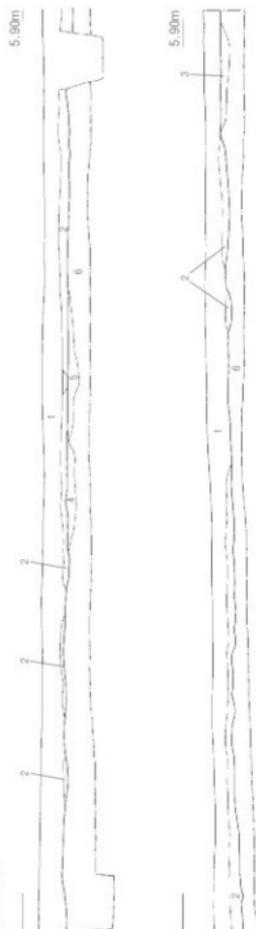
2区



竹の前遺跡平面図



1 区東壁



- 1 田原土
- 2 1006.4/2 灰層
- 3 1006.5/3 灰層
- 4 1006.5/3 田原土
- 5 1006.5/3 シルト層
- 6 1006.4/3 シルト層

- 1 田原土
- 2 1006.4/2 灰層
- 3 1006.5/3 灰層
- 4 1006.5/3 田原土
- 5 1006.5/3 シルト層
- 6 1006.4/3 シルト層

2 区南壁

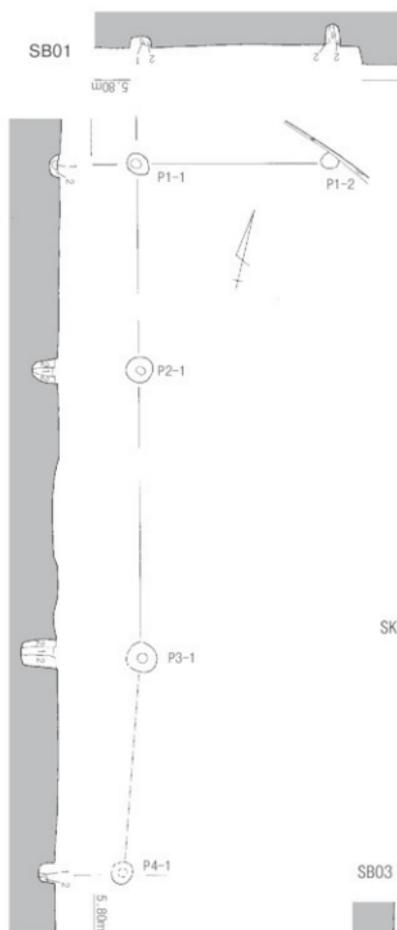


- 1 1006.4/1 堀底
- 2 2,397.5/3 堀底
- 3 2,397.5/3 堀底
- 4 2,397.5/2 堀底
- 5 2,397.4/2 堀底
- 6 2,397.4/2 堀底
- 7 1006.5/2 堀底
- 8 2,397.5/1 堀底
- 9 2,397.5/1 堀底
- 10 1006.4/3 堀底

- 1 シルト層
- 2 シルト層
- 3 シルト層
- 4 シルト層
- 5 シルト層
- 6 シルト層
- 7 シルト層
- 8 シルト層
- 9 シルト層
- 10 シルト層



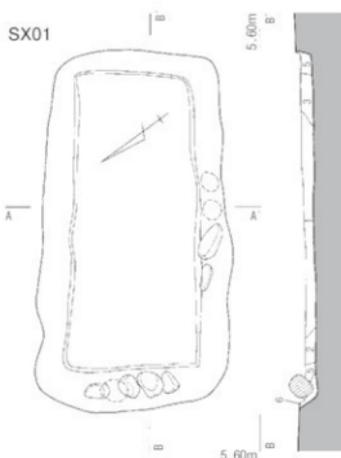
竹の前遺跡土層図



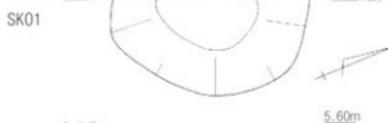
5.60m



1 10R 5/2 灰黄褐色 粘質シルト～粘細砂
2 10R 4/2 灰黄褐色 粘質シルト～粘細砂



1 2.5R 5/2 暗灰黄 中砂混じりシルト～粘細砂
2 2.5R 5/3 黄褐色 中砂混じりシルト～粘細砂
3 10R 5/2 灰黄褐色 中砂混じり粘質シルト～粘細砂
4 10R 5/3 に近い黄褐色 中砂混じりシルト～粘細砂
5 10R 5/4 に近い黄褐色 中砂混じり粘細砂～細砂
6 10R 4/6 黄褐色 中砂混じり粘細砂～細砂



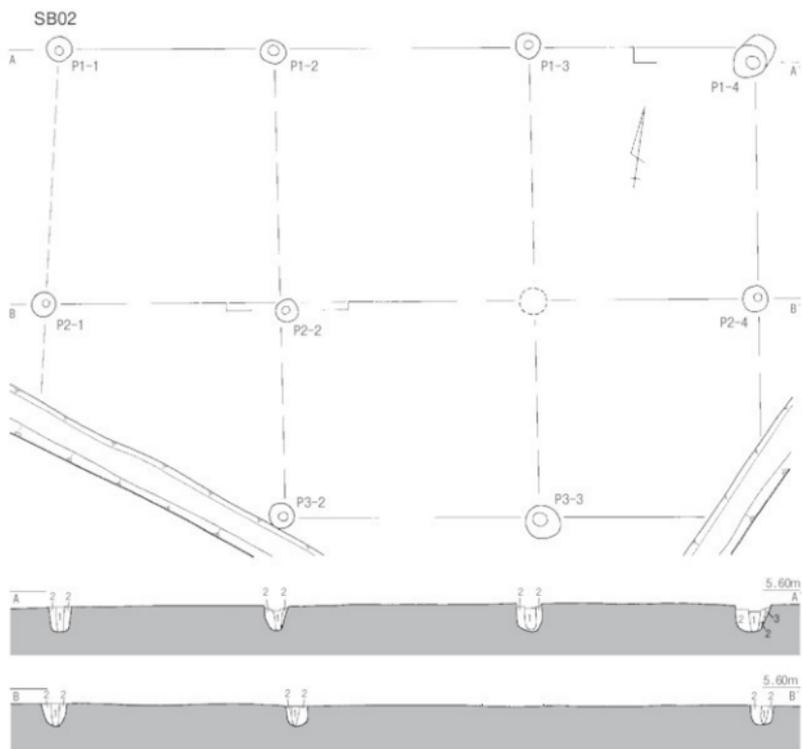
1 10R 6/2 灰黄褐色 シルト質粘細砂～細砂
2 10R 5/3 黄褐色 中砂混じりシルト質粘細砂

SB03



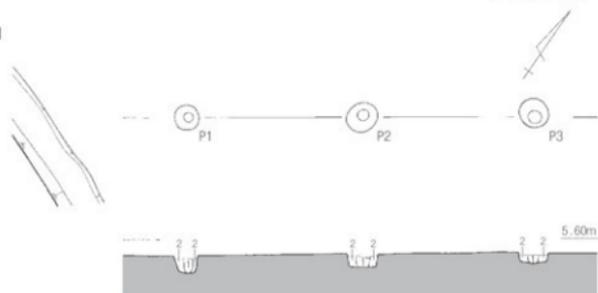
1 10R 3/1 黄褐色 シルト質粘細砂～細砂
2 10R 4/2 灰黄褐色 中砂混じり粘質シルト～粘細砂
3 10R 4/2 灰黄褐色 シルト質粘細砂～細砂
4 10R 5/4 に近い黄褐色 中砂混じりシルト～粘細砂
5 10R 4/1 暗灰黄 シルト質粘細砂～細砂
6 10R 4/2 灰黄褐色 シルト質粘細砂～細砂

竹の前遺跡遺構実測図(1)



- | | | | |
|---|----------|--------|--------------|
| 1 | 10R 4/3 | にがい黄褐色 | 中砂混じり粘細砂一級砂 |
| 2 | 10R 4/4 | 褐色 | シルト混じり中砂一級砂 |
| 3 | 2.5F 5/2 | 暗灰黄 | 中砂混じりシルト一級粘砂 |

SA01

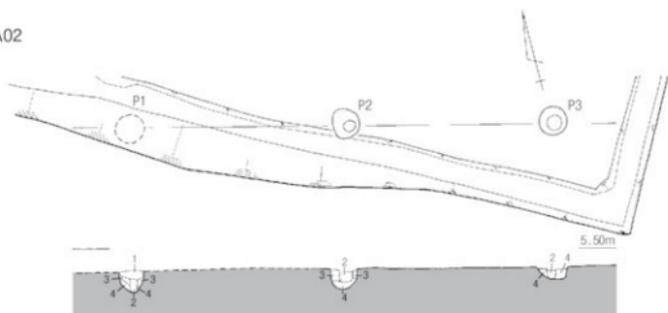


- | | | | |
|---|----------|--------|---------------------|
| 1 | 10R 5/3 | にがい黄褐色 | シルト質粘細砂一級砂 マンガン多く含む |
| 2 | 2.5F 6/3 | にがい黄褐色 | シルト質粘細砂 マンガン割合を少し含む |

竹の前遺跡遺構実測図(2)

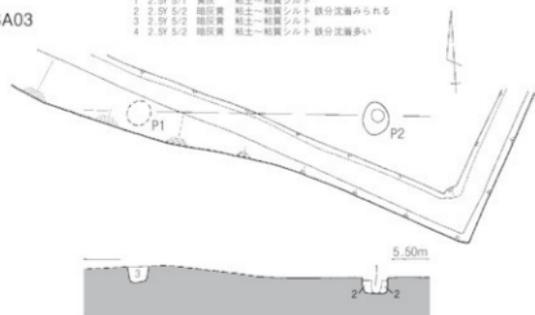


SA02



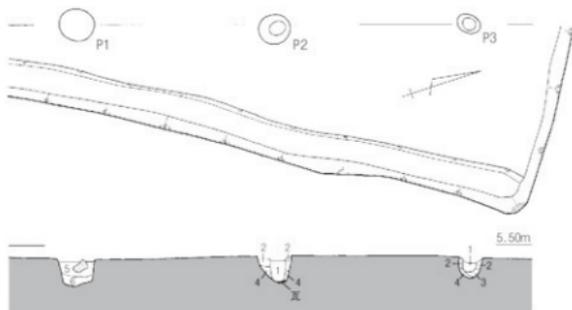
- 1 2.5Y 5/1 黄灰 粘土→粘質シルト
- 2 2.5Y 5/2 暗灰黄 粘土→粘質シルト 鉄分沈着みられる
- 3 2.5Y 5/2 暗灰黄 粘土→粘質シルト
- 4 2.5Y 5/2 暗灰黄 粘土→粘質シルト 鉄分沈着多い

SA03



- 1 2.5Y 4/2 暗灰黄 粘質シルト→粘細砂
- 2 2.5Y 5/3 黄褐 中砂混じり粘質シルト
- 3 10R 4/2 灰黄褐 シルト→粘細砂

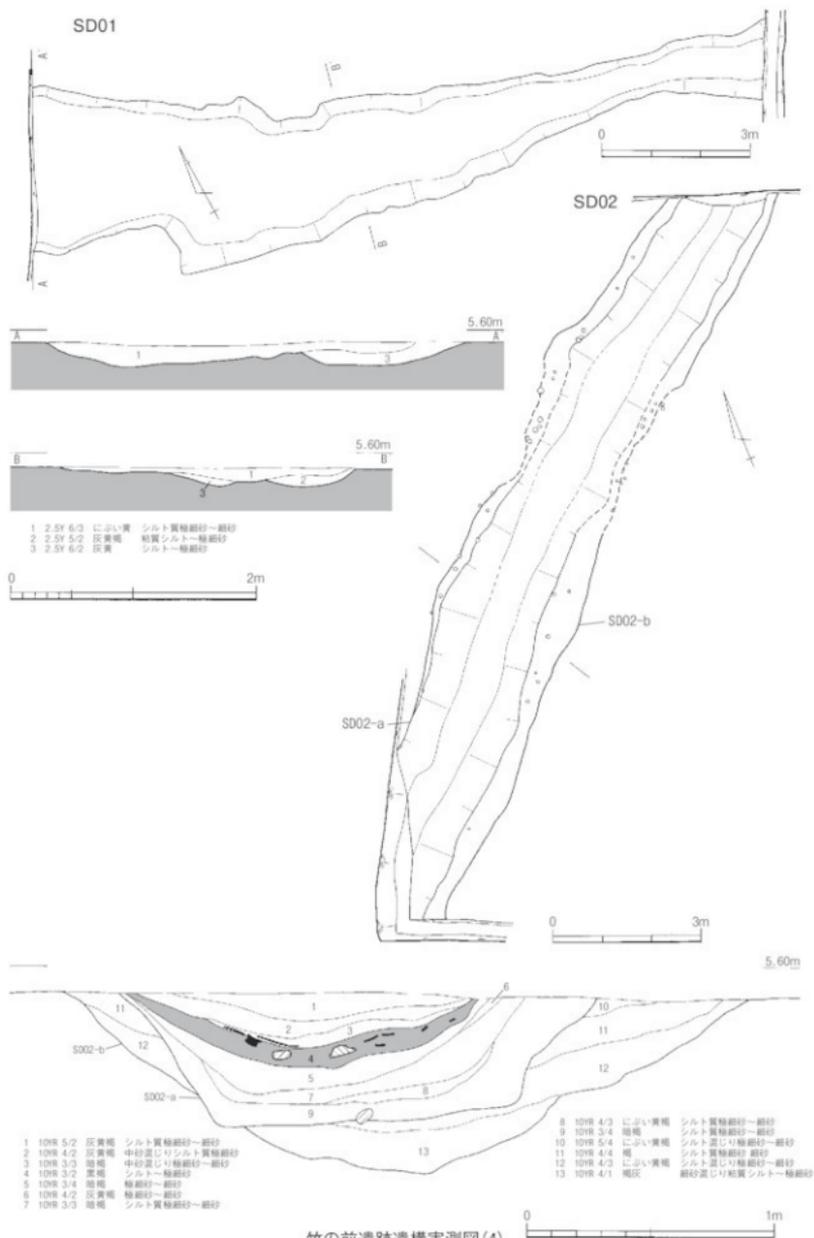
SA04



- 1 10R 5/2 灰黄褐 シルト→粘細砂 ベースをわずかに含む
- 2 10R 5/4 にぶい黄褐 粘細砂→粘砂
- 3 10R 5/6 黄褐 シルト質粘細砂→粘砂
- 4 10R 5/2 灰黄褐 中砂混じり粘細砂→粘砂
- 5 10R 5/1 暗灰 粘細砂→粘細砂 ベースをブロック状に含む
- 6 10R 5/3 にぶい黄褐 中砂混じりシルト→粘細砂 ベース下層の粗→中砂をわずかに含む

竹の前遺跡遺構実測図(3)





竹の前遺跡遺構実測図(4)

1区 SD01



1



2

1区 SD02



3



4



5



6



7



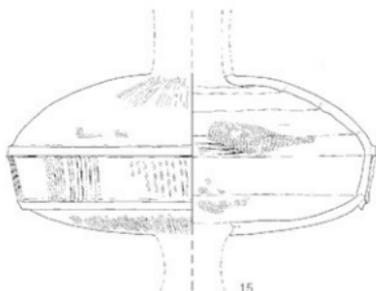
8



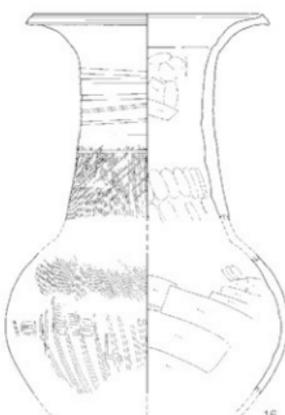
9



10



15



16



11



17



12



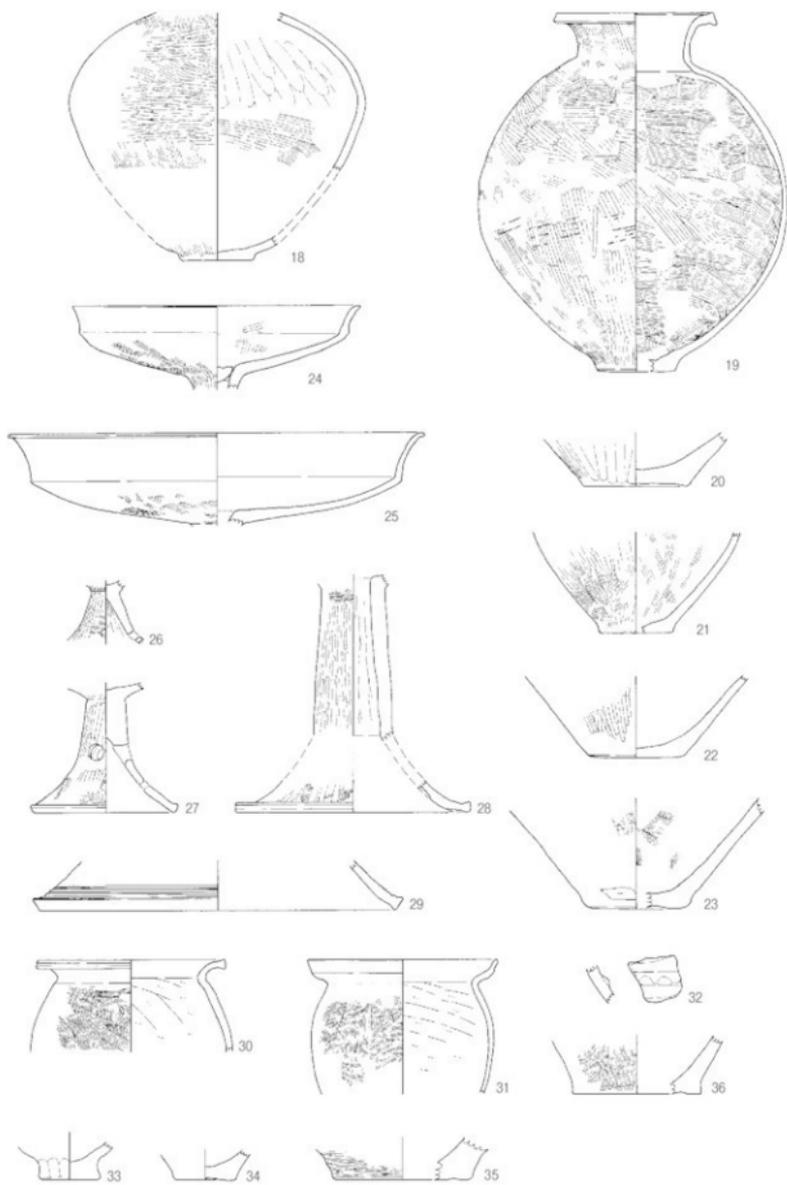
13



14



竹の前遺跡土器実測図(1)



竹の前遺跡土器実測図(2)

写 真 图 版





空中写真（南西上空から）



空中写真（南東上空から）



空中写真（国土地理院撮影）



調査区空中写真（東上空から）



調査区空中写真（南上空から）



調査区空中写真



飯田橋からの景色（後方は長越遺跡 I）



全景（南から）



調査区全景（南から）



全景（北から）



竪穴住居跡群（南東から）



竪穴住居跡群（南から）



竪穴住居跡群（南西から）



SH01全景（西から）



SH01全景（南から）



SH01検出状況
(北から)



SH01検出状況
(東から)



SH01検出状況 (南から)



SH01検出状況 (西から)



SH01炭化材検出状況



SH01低床部全景



低床部土坑・台石



台石検出状況



調査風景



調査風景



SH02全景 (南から)



SH02堆積状況



壁溝堆積状況



床面土器出土状態



中央土坑堆積状況



SH03全景 (南から)



SH03堆積状況 (南から)



SH04・SH05全景（南西から）



SH04全景（南東から）



SH04全景（北東から）



SH04堆積状況



調査風景



遺物出土状態



中央土坑遺物出土状態（西から）



SH06・SH12全景（東から）



SH06・SH12全景（西から）



SH06焼土坑検出状況（東から）



SH06土器出土状態



SH06焼土坑断面（東から）



SH06焼土坑出土状態（東から）



SH06炉跡断面



SH06炭化材出土状態



SH06炭化材出土状態



SH06炭化材出土状態



SH06東壁炭化材



SH06西壁炭化材



東壁断ち割り



南壁断ち割り



SH06炭化材



網代炭化材（剥ぎ取り）



SH06土器出土状態（南から）



SH06土器出土状態



SH07 (南から)



SH08 (北から)



SH08 (西から)



SH08土器出土状態（西から）



調査風景



SH09・10・11（南から）



SH09～11の切り合い



SH09（南から）



SH09・SH10遺物出土状態（南から）



SH10（南から）



SH10堆積状況（南から）



SH10土器出土状態



SH10・11の切り合い

調査風景



SH11 (南から)



SH11炉跡



SH11土器出土状態



SH13 (西から)



SH13 (北から)



SK01土器出土状態



SK02アゼ (北西から)



SK03アゼ・土器出土状態 (北西から)



SK02アゼ (北西から)



SD01アゼ (南から)



SD06アゼ (南から)



SD09 (西から)



SD02上層アゼ (東から)



SD02土器出土状態 (西から)



SD02土器出土状態 (西から)



SD02土器出土状態 (西から)



SR01 (北から)



SR01 (南から)



SR01アゼ (北から)



中央アゼ (南から)



旧河道土器出土状態



調査風景



SH04出土遺物



SH06出土遺物



SH09出土遺物



讃岐からの搬入品



山陰からの搬入品



庄内甕



旧河道出土
(壺)

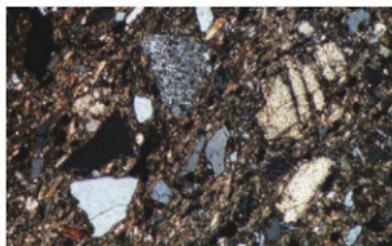
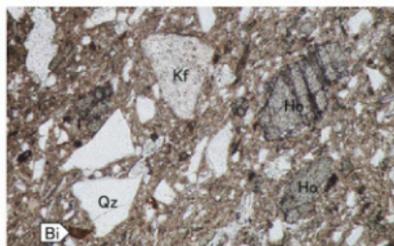


旧河道出土
(高杯・器台)

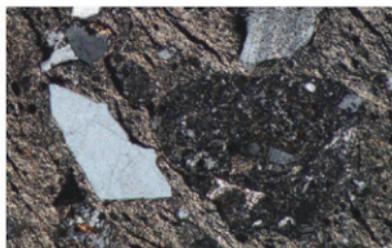
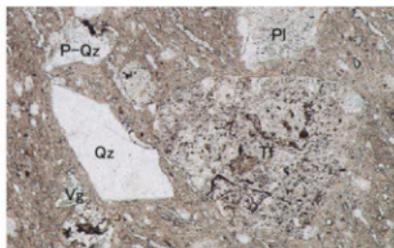


旧河道出土
(製塩土器)

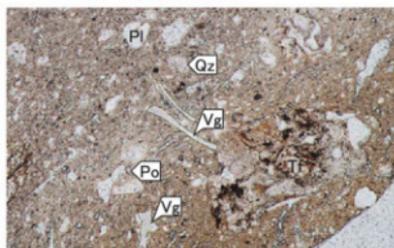
胎土薄片(1)



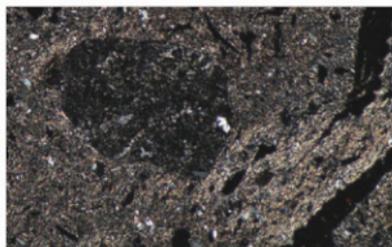
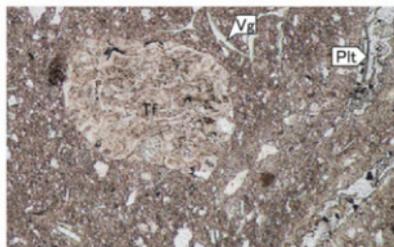
1.No.1(土師器 庄内壺 播磨産)



2.No.2(土師器 庄内壺 播磨産)



3.No.3(土師器 庄内壺 播磨産)

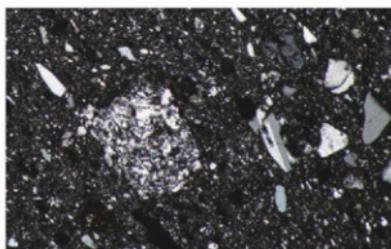
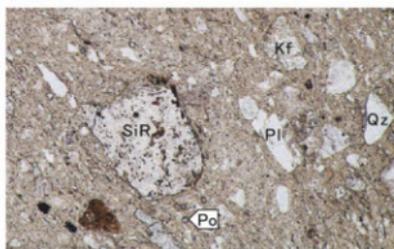


4.No.4(土師器 壺 播磨産)

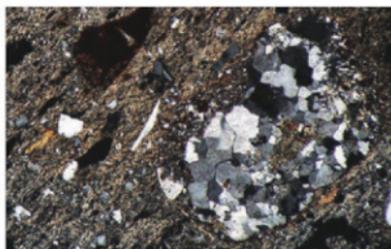
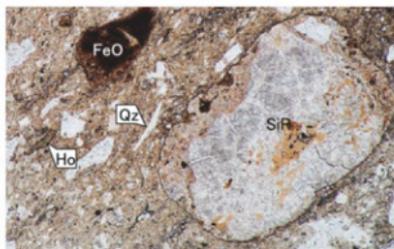
Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Bi:黒雲母, Tf:凝灰岩,
 P-Qz:多結晶石英, Vg:火山ガラス, Po:植物珪酸体, Plt:植物片,
 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

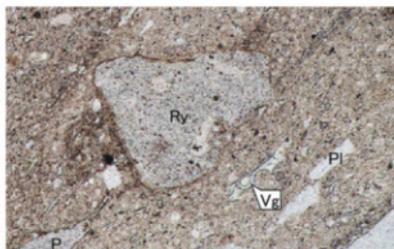
胎土薄片(2)



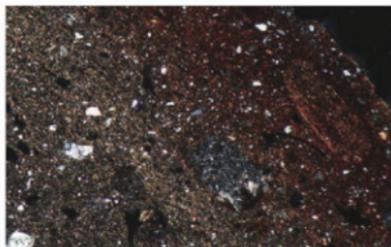
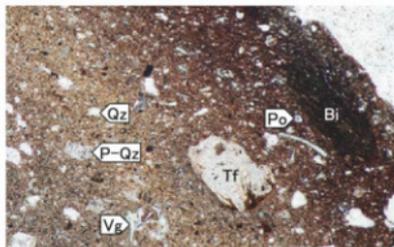
5.No.5(土師器 壺 播磨産)



6.No.6(土師器 壺 播磨産)



7.No.7(土師器 壺 播磨産)

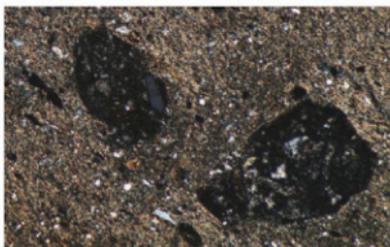
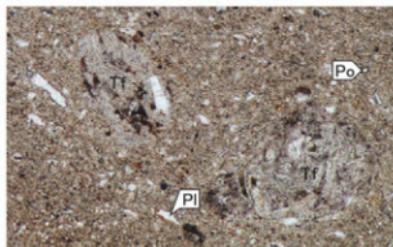


8.No.8(土師器 高杯 播磨産)

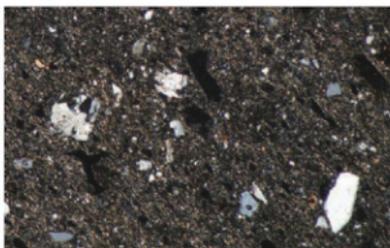
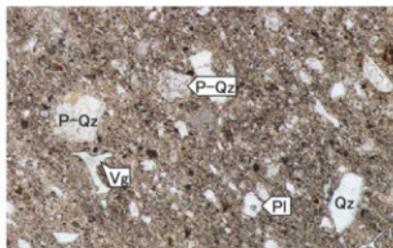
Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Bi:黒雲母, Tf:凝灰岩, Ry:流紋岩,
P-Qz:多結晶石英, SiR:珪化岩, Vg:火山ガラス, FeO:酸化鉄, Po:植物珪酸体。
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

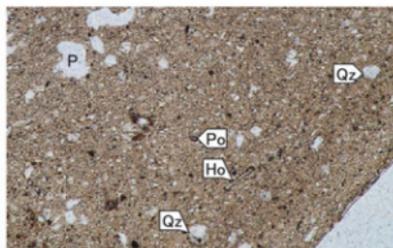
胎土薄片(3)



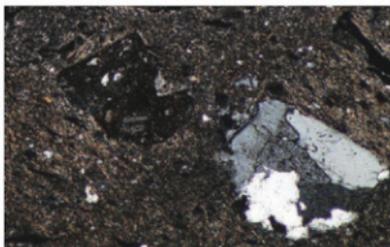
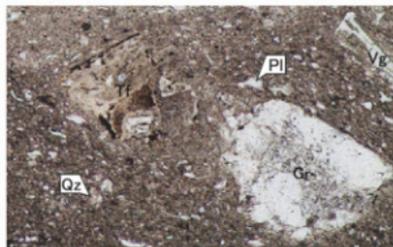
9.No.9(土師器 高杯 播磨産)



10.No.10(土師器 高杯 播磨産)



11.No.11(土師器 小形丸底壺 播磨産)



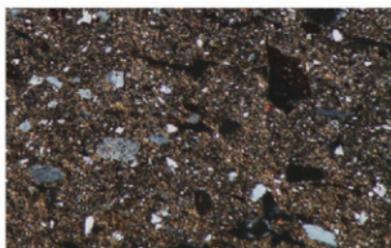
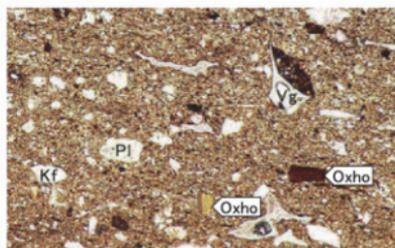
12.No.12(土師器 小形丸底壺 播磨産)

Qz:石英, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Tf:凝灰岩, P-Qz:多結晶石英, Gr:花崗岩,
Vg:火山ガラス, Po:植物珪酸体, P:孔隙。

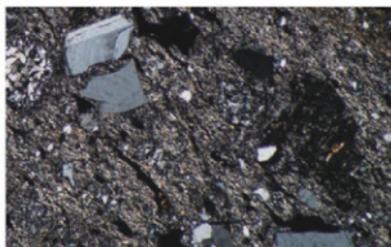
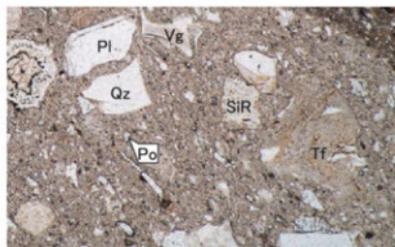
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

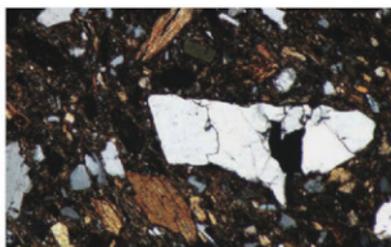
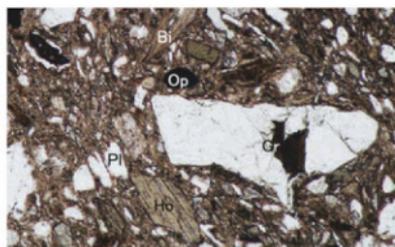
胎土薄片(4)



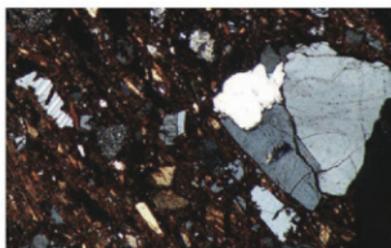
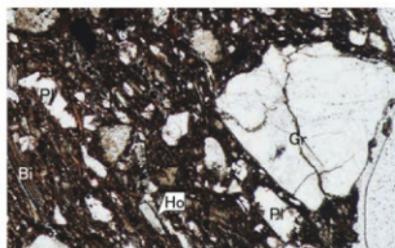
13.No.13(土師器 小形丸底壺 播磨産)



14.No.14(土師器 壺 讃岐型、播磨産)



15.No.15(土師器 壺 讃岐産)



16.No.16(土師器 壺 讃岐産)

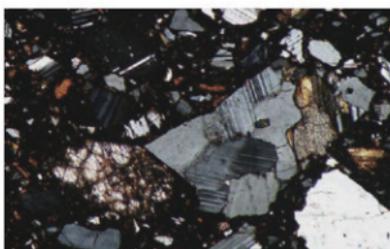
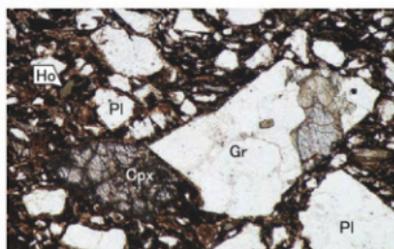
0.5mm

Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Oxho:酸化角閃石, Bi:黒雲母,

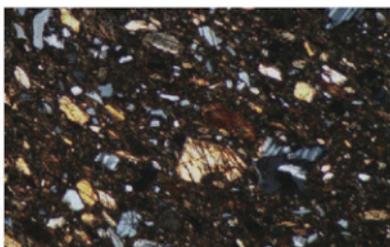
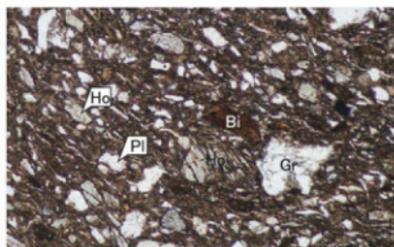
Op:不透明鉱物, Tf:凝灰岩, Gr:花崗岩, SiR:珪化岩, Vg:火山ガラス, Po:植物珪酸体,

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

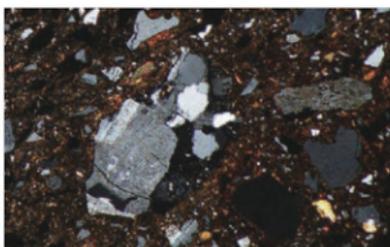
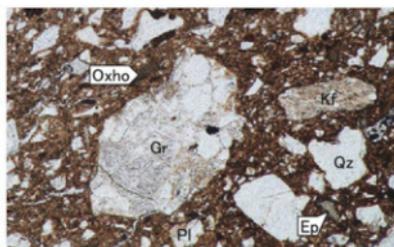
胎土薄片(5)



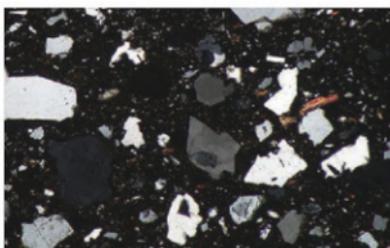
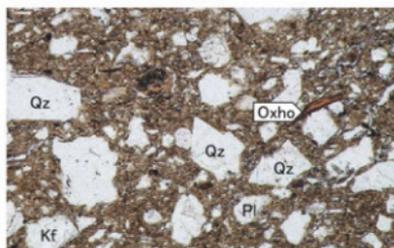
17.No.17(土師器 壺 讃岐産)



18.No.18(土師器 壺 河内産)



19.No.19(土師器 壺 吉備産)



20.No.20(土師器 壺 因幡産)

Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Cpx:単斜輝石, Ho:角閃石, Oxho:酸化角閃石,
Ep:緑レン石, Bi:黒雲母, Gr:花崗岩。

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm



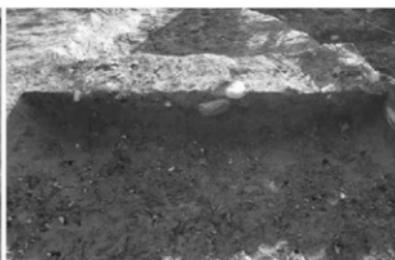
SD09 (西から)



SD10アゼ (南から)



SR01アゼ (南から)



SR01アゼ (北から)



SR01アゼ (北から)



SR01アゼ (北から)



SX01土器出土状態



SX02調査風景



SX04土器出土状態（東から）



現地説明会



考古学者養成セミナー



実測風景



上層スキ溝（南から）



上層水田アゼ（南から）



15年度調査区（長越Ⅱ）の現況



船場川ゴミ集積状況



出土遺物



旧河道出土遺物

出土遺物(1)



旧河道出土
讃岐搬入土器



旧河道出土製塩土器



暗灰砂出土鉢



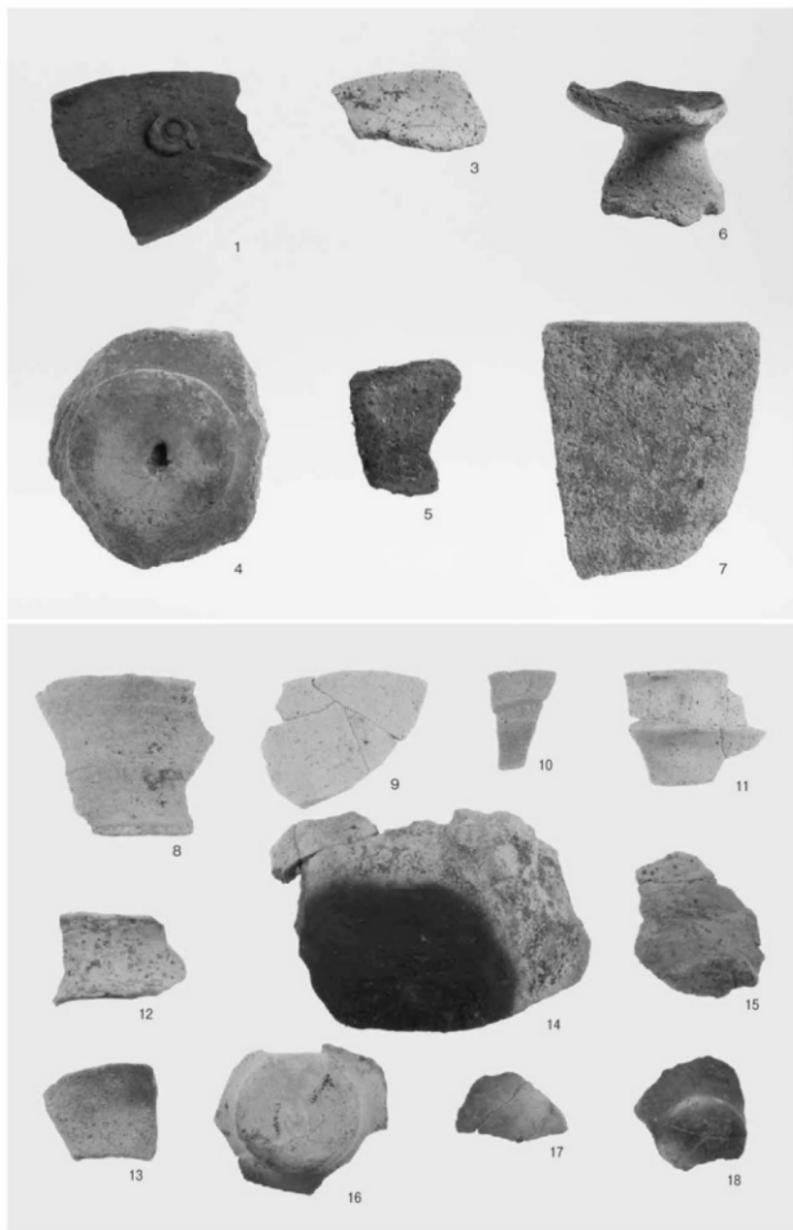
暗灰砂出土小形土器



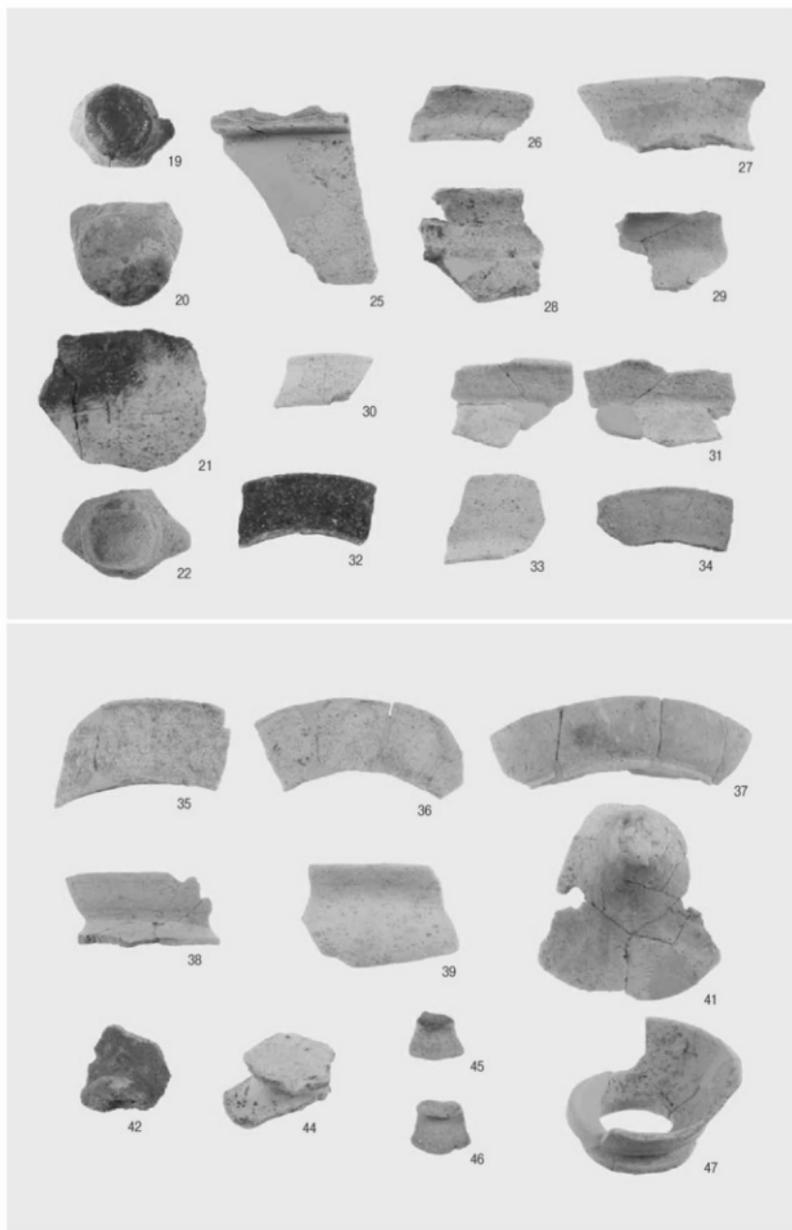
暗灰砂出土甕



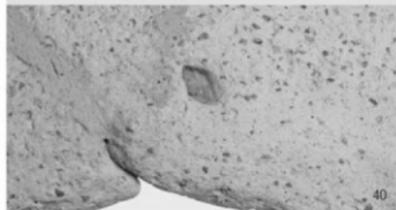
出土遺物(3)



出土遺物(4)



出土遺物(5)



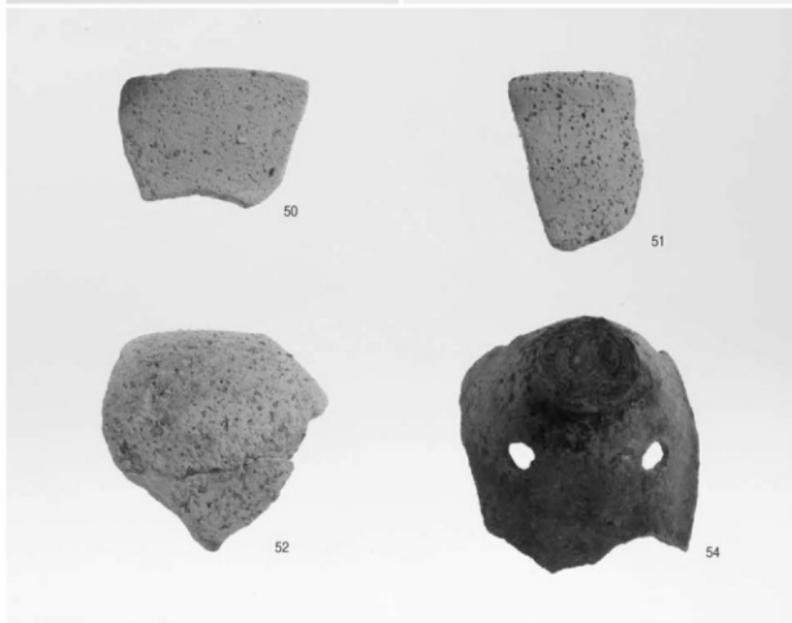
43

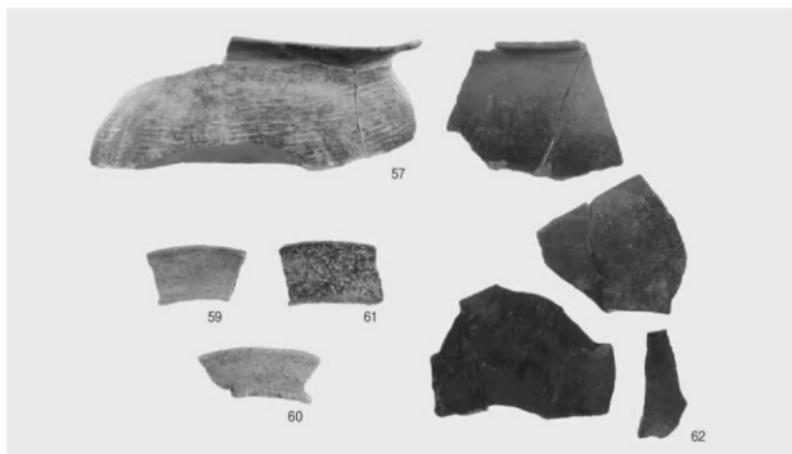


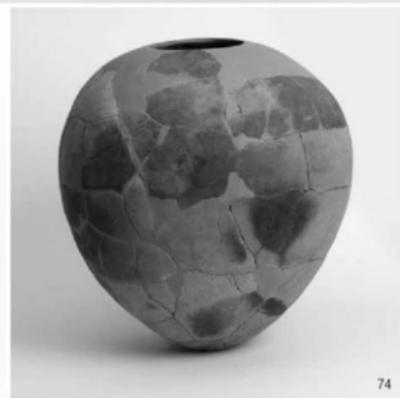
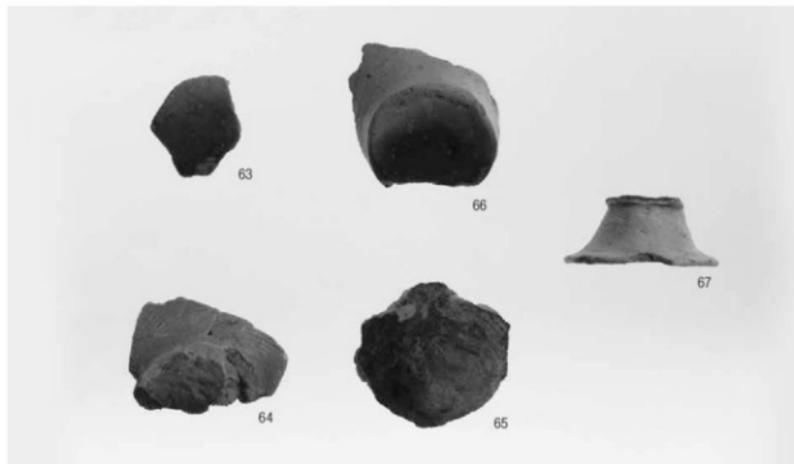
48

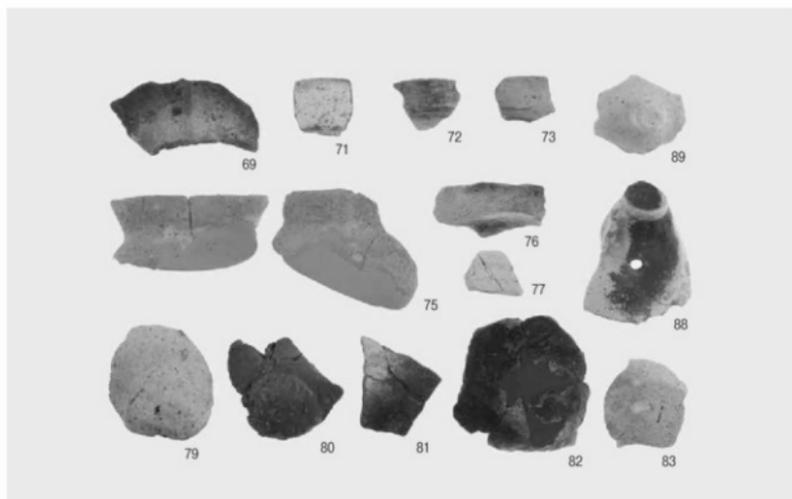


49









70



85



90



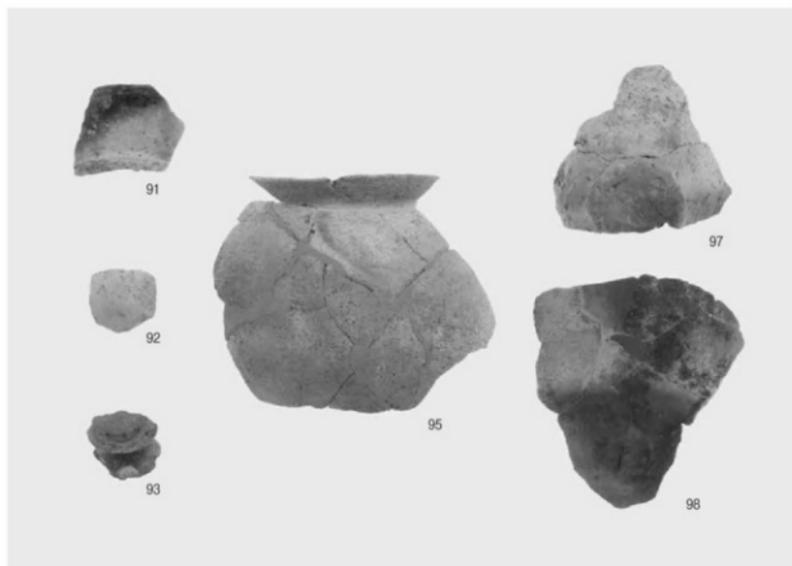
84

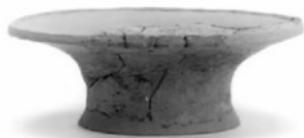


86



87





109



103



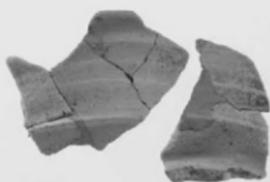
101



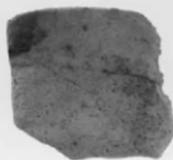
102



108



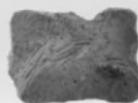
106



105



107



104



111



112



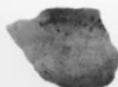
114



113



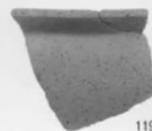
115



120



118



119



121



124



123

出土遺物(11)



110



122



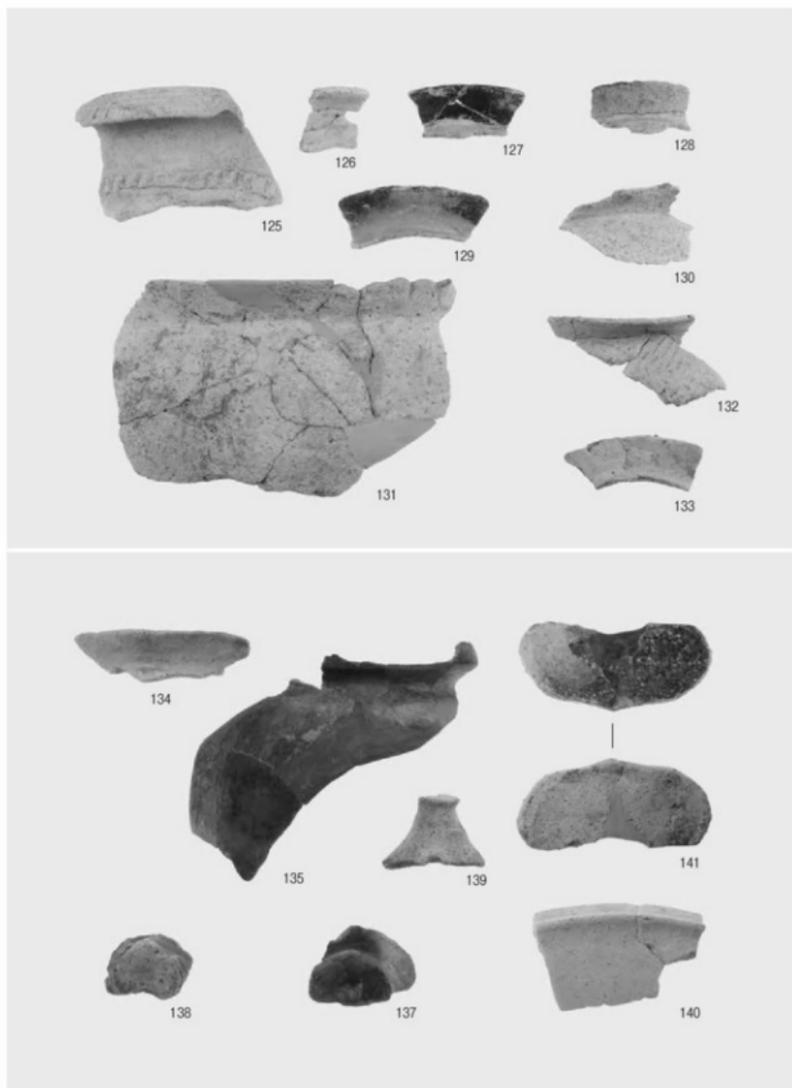
116

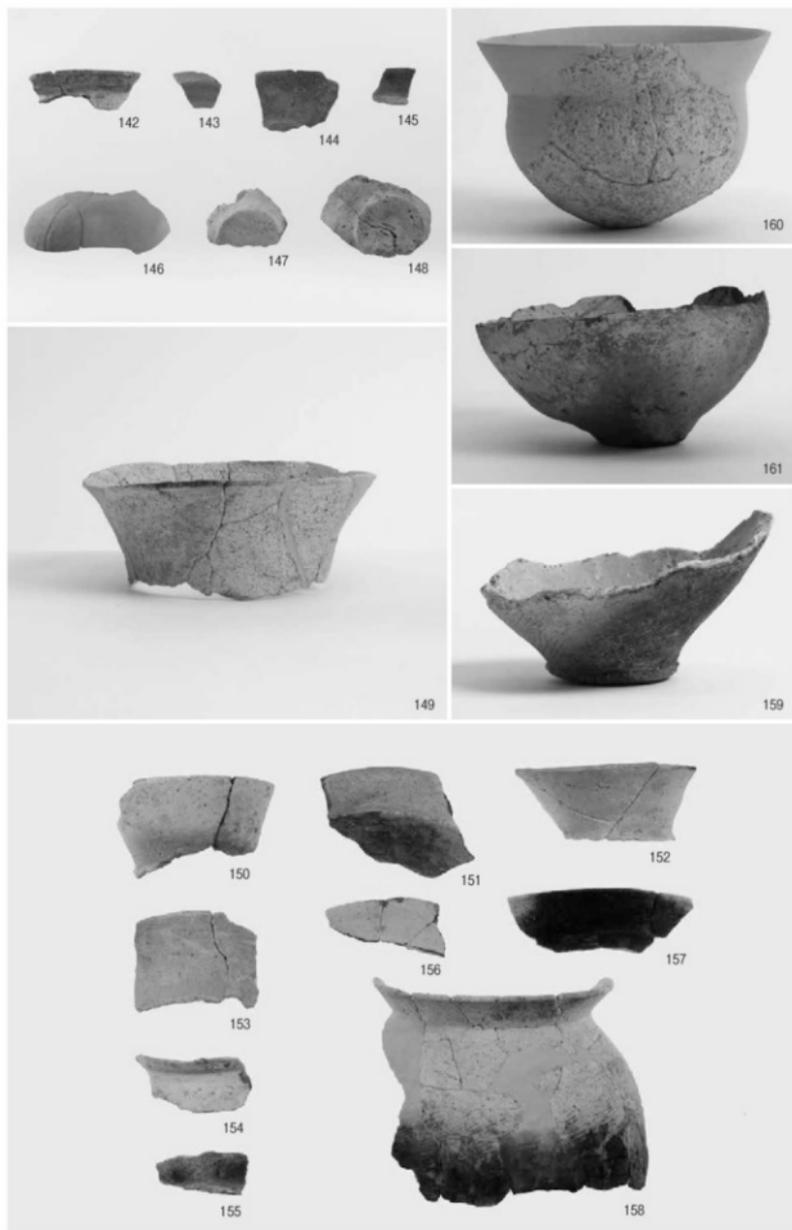


117



136

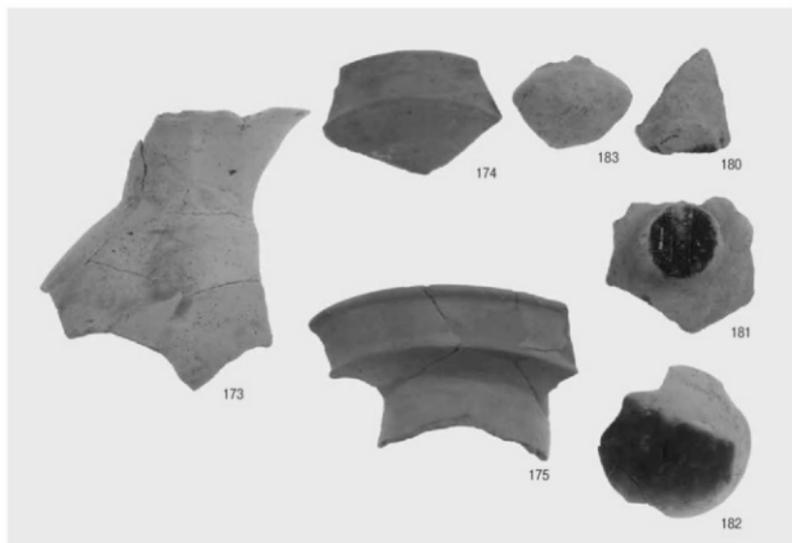


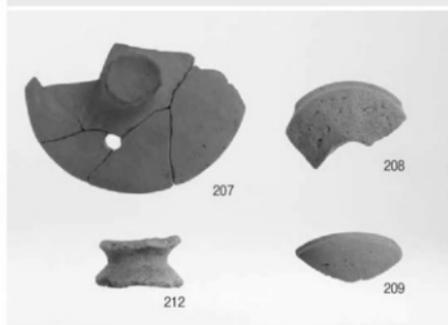
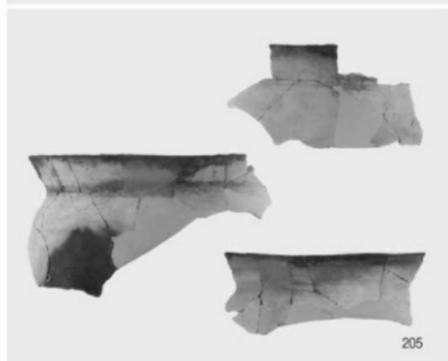
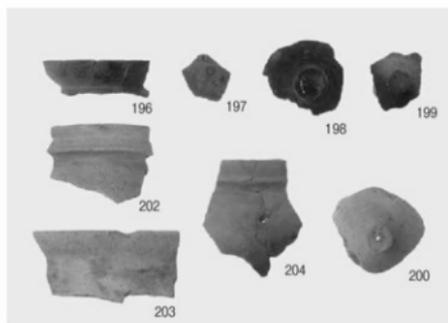


出土遺物(14)



出土遺物(15)





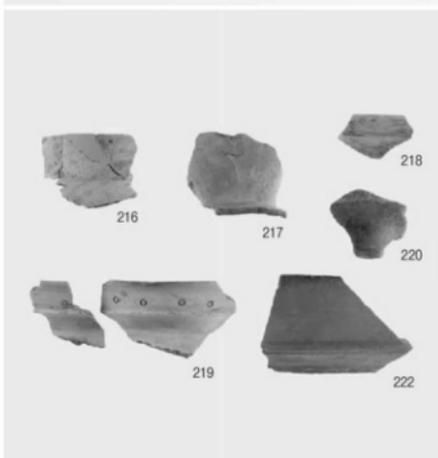




221



223



216

217

218

220

219

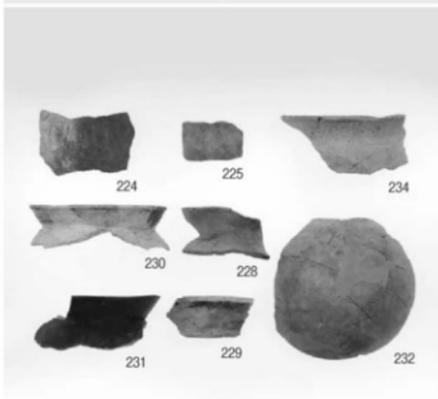
222



226



227



224

225

234

230

228

231

229

232



233





248



252



251



247



253



255



256

257

259

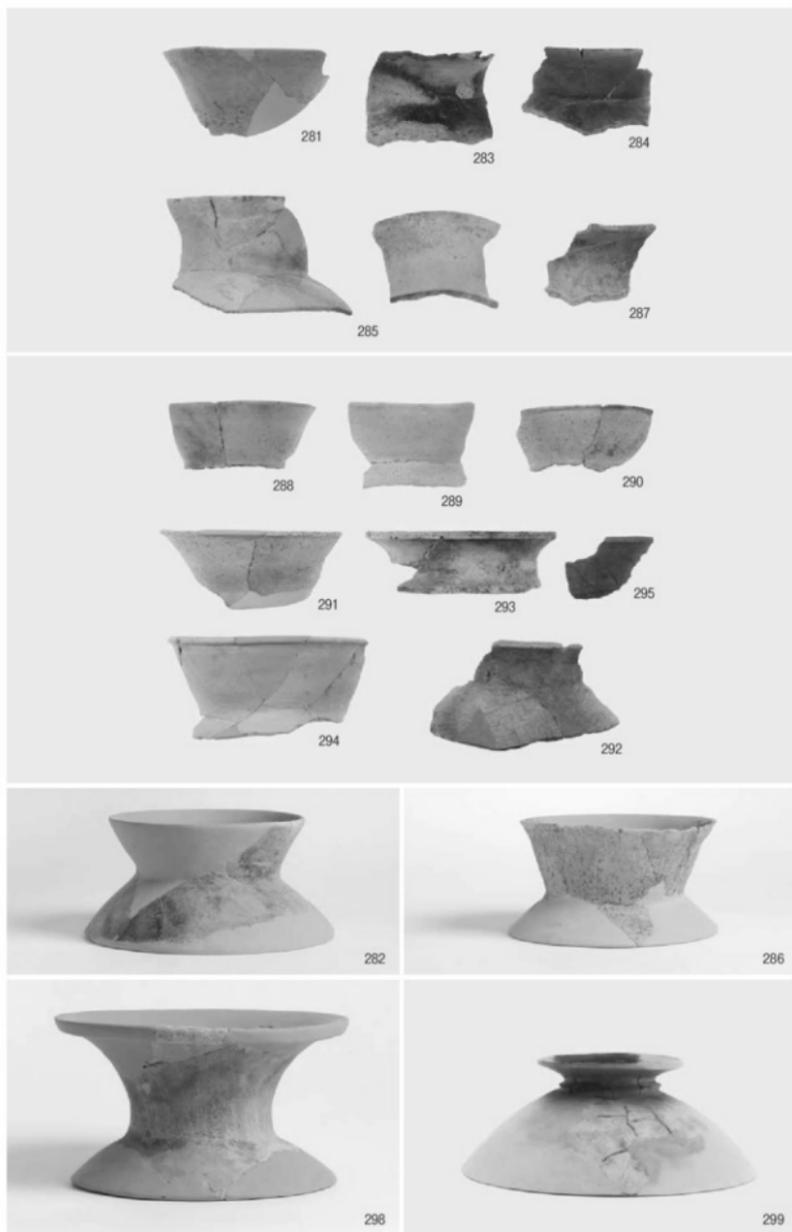


260

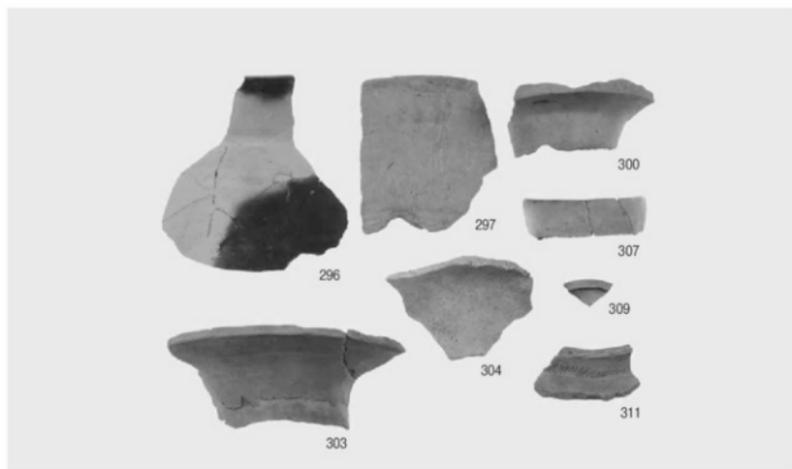
261

277



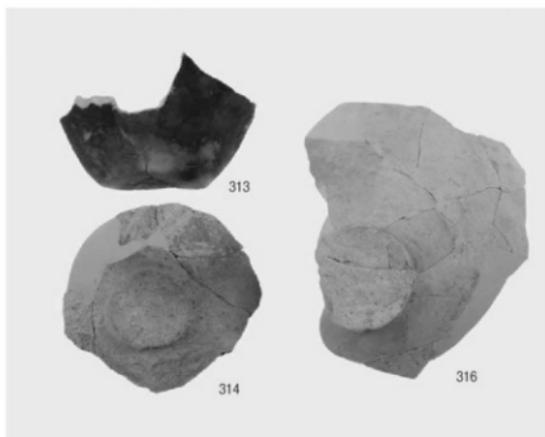


出土遺物(23)

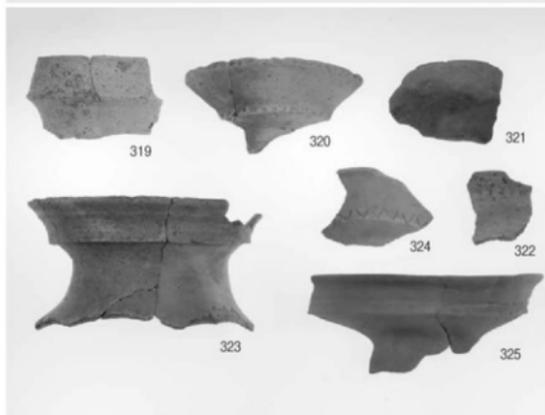




317



318

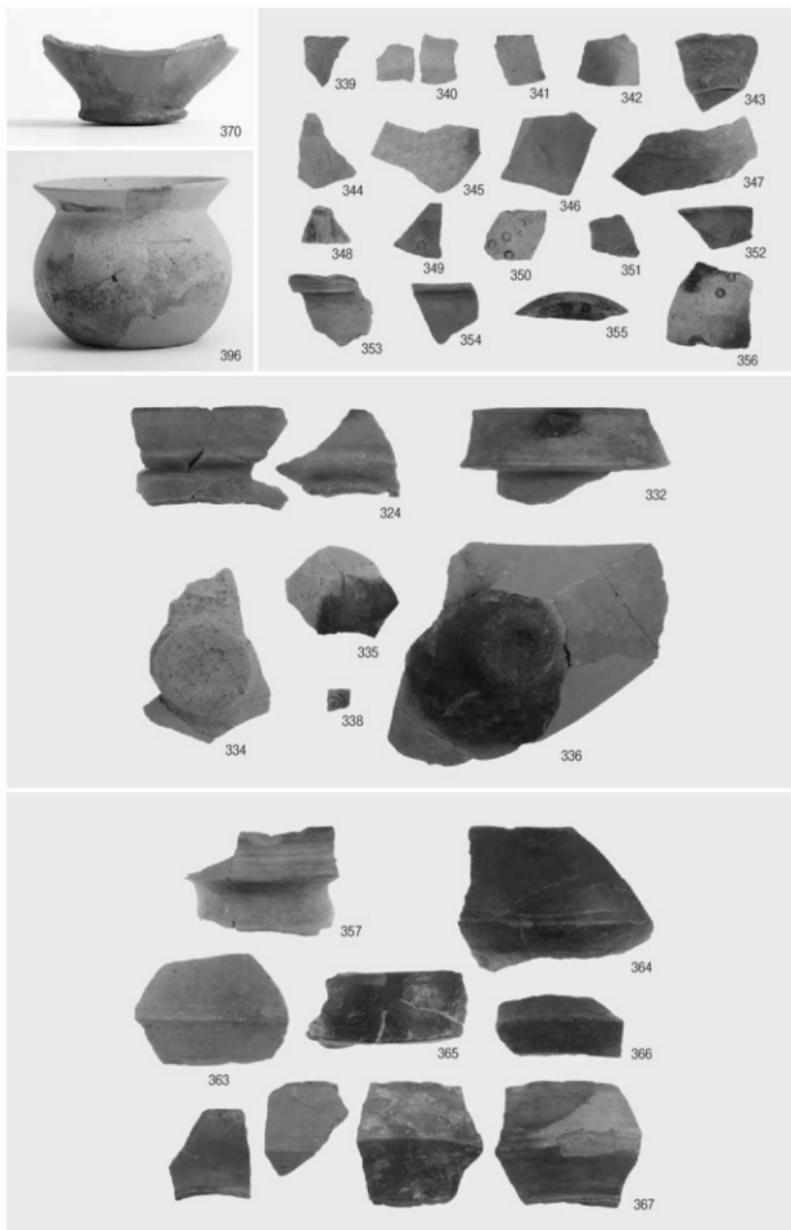


312

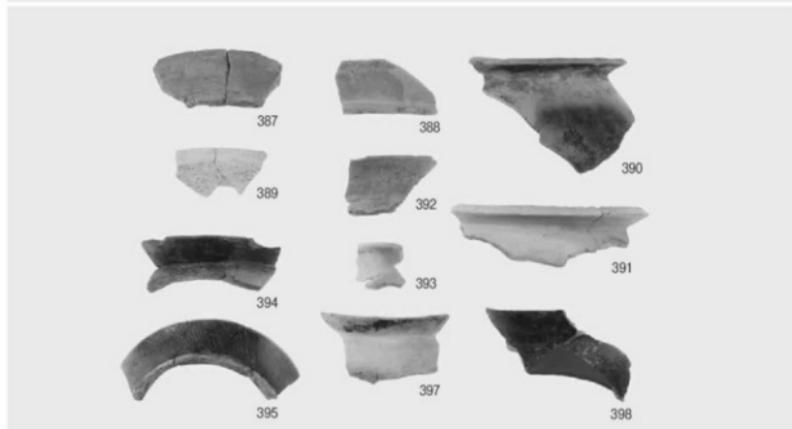
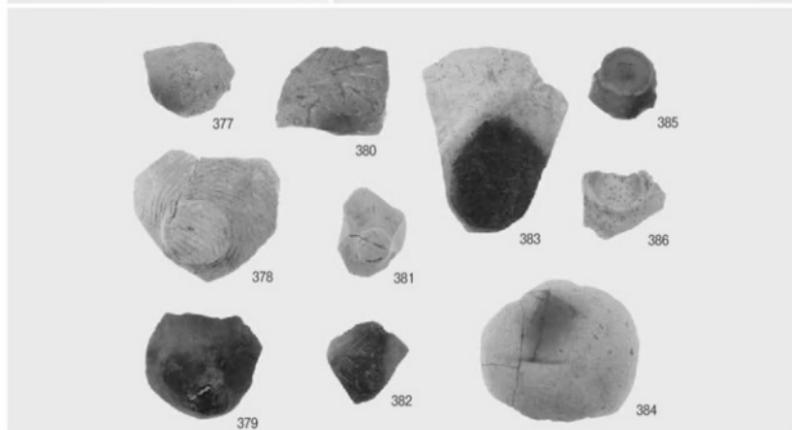
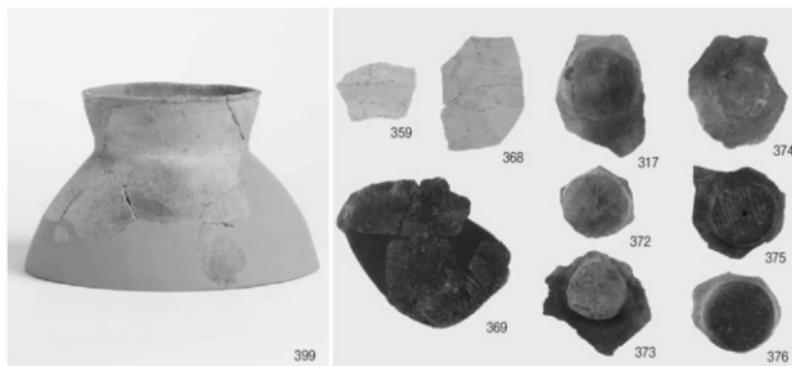


315





出土遺物(27)





414



415



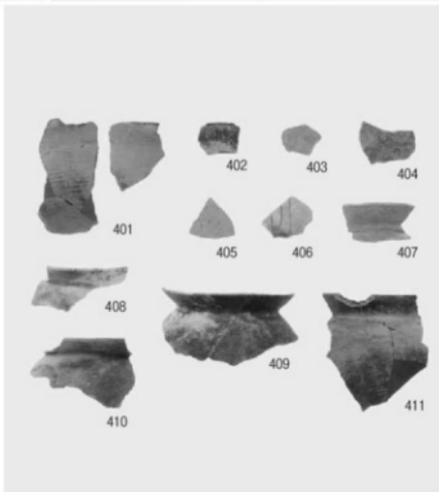
416



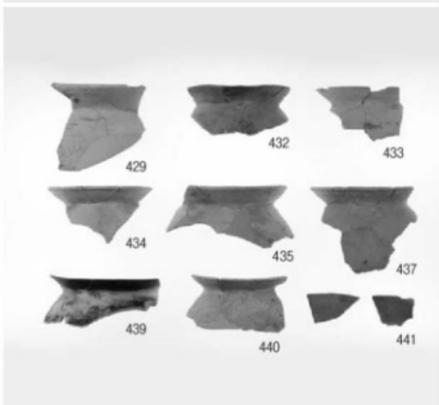
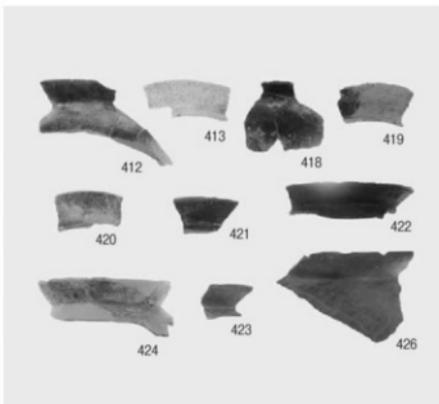
417



400



出土遺物(29)





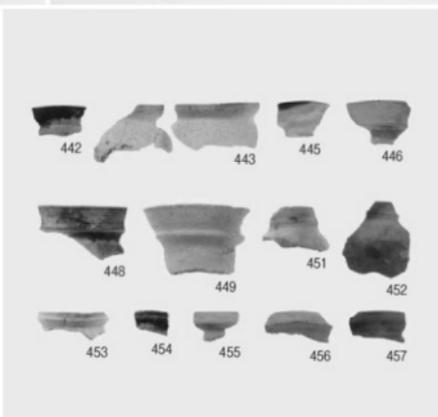
436



444



438



447



450

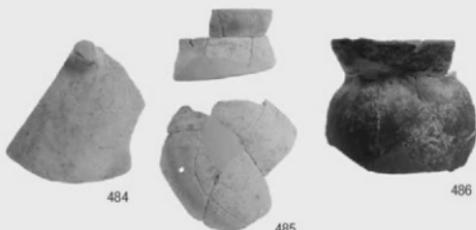




出土遺物(33)



490



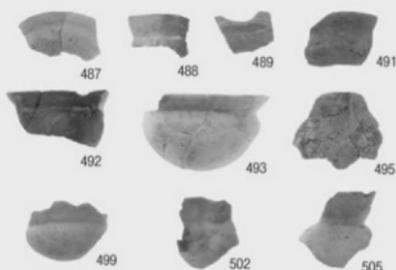
484

485

486



496



487

488

489

491

492

493

495

499

502

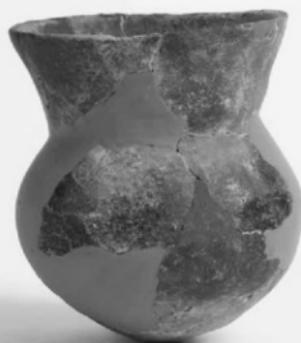
505



494

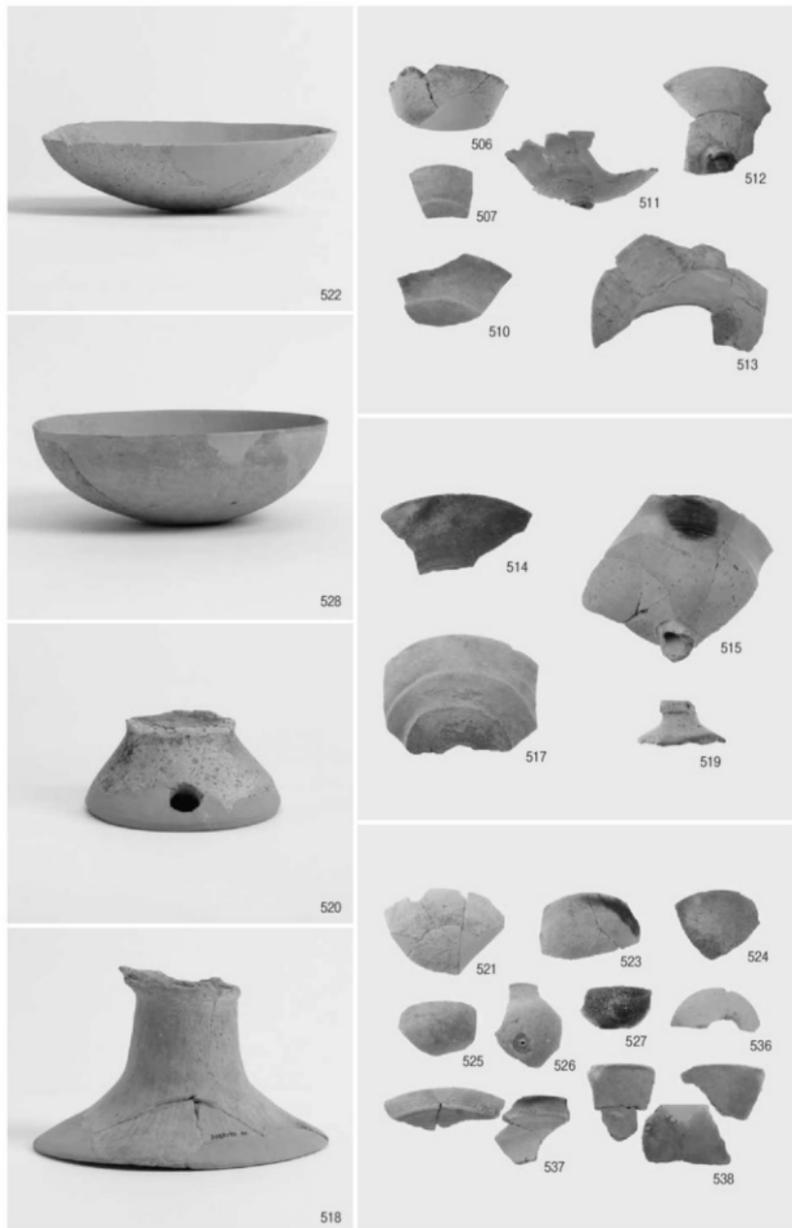


503

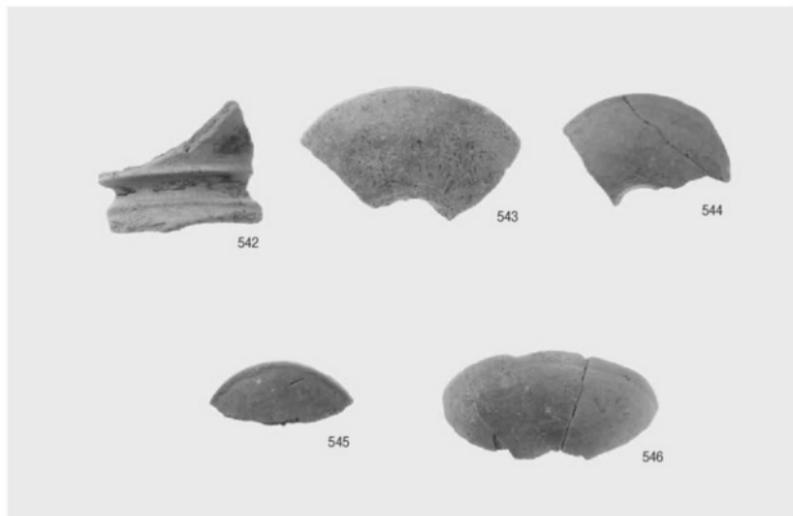


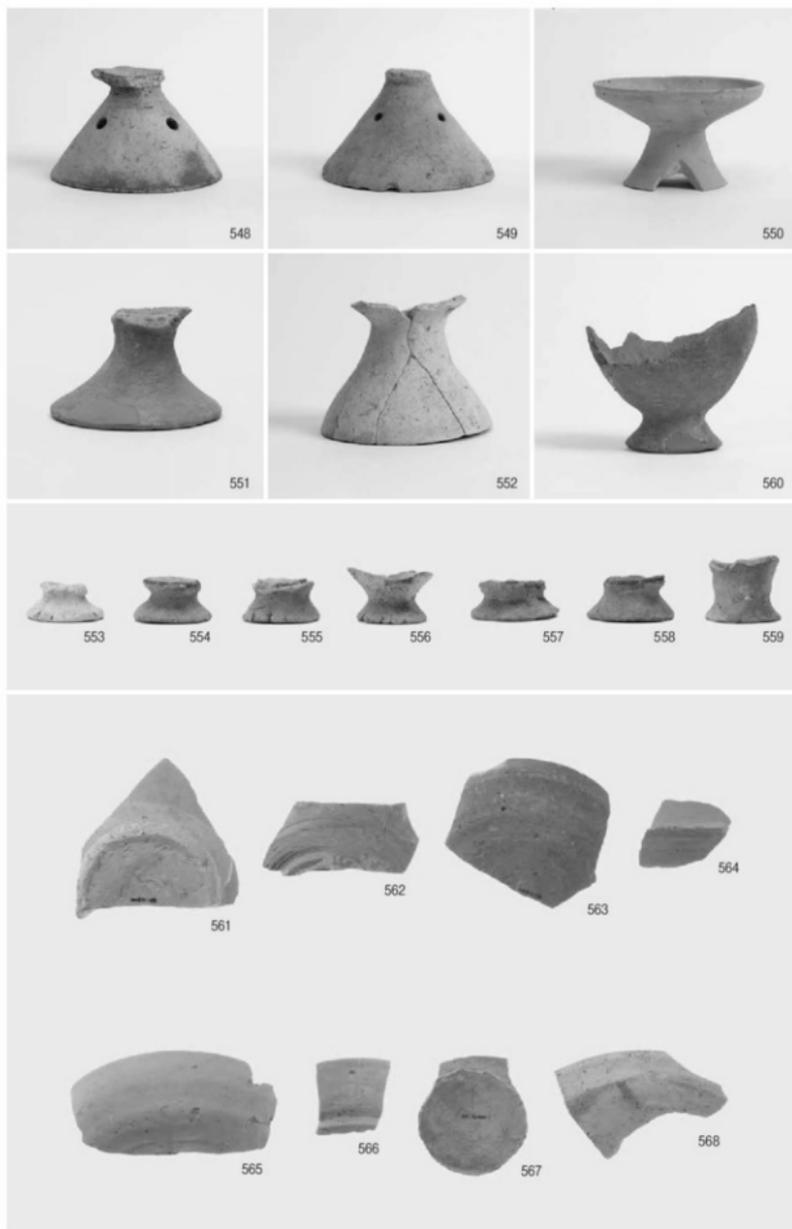
497

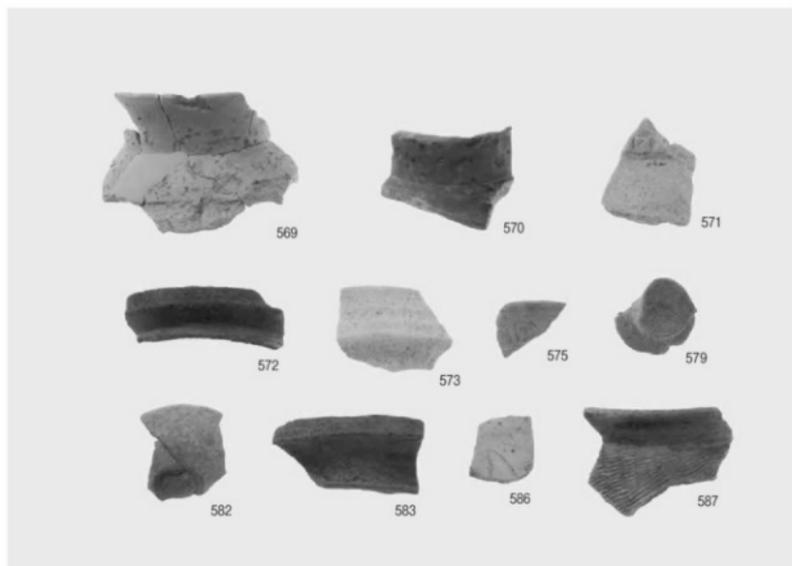


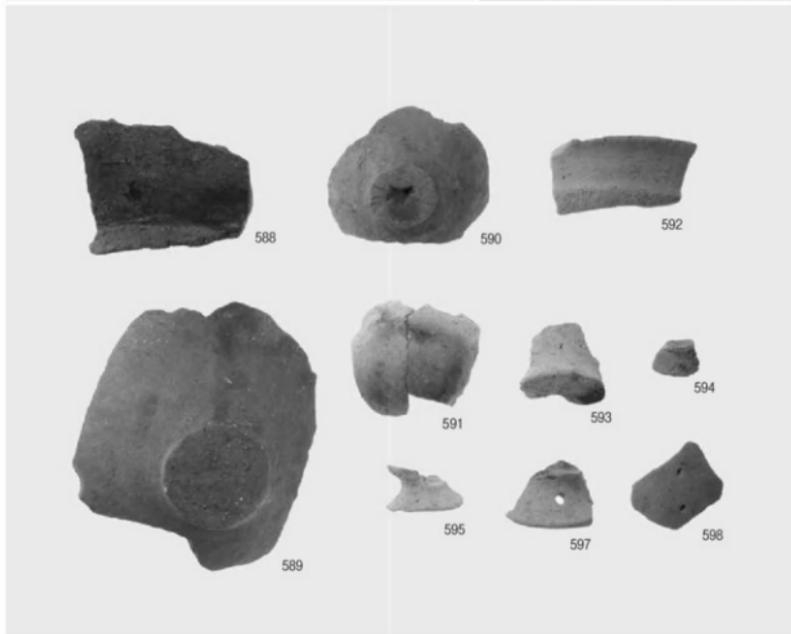
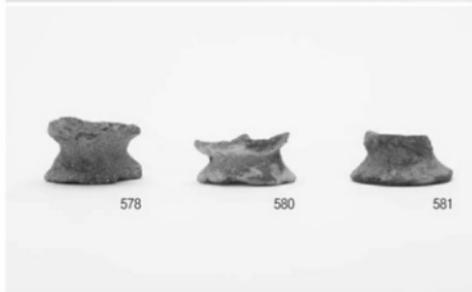


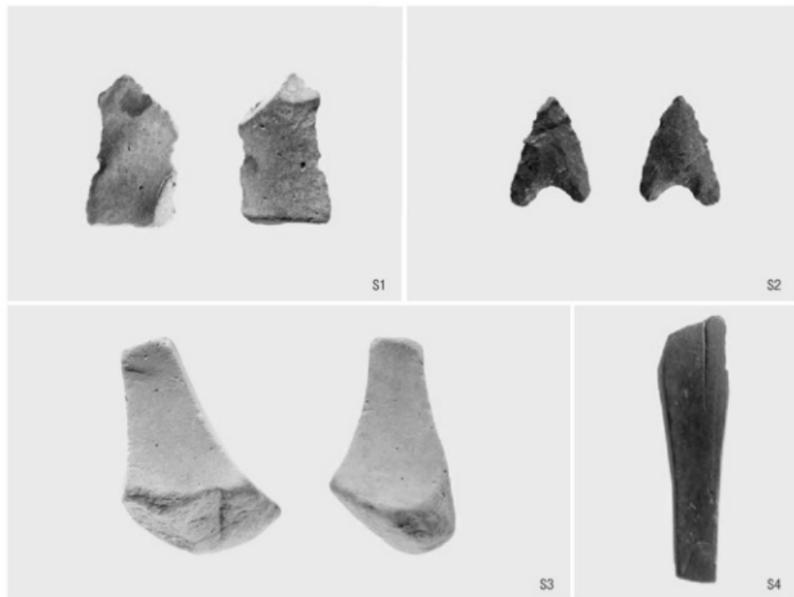














I区全景（東から）



II区全景（北から）



SD02-a全景 (南西から)



SD02-a中層土器出土状況 (南西から)



SD02-a (北東から)



SD02-b (北東から)



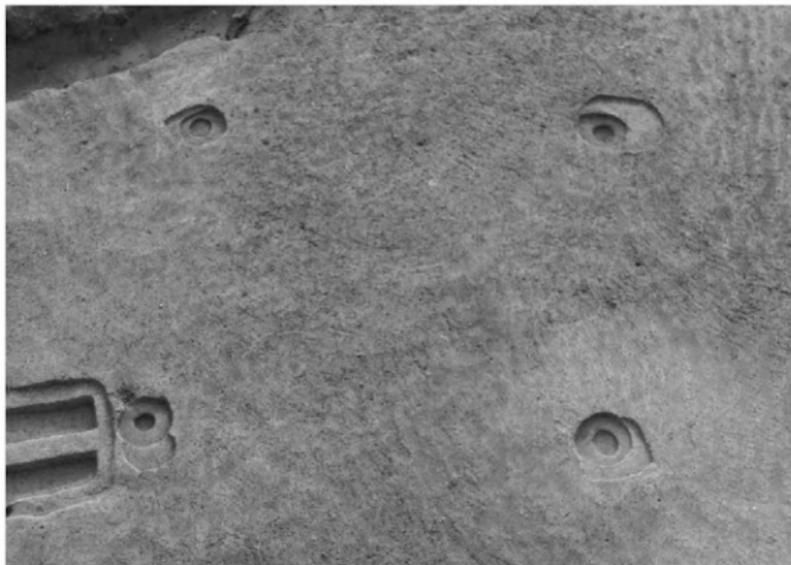
SD02土層断面（中央部・南西から）



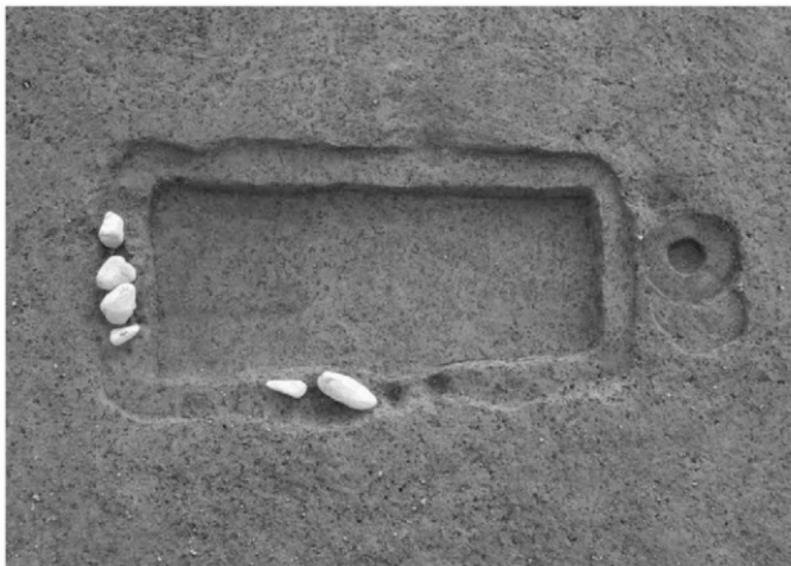
SD02土層断面（北部・南から）

写真図版84

竹の前遺跡



SB02 (北東から)



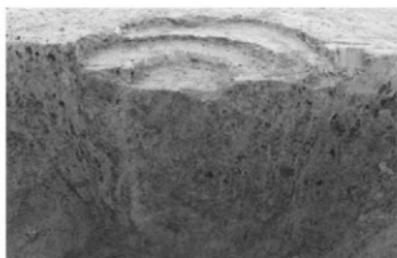
SX01 (北東から)



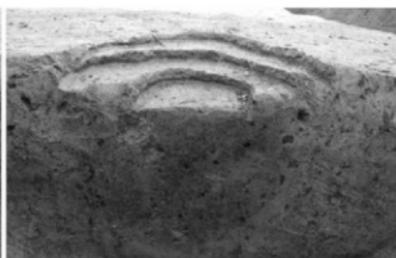
SB01P2-1土層断面 (西から)



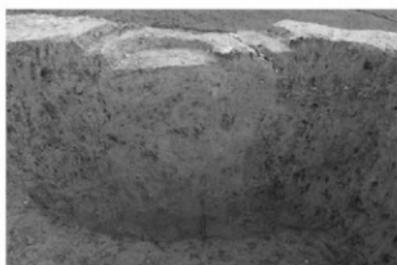
SB02P1-1土層断面 (東から)



SB02P2-1土層断面 (東から)



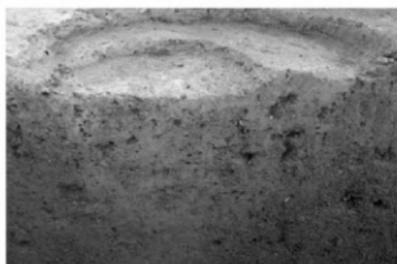
SB03P1-2土層断面 (西から)



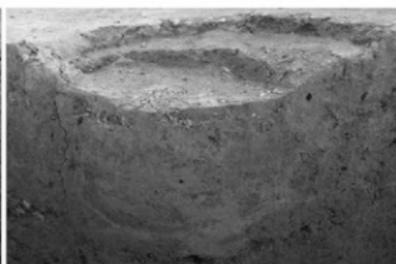
SA02P2土層断面 (北から)



SA04P1土層断面 (南西から)



SA04P2土層断面 (西から)



SA04P3土層断面 (南西から)



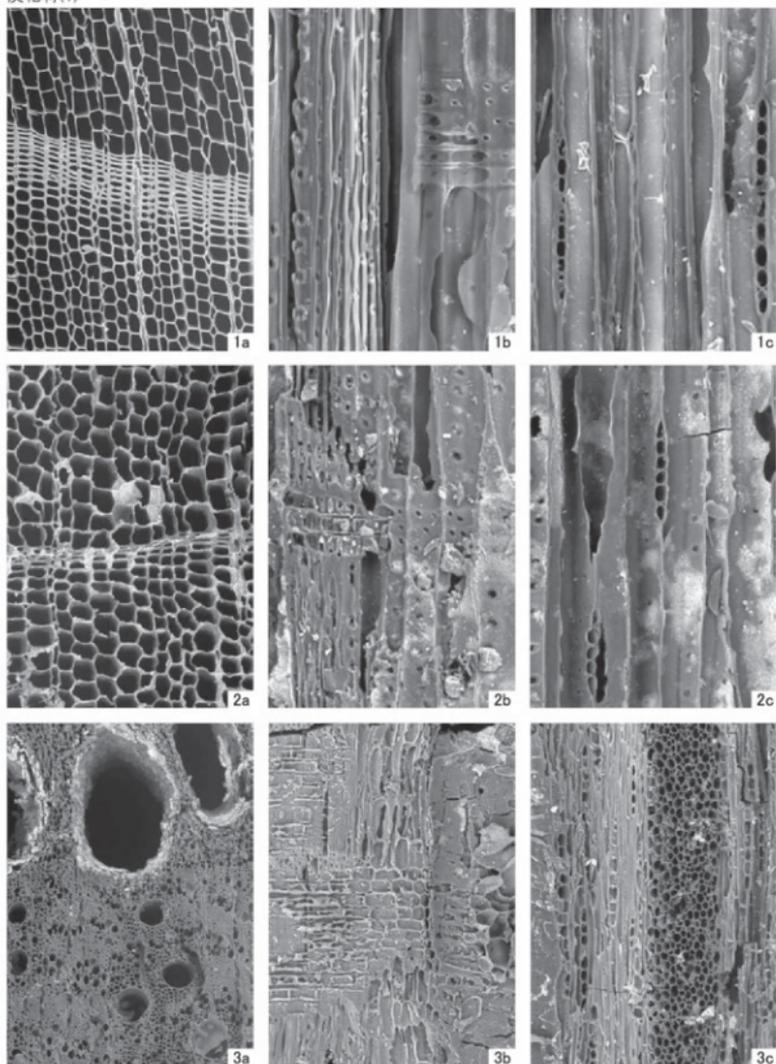
出土遺物(1)



出土遺物(2)



炭化材(1)



1.スギ(SH09)

2.ヒノキ(SH06)

3.コナラ属コナラ亜属クスギ節(SH01:壁)

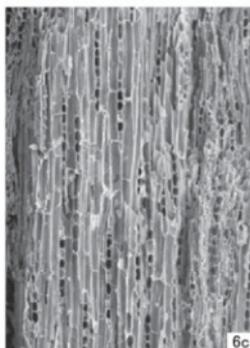
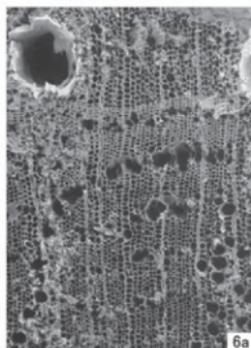
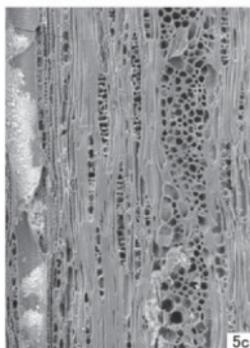
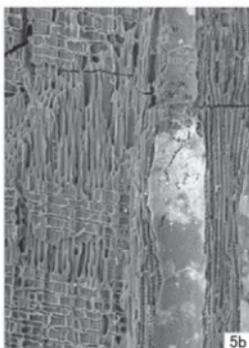
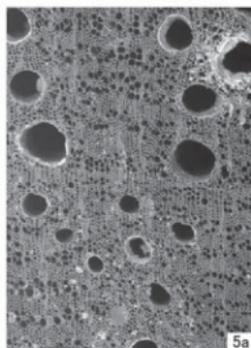
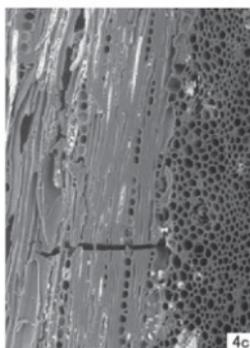
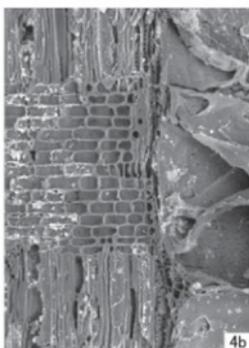
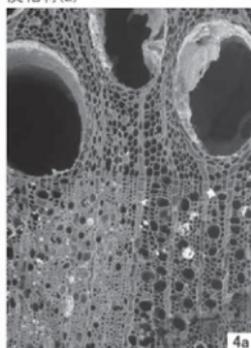
a:木口,b:柎目,c:板目

200 μm:3a

200 μm:1-2a,3b,c

100 μm:1-2b,c

炭化材(2)



4.コナラ属コナラ亜属コナラ節(SH01;南東柱)

5.コナラ属アカガシ亜属(SH01;南西柱)

6.スダジイ(SH06)

a:木口,b:柁目,c:板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

報告書抄録

ふりがな	ながこしいせき							
書名	長越遺跡Ⅲ							
副書名	(二) 船場川水系船場川 流域治水対策事業							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第432冊							
編著者名	渡辺 昇・上田健太郎							
編集機関	兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1 TEL. 079(437)5589							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1							
発行年月日	2012年3月							
所収遺跡名	所在地	コード			調査期間	調査面積	調査原因	
長越遺跡		市町村	調査番号	北緯	東経			
確認調査	兵庫県船路市 飯田		2003076	34° 48'	134° 40'	2000.7.13～8.17	62㎡	(二) 船場川水系船場川 流域治水対策事業
本発掘調査			2008171	52° 15'		2009.2.2～3.24	440㎡	
		遺跡番号	020414					
竹の前遺跡		28201		34° 48'	134° 40'			
本発掘調査	兵庫県船路市 手柄		調査番号	2008175	58°	35'	2009.2.21～3.10	80㎡
			遺跡番号					
				020435				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長越遺跡	集落跡	古墳時代前期	竪穴住居跡・落ち込み・溝	古式土師器				
竹の前遺跡	集落跡	弥生時代後期	建物・溝	弥生土器				
		奈良時代	柱穴列	瓦				
		平安時代	掘立柱建物・柱穴列・溝	須恵器・陶磁器				
要約	<p>長越遺跡は弥生時代終末から古墳時代にかけての兵庫県を代表する集落跡である。その東側の調査で、14棟の竪穴住居跡を調査した。狭い部分に集中して住居が築かれている。以前調査部分よりも新しい時期に集中して住居が築かれていたようである。庄内壁は保有しているが、掘入土器に変化が見られる。</p> <p>竹の前遺跡は弥生時代後期の溝が検出されている。後期前半の古い集落跡で長越遺跡に先行し、畑田遺跡などとともに後期集落を考えるのに重要な資料である。</p>							

兵庫県文化財調査報告 第432冊

姫路市

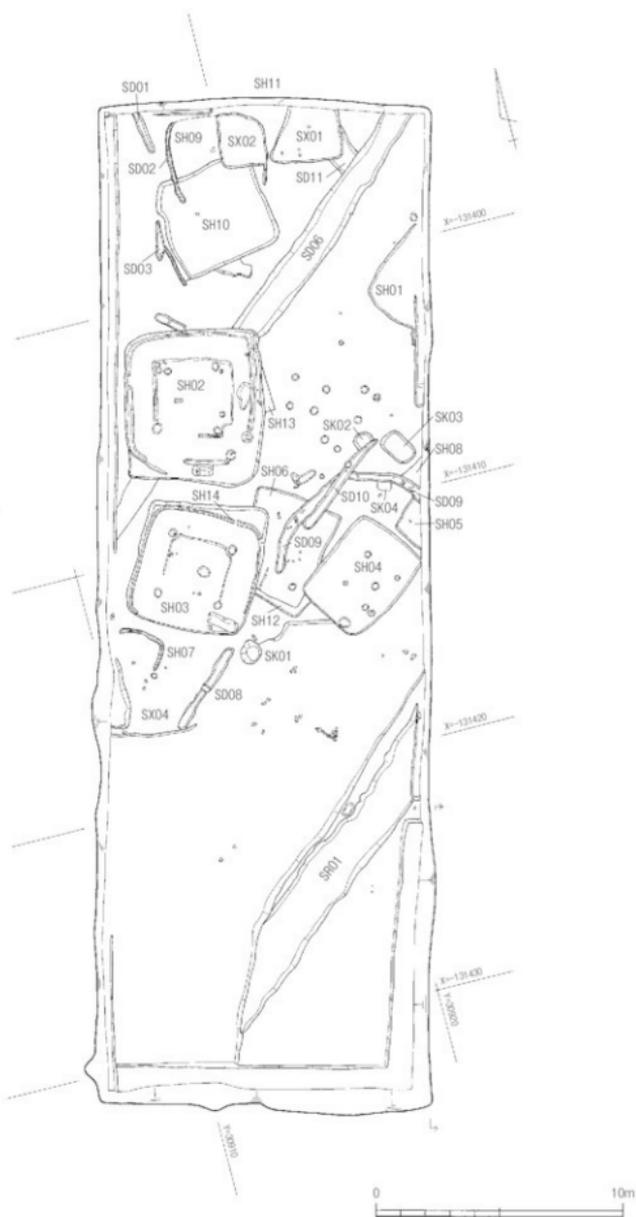
長越遺跡Ⅲ

(飯田湯田遺跡)

2012年3月20日発行

編 集 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
〒675-0142 加古郡播磨町大中1-1-1
発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
印 刷 富士高速印刷株式会社

圖 版



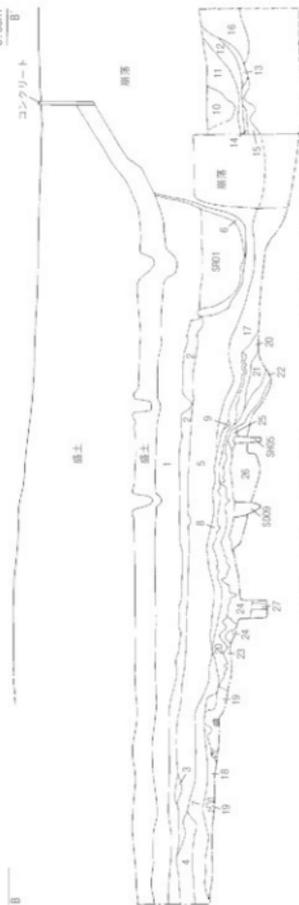
調査区平面図

4.00m
A

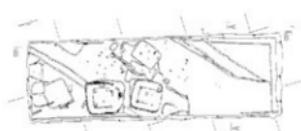


- | | | | |
|---------------|-----------|--------------|-----------|
| 1. 1508 4.2 | 砂礫層(多量)含む | 10. 57 5.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 2. 2.09 2.2 | 砂礫層(多量)含む | 11. 2.57 4.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 3. 7.08 2.1 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 4. 1008 4.5 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 5. 1008 2.1 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 6. 1008 1.2/1 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 7. 1008 0.1 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 8. 2.57 3.1 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 9. 2.57 3.1 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 10. 1008 2.2 | 砂礫層(多量)含む | | |
| 11. 2.57 4.2 | 砂礫層(多量)含む | | |

5.30m
B



- | | | | |
|--------------|-----------|--------------|-----------|
| 1. 田丸土 | 砂礫層(多量)含む | 14. 2.57 5.1 | 砂礫層(多量)含む |
| 2. 1008 4.3 | 砂礫層(多量)含む | 15. 2.57 4.1 | 砂礫層(多量)含む |
| 3. 1008 4.5 | 砂礫層(多量)含む | 16. 2.57 4.1 | 砂礫層(多量)含む |
| 4. 1008 4.5 | 砂礫層(多量)含む | 17. 5.8 4.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 5. 1008 4.8 | 砂礫層(多量)含む | 18. 1008 3.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 6. 1008 4.8 | 砂礫層(多量)含む | 19. 1008 4.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 7. 1008 3.3 | 砂礫層(多量)含む | 20. 1008 4.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 8. 1008 5.1 | 砂礫層(多量)含む | 21. 2.57 3.1 | 砂礫層(多量)含む |
| 9. 1008 5.1 | 砂礫層(多量)含む | 22. 1008 4.1 | 砂礫層(多量)含む |
| 10. 57 5.2 | 砂礫層(多量)含む | 23. 1008 4.1 | 砂礫層(多量)含む |
| 11. 57 5.2 | 砂礫層(多量)含む | 24. 1008 2.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 12. 57 5.1 | 砂礫層(多量)含む | 25. 1008 3.2 | 砂礫層(多量)含む |
| 13. 7.57 4.1 | 砂礫層(多量)含む | 26. 1008 2.1 | 砂礫層(多量)含む |
| | | 27. 7.57 2.1 | 砂礫層(多量)含む |



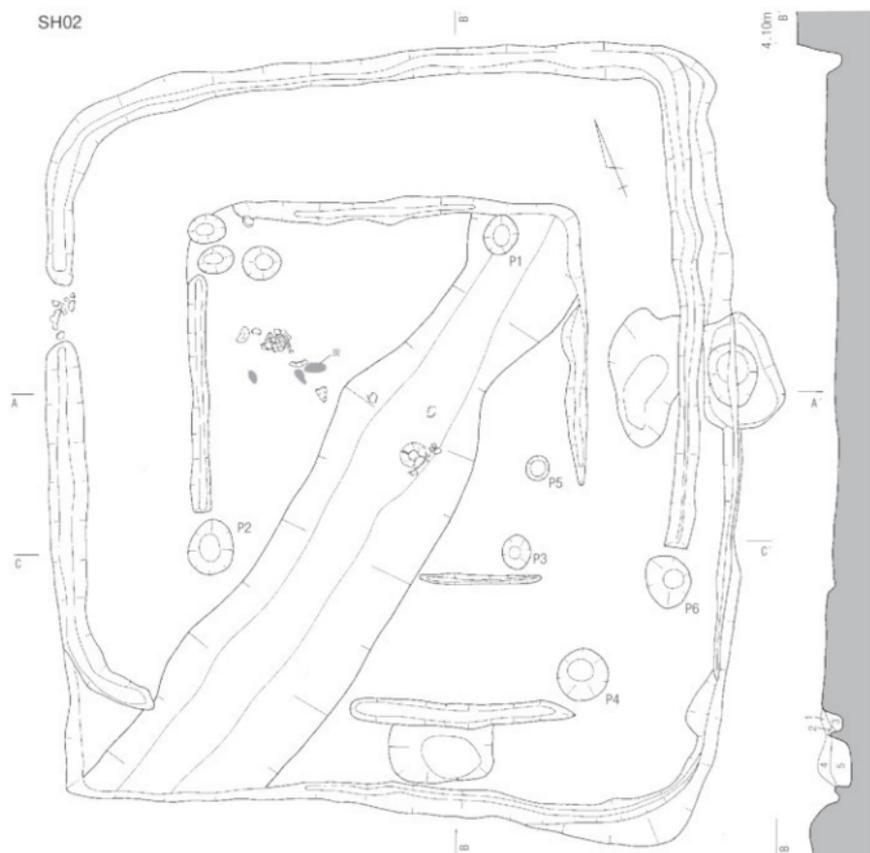
土層断面図

SH01



SH01実測図

SH02



- 1 7.5M 2/2 遺構 シルト質粘砂層 (土器・マンガン含有)
- 2 10M 2/1 遺構 シルト質粘砂層 (湖山ブロック・土器含有)
- 3 10M 4/2 灰質層 中砂 (土器含有)

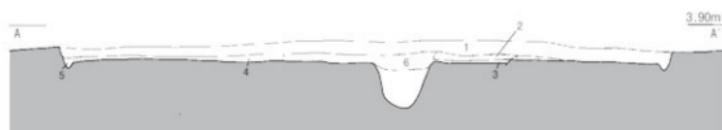
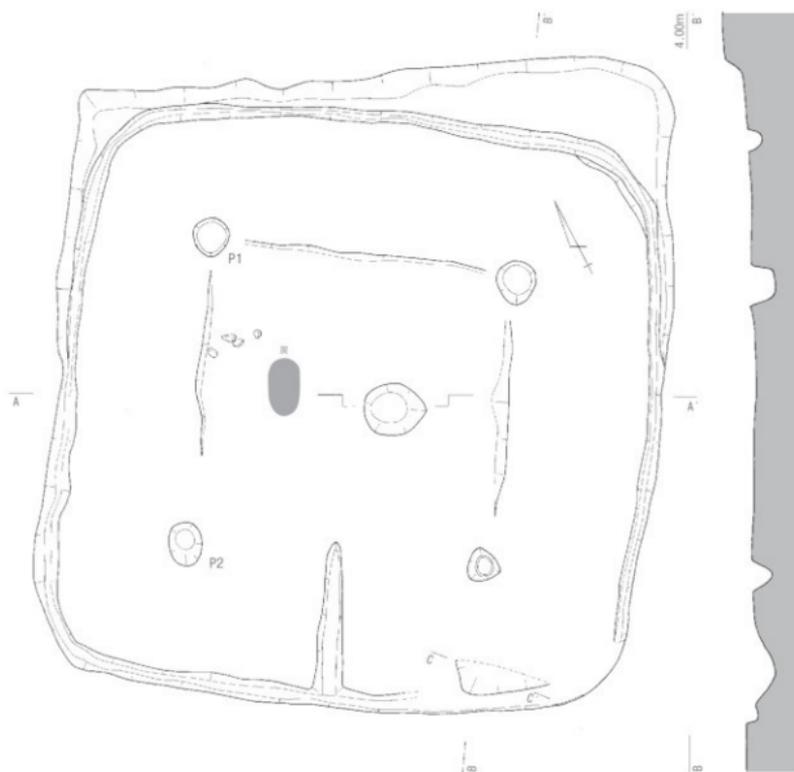
- 4 10M 2/2 遺構 シルト質粘砂層
- 5 10M 2/1 遺構 シルト質粘砂層
- 6 10M 4/2 遺構 灰質層



SH02実測図



SH03



- | | | | |
|---|----------|----|-----------------|
| 1 | 10VR 2/3 | 築構 | シルト質粘細砂 (堆山土含む) |
| 2 | 10VR 3/1 | 築構 | シルト質粘細砂 (堆山土含む) |
| 3 | 10VR 2/1 | 溝 | シルト質粘細砂 (炭灰) |
| 4 | 10VR 4/2 | 堀戻 | シルト質粘細砂 (堆山土含む) |
| 5 | 10VR 2/2 | 築構 | シルト質粘細砂 (炭灰) |
| 6 | 10VR 3/1 | 築構 | シルト質粘細砂 (炭灰) |

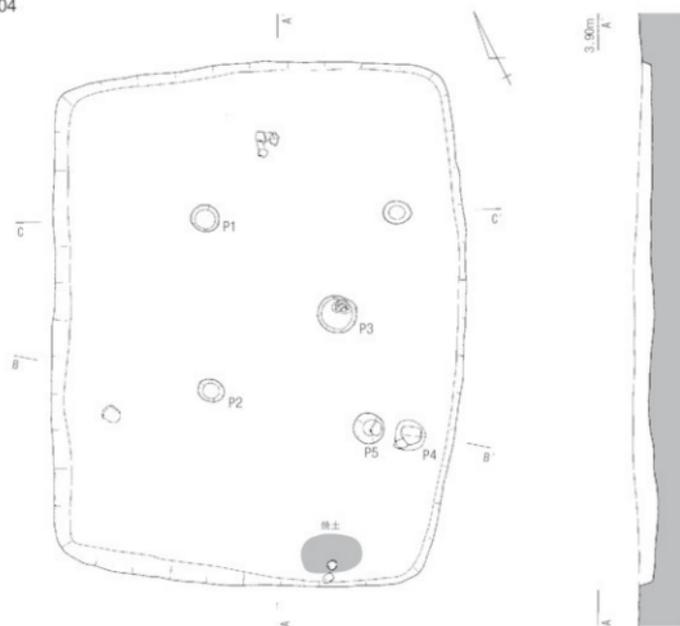


1 2.5F 1/2 溝 シルト質粘細砂 (炭・堆山土ブロック多く入る)



SH03実測図

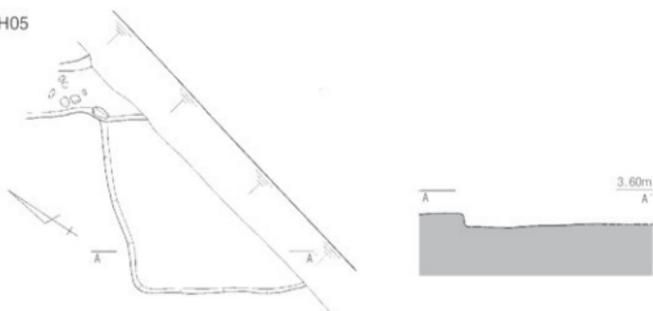
SH04



SH04実測図



SH05

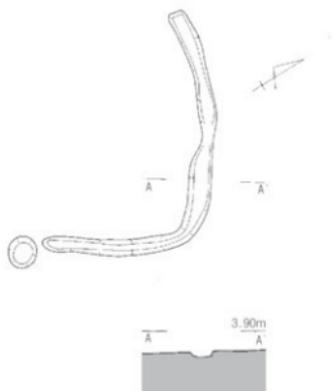


SH06



SH05 · SH06实测图

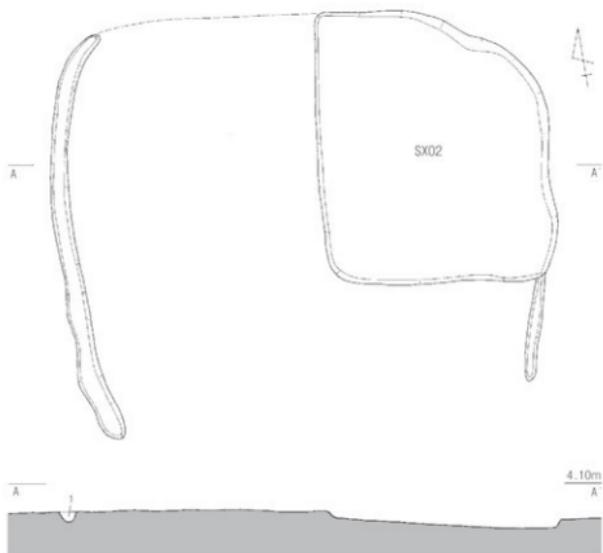
SH07



SH08



SH09

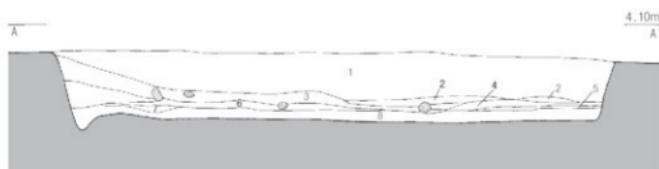
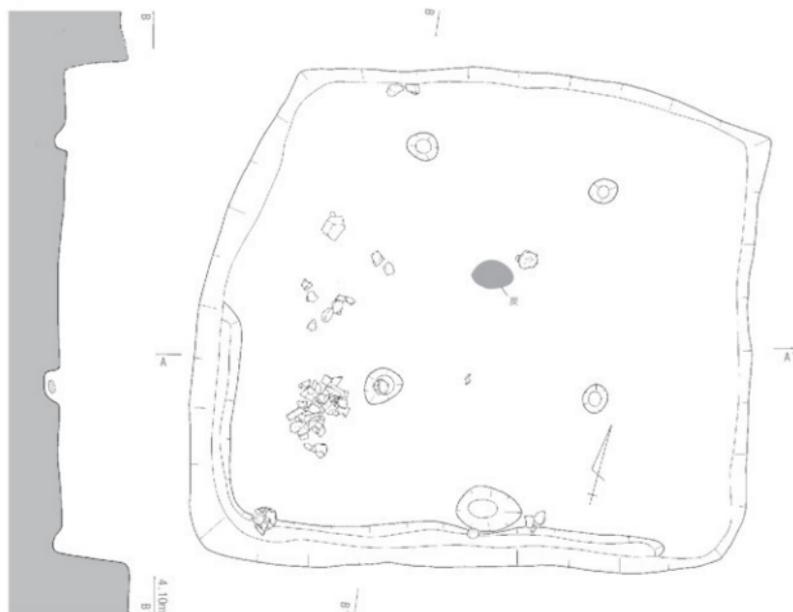


1 7.5F 2/2 オリーブ葉 シルト質輪形砂

SH07~SH09実測図



SH10

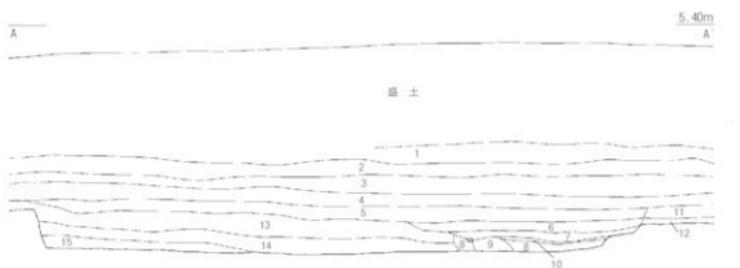
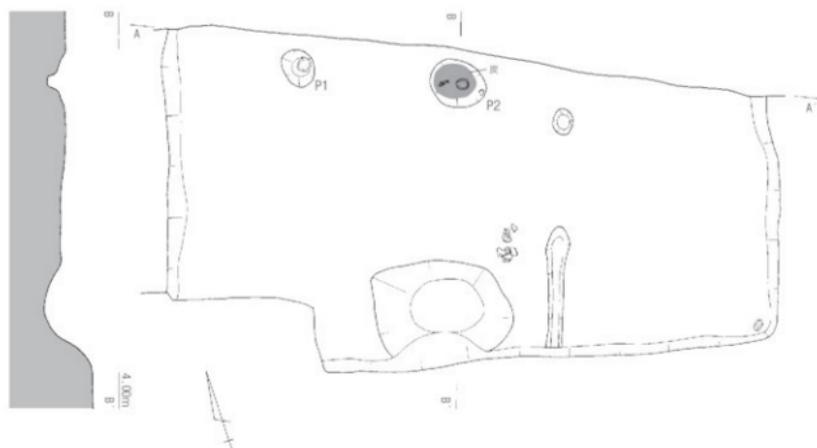


- | | | |
|---|----------------|---|
| 1 | 10R 3/3 堀溝 | シルト質粘細砂 (堆山土・灰・10R 4/1 焼灰 シルトのブロック多く含む) |
| 2 | 10R 5/8 溝 | シルト質粘細砂 |
| 3 | 10R 4/3 にがい質土 | シルト質粘細砂 (堆山ブロック多く・灰少量含む) |
| 4 | 2.5R 4/3 オリーブ溝 | 細砂 |
| 5 | 2.5R 4/1 溝 | シルト質粘細砂 (堆山土含む) |
| 6 | 2.5R 4/1 溝 | シルト質粘細砂 (堆山土含む) |
| 7 | 2.5R 3/3 堀溝 | シルト質粘細砂 (堆山土含む) |
| 8 | 10R 2/2 溝 | シルト質粘細砂 (堆山土含む) |

SH10実測図



SH11

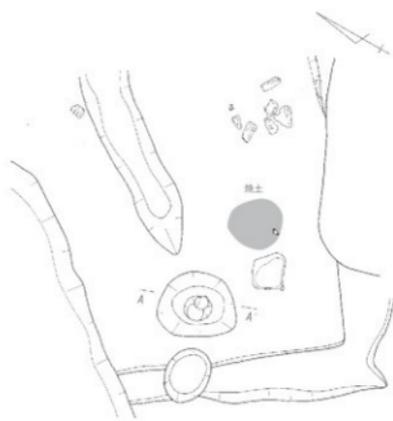


- | | | | |
|----|--------------|---------------|---------------------|
| 1 | 粘土 | | |
| 2 | 5R 5/3 | オリーブ黄 | シルト質粘砂 |
| 3 | 10R 4/3 | にがい黄褐色 | シルト質粘砂 |
| 4 | 10R 3/3 | 黄褐色 | シルト質粘砂 (黄褐色) |
| 5 | 10R 2/2 | 黄褐色 | シルト質粘砂 |
| 6 | 10R 3/2 | 黄褐色 | シルト質粘砂 (黄褐色) |
| 7 | 10R 4/1 | 黄褐色 | シルト質粘砂 (粘性強い) |
| 8 | 10R 3/1 | 黄褐色 | シルト質粘砂 (粘土土・黄褐色) |
| 9 | 10R 4/2 | 灰黄褐色 | シルト質粘砂 (7層・粘土土多く含む) |
| 10 | 10R 4/1 | 黄褐色 | 細～中粒 (ラミナ状になる) |
| 11 | 10R 4/2 | 黄褐色 | シルト質粘砂 |
| 12 | 粘土土 | (上から影響を受けた部分) | |
| 13 | 5層と粘土土が混じった層 | (5層が多い7～8割) | |
| 14 | 5層と粘土土が混じった層 | (粘土土が多い7割程度) | |
| 15 | 2.5R 4/1 | 黄褐色 | シルト質粘砂 (黄褐色) |



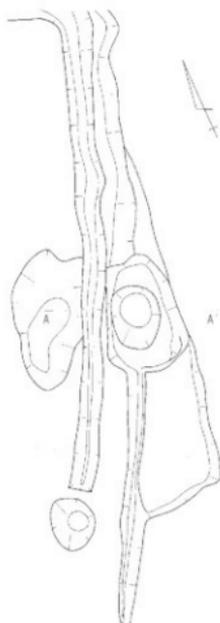
SH11実測図

SH12

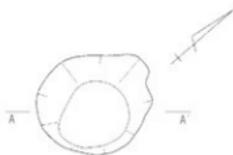


- 1 7.5W 2.2 黒褐色 シルト質粘細砂 (焼山・炭・焼土・レキ含む)
- 2 10W 1.7/1 黒 シルト質粘細砂 (焼山・炭・焼土含む)
- 3 9W 2/1 黒 シルト質粘細砂 (焼土・炭含む)
- 4 2.50F 2/1 黒 シルト質粘細砂 (炭・土器含む)

SH13



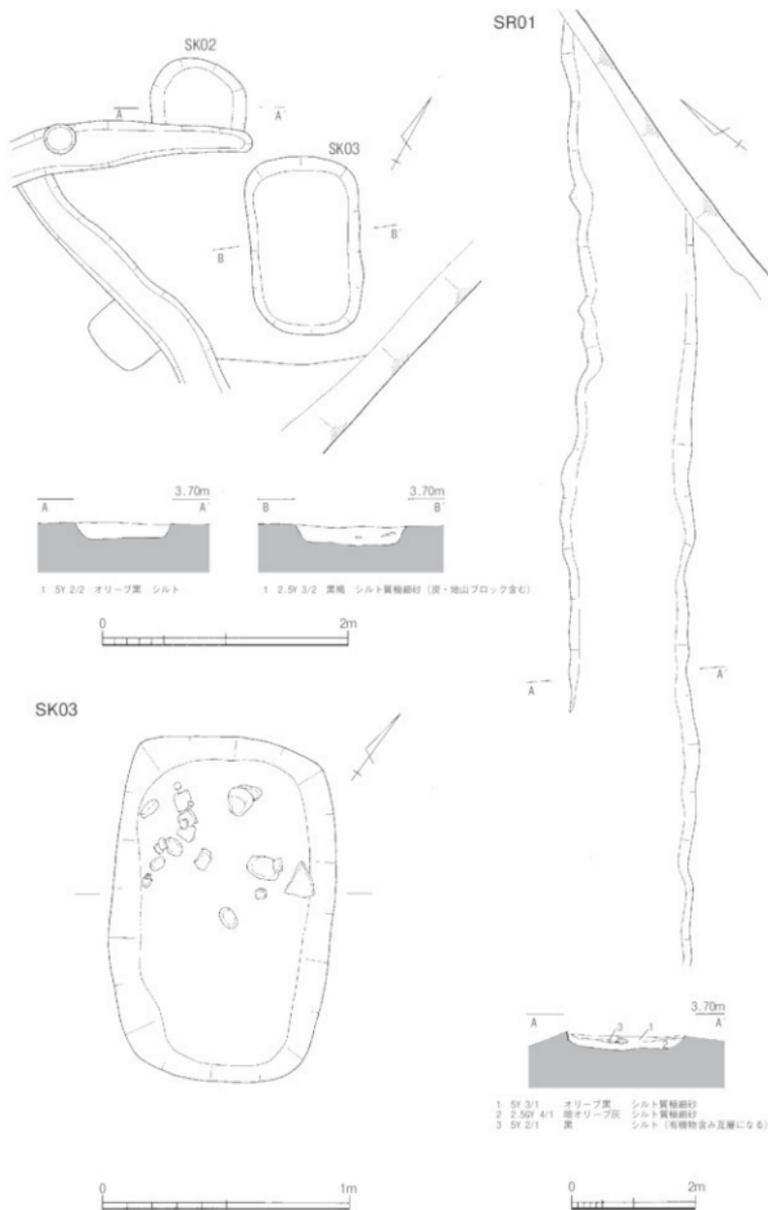
SK01



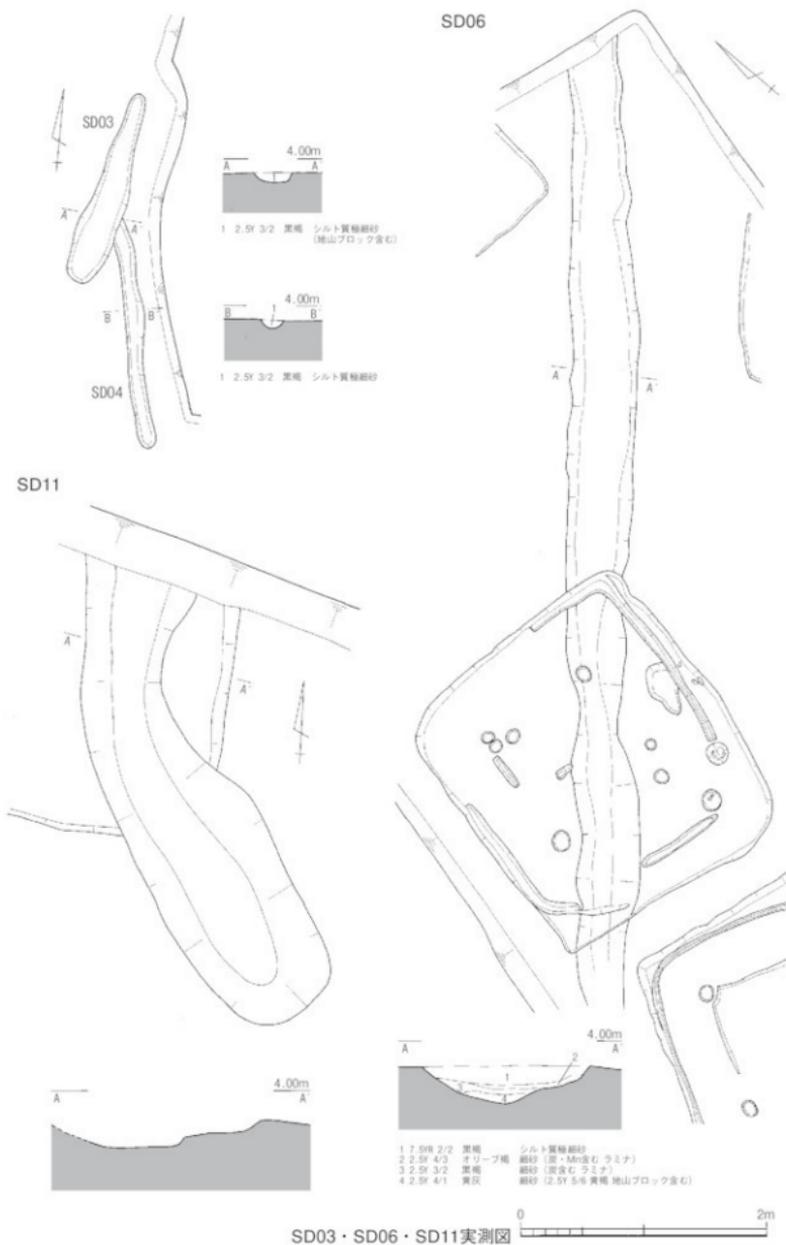
- 1 5F 2/2 オリーブ黒 シルト質赤石

SH12・SH13・SK01実測図

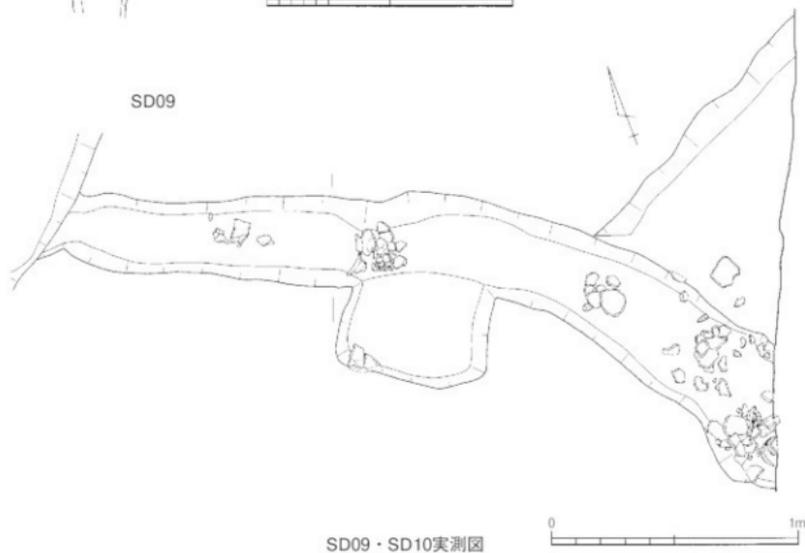
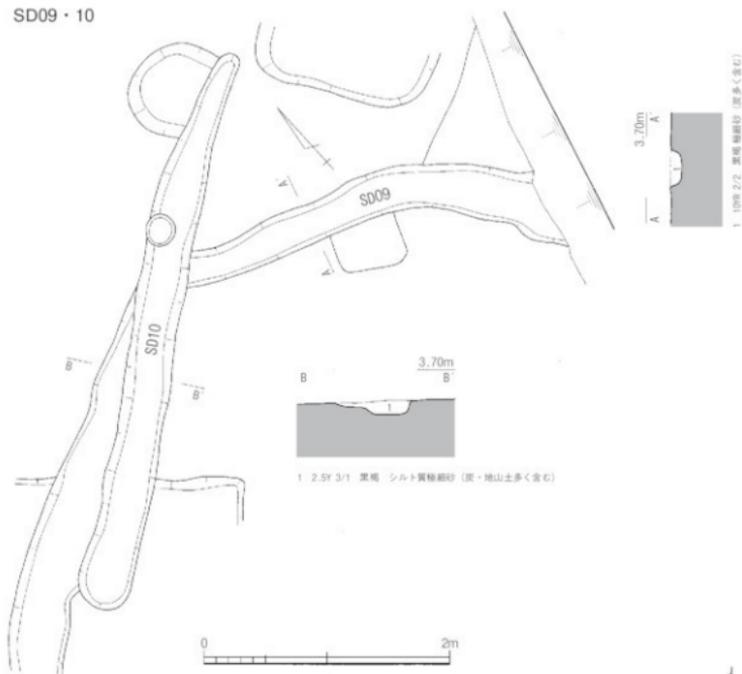




SK02・SK03・SR01実測図

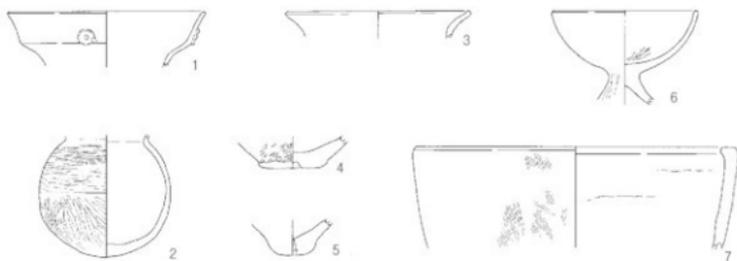


SD09・10

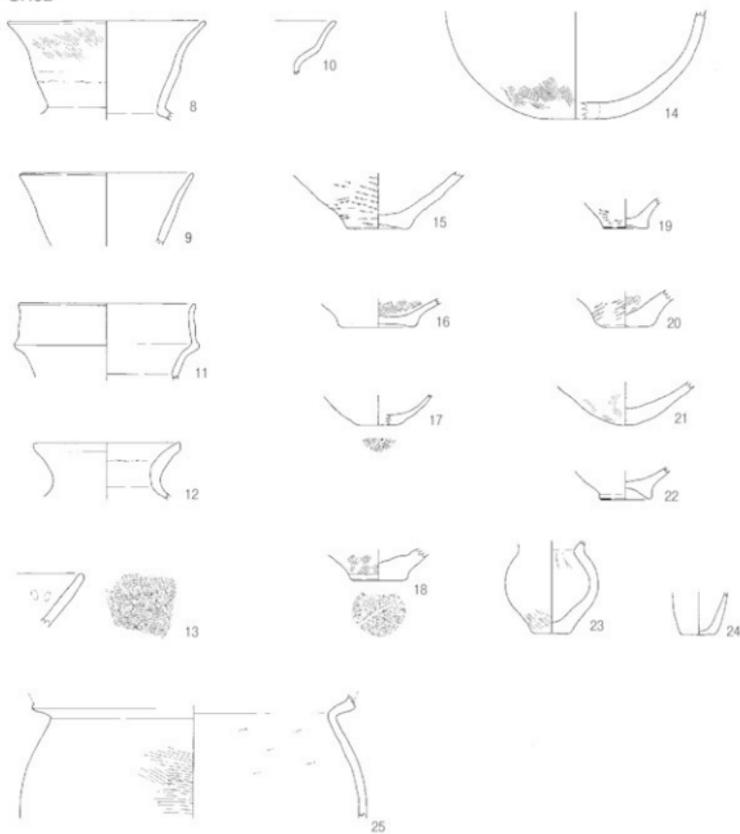


SD09・SD10実測図

SH01



SH02



土器実測図(1)



SH02



26



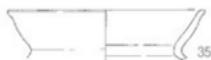
34



42



27



35



43



28



36



44



29



37



45



30



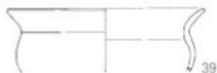
38



46



31



39



47



32



40



48



33

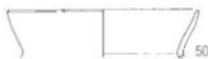


41

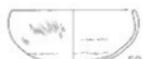


49

SH03



50



52



54



51

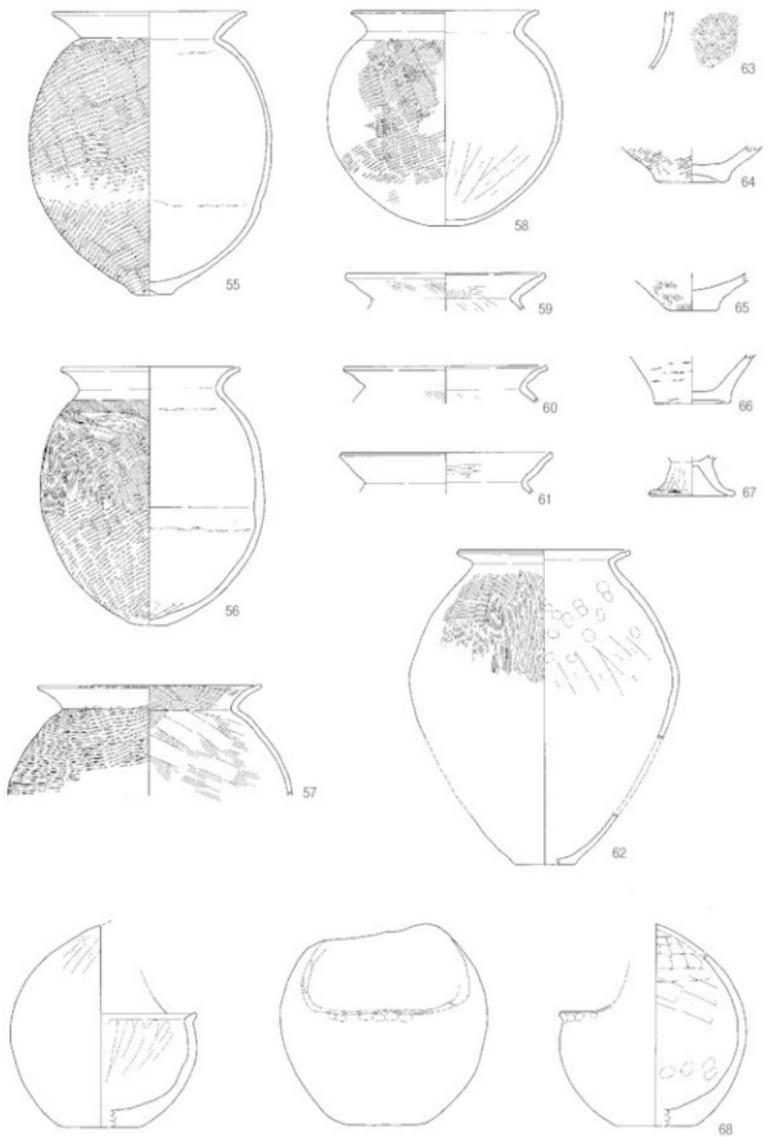


53

土器实测图(2)



SH04



土器実測図(3)

0 20cm

SH06



69



70



71



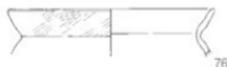
72



73



75



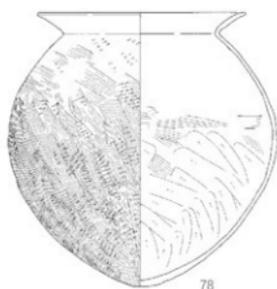
76



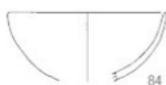
77



74



78



84



81



82



85



83



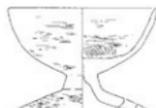
89



79



86



90

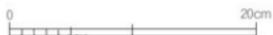


80

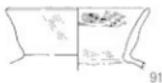


87

土器実測図(4)



SH05



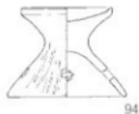
91



92

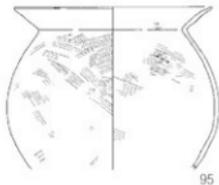


93



94

SH08



95



97



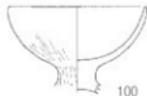
98



99

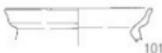


96



100

SH10

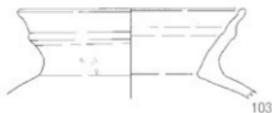


101



102

SH11



103

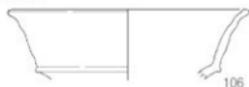


104



105

SK01



106

SK03

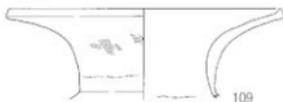


107



108

SX01

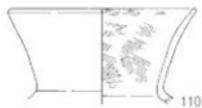


109

土器実測図(5)



SX03



110



111



112



113



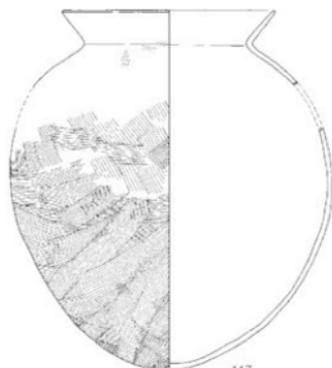
114



115



116



117



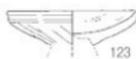
118



119



122



123



120

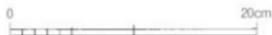


121

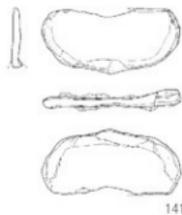
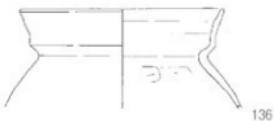
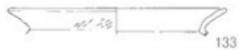
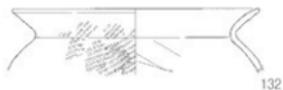
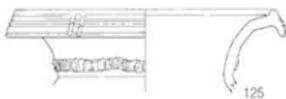


124

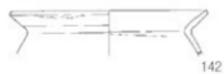
土器实测图(6)



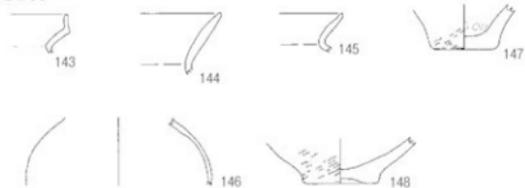
SX04



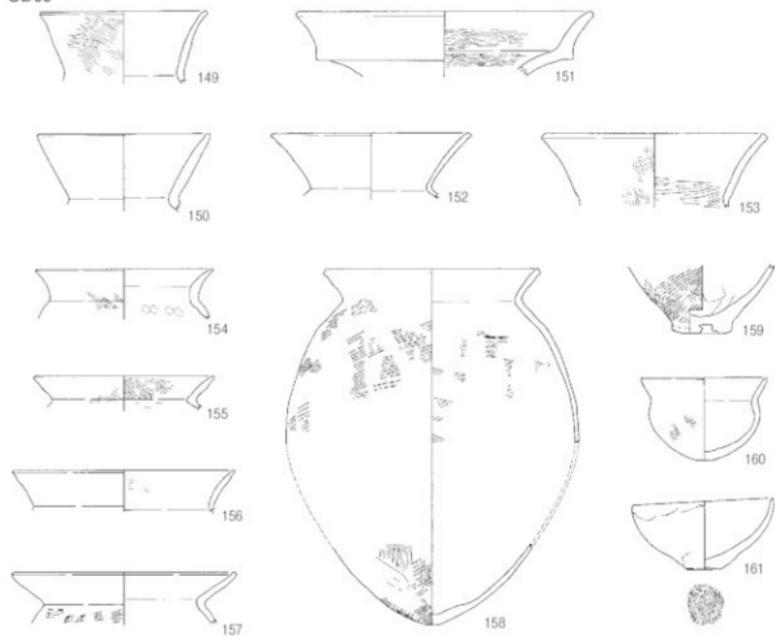
SD01



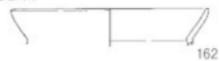
SD06



SD09

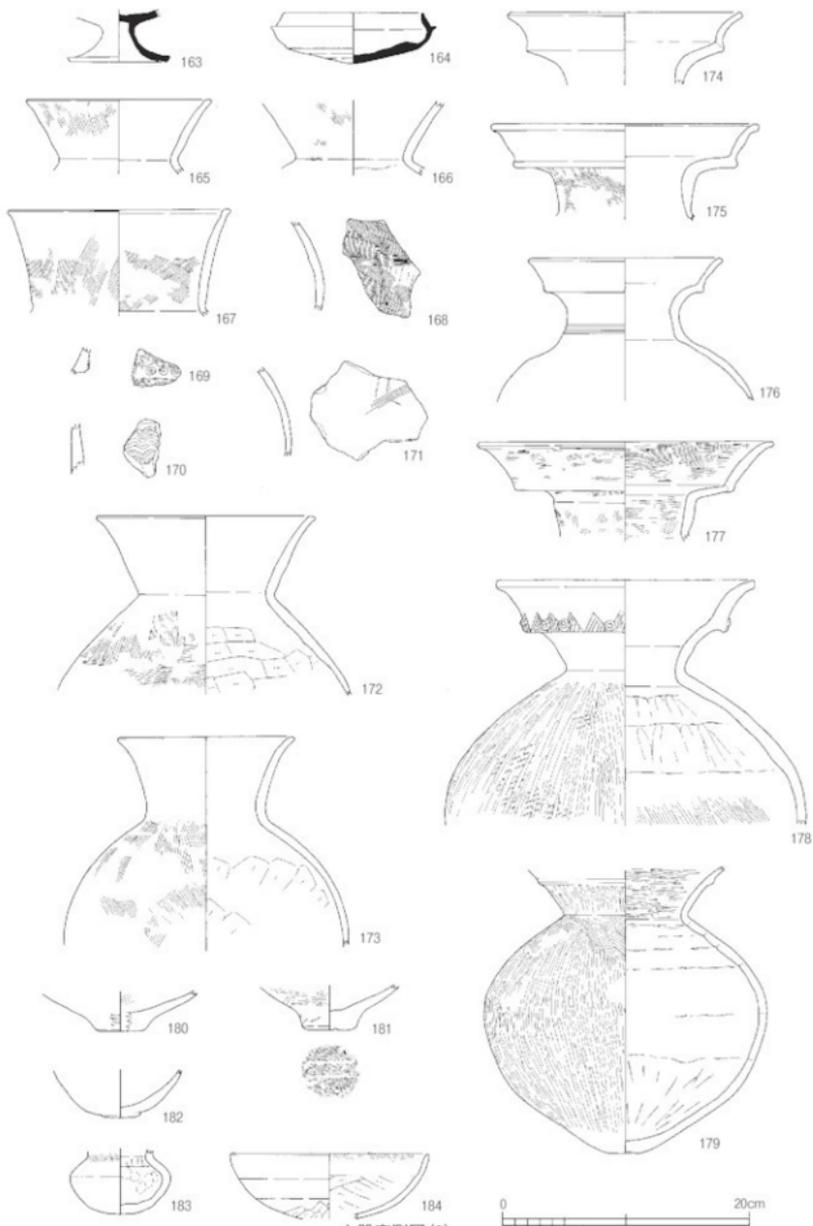


SD11

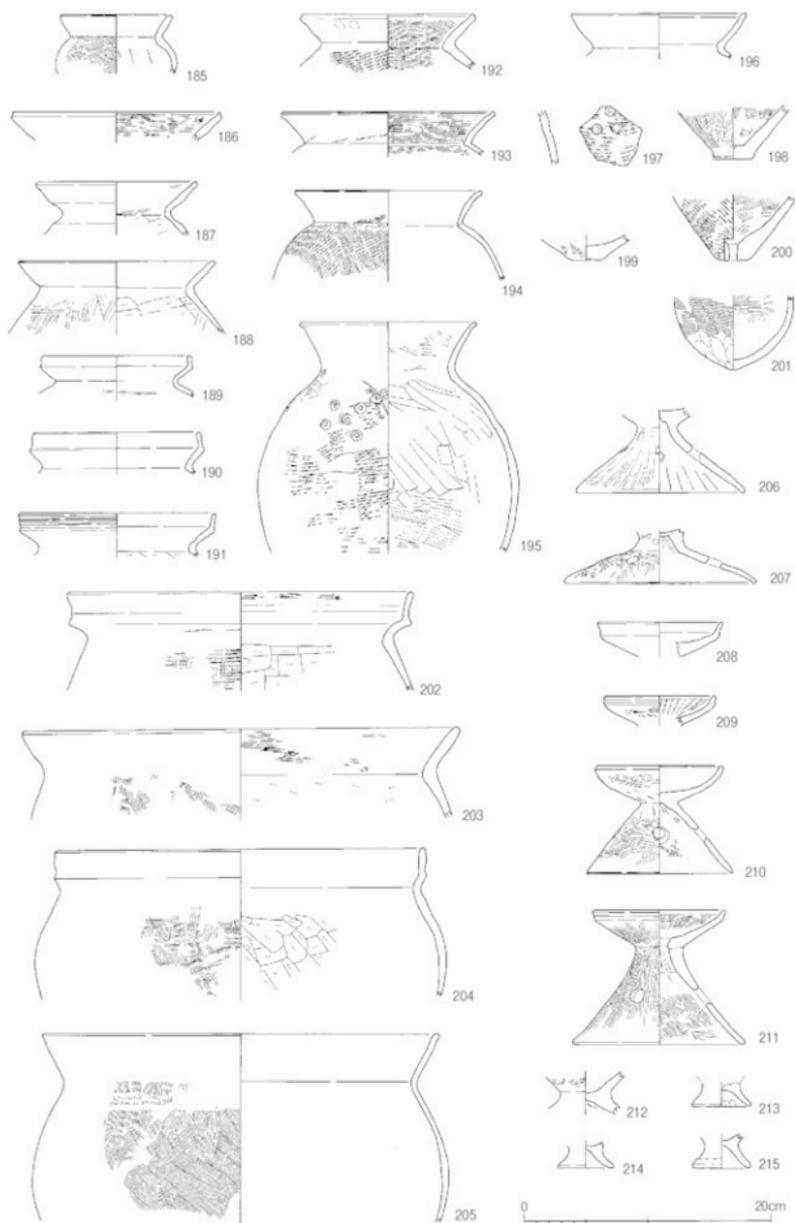


土器実測図(8)

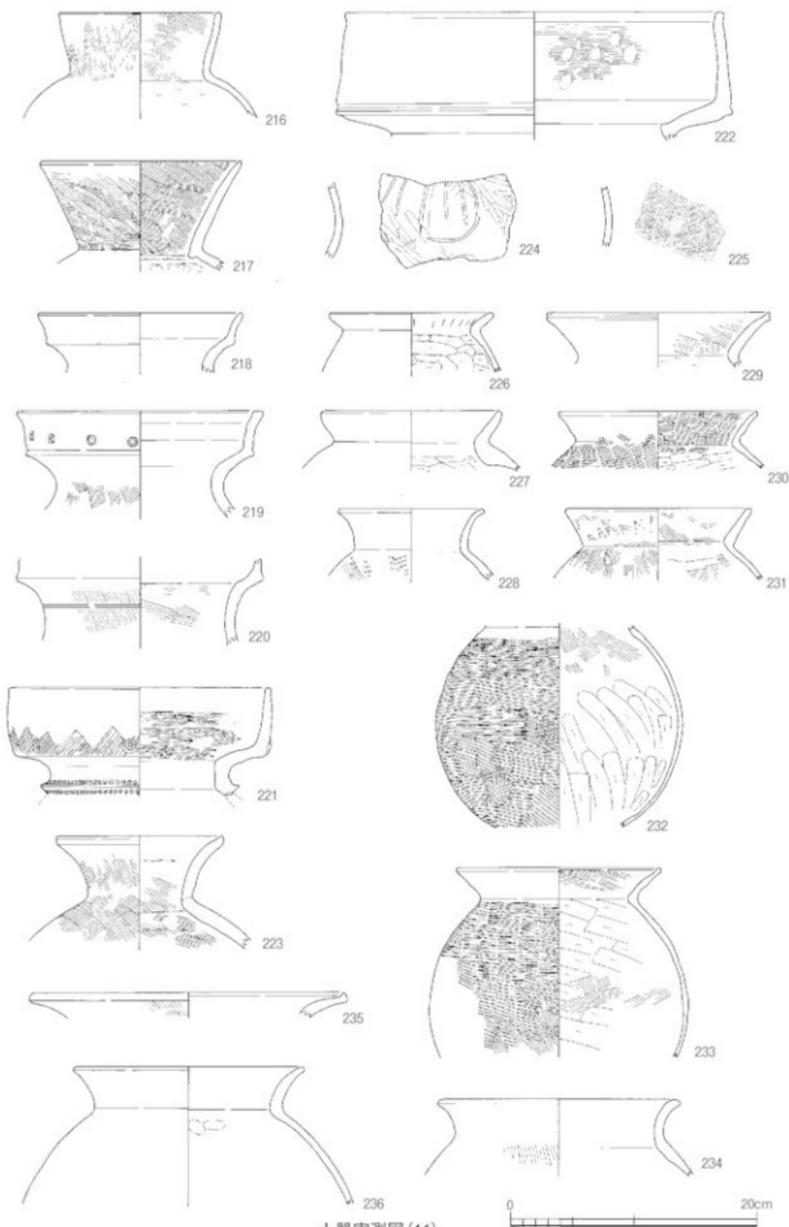




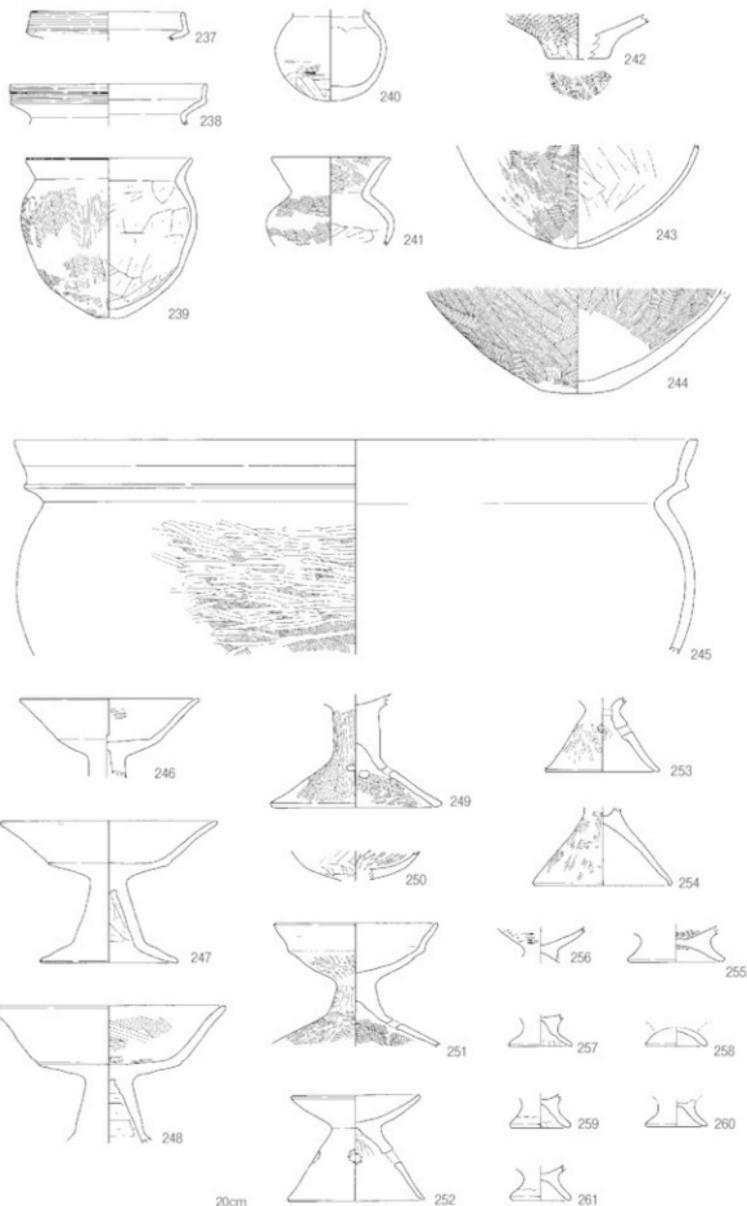
土器実測図(9)



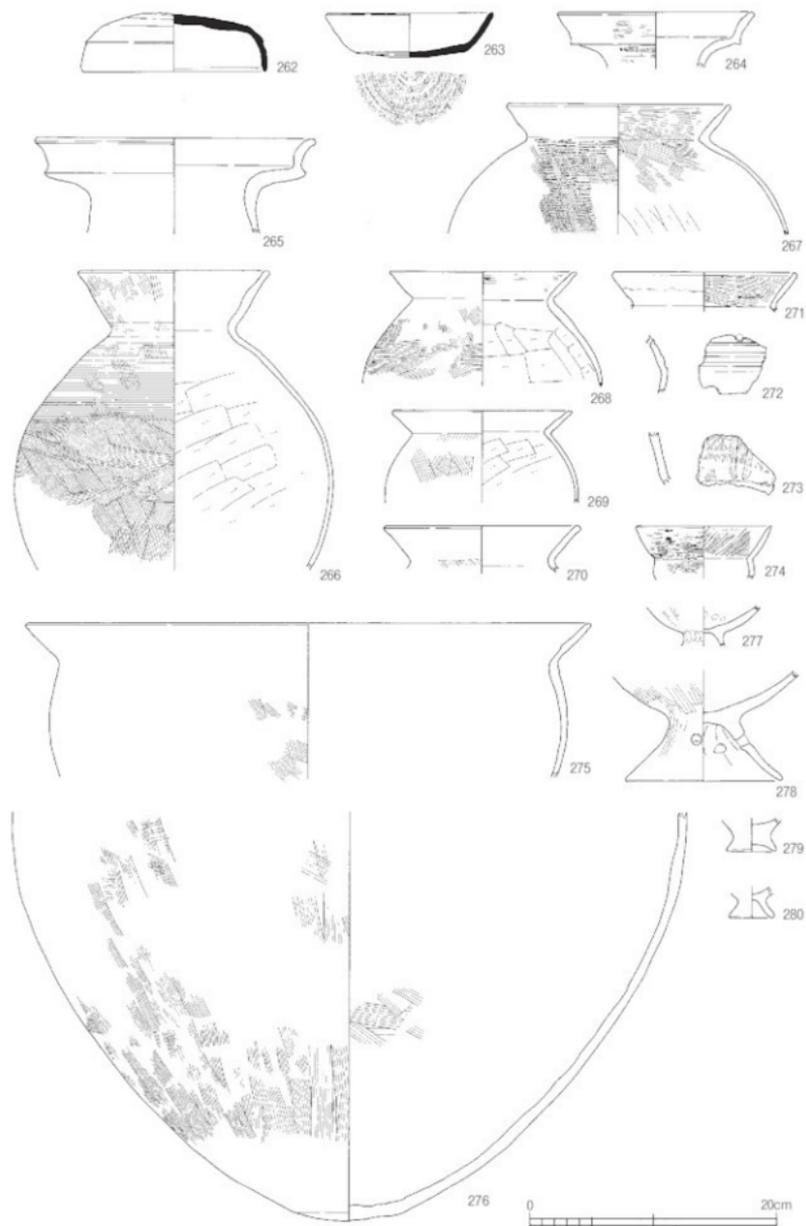
土器实测图(10)



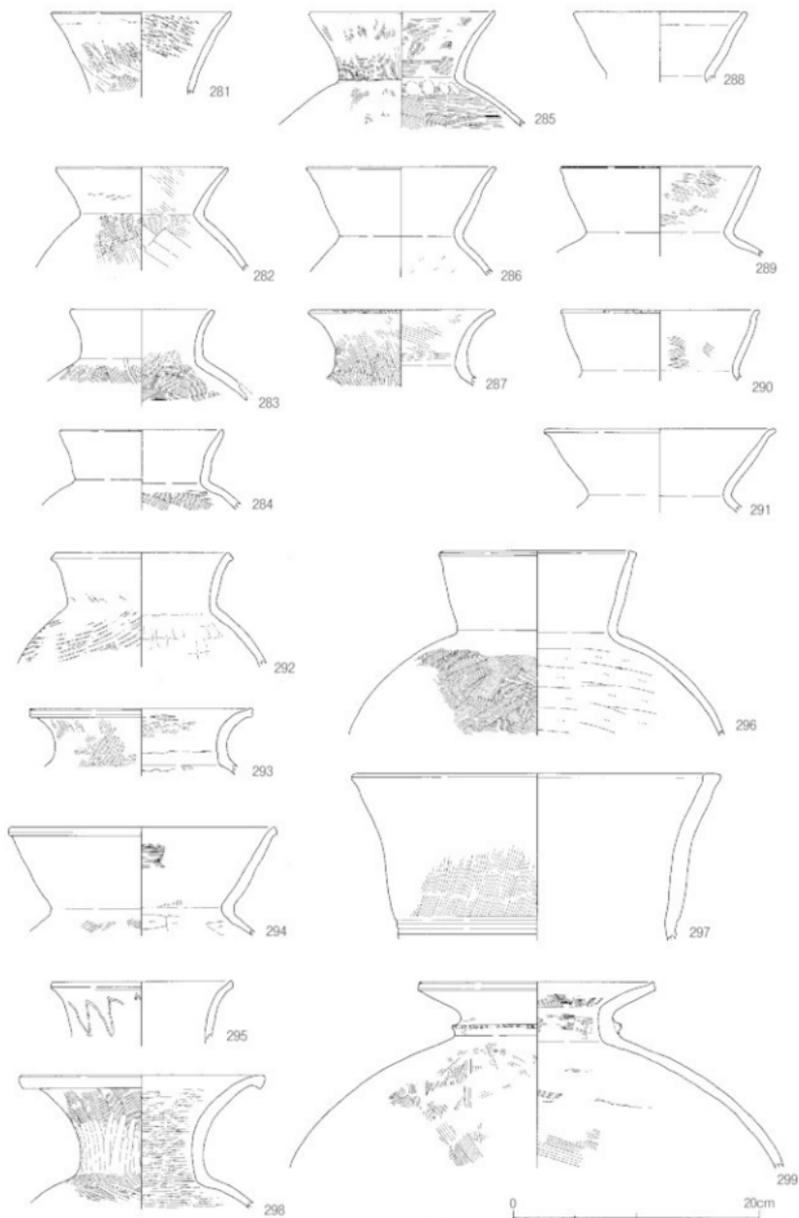
土器実測図(11)



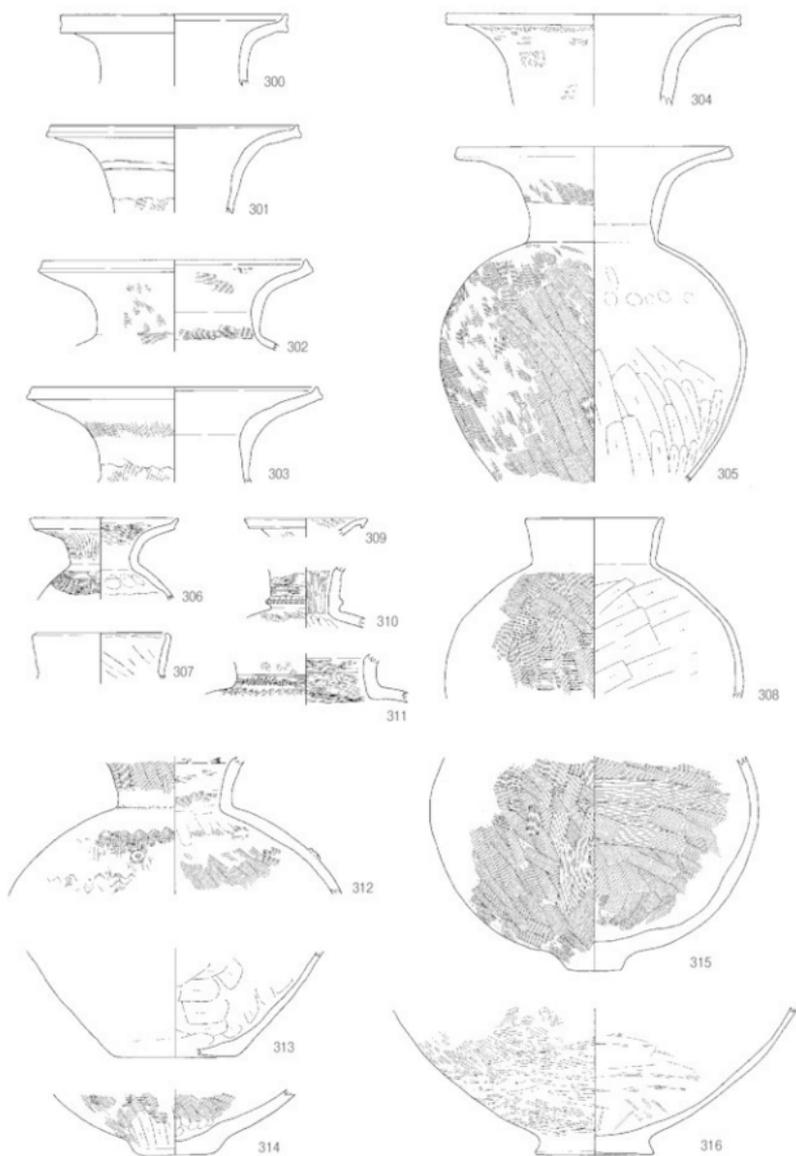
土器実測図(12)



土器実測図(13)

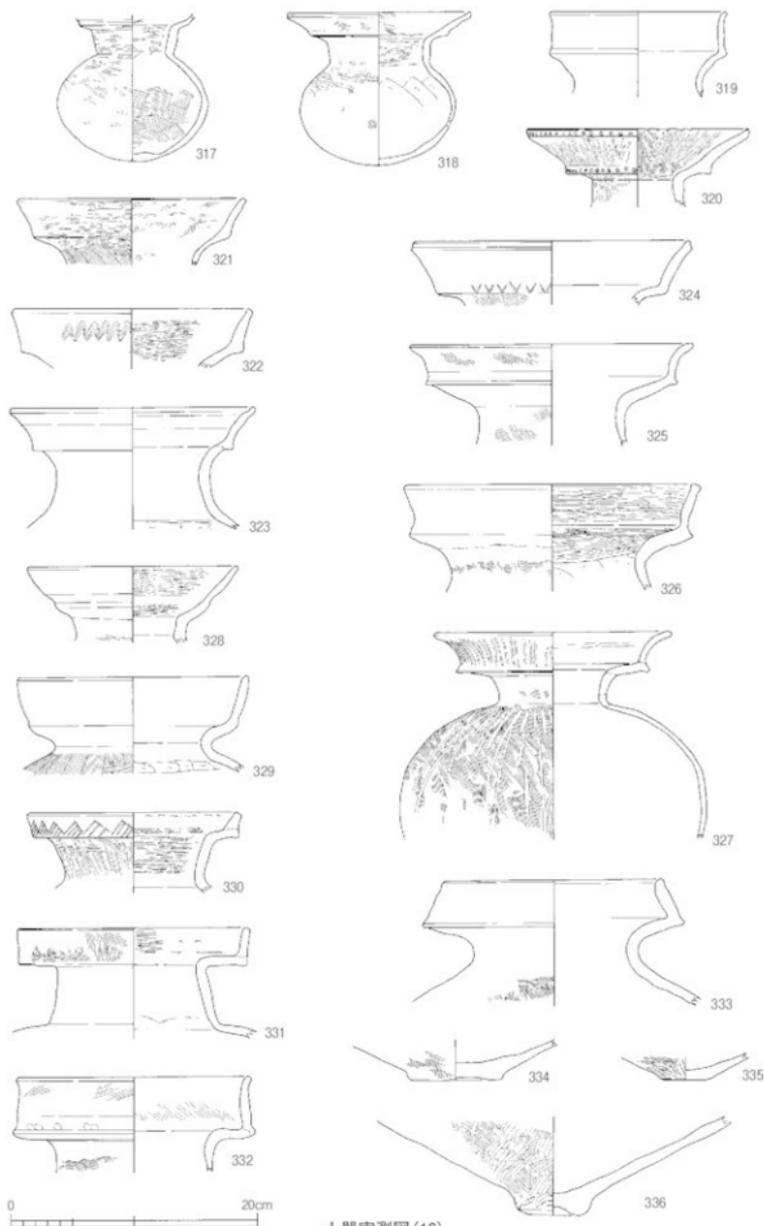


土器实测图(14)

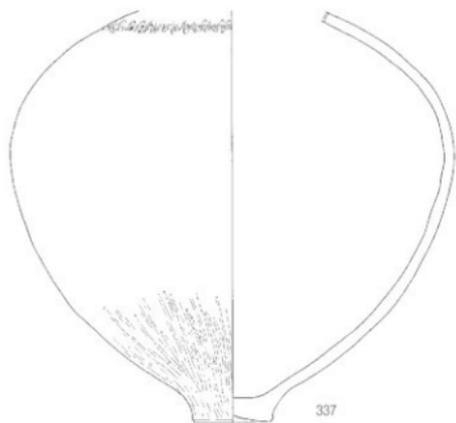


土器実測図(15)





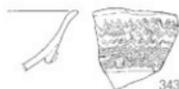
土器実測図(16)



337



357



343



353



358



344



354



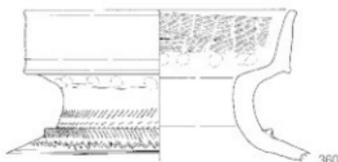
359



345



355



360



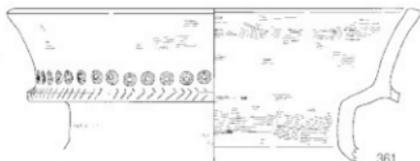
346



356



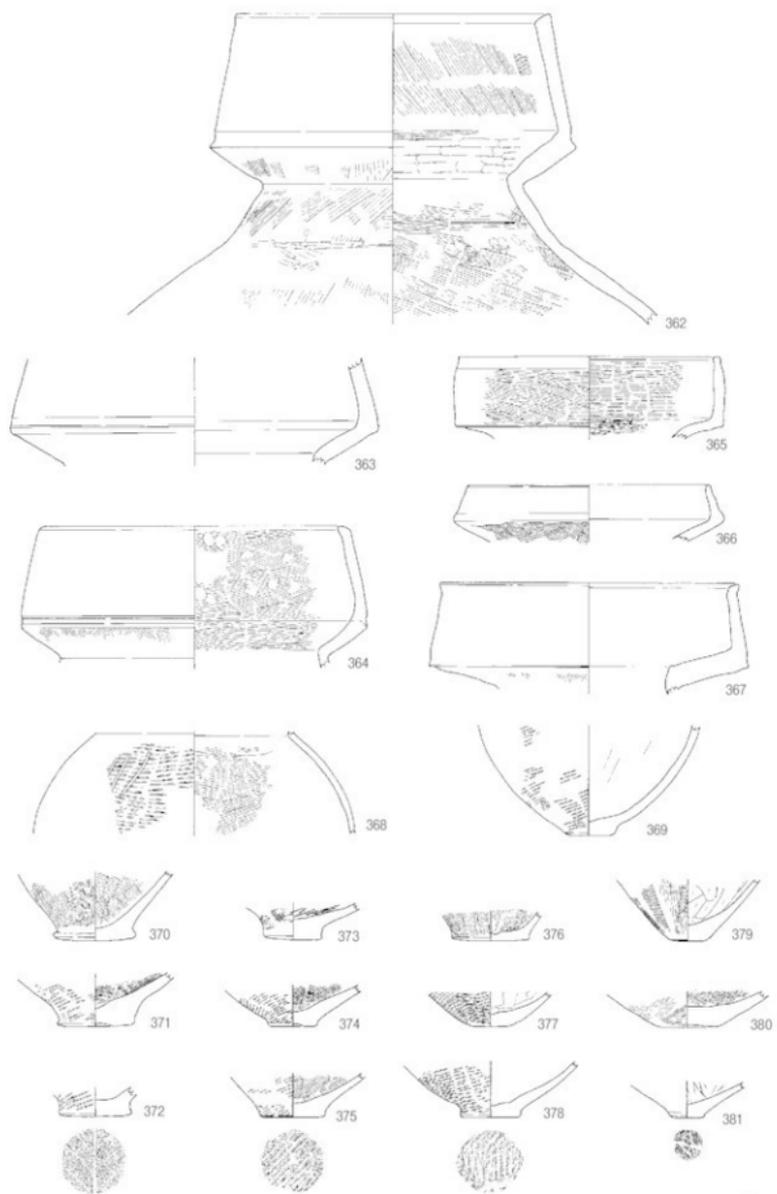
347



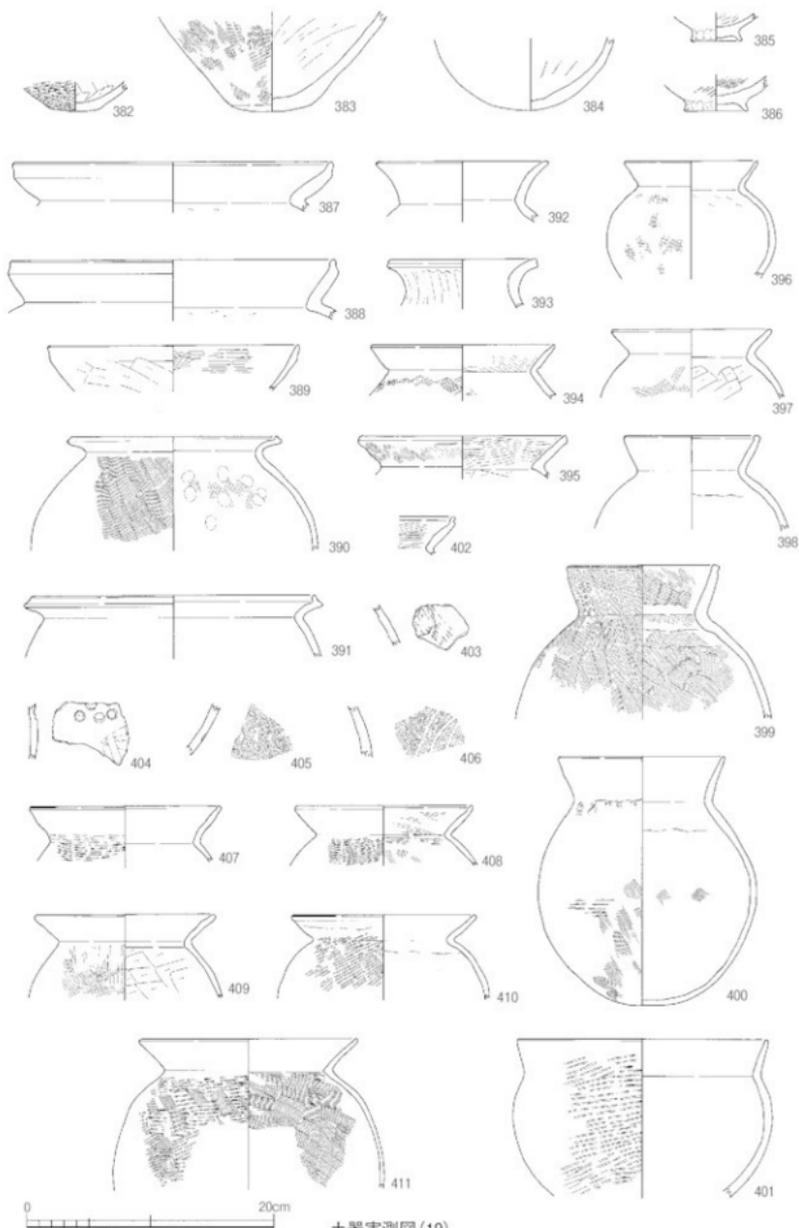
361



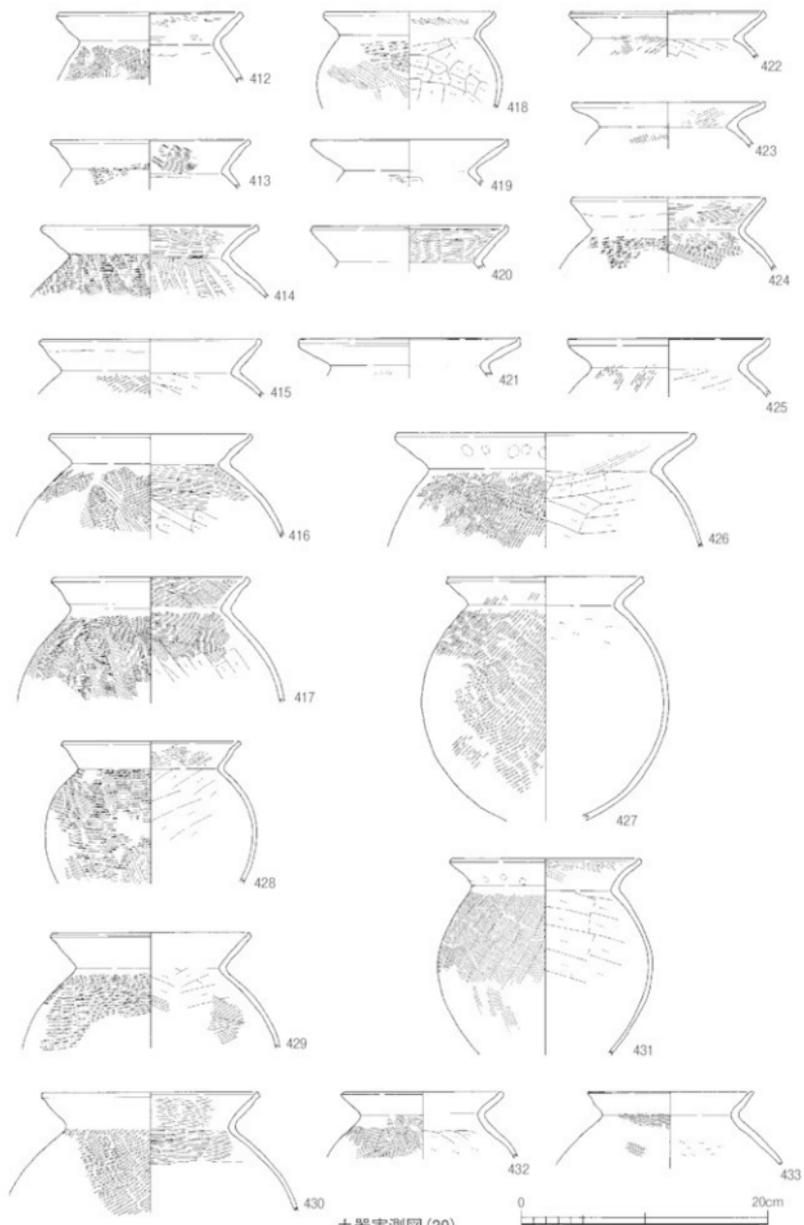
土器実測図(17)



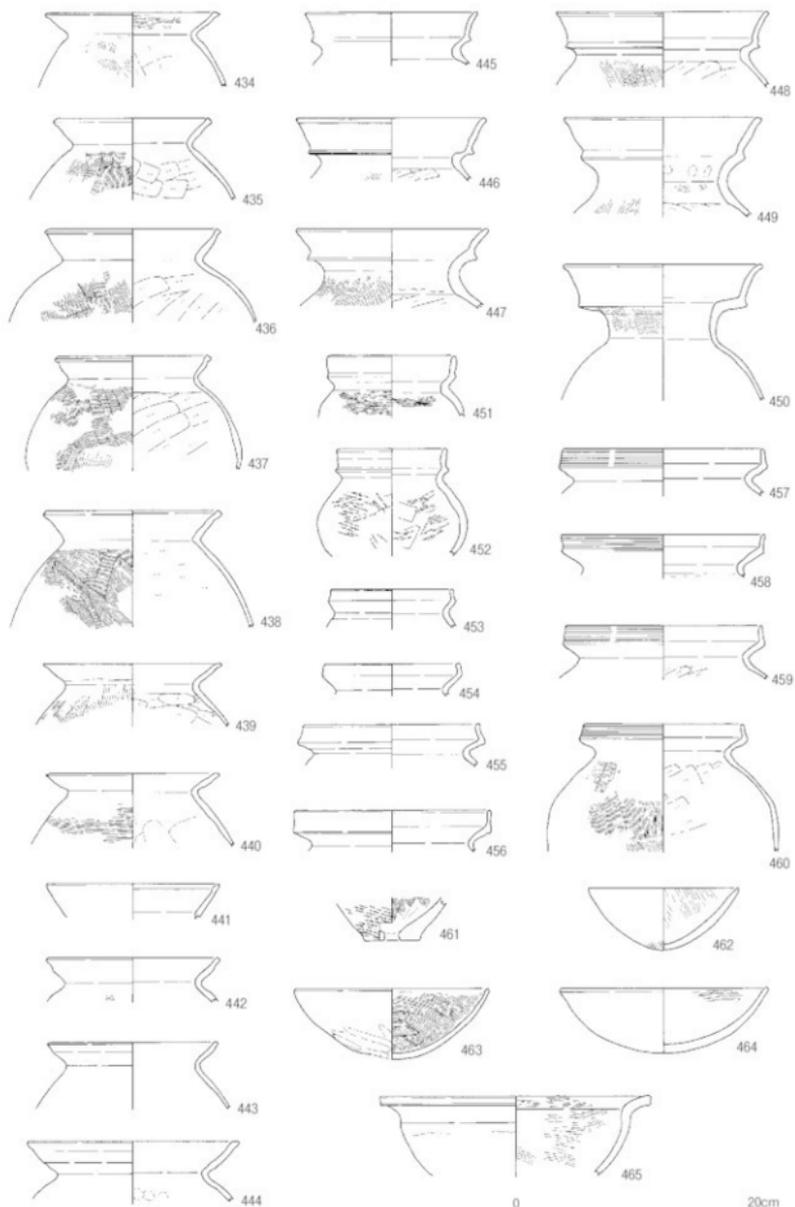
土器实测图(18)



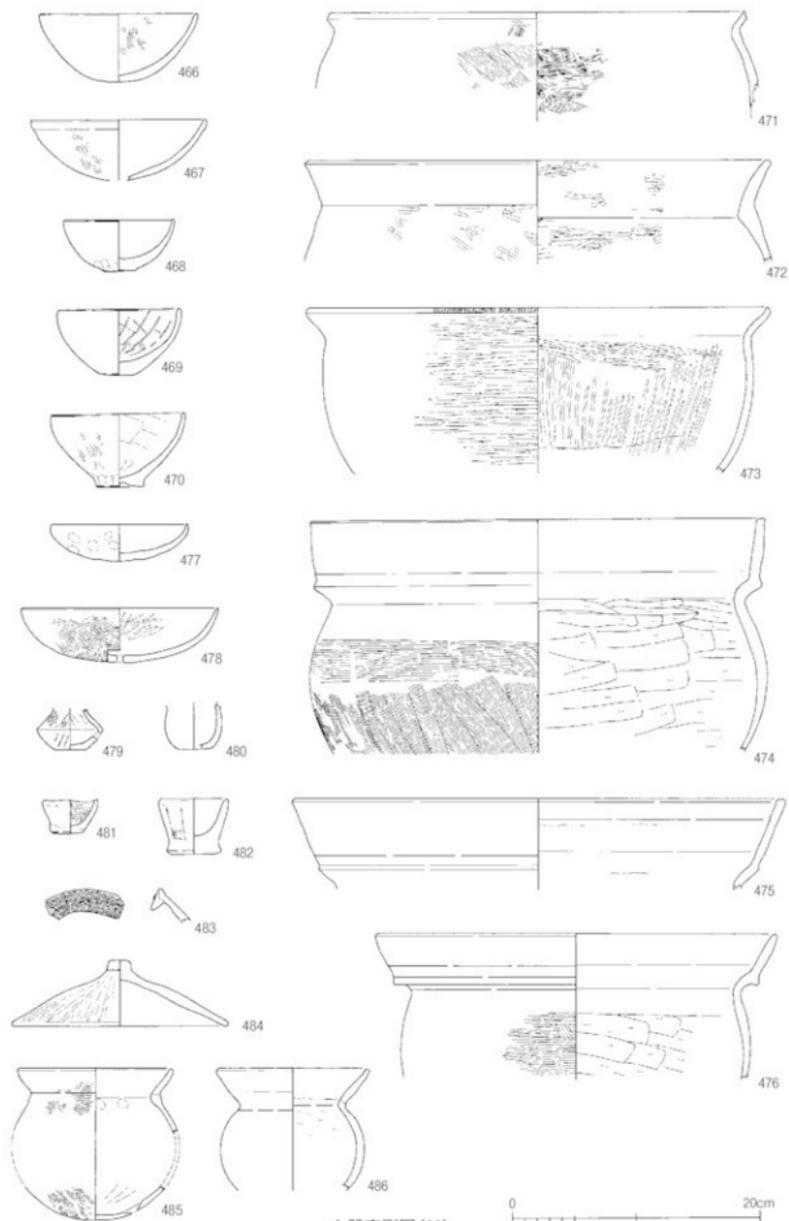
土器实测图(19)



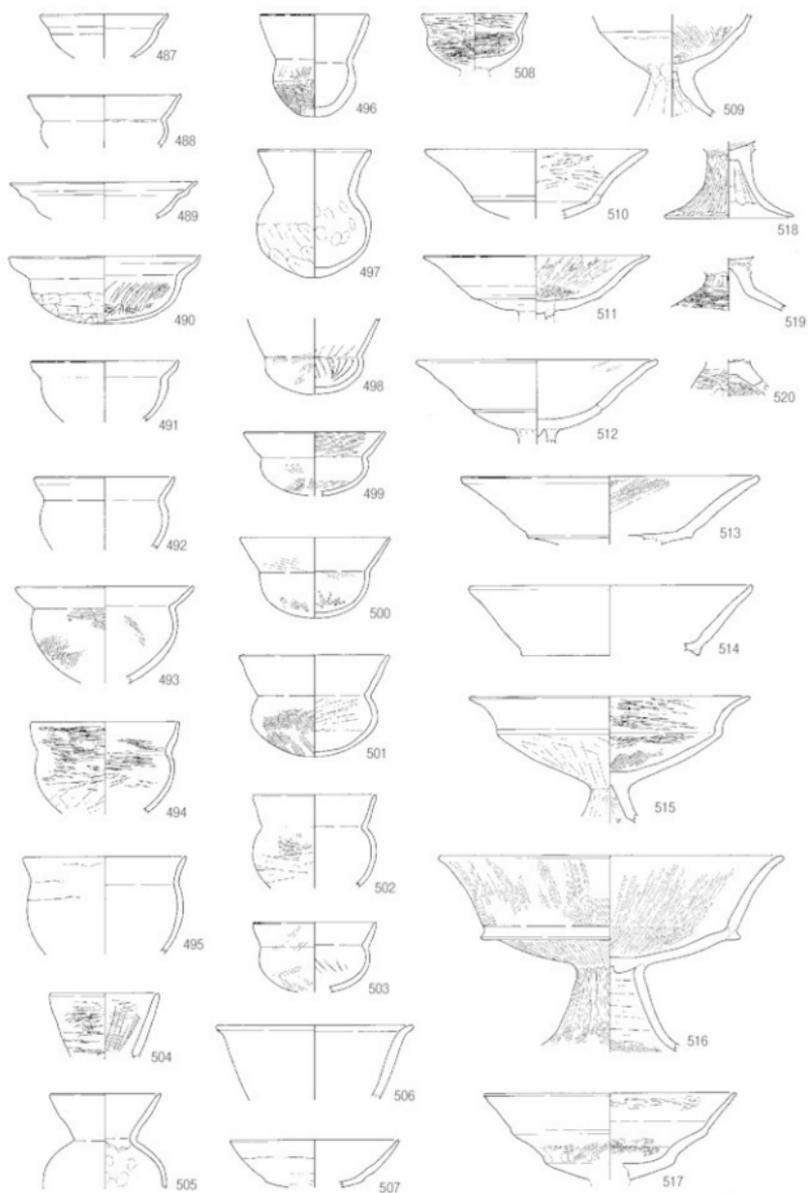
土器実測図(20)



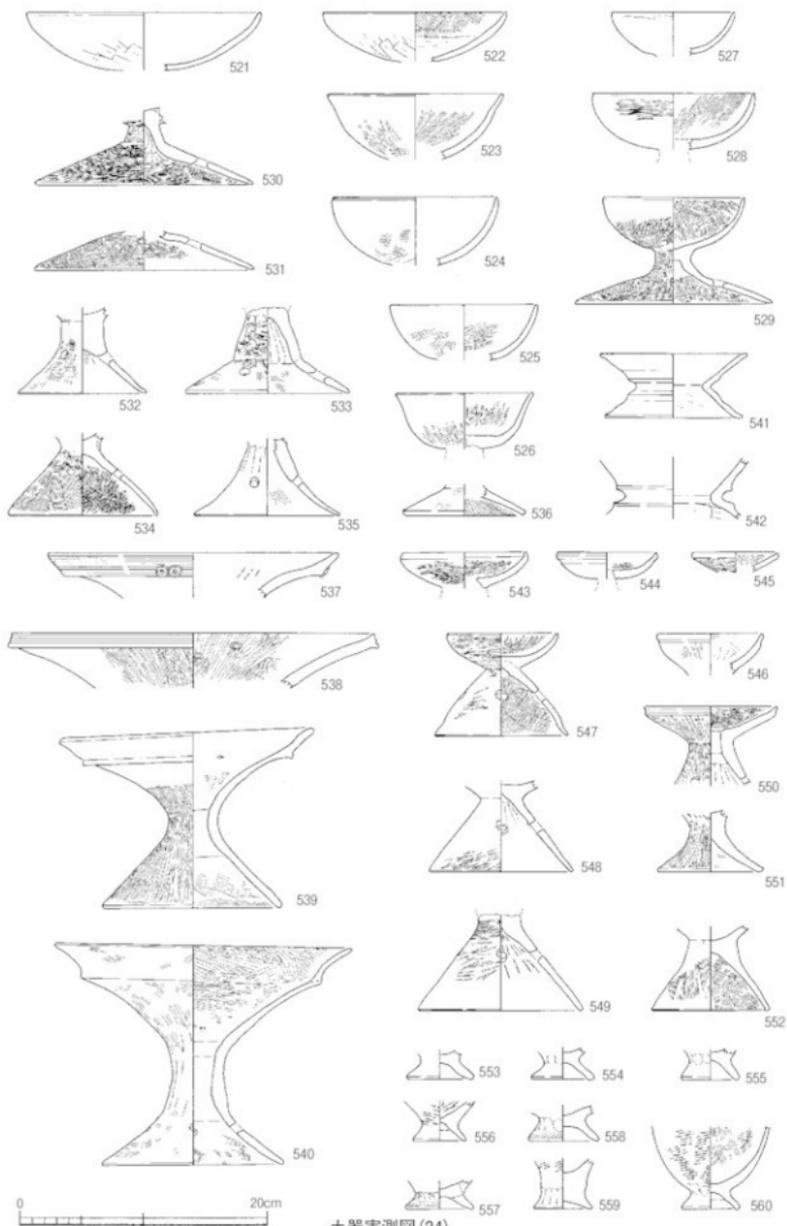
土器实测图(21)



土器实测图(22)

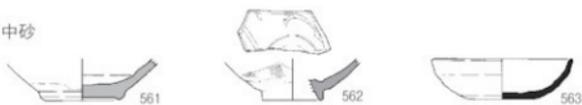


土器实测图(23)

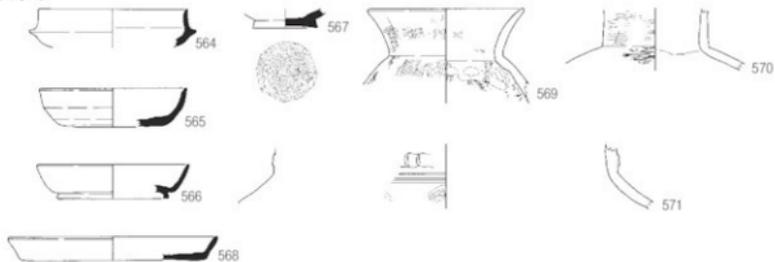


土器实测图(24)

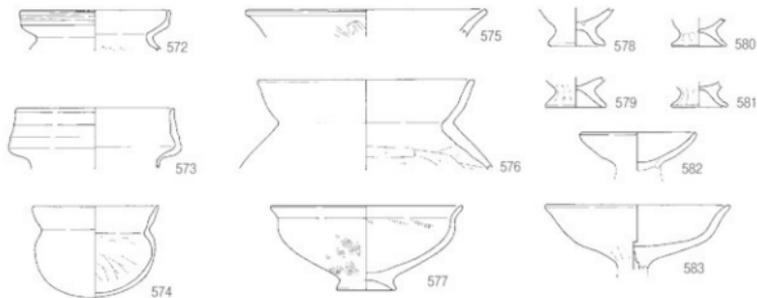
黄灰中砂



灰砂礫



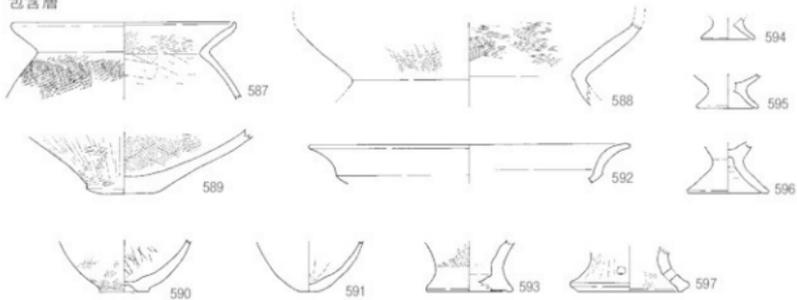
礫層



褐灰シルト



包含層



土器実測図(25)





13



17



18



63



161



181



195



195



225



242



263



295



339



342



344



345



346



347



348



350



352



356



368



372



375



378



381



405

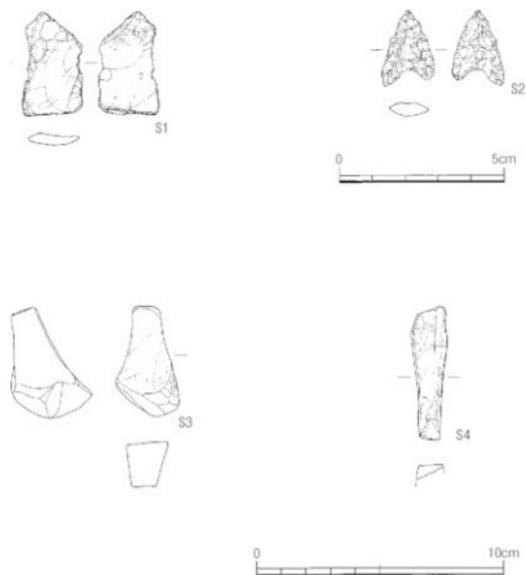


406

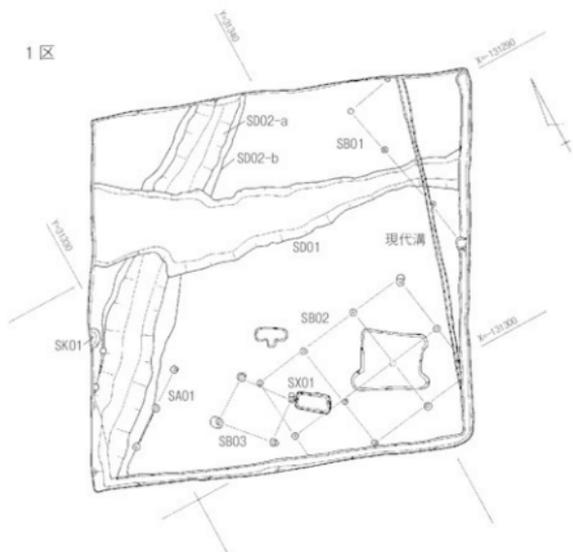


567

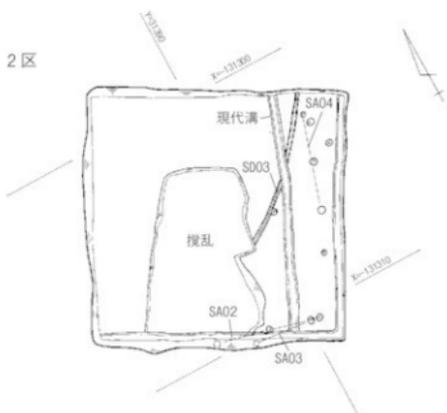




1区



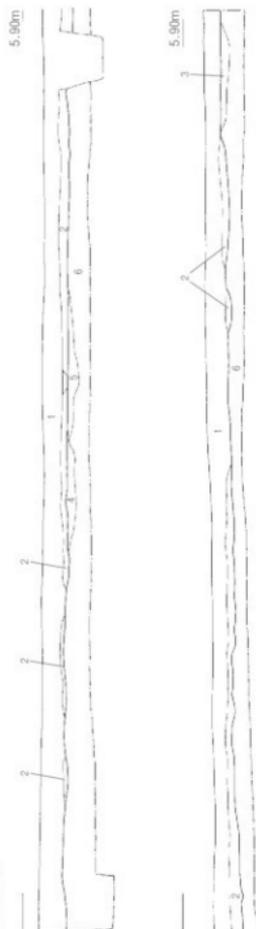
2区



竹の前遺跡平面図



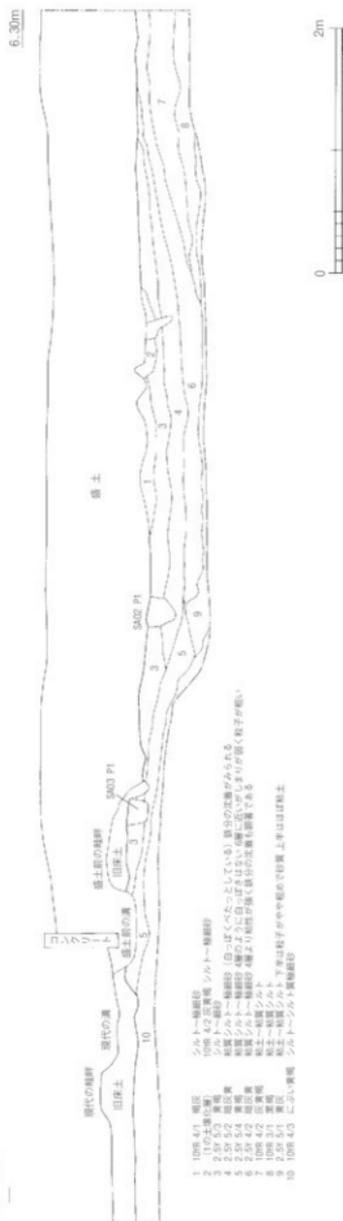
1 区東壁



- 1 田原土
- 2 1006.4/2 灰層
- 3 1006.5/3 灰層
- 4 1006.5/3 田原土
- 5 1006.5/3 シルト層
- 6 1006.4/3 シルト層

- 1 田原土
- 2 1006.4/2 灰層
- 3 1006.5/3 灰層
- 4 1006.5/3 田原土
- 5 1006.5/3 シルト層
- 6 1006.4/3 シルト層

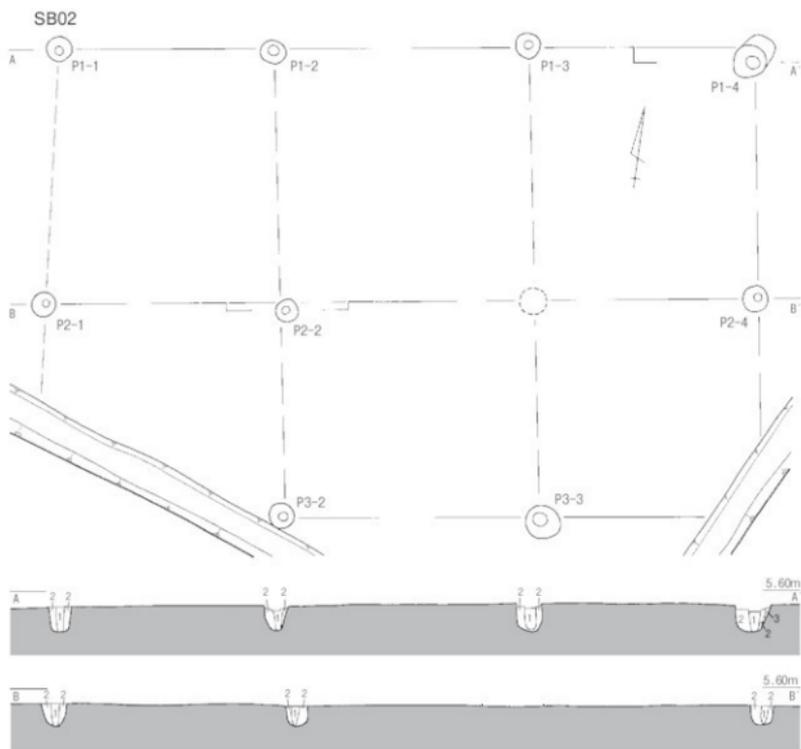
2 区南壁



- 1 1006.4/1 田原土
- 2 1006.5/3 灰層
- 3 1006.5/2 灰層
- 4 1006.4/2 田原土
- 5 1006.4/2 灰層
- 6 1006.5/2 灰層
- 7 1006.5/2 灰層
- 8 1006.5/1 灰層
- 9 1006.4/3 田原土
- 10 1006.4/3 シルト層

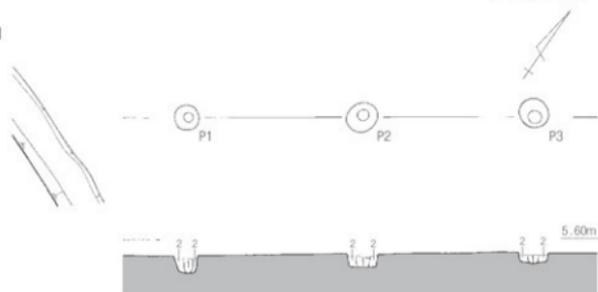
- 1 シルト層
- 2 シルト層
- 3 シルト層
- 4 シルト層
- 5 シルト層
- 6 シルト層
- 7 シルト層
- 8 シルト層
- 9 シルト層
- 10 シルト層

竹の前遺跡土層図



- | | | | |
|---|----------|--------|--------------|
| 1 | 10R 4/3 | にがい黄褐色 | 中砂混じり粘細砂一級砂 |
| 2 | 10R 4/4 | 褐色 | シルト混じり中砂一級砂 |
| 3 | 2.5R 5/2 | 暗灰黄 | 中砂混じりシルト一級粘砂 |

SA01

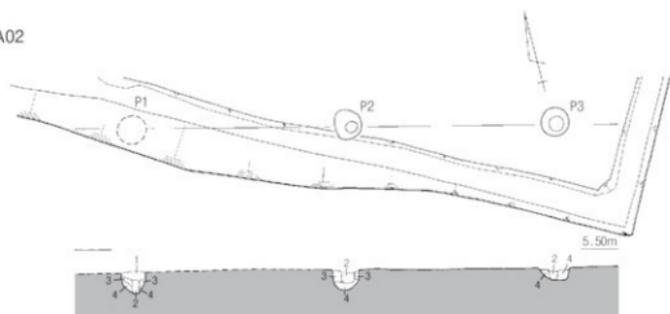


- | | | | |
|---|----------|--------|---------------------|
| 1 | 10R 5/3 | にがい黄褐色 | シルト質粘細砂一級砂 マンガン多く含む |
| 2 | 2.5R 6/3 | にがい黄褐色 | シルト質粘細砂 マンガン割合を少し含む |

竹の前遺跡遺構実測図(2)

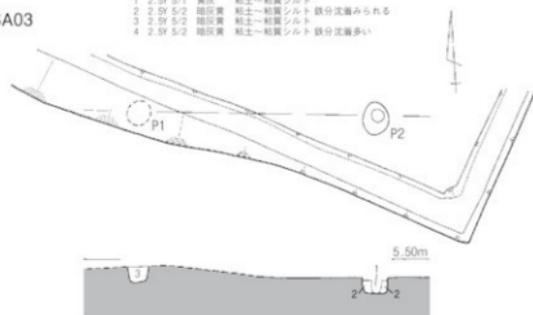


SA02



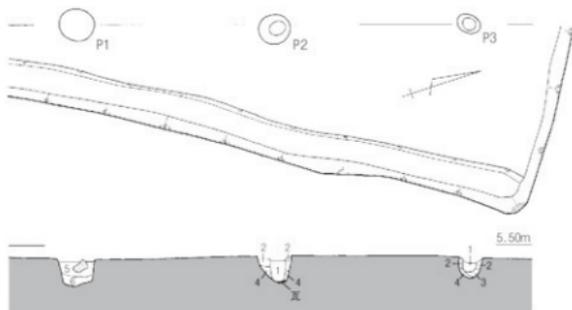
- 1 2.5Y 5/1 黄灰 粘土→粘質シルト
- 2 2.5Y 5/2 暗灰黄 粘土→粘質シルト 鉄分沈着みられる
- 3 2.5Y 5/2 暗灰黄 粘土→粘質シルト
- 4 2.5Y 5/2 暗灰黄 粘土→粘質シルト 鉄分沈着多い

SA03



- 1 2.5Y 4/2 暗灰黄 粘質シルト→粘細砂
- 2 2.5Y 5/3 黄褐 中砂混じり粘質シルト
- 3 10R 4/2 灰黄褐 シルト→粘細砂

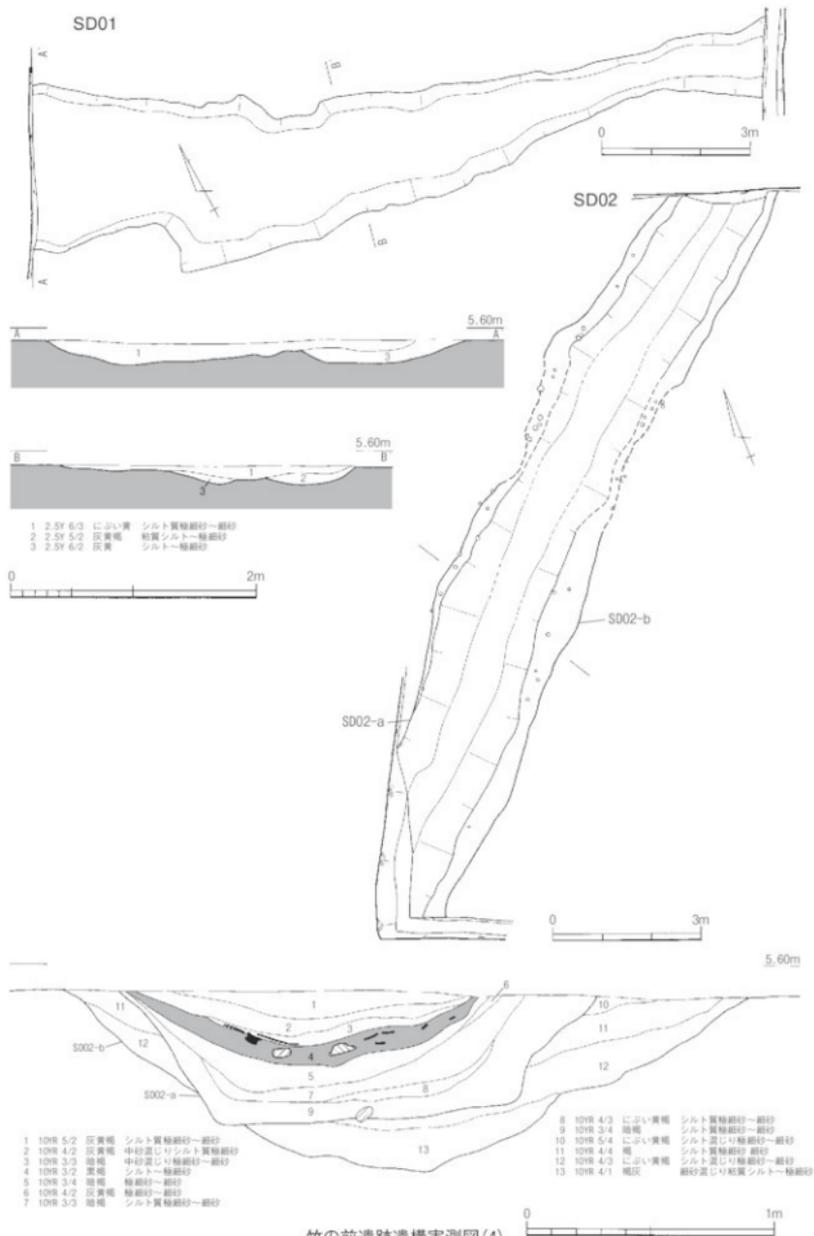
SA04



- 1 10R 5/2 灰黄褐 シルト→粘細砂 ベースをわずかに含む
- 2 10R 5/4 にぶい黄褐 粘細砂→粘砂
- 3 10R 5/6 黄褐 シルト質粘細砂→粘砂
- 4 10R 5/2 灰黄褐 中砂混じり粘細砂→粘砂
- 5 10R 5/1 暗灰 粘細砂→粘細砂 ベースをブロック状に含む
- 6 10R 5/3 にぶい黄褐 中砂混じりシルト→粘細砂 ベース下層の粗→中砂をわずかに含む

竹の前遺跡遺構実測図(3)





竹の前遺跡遺構実測図(4)

1区 SD01



1



2

1区 SD02



3



4



5



6



7



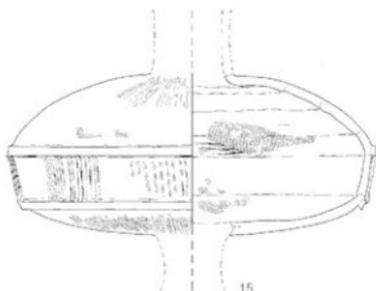
8



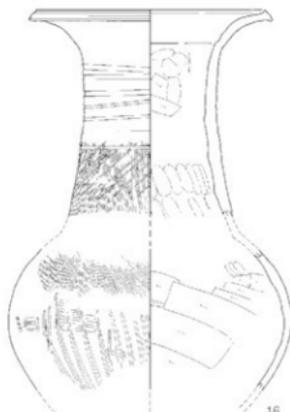
9



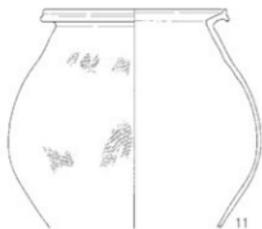
10



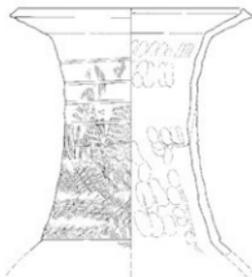
15



16



11



17



12



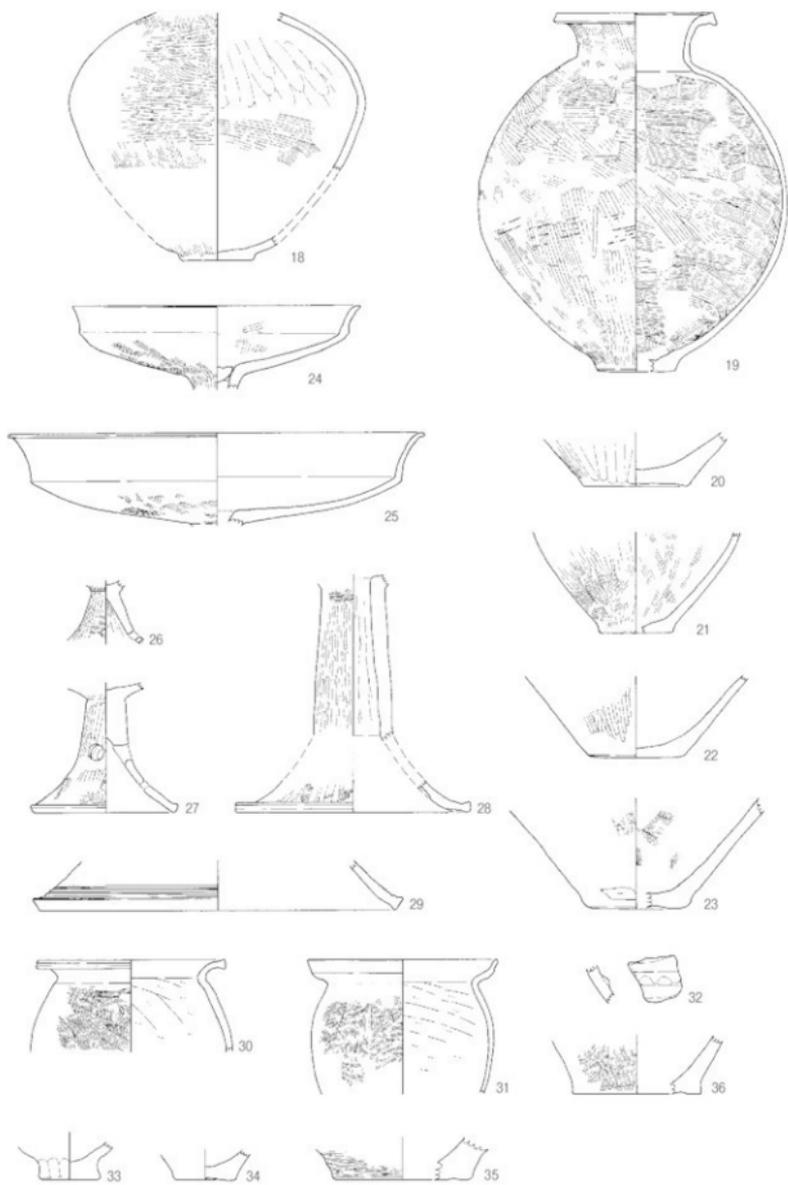
13



14



竹の前遺跡土器実測図(1)



竹の前遺跡土器実測図(2)



写 真 图 版





空中写真（南西上空から）



空中写真（南東上空から）



空中写真（国土地理院撮影）



調査区空中写真（東上空から）



調査区空中写真（南上空から）



調査区空中写真



飯田橋からの景色（後方は長越遺跡 I）



全景（南から）



調査区全景（南から）



全景（北から）



竪穴住居跡群（南東から）



竪穴住居跡群（南から）



竪穴住居跡群（南西から）



SH01全景 (西から)



SH01全景 (南から)



SH01検出状況
(北から)



SH01検出状況
(東から)



SH01検出状況 (南から)



SH01検出状況 (西から)



SH01炭化材検出状況



SH01低床部全景



低床部土坑・台石



台石検出状況



調査風景



調査風景



SH02全景（南から）



SH02堆積状況



壁溝堆積状況



床面土器出土状態



中央土坑堆積状況



SH03全景（南から）



SH03堆積状況（南から）



SH04・SH05全景（南西から）



SH04全景（南東から）



SH04全景（北東から）



SH04堆積状況



調査風景



遺物出土状態



中央土坑遺物出土状態（西から）



SH06・SH12全景（東から）



SH06・SH12全景（西から）



SH06焼土坑検出状況（東から）



SH06土器出土状態



SH06焼土坑断面（東から）



SH06焼土坑出土状態（東から）



SH06炉跡断面



SH06炭化材出土状態



SH06炭化材出土状態



SH06炭化材出土状態



SH06東壁炭化材



SH06西壁炭化材



東壁断ち割り



南壁断ち割り



SH06炭化材



網代炭化材（剥ぎ取り）



SH06土器出土状態（南から）



SH06土器出土状態



SH07 (南から)



SH08 (北から)



SH08 (西から)



SH08土器出土状態（西から）



調査風景



SH09・10・11（南から）



SH09～11の切り合い



SH09（南から）



SH09・SH10遺物出土状態（南から）



SH10（南から）



SH10堆積状況（南から）



SH10土器出土状態



SH10・11の切り合い

調査風景



SH11 (南から)



SH11炉跡



SH11土器出土状態



SH13 (西から)



SH13 (北から)



SK01土器出土状態



SK02アゼ (北西から)



SK03アゼ・土器出土状態 (北西から)



SK02アゼ (北西から)



SD01アゼ (南から)



SD06アゼ (南から)



SD09 (西から)



SD02上層アゼ (東から)



SD02土器出土状態 (西から)



SD02土器出土状態 (西から)



SD02土器出土状態 (西から)



SR01 (北から)



SR01 (南から)



SR01アゼ (北から)



中央アゼ (南から)



旧河道土器出土状態



調査風景



SH04出土遺物



SH06出土遺物



SH09出土遺物



讃岐からの搬入品



山陰からの搬入品



庄内甕



旧河道出土
(壺)

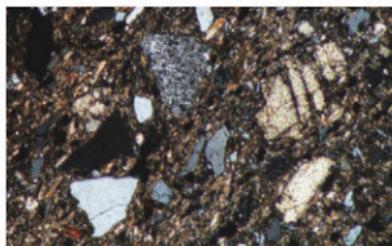
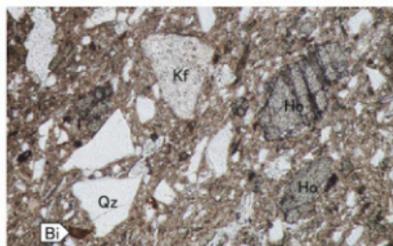


旧河道出土
(高杯・器台)

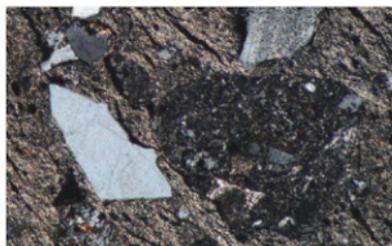
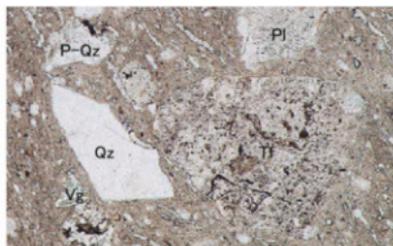


旧河道出土
(製塩土器)

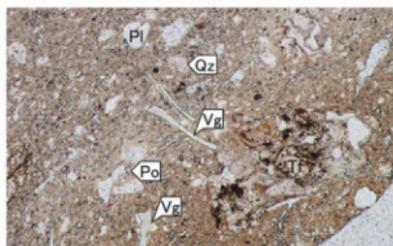
胎土薄片(1)



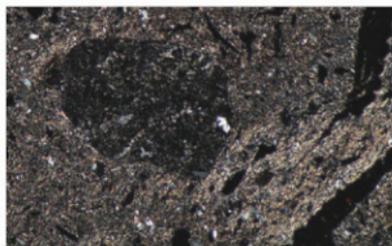
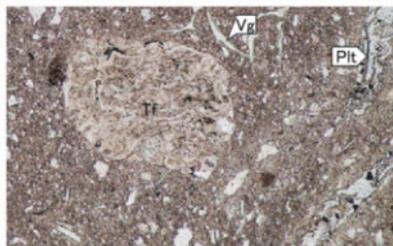
1.No.1(土師器 庄内壺 播磨産)



2.No.2(土師器 庄内壺 播磨産)



3.No.3(土師器 庄内壺 播磨産)

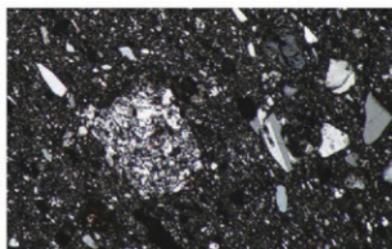
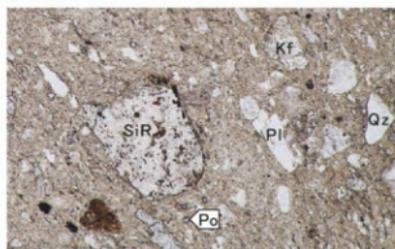


4.No.4(土師器 壺 播磨産)

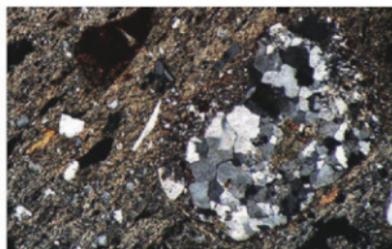
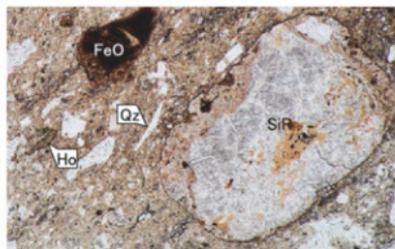
Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Bi:黒雲母, Tf:凝灰岩,
 P-Qz:多結晶石英, Vg:火山ガラス, Po:植物珪酸体, Plt:植物片,
 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

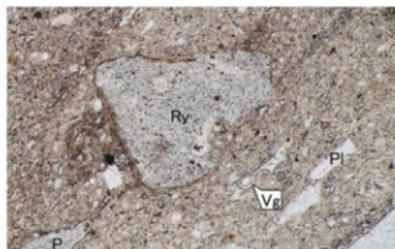
胎土薄片(2)



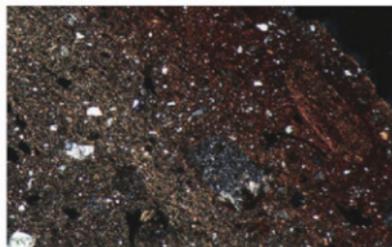
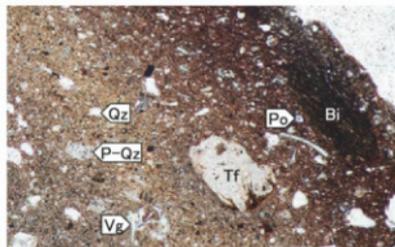
5.No.5(土師器 壺 播磨産)



6.No.6(土師器 壺 播磨産)



7.No.7(土師器 壺 播磨産)

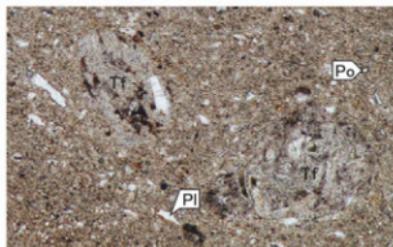


8.No.8(土師器 高杯 播磨産)

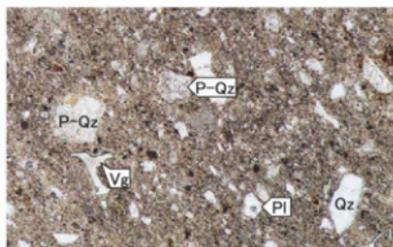
Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Bi:黒雲母, Tf:凝灰岩, Ry:流紋岩,
P-Qz:多結晶石英, SiR:珪化岩, Vg:火山ガラス, FeO:酸化鉄, Po:植物珪酸体。
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

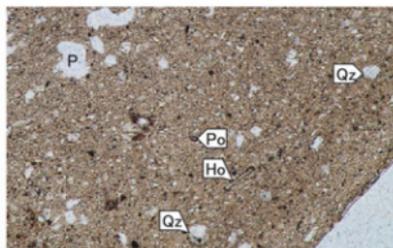
胎土薄片(3)



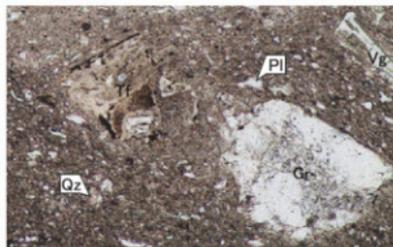
9.No.9(土師器 高杯 播磨産)



10.No.10(土師器 高杯 播磨産)



11.No.11(土師器 小形丸底壺 播磨産)



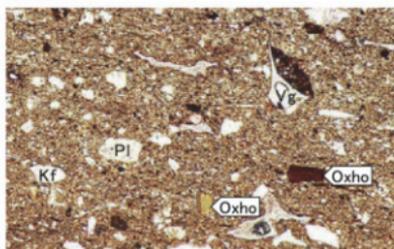
12.No.12(土師器 小形丸底壺 播磨産)

Qz:石英, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Tf:凝灰岩, P-Qz:多結晶石英, Gr:花崗岩,
Vg:火山ガラス, Po:植物珪酸体, P:孔隙。

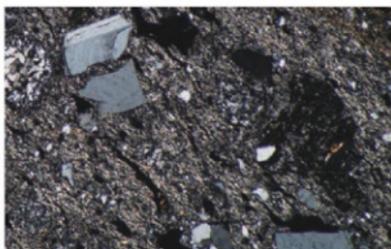
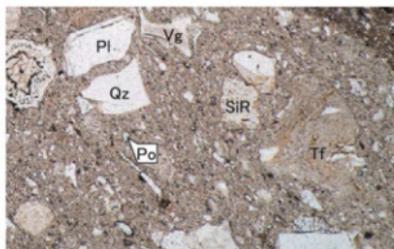
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

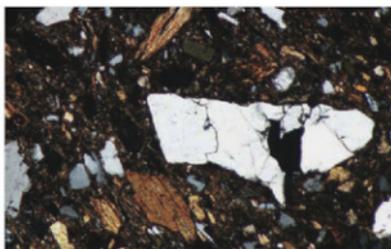
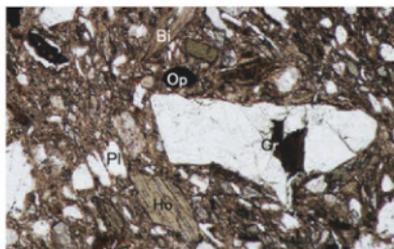
胎土薄片(4)



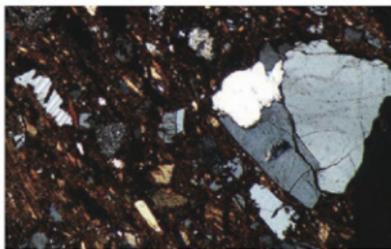
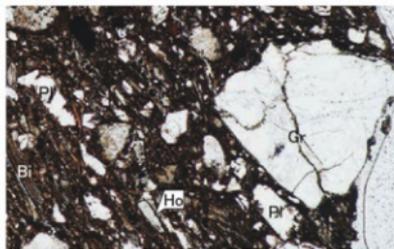
13.No.13(土師器 小形丸底壺 播磨産)



14.No.14(土師器 壺 讃岐型、播磨産)



15.No.15(土師器 壺 讃岐産)



16.No.16(土師器 壺 讃岐産)

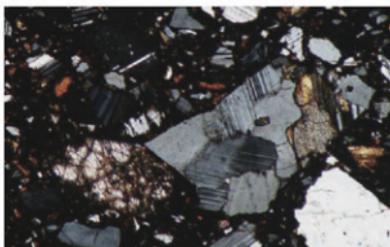
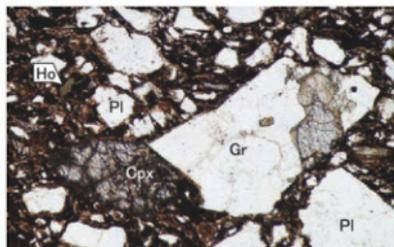
0.5mm

Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Oxho:酸化角閃石, Bi:黒雲母,

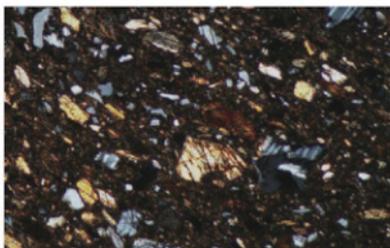
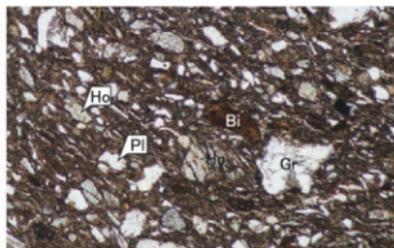
Op:不透明鉱物, Tf:凝灰岩, Gr:花崗岩, SiR:珩化岩, Vg:火山ガラス, Po:植物珩酸体,

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

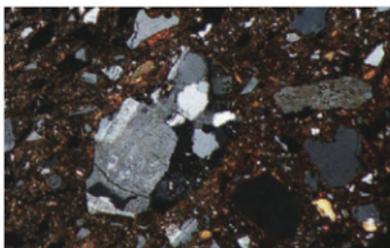
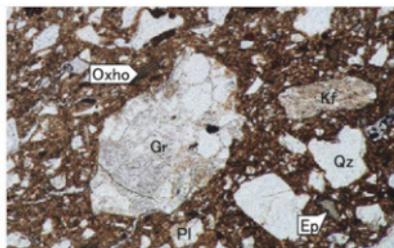
胎土薄片(5)



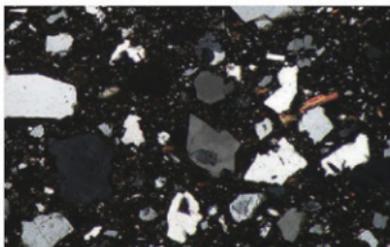
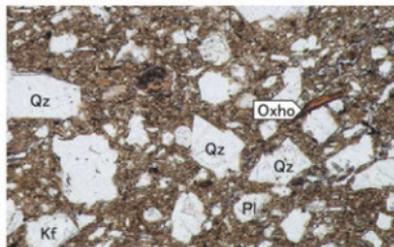
17.No.17(土師器 壺 讃岐産)



18.No.18(土師器 壺 河内産)



19.No.19(土師器 壺 吉備産)



20.No.20(土師器 壺 因幡産)

Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Cpx:単斜輝石, Ho:角閃石, Oxho:酸化角閃石,
Ep:緑レン石, Bi:黒雲母, Gr:花崗岩。

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm



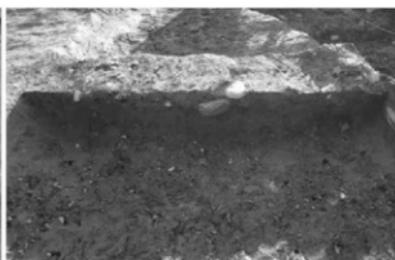
SD09 (西から)



SD10アゼ (南から)



SR01アゼ (南から)



SR01アゼ (北から)



SR01アゼ (北から)



SR01アゼ (北から)



SX01土器出土状態



SX02調査風景



SX04土器出土状態（東から）



現地説明会



考古学者養成セミナー



実測風景



上層スキ溝（南から）



上層水田アゼ（南から）



15年度調査区（長越Ⅱ）の現況



船場川ゴミ集積状況



出土遺物



旧河道出土遺物

出土遺物(1)



旧河道出土
讃岐搬入土器



旧河道出土製塩土器



暗灰砂出土鉢



暗灰砂出土小形土器



暗灰砂出土甕



2

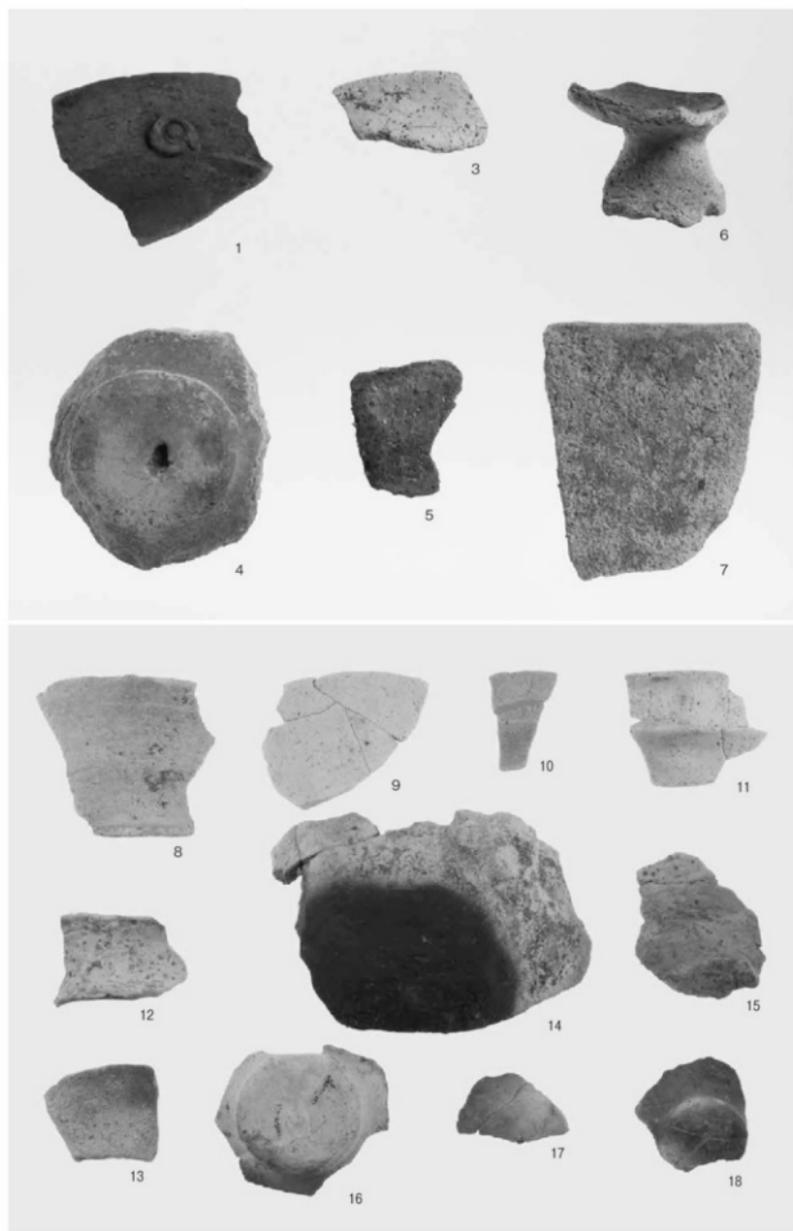


23

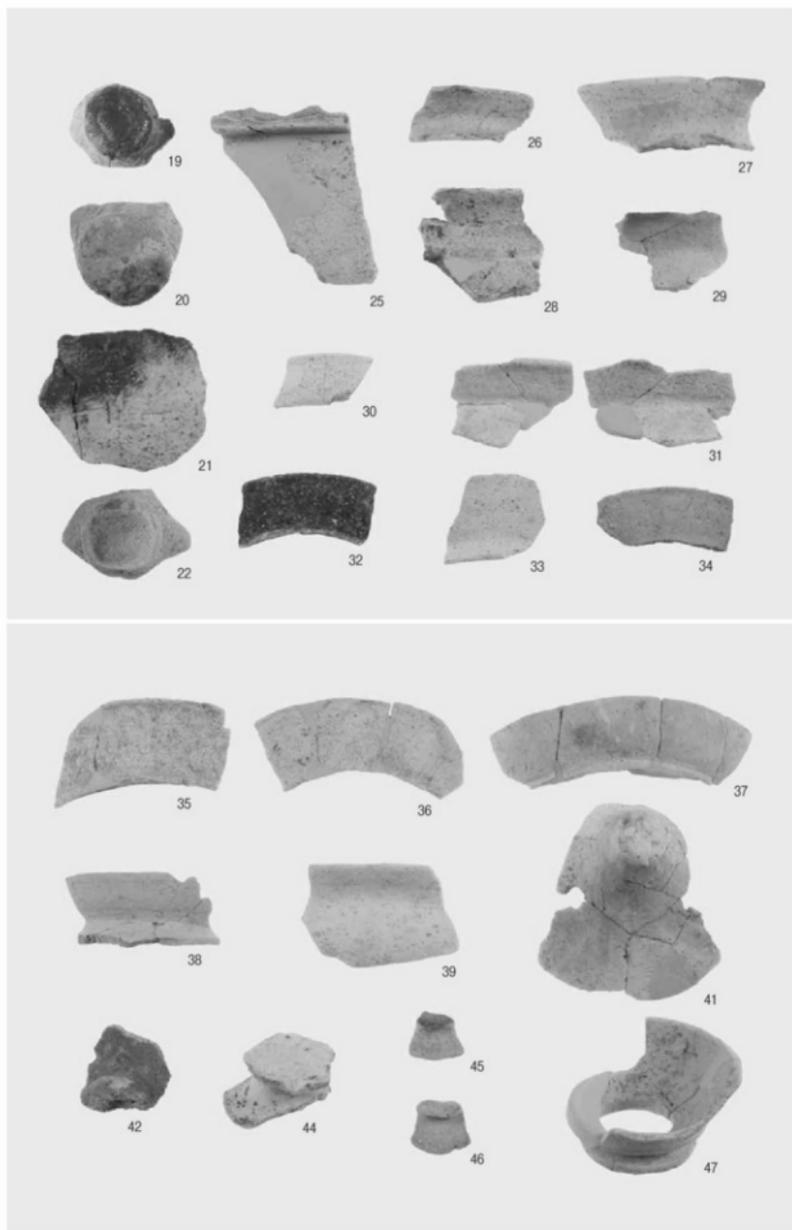


24

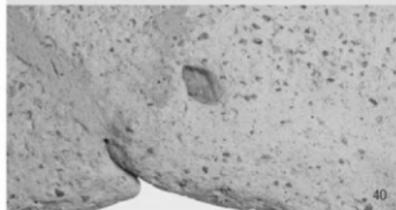
出土遺物(3)



出土遺物(4)



出土遺物(5)



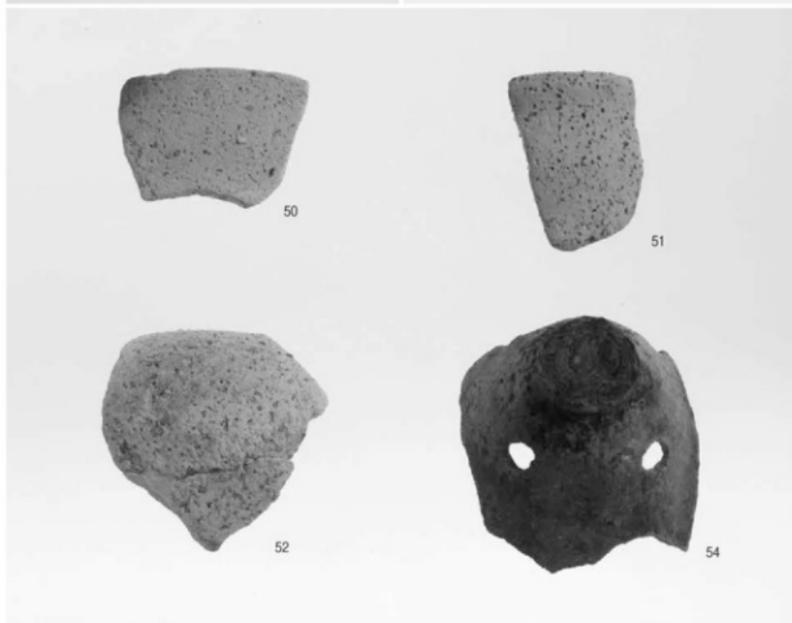
43

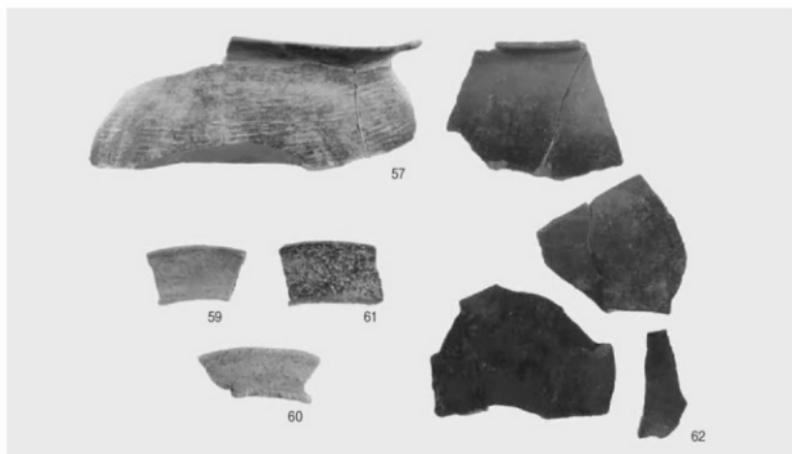


48

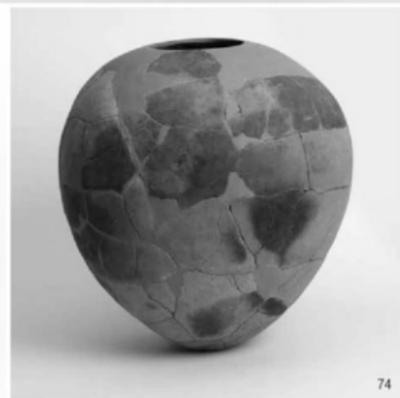
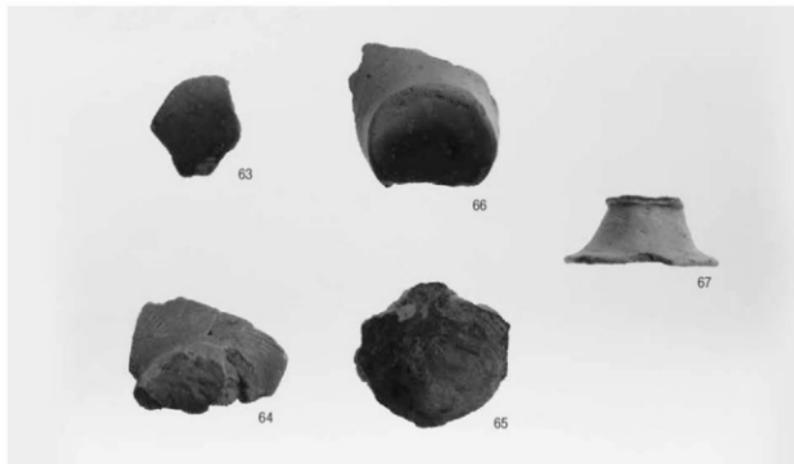


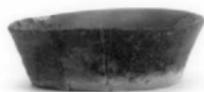
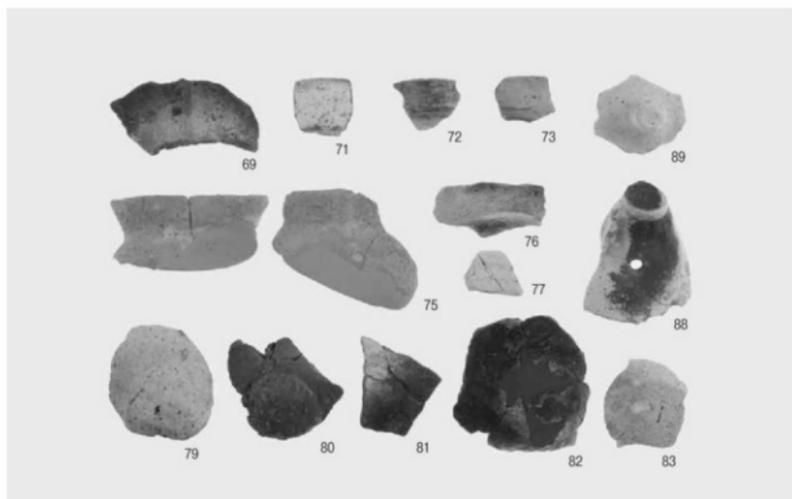
49





出土遺物(7)





70



85



90



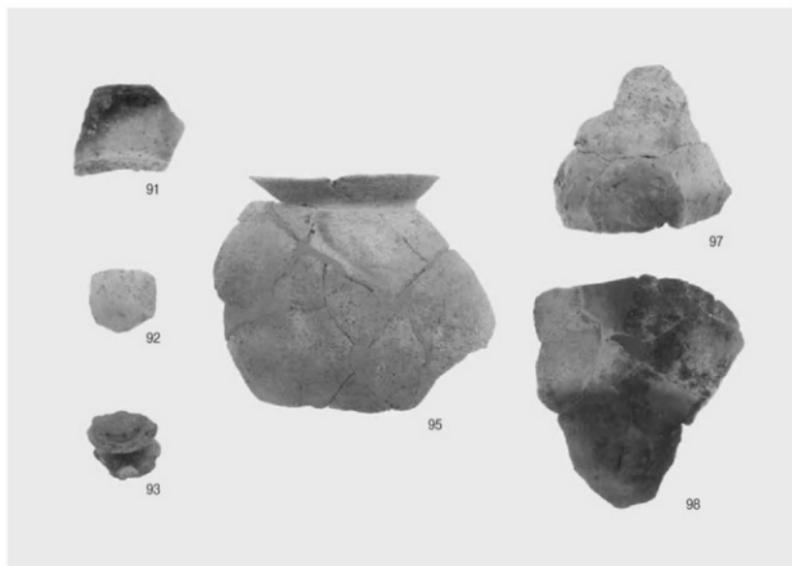
84

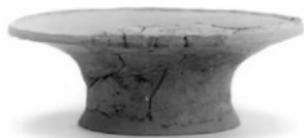


86

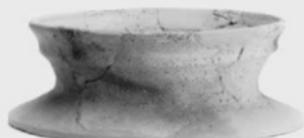


87





109



103



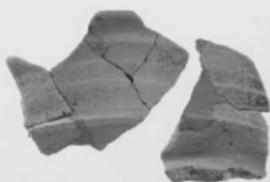
101



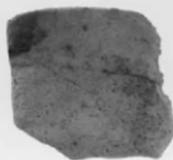
102



108



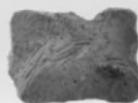
106



105



107



104



111



112



114



113



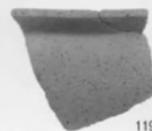
115



120



118



119



121



124



123



110



122



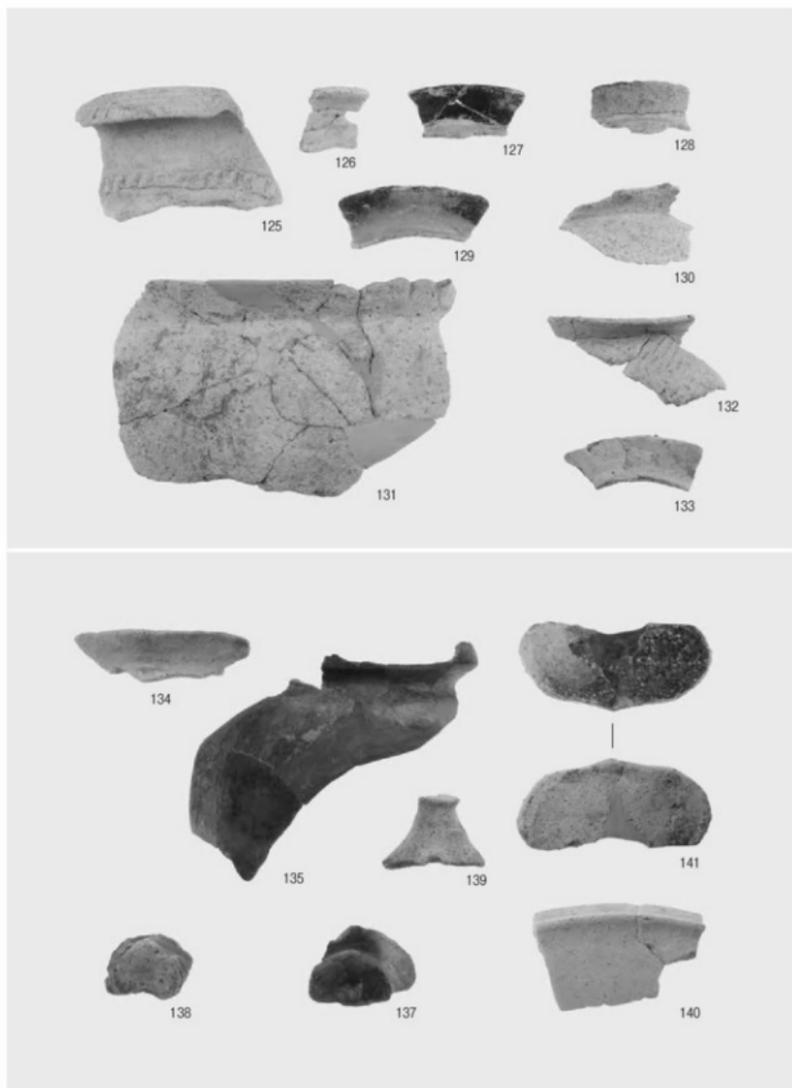
116

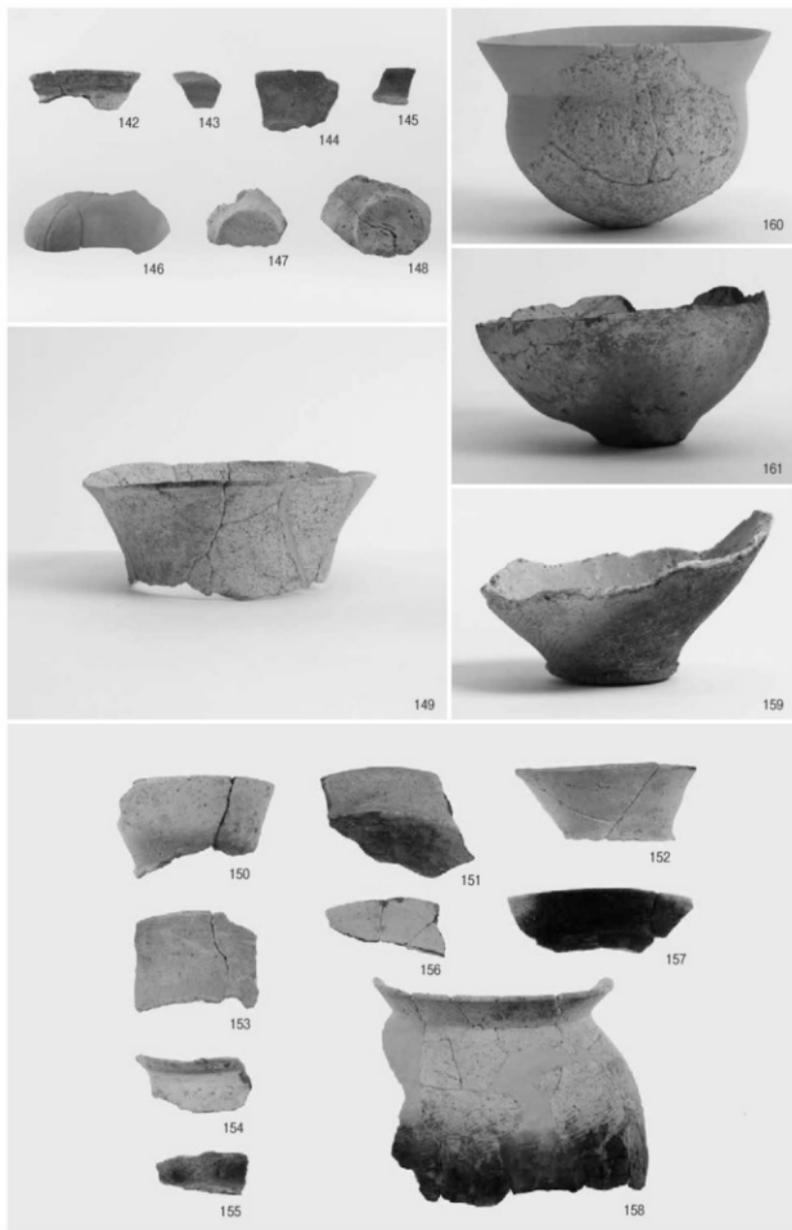


117



136

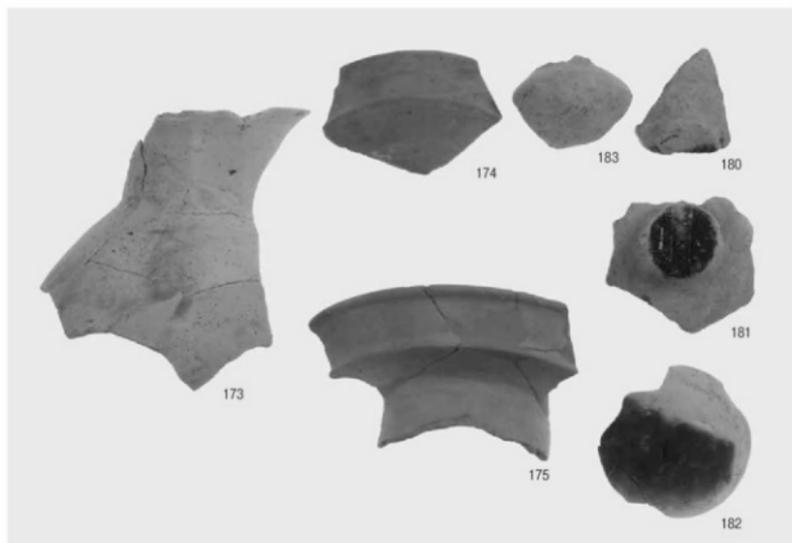


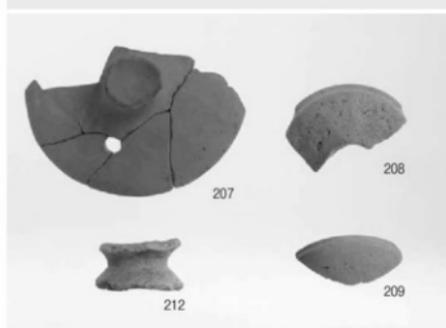
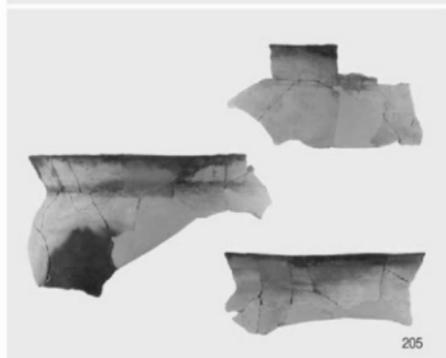
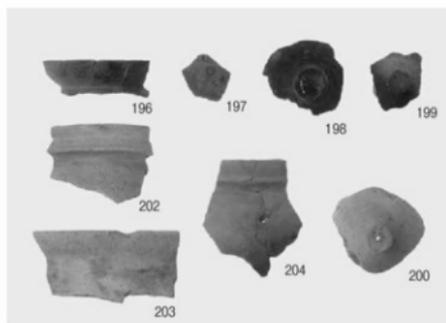


出土遺物(14)



出土遺物(15)





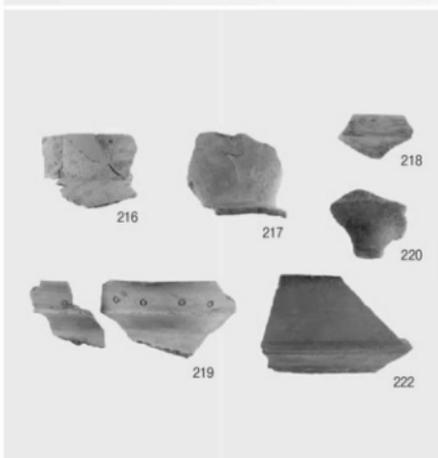




221



223



216

217

218

220

219

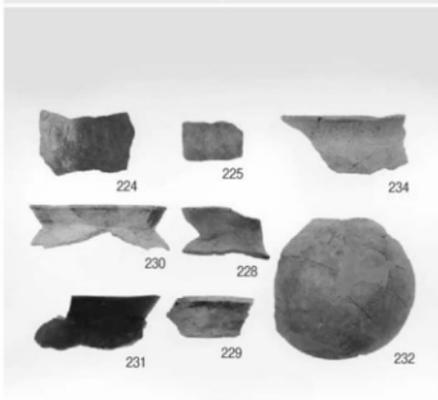
222



226



227



224

225

234

230

228

231

229

232



233





248



252



251



247



253



255



256

257

259

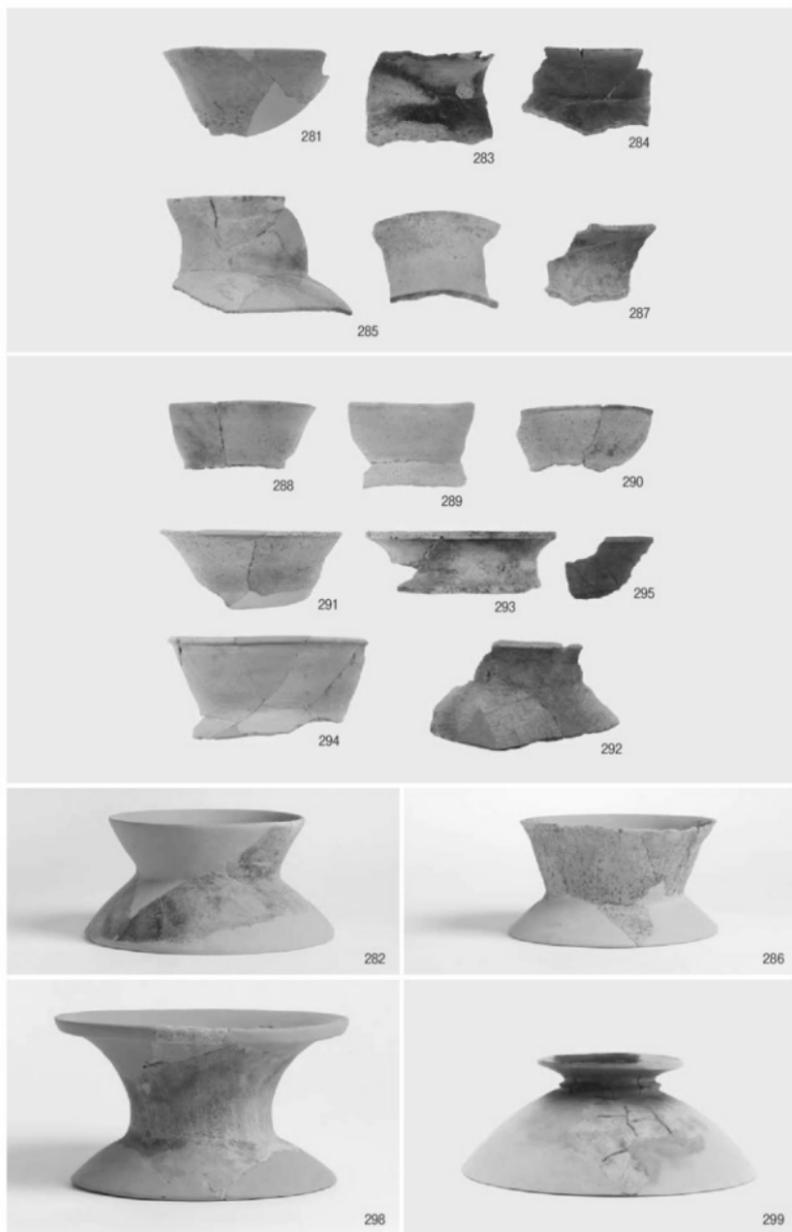


260

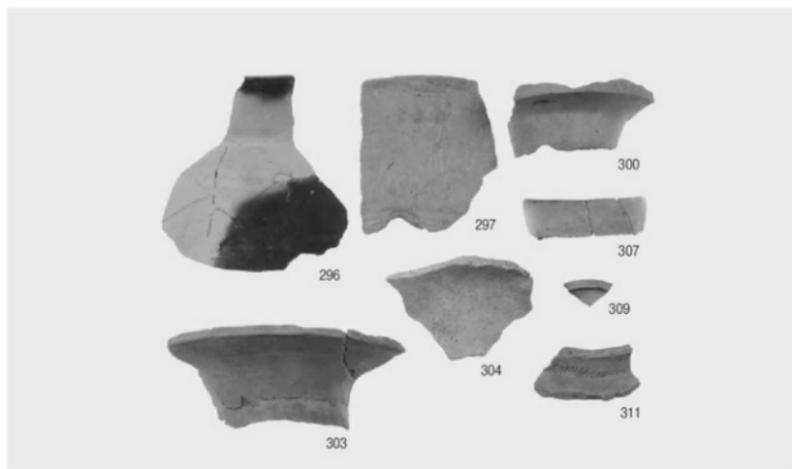
261

277



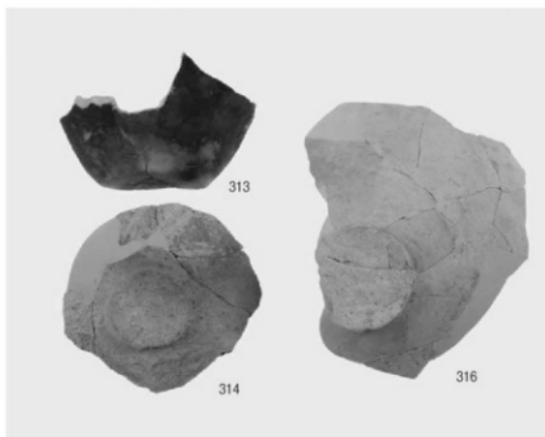


出土遺物(23)

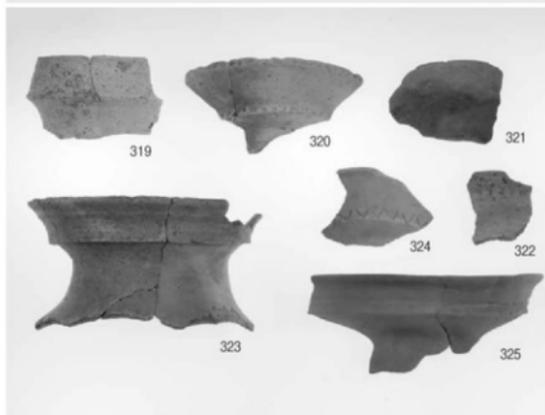




317



318

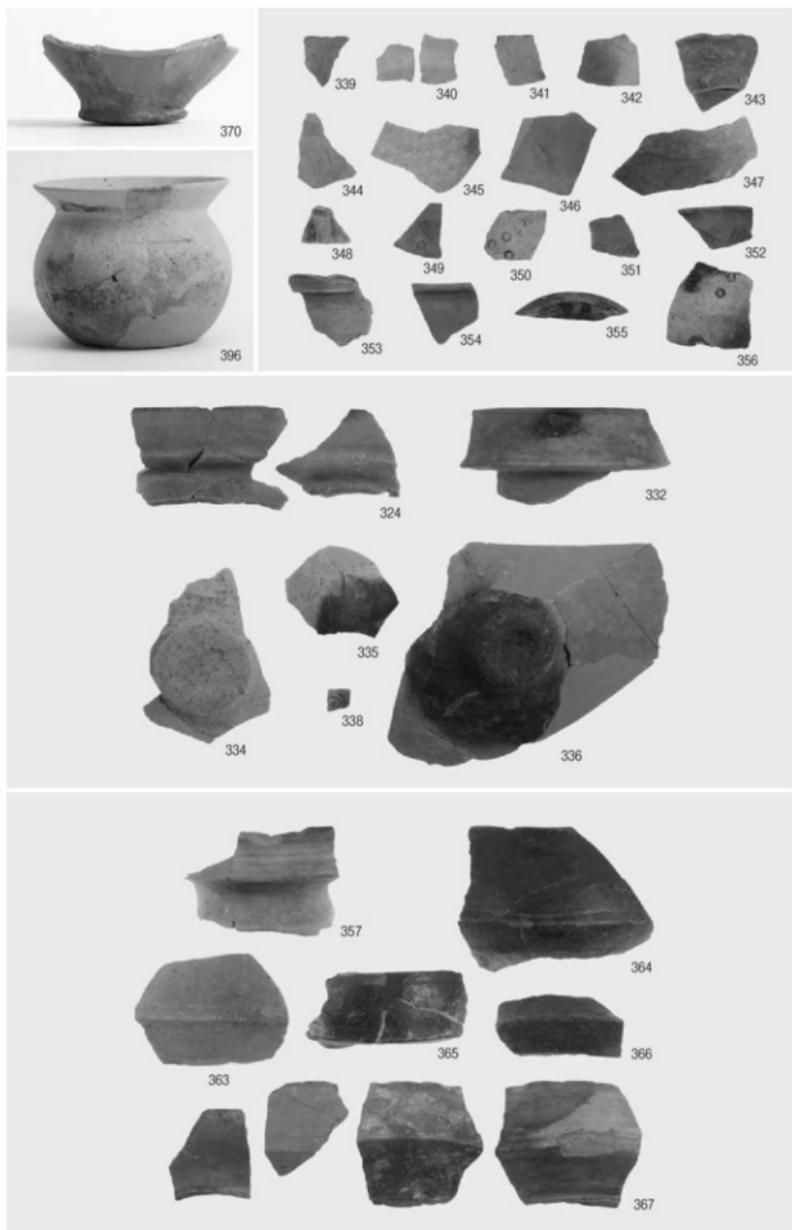


312

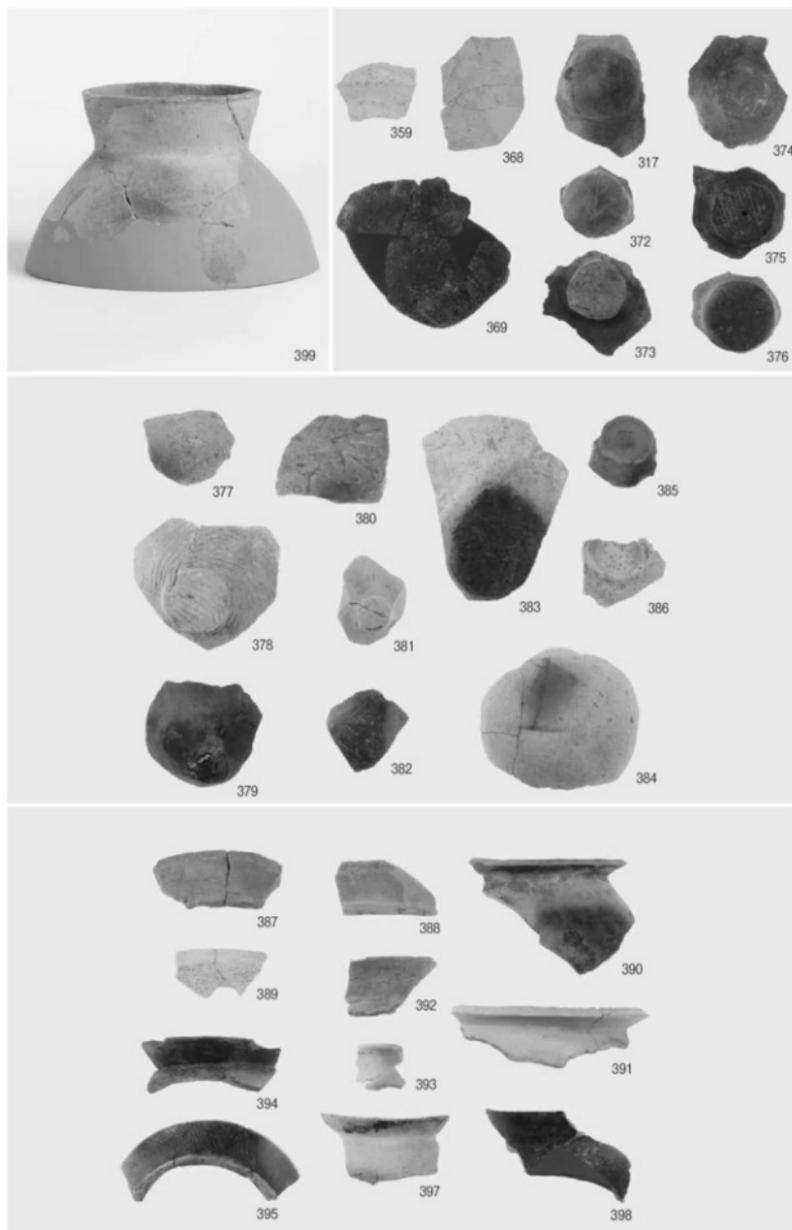


315





出土遺物(27)





414



415



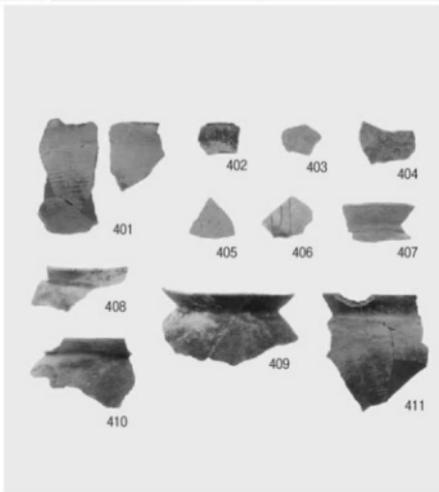
416



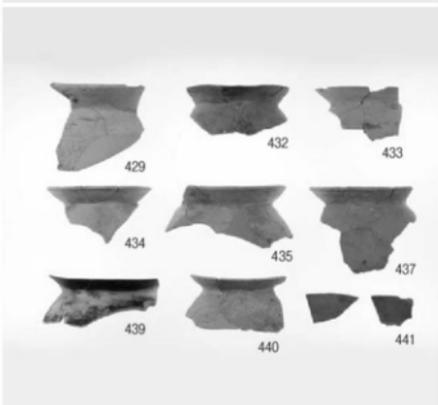
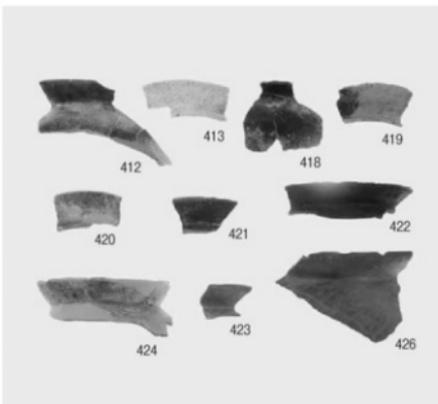
417



400



出土遺物(29)





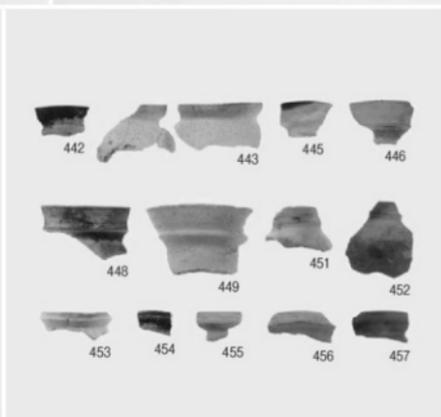
436



444



438



447



450

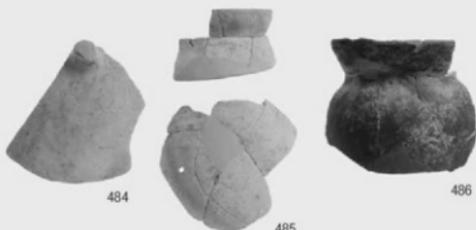




出土遺物(33)



490



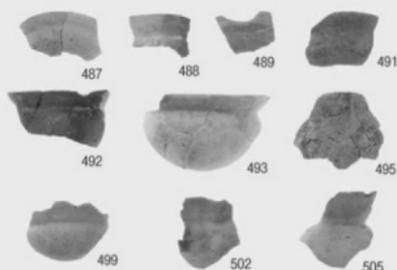
484

485

486



496



487

488

489

491

492

493

495

499

502

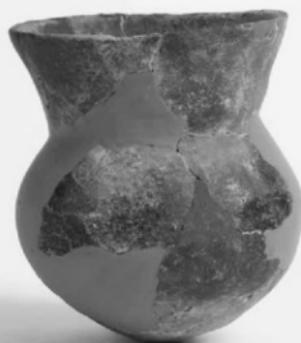
505



494

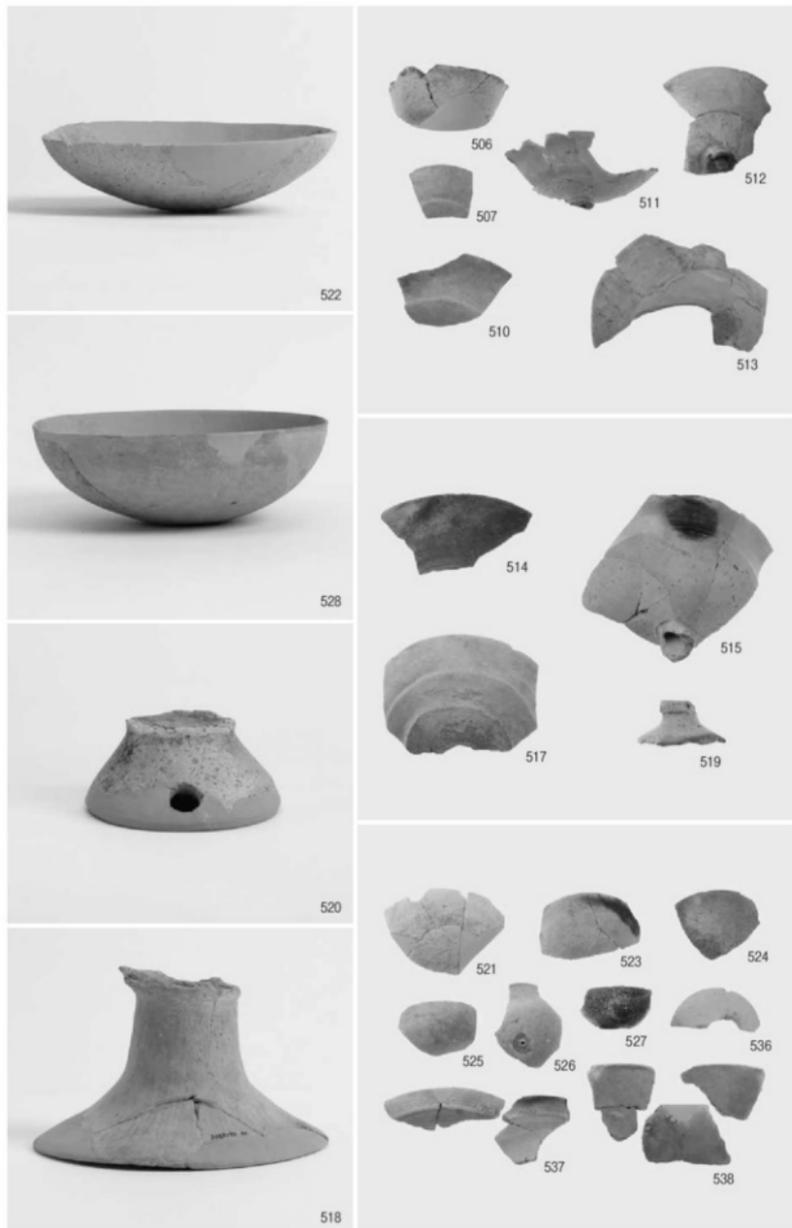


503

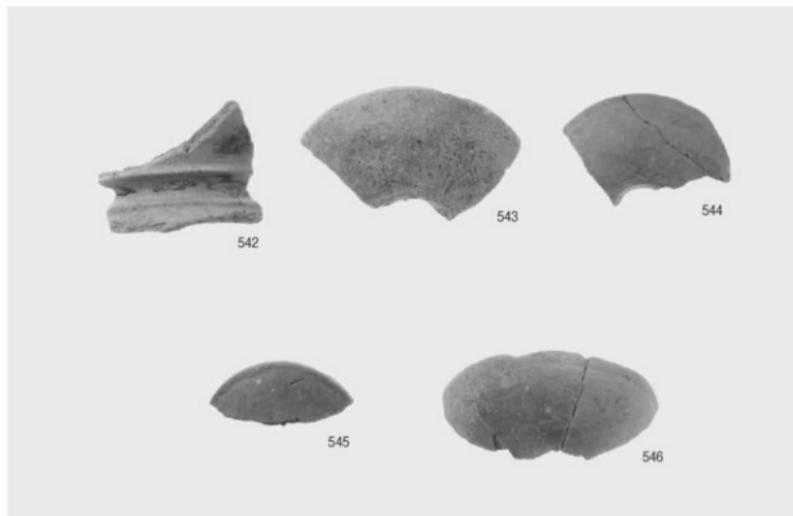


497









540



532



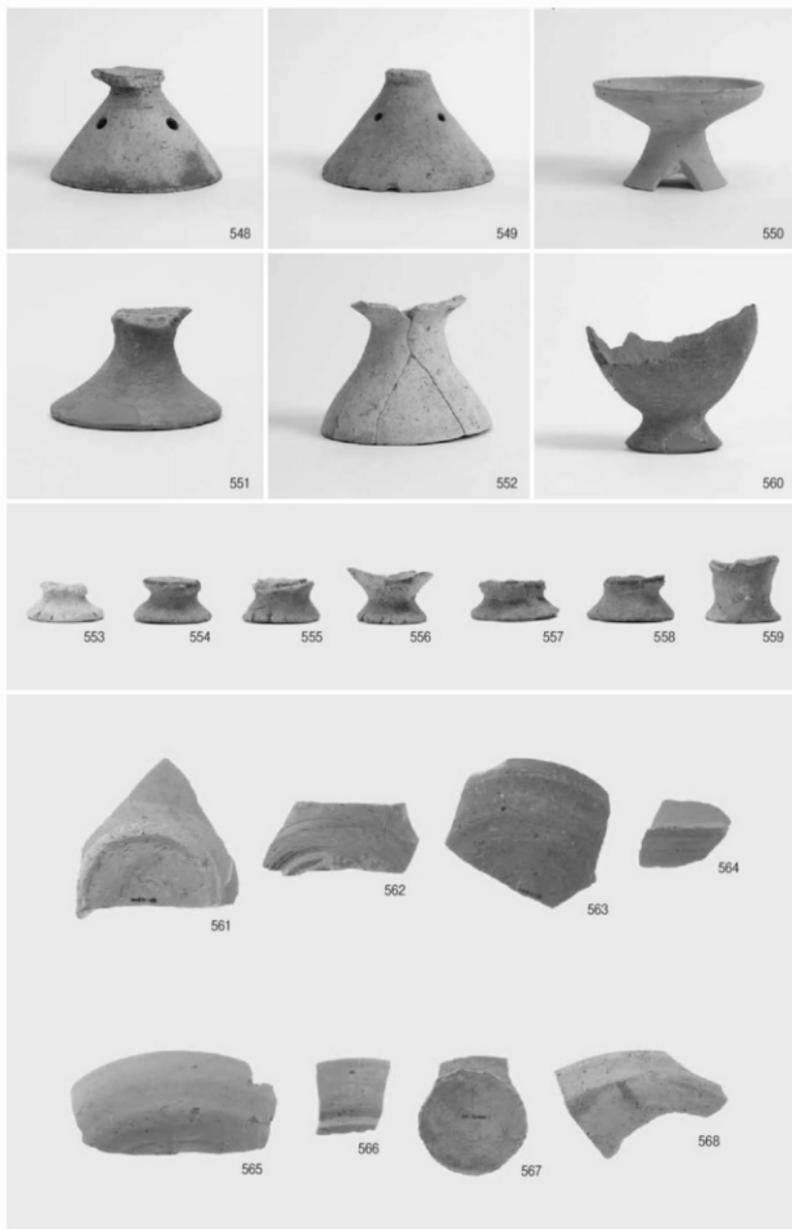
535

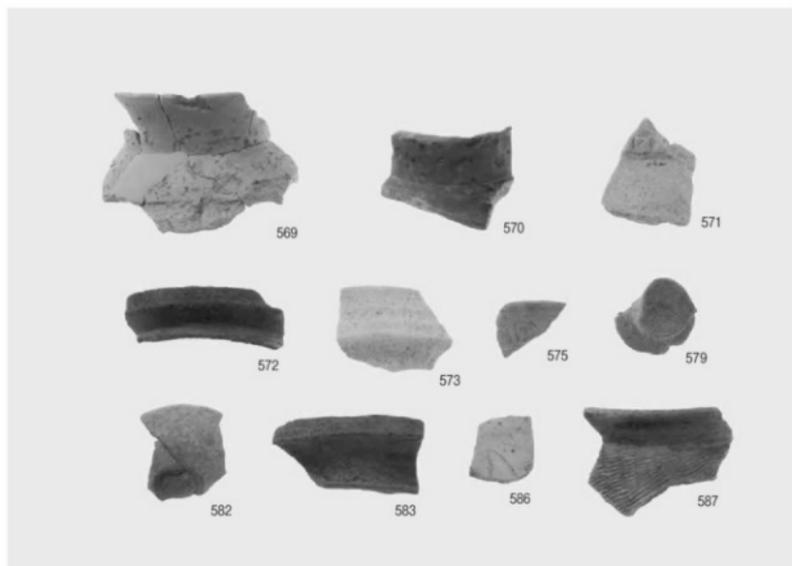


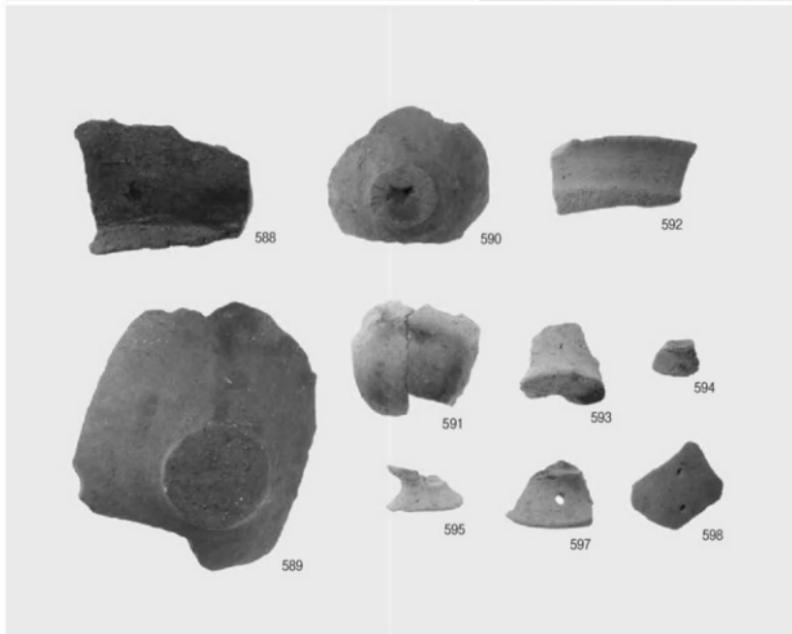
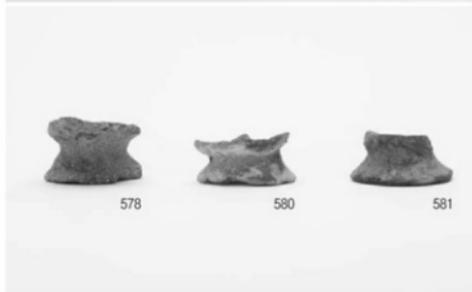
541

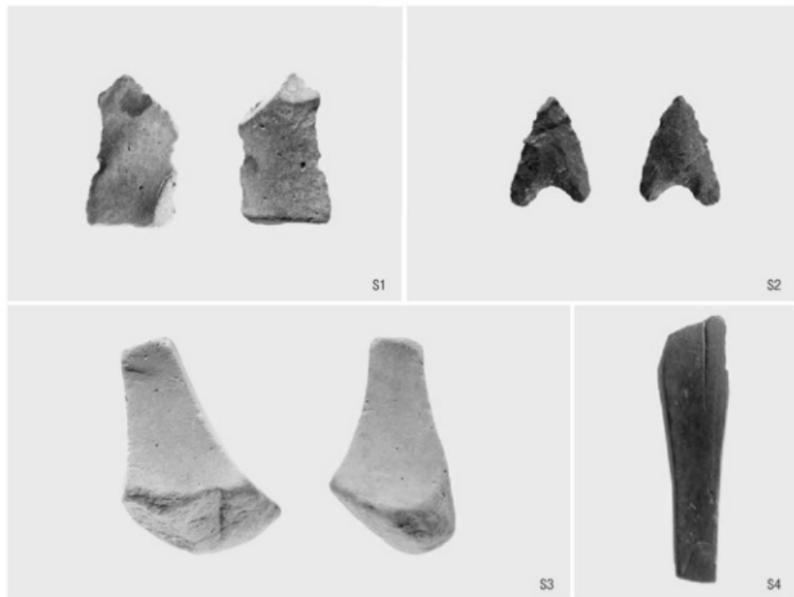


547











I区全景（東から）



II区全景（北から）



SD02-a全景 (南西から)



SD02-a中層土器出土状況 (南西から)



SD02-a (北東から)



SD02-b (北東から)



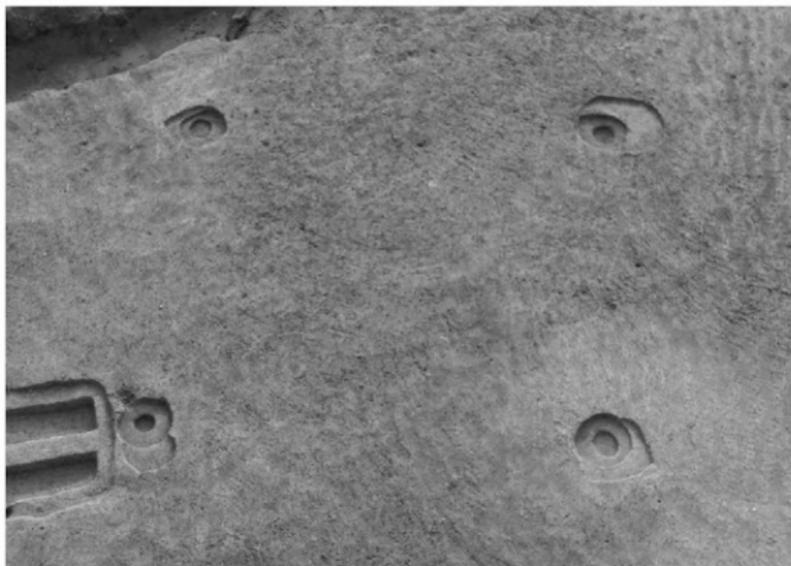
SD02土層断面（中央部・南西から）



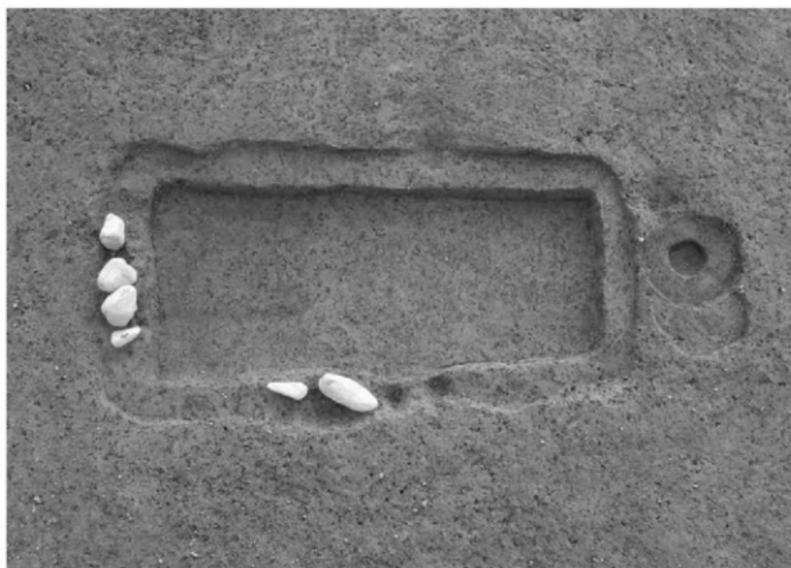
SD02土層断面（北部・南から）

写真図版84

竹の前遺跡



SB02 (北東から)



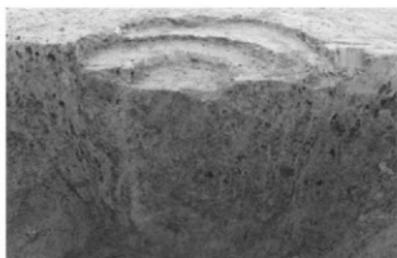
SX01 (北東から)



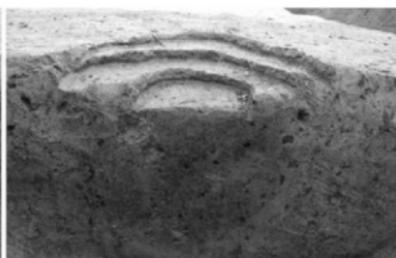
SB01P2-1土層断面 (西から)



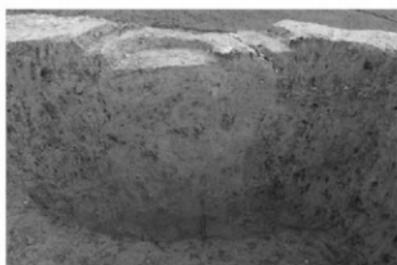
SB02P1-1土層断面 (東から)



SB02P2-1土層断面 (東から)



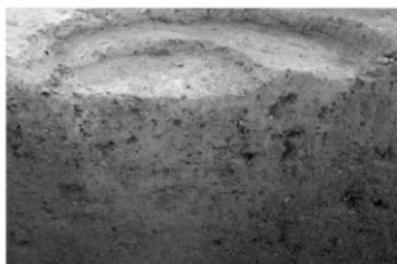
SB03P1-2土層断面 (西から)



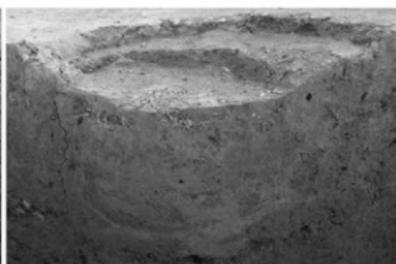
SA02P2土層断面 (北から)



SA04P1土層断面 (南西から)



SA04P2土層断面 (西から)



SA04P3土層断面 (南西から)



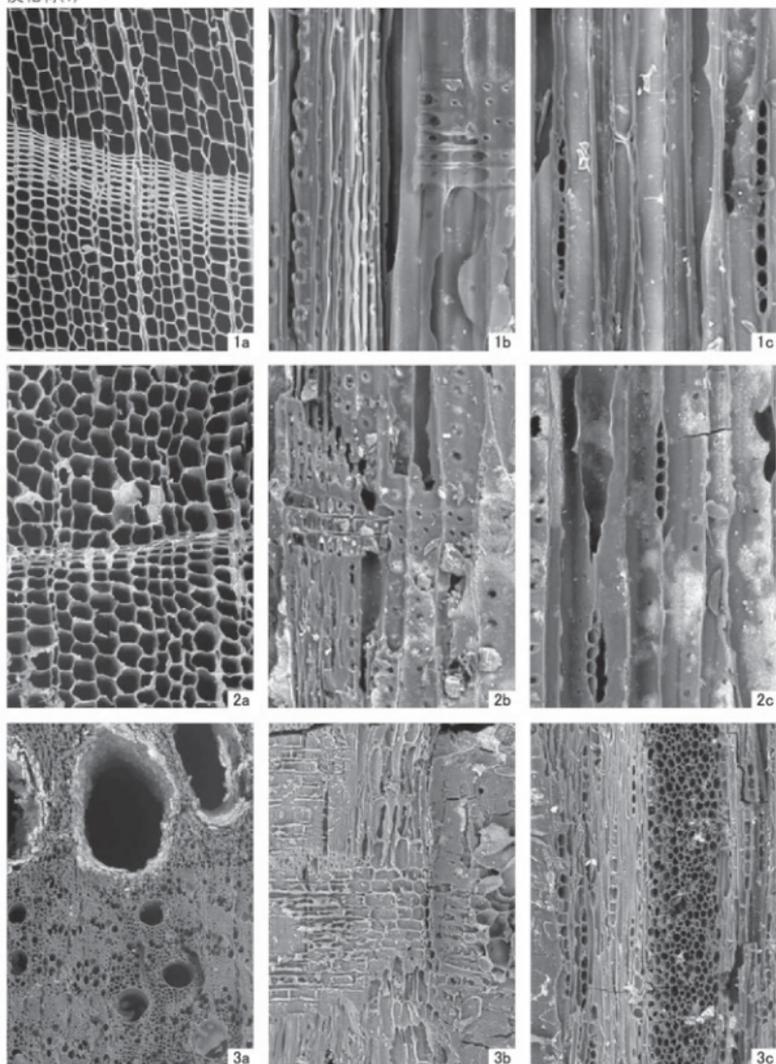
出土遺物(1)



出土遺物(2)



炭化材(1)



1.スギ(SH09)

2.ヒノキ(SH06)

3.コナラ属コナラ亜属クスギ節(SH01:壁)

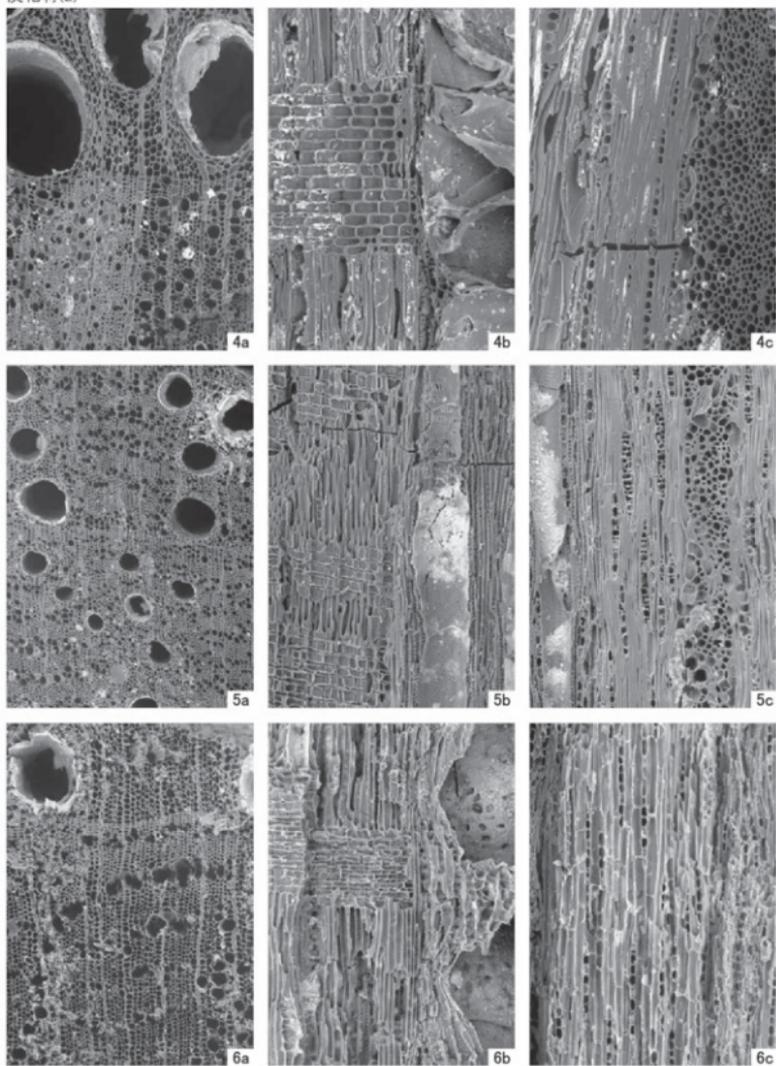
a:木口,b:柎目,c:板目

200 μm:3a

200 μm:1-2a,3b,c

100 μm:1-2b,c

炭化材(2)



4.コナラ属コナラ亜属コナラ節(SH01;南東柱)

5.コナラ属アカガシ亜属(SH01;南西柱)

6.スダジイ(SH06)

a:木口,b:柱目,c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

報告書抄録

ふりがな	ながこしいせき							
書名	長越遺跡Ⅲ							
副書名	(二) 船場川水系船場川 流域治水対策事業							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第432冊							
編著者名	渡辺 昇・上田健太郎							
編集機関	兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1 TEL. 079(437)5589							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1							
発行年月日	2012年3月							
所収遺跡名	所在地	コード			調査期間	調査面積	調査原因	
長越遺跡		市町村	調査番号	北緯	東経			
確認調査	兵庫県船路市 飯田		2003076	34° 48'	134° 40'	2000.7.13～8.17	62㎡	(二) 船場川水系船場川 流域治水対策事業
本発掘調査			2008171	52° 15'		2009.2.2～3.24	440㎡	
		遺跡番号	020414					
竹の前遺跡		28201		34° 48'	134° 40'			
本発掘調査	兵庫県船路市 手柄		調査番号	2008175	58° 35'		2009.2.21～3.10	80㎡
			遺跡番号					
				020435				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長越遺跡	集落跡	古墳時代前期	竪穴住居跡・落ち込み・溝	古式土師器				
竹の前遺跡	集落跡	弥生時代後期	建物・溝	弥生土器				
		奈良時代	柱穴列	瓦				
		平安時代	掘立柱建物・柱穴列・溝	須恵器・陶磁器				
要約	<p>長越遺跡は弥生時代終末から古墳時代にかけての兵庫県を代表する集落跡である。その東側の調査で、14棟の竪穴住居跡を調査した。狭い部分に集中して住居が築かれている。以前調査部分よりも新しい時期に集中して住居が築かれていたようである。庄内壁は保有しているが、掘入土器に変化が見られる。</p> <p>竹の前遺跡は弥生時代後期の溝が検出されている。後期前半の古い集落跡で長越遺跡に先行し、畑田遺跡などとともに後期集落を考えるのに重要な資料である。</p>							

姫路市

長越遺跡Ⅲ

(飯田湯田遺跡)

2012年3月20日発行

- 編 集 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
〒675-0142 加古郡播磨町大中1-1-1
- 発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
- 印 刷 富士高速印刷株式会社
-